

勝手に書きます銀河英雄伝説外々伝

シユザンナ

作 フミヲ

【目次】

一・前奏曲 プレリユード	1
二・円舞曲 ワルツ	3
三・女優誕生	5
四・そして開演のベルは鳴り…	7
五・迷宮 ラビリンス	10
六・幕間 パウゼ	13
七・懐妊	16
八・喪われしもの	20
九・女優継者	24
一〇・皇后風邪	28
一一・灰色の時代	30
一二・血と水と	33
一三・寵姫	37
一四・陽は翳りぬ	41
一五・皇孫誕生	44
一六・終わりの始まり	48
一七・朽ちゆく大樹	53
一八・薔薇の騎士 ローゼンリッター	61
一九・策謀	66
二〇・死神 トート	64
二一・明けの明星	68
二二・終幕	72
あとがき	77

一・前奏曲 プレリユード

もつこれで何回目だったのだろうか。少女

は自室の姿見の前に立ち、鏡に映る己の姿を入念に確かめていた。幼い頃から彼女に仕えてくれている侍女が念入りに結い上げてくれた髪。これまでに着てきたドレスとは比べようもないほど豪華な夜会服。いたずらでしたのは別として、初めて化粧を施された自分の顔。

（何だか、私ではないみたいだわ…。）

落ち着かない気持ちのまま、少女はほっそりとした体をねじって今度は背中を鏡に映す。大きく開いた夜会服から、象牙色の染み一つない素肌が覗いている。
（こんなに背中が見えていいのかしら？もう少し襟の詰まったものの方が良かったの…。）

先程から何回目かの同じ感想を胸に溜息をつく少女に、扉の向こう側から声が掛けられた。

「シユザンナお嬢様、そろそろ出発のお時間でございますよ。地上車 ランド・カーの準備も出来ております。降りていらっしやいませ。」

「…判ったわ、ヨハンナ、今行きます。」
最後にもつ一度、鏡の中の己の姿に目をやっつて、少女は部屋を出た。部屋の中や廊下では苦にならなかつたが、階段を降りるには履き慣れぬ踵の高い靴は不安定で、思わず手すりにつかまる手にも力が入る。

「やあねえ、シユザンナったら膝が曲がってるじゃない。なんて垢抜けない格好なの。」
馬鹿にした笑いととも投げつけられた台詞は、二歳年上の姉のものであった。膝を真っ直ぐにと注意されていたのに、降りるのに精一杯で忘れていたらしい。階段下のサロンで両親とともに少女を見上げていた姉は、階段の途中に立ち止まっている妹とは対照的に、これが同じ親から生まれた姉妹かと思われるほどに肉感的な体つきをしていた。

「貴女は私と違って痩せっぽちなんだし、せめて身のこなしくらい洗練されたものじゃ

ないと恥ずかしいわ。貴女が、ではなくてよ、私やお父様達が恥ずかしいの。いいこと？私に恥をかかせるような真似をしたら赦さなくてよ。」

それだけ言う姉嬢は、妹の降りてくるのを待たずに、既に大きな扉が開かれている正面玄関へと向かった。戸口の脇に身を控え、頭を下げて、

「行っていらっしやいませ。」
と声を掛ける使用人達を睥睨し、やや顎を上向きにして車寄せに一人だけ歩いて行き、停まっている地上車 ランド・カーに先乗り込むその姿を見て、シユザンナはただでさえ気が進まぬ今日の行き先が、益々気が重い場所となるのを感じた。
（マルコットお姉様、今日は御機嫌が悪いみたい…。）

姉の機嫌が悪い理由は、おおよそ見当がついていない。いつもならば主役はいつも姉と決まっているのに、今日に限っては妹の方が注目されるのが気に入らないのである。今日シユザンナの社交界へのデビューの日であった。

毎年、秋が深まる頃、一六歳前後の貴族の娘達は社交界へ最初の一步を踏み入れる。特にオーデインで開かれる大舞踏会ではデヴィューを飾るのは、一種のステータス・シボルともなっており、まさに今日がその日であった。この日はやはり、既に社交界で咲き誇っているどんな大輪の花も、未だ名も知られていない小さく可憐な花たち、デヴィュータンの前にその輝きを失うのである。そしてそれは、ヘーネミニオン子爵家の二人の令嬢についても言えることであった。

しかしシユザンナは知っていた。両親も自分にはどこかの立派な家柄の殿方の心を射抜いて、いわゆる「玉の輿に乗る」などと言う芸当は出来ないと思っていることを。初めて公の場に赴くとする妹に対して、無神経とも言える姉嬢の発言をたしなめようともしなかつたのは、両親もまた、マル

コットと同じように考えているからに相違なかつた。「出来の良い姉と不出来な妹」……これが数年の内に確定した姉妹への評価であった。

シユザンナやその家族達の属する社会において、「息子」はその家の血統を絶やさない為に不可欠の存在であったが、「娘」という存在は、より権力のある家門と閥閥を組むための道具でしかなく、より優秀な道具を手に入れる為に何の血の繋がりもない平民の娘を買ひ上げて、権力者に「娘」として差し出すなどということは日常茶飯事であった。そして、現在帝位にあるフリードリヒ四世の嗜好にあつた女性は豊満な肉体を持つた女性であり、そのような肉体を持つ「娘」が優秀な道具と見なされていた。痩せ気味の娘達の多くは少しだけでも、よかな身体を得る為に、自分から進んで、或いは親から強制されて、一日に何度もクリームと砂糖をたっぷり入れた「コーヒ」でケーキを胃の腑に無理矢理流し込んでいたのである。

しかし、体質によつては、そのような努力にも関わらず相変わらずほっそりとした、優しい言い方をすれば妖精のような、辛辣な言い方をすれば瘦せぎすの体型のままの娘達も存在した。そついった「娘」達は、自分達が出来損ないの道具であり、何の価値もないという強迫観念を持つことが多かつた。たとえどんなに楽器の演奏が巧みであっても、天使の歌声の持ち主であっても、絵画の才能があつても、刺繍の技量が優れていても、家人の舌を言はせる料理の腕を持っていても、そして帝国図書館の蔵書全てがその頭脳に収まっているほどの博識であつても、そんなものは何の役にも立たなかつた。そついった自分の特技、個性を世に問うことが許されているのは男性だけであり、女性が人前で自分の技術、知識を見せるのは、下賤な者が生きる糧を得る為にやむを得ずするはしたない行為と

されていたからである。良家の子女とは嫁ぐ前は父親や兄弟に従い、嫁しては夫に従い、決して自分を前面に出すものではないと躰られて育った彼女達にとって、自分の価値とは自分の保護者となる男性によって決まるものであった。それ以外の価値基準は存在しなかったのである。そして夫となる男性を惹きつけるための彼女達の武器は、ほとんどの場合、家柄と容姿であった。巧みな話術や豊富な話題を持つ者も稀にはいたが、それはともすると両刃の剣となつて彼女達から男性を遠ざけることもとなり、女性として決して好ましい資質とは見られていなかった。そして、この時点では、シュザンナ・フォン・バーネミュンデは「美しくなかった」のである。

姉マルゴットに遅れること何十秒かでシュザンナも両親と共に玄関へと向かった。「行つていらつしやいませ。」

姉娘に言つたと同じ言葉を使用人達が掛けてくる。

「ありがとつ、行つて来るわね。」

シュザンナの言葉に使用人達の表情が僅かだが緩み、

「社交界デヴュー、おめでとつございませ。」

「楽しんでいらつしやいませ。」

といったお仕着せではない言葉がその口から飛び出した。シュザンナは少しはにがんだ顔を用人達に向けると、まるでそよ風に運ばれているかのように軽やかな、体重を感じさせない歩き方で屋外の人となつた。

舞踏会の会場へ向かう地上車 ランド・カーの中は、シュザンナにとって息苦しい空間であった。両親はシュザンナを挟んで後部座席に腰掛けていたが、右と左から代わる代わる今日の舞踏会のしきたりをシュザンナが覚えていくか質問した。同席する他の貴族令嬢や子弟に対する振る舞い方、

目上の者から声を掛けられた場合の挨拶の仕方、ダンスを申し込まれた場合の受け方、断り方……。そんな様子を相変わらず不機嫌な顔で横から見ていたマルゴットがそこで地上車 ランド・カー に乗つてから初めて口を開いた。

「ダンスを申し込まれたらどうするかを覚えても、シュザンナには役に立たないでしょうに。そんな痩せっばちにダンスを申し込む男の人なんていないに決まっていますもの。そんなことより、どうしたら目立たないかを教えてあげた方が余程役に立つてよ、お母様。壁の花は出来るだけ目立たない方がいいのだから。」

容姿の点で不利な下の娘のことを氣遣つて、あれこれと世話を焼いていた母親にとっては、この姉娘の台詞は流石に癪に觸つたらしい。

「マルゴット、もつ少し口を慎みなさい。いくら妹に対してだつて、それは言い過ぎですよ。今日はシュザンナにとって初めての舞踏会なのよ。貴女のデヴューの時だつて、私は貴女にいろいろ教えてあげたではありませんか。」

「ええ、お母様。そして、その教えを私は有意義に活かしておりますわ。でもシュザンナに、折角のお母様の教えを活かすことが出来るのかしらうねえ、シュザンナ、貴女、その自信があつて？」

突然自分に振られた会話に、シュザンナは真つ赤になつて俯いた。

「ほらね、」寛大なさいな、お母様、シュザンナは自信がないようよ。折角のお母様の教えも無駄になるつて判つて居るのですわ。シュザンナのことを心配なのはよく判りますけれど、お母様の娘はシュザンナだけではありませんのよ。私もいるつて事をお忘れにならないでね。少しは私の心配もして下さいな。」

「仕方のない娘、こね。」

母親は少し甘えるように言葉を続ける

姉娘に向かつて溜息を付いた。もともとマルゴットは自慢の娘である。下手に出されればついつい甘くなつてしまつのは、いつものことであった。

「それで、貴女はどんな心配をして欲しいのかしらう？」

この問いかけで、すでに母親の機嫌が回復したと見た姉娘は、更に甘えた口調で続けた。

「今日の舞踏会には皇帝陛下も皇后陛下も、皇太子様までいらつしやるというではありませんか。私、皇室の方々の前に出る時は、私の中でも一番美しい私でいたいのもしかしたら私の姿が御眼に入るのだつてあるのですもの。判るでしょう、お母様、髪飾りの角度、サッシュの結び具合、全て完璧な姿でいたいのです。ですからお母様、お母様の目で私が今望みうる最高の姿かどうか確かめて戴きたいの。勿論、お父様にもよ。」

先程の姉娘の発言以来、沈黙を守つていた父親にも、暗に自分にもつと注意を払つて欲しいと要求して、マルゴットは家族の者の眼から見ても妖艶な笑みを浮かべて見せた。それはマルゴットにとって勝利の笑みであった。両親の関心を妹から自分に取り返したという満足感が彼女を満たしていつた。

一方シュザンナは、自分の存在がいつも通り両親と姉の三人から取り残されるのを感じた。地上車 ランド・カー の中に確かに自分は乗っているのだが、その存在は空気のように希薄で、例えその場から消え去つても、おそろく三人はその事に気付くまい。事細かに注意されるのも決して嬉しいことではなかったが、その後、まるで弾き出されるかのようにして両親の関心の外に出されたことで、シュザンナは改めて自分の価値の無さを噛みしめたのであった。

大舞踏会の会場となる帝国歌劇場に到着し地上車 ランド・カー のドアが開か

れた時、正直に言つてシュザンナは車を降りず、「この洋服目もへ帰つてしまいたかつた。バーネミュンデ家の紋章の付いた地上車 ランド・カー に気が付いたのか、何人かの男性が地上車 ランド・カー を取り囲んでいたのである。皆、姉が目当てに違いない。

「フロイライン・バーネミュンデ、今日は一段とお美しい。」

「是非とも後でダンスのお相手を。」

迎える男性たちの輪の中に降り立った姉娘は、両親に軽く会釈をすると、勝ち誇つた表情でシュザンナを一瞥し、崇拜者達に囲まれて劇場の中に消えていった。それを見送るシュザンナの間に声が出た。

「フロイライン・バーネミュンデ。」

もつ誰もいないと思つていたシュザンナは驚いた。地上車 ランド・カー の乗降口から自分の方に手が差し伸べられていた。今日の最初のダンスを踊ることになつて居るアーデナウアー伯爵家の三番目の息子であった。アーデナウアー伯クリストフはシュザンナの父、アロイス・フォン・バーネミュンデとの親交が厚く、その息子達ともシュザンナは顔見知りであった。引つ込み思案で人見知りする下の娘を心配したバーネミュンデ子爵は、今回の娘の晴れ舞台の為に、アーデナウアー伯爵の四人の息子のうちの誰かに相手役をして貰えるよう伯爵に頼んだのである。そして、それに対し名乗りを上げたのが彼であった。

「ベネディクト様？」

「迎えに来たよ。今日の大切なパートナーをね。」

明るい栗色の髪と榛 ハシバミ 色の瞳を持つ端正な顔立ちの若者は、少し低い心地よく響く声でそう言つた。

「お姉様ではなく私を？」

「当たり前じゃないか。今日私が踊るのはシュザンナ、君の方なのだから。」

何故だか判らないが、シュザンナはその言

葉を聞いて急に顔が熱くなるのを感じた。「行ってくまがよい。ベネディクト、娘のことをよるしく頼んだよ。」

パートナーとなる少女を託された若者は、恭しく彼女の父親に一礼を捧げると、自分の父親からの伝言だと言って、アーデナウアー家のボックス席から私達の様子を御覧になりませんかと誘った。

「年代物のワインなども用意してお待ちしているようですよ。」

有り難く御厚意に甘えさせていたたく、と言つ返事を聞くと、若者は彼の家のボックス席のナンバーを伝え、シュザンナの手を取つて今日の主役達の控室へと誘つていった。それを見送るベネディクト子爵夫妻の目が、今日初めてと言つていい安堵の表情を浮かべていた。

「いい若者じゃないか。」

「そうですね。」

「このままシュザンナのことを気に入ってくれたら良いのだがな。」

「本当に……。」

「アーデナウアー伯爵も、下の三人の御子息の身の振り方を考えると頭が痛いと言つておられたことだしな。」

息子を持たないベネディクト夫妻には、漠然とではあるがベネディクト家存続のための言与真があった。姉妹は嫁に出さず、あの娘「こ」ならば引く手あまたであろう。その中から最も条件の良い家に嫁がせれば良い。ベネディクト家より階位も上で権力もあり、経済的にも恵まれた家の跡継ぎの許へ。そうなれば、そんな家と閨閣を組んだベネディクト家の価値も今よりもずっと上がる筈だ。経済的な面での心配は全くない。先々代の当主が二束三文で辺境の惑星に買った土地から希少金属の鉱脈が見つかり、それは汲めども尽きぬ泉のようにベネディクト家の金庫を潤していた。例え少々容姿に難があるとは言え、妹の婿になってベネディクト家の家督を

継ぎたいという次男坊や三男坊も出てくることだろう。その若者がベネディクト家の財産や格式だけではなく、シュザンナ本人のことも気に入ってくれば、夫妻にとつては申し分なかった。

二・円舞曲 ワルツ

すっかり日が暮れ、星が天を飾る頃、いよいよ舞踏会は始まった。今日の主役達を見ようという観客が席につき、新しい社交界の花達がそれぞれ相手の男性にエスコートされてダンスフロアに姿を現し整然と並び、それを確かめて、式部官は自分の肺腑に可能な限り息を吸い込むと、今日の舞踏会の主賓たる皇帝一家の到来を告げる。

「全人類の支配者にして全宇宙の統治者、天界を統べる秩序と法則の保護者、神聖にして不可侵なる銀河帝国フリードリヒ四世陛下、及びその良き伴侶にして帝国の母たる皇后エレオノレ陛下、帝国の輝かしい未来の家徴にして良き伝統の守護者たる皇太子ルードヴィヒ殿下の御入来！」

式部官の声を追いかけるように帝国国歌の荘重な旋律が流れ、起立した一同はそれに首筋を押さえられるように深々と頭を垂れた。皇帝一家の入来から着席までの数十秒が過ぎ、一同は漸く頭を上げることを許される。

「陛下、今年新たに咲きほころびたばかりの花々にございます。」

舞踏会の主催責任者の一人がロイヤルボックスでフリードリヒ四世の耳許に隣から囁く。その言葉に物覺げに頷いて、皇帝はダンスフロアに手を振ってみせる。フロアの間

をどよめきが細波のように拡がっていく。「もつ良いであろう。若い者たちの楽しみを邪魔しては気の毒というももの……。」

皇帝の言葉に、責任者は頷くと、オーケストラボックスの方に手を挙げて見せた。それを合図に最初の円舞曲が奏でられ、夜会服の裾が拡がり、上から見るとまさしく花が一斉に開いたかのようであった。デヴユタント達の着るドレスには、色も材質もデザインも決まりがあつてある程度統一されているのだが、それでもダンスの技量やその娘の容姿などによつて、人目を惹く者惹かぬ者の差は生じる。今回の舞踏会で一番人目を惹いた踊り手は、周りの令嬢達に比べ二まわりほど細い身体を持った少女であった。まるで宙に浮いているかのようになやかにステップを踏む様にフリードリヒ四世も思わず眼を止めた。

「ほつ、誰じゃ、あの娘は？」

手許の資料に眼を通し、責任者が答え

た。「ベネディクト子爵の次女でシュザンナと申します。相手の男はベネディクト・フォン・アーデナウアー、アーデナウアー伯爵の三男、となつておりますが……。」

「そうか……。」

フリードリヒ四世にしてみれば、何の他意もなく発した質問であった。しかし、このやり取りがシュザンナの人生の最初の分岐点であった。

同時刻、シュザンナはそのように重大な会話がなされていたことなど露とも知らず、ベネディクトのリードに合せて踊ることで精一杯であった。ベネディクトが舞踏会の相手を務めてくれると決まっただけで、何度が練習を一緒にしたことはあつた。しかし、今日のように体が軽く動いたのは初めてであった。曲が始まった時には身体が震え、早く終わらせて帰りたいとそればかり考えていたが嘘のように、シュザンナはダンスを楽しんでいた。自分が痩せておりみつ

ともないということも、両親にとつて価値のない娘であるということも、何もかも忘れ、シュザンナは踊った。いつしか顔は下気し腫は明るく輝き、口元からは笑みさえこぼれた。その様子を見つめるベネディクトが実に満足げな表情を浮かべていることにさえ気付かなかつた。

やがて曲が終わり、デヴユタント達は先ず最初に皇帝一家に、それから会場の観客各位に挨拶のポーズを取り、フロアから引き揚げた。この後は会場に入ることを許された者ならば誰でも自由にダンスに参加して良いのである。

「シュザンナ、素晴らしかったよ。」

控室に続く廊下で掛けられたベネディクトの言葉に、シュザンナは未だに先程の昂揚感の冷めやらぬ、桜色に上気した顔を彼に向けた。優しく自分を見下ろしている様子の瞳があつた。

「いいえ、ベネディクト様のリードの御陰ですわ。本当にありがたございました。」

「どつかな、少し休んでから、もう一度フロアに出てみないかい？折角の君の初めての舞踏会だもの、あれだけ物足りないだろう？」

「ありがたございませす。私、」

申し出を受けよつとしたその時、シュザンナの腕を後ろから掴む者があつた。「シュザンナ、何とか大きな失敗もなく終わったようね、安心したわ。もう後は恥をかかないようにお父様達のところへ戻つてなさい。」

姉の顔を見た瞬間、シュザンナにかかつていた魔法は解け、シュザンナはいつも通りの内気で人見知りをする少女に戻つていた。

「……はい、お姉様。」

数人の取り巻きに囲まれてフロアに向かう姉を見送つて、シュザンナはベネディクトに先程の返事の続きを与えた。

「ベネディクト様、私、両親の許に参ります。ベネディクト様はどつそ踊つていらして下

さいませ。」

「いや、いいよ。今日の私のパートナーは君だけと決めているのだからね。君の両親もうちのボックス席に来ていらっしやる善だ一緒に行く。」

「それではあまりに申し訳ございませんも。どうか私のことは気になさらないで。本当に今日はありがとうございました。」

それだけ言うとシユザンナはその場を走り去った。数瞬間の間呆然とした後で、ベネディクトもその後を追ったのだが、この若者は知らなかった。シユザンナが初めての場所から消えた後、ベネディクトの視界から消えた後、アーデナウアー家のボックス席へ通じる通路とは別の通路に紛れ込んでしまったという事実を、ベネディクトが自分の家のボックス席の扉を開いた時、そこには当然あるべき人の姿がなかった。ベネディクトはアーデナウアー伯爵から、自分のパートナーを一人にするとは何事かと厳しく叱責され、慌ててシユザンナを探しに劇場内を駆け回ることになったのである。

ベネディクト・フォン・アーデナウアーと別れてから一時間近くが経過しているというのに、シユザンナは相変わらずどこまでも続くかのような迷路と格闘していた。

本来席には当然並び方に法則性がある筈で、それはボックス席といえども同じなのだが、長い年月の間に、主の権勢によって位置や番号がその法則から逸脱して変えられたボックス席が幾つもあり、その為に番号だけを頼りに目的の場所にたどり着くのは至難の業となっていた。しかしそんなことは知らないシユザンナは、ボックス席の扉の番号を見ては廊下や階段を行きつ戻りつして、アーデナウアー家の所有するボックスを探し続けていたのである。そして今、彼女は、もし自分が立っているのが何処かを知ったならば、恐れ多くてその場にひれ伏してしまつてあるところ場所

立っていた。彼女の目と鼻の先にある彫刻を施された重厚な扉の向こうには、ロイヤル・ボックスへの通路が続いており、その通路を扉に向かって、つまり彼女の方に向かって進む一団があった。新無憂宮、ノイエ・サン

スーシー、へ戻る皇帝フリードリヒ四世の一行で、警護の近衛兵六名、宮内省の職員が二名、皇帝とその侍従、皇后とその女官、皇太子とその侍従、それに今回の舞踏会の主催責任者の一五名である。櫺の無垢板で作られた扉が重たく、けれども音も立てずに開かれた時、より驚いたのは扉のどちら側に立っていた者であったのか。：。本来そこは一般の者が徘徊する筈のない場所であったのだから。

「何者であるか？返答せよ。ここで何をしている？」

一行の最前列を進んでいた三名の近衛兵がシユザンナを取り囲み、ブラスターを向け詰問する。シユザンナはその威圧的な姿勢に困り、ただ震えるばかりであった。

「どつしたのじゃ？」

至尊者の声に、年かきの宮内省の職員が侍従に事の成り行きを伝え、それを侍従が言上する。扉の外側にと身体を進めたフリードリヒ四世の眼に飛び込んできたのは、ロイヤル・ボックスから見た覚えのある少女の姿であった。フロアで軽やかに舞っていた先程の姿とは打って変わって、まるで展翹板に止められた蝶のように動くこともかなわず壁に張り付いている。

「確かシユザンナ・フォン・ペーネミュンデであったな。このようにどこで何をしておるのじゃ？」

新たな声の持ち主に顔を向けて、シユザンナはいよいよ身体が硬直するのを禁じ得なかった。その人物は、彼女が物心付いて以来ずっと、映像ですらまともに見ては眼が潰れると教えられてきた人物であった。

「恐怖を通り越して恐怖すら湛えたその瞳に気付いた若い方の宮内省の職員が、近衛兵と少女の間に入って優しく声を掛けました。」

「フロイライン、皇帝陛下は、なぜ貴女がここにいらぬのかと御下問であらせられます。陛下はお優しいお方です。恐がる必要はありません。本当のことをお話しなさい。私に構いませんから。」

「も、申し訳ございません。両親のおります知人の席へ参ろうとして、道に迷つたようでございます。戻ろうにも、戻る道すら判らなくなつてしまひ……。」

宮内省の職員にしか聞こえない程の可聴域ぎりぎりの声で呟くように答えたシユザンナに頷くと、職員は重ねて質問した。

「その席の番号は判つて居るのですか？」

シユザンナは首肯した。それを見てその職員はシユザンナから離れ、皇帝に侍従を通して彼女の返答を伝えた。侍従に言えは、当然皇帝の耳にも届いている筈なのだが、それでも所定の手順を踏むのがしきたりであった。

「ふむ、それは気の毒い。誰ぞ、そのものをアーデナウアー伯爵のボックスまで連れて行ってやるがよい。きつと今頃向こうでも探しておろつて。」

皇帝の通行を遮るなどという不始末をしでかして、どのような処罰が下つても文句は言えないと身を縮こまらせていたシユザンナにとつて、それは思いがけない言葉であった。

先程の若い宮内省の職員に伴われて、深々と皇帝に感謝の礼をするシユザンナの前を通り過ぎてから、フリードリヒ四世は溜息と共に呟いた。

「若いということはいいいものじゃ……。」

この瞬間、フリードリヒ四世以外の者達には、先程の少女の運命が定まつた事が無い言のうちに共通の認識となつていた。その事を少々苦々しく思う者、自身の栄達の

機会と捉える者、少女の将来に同情を寄せる者、想いは統一を欠いていたが、それはもう既定の事実であった。その事に気付いていないのはただ一人、全人類の支配者にして全宇宙の統治者たる人物だけであつた。

数分後、シユザンナはアーデナウアー家のボックス席に両親と並んで立っていた。宮内省の職員から事情を聞かされた両親は顔面蒼白となつて娘の非礼を詫言したが、若い職員は皇帝は少しも気に留めておられなかつたからと言って二人を安心させた。

「しかし、出来るだけ早い機会に陛下に感謝の意をお伝えする機会をお持ちになられた方がよろしいでしょう。拝謁を申し込まれるなり、何らかの献上品を贈られるなりして。」

もしよろしければ私がその為の労を取つてもよろしいが、と言外に自分への恩義を主張して職員は帰つていった。

両親から、ベネディクトと離れて行動するからこんな事になるのだとシユザンナが叱られているところに、職員と入れ違つて来た。アーデナウアー伯爵から事の顛末を聞かされ、改めて自分の非を鳴らされた若者を庇つたのはシユザンナであった。

「伯爵様、ベネディクト様は悪くございません。全ては私のせいでございます。ベネディクト様が折角ダンスに誘つて下さつたのを断つて、私が一人でこちらへ参つたのが間違いでございます。どうかお叱りにならないで下さいませ。御怒りならばどうか私に。」

「それは違つ、シユザンナ。君と共にすぐに帰らなかつた私がいけなかつたのだ。パートナーとなる女性を一瞬でも一人にするなんて、私がいけなかつたのだ。父上、お叱りは全て私に。」

若い一人の庇い合つ姿に、ペーネミュンデ

子爵夫妻は眼を見合わせ頷いた。雨降って地面まるるとも言つ。今回の出来事はかえって良かったのかも知れない。

「アーデナウアー伯爵、娘の言つとおり、今回のこと、御子息の責任ではありませんが娘も無事だったことですし、もつこの辺で赦して差し上げて下さいませんか？」
子爵の言葉で漸く息子を放免した伯爵は、気持ちを切り替えるようにこう言つた。

「それにしても、今日の二人のワルツは見事だったな。それだけは誉めてやるぞ、ベネディクト。」
「パートナーが良かったからですよ。」
「ベネディクト様のリードがお上手だったからです。」
期せずして、互いを持ち上げるのを聞いた伯爵は、更に息子を擁護するように続けた。

「このところ、狩りも乗馬もせず、ワルツの練習に励んだ甲斐があったというものだな、ベネディクト。大切なシュザン嬢のデヴィューの相手を無事に勤め上げた感想はどうだ？」
父親の言葉に顔を真っ赤に染める若者の顔を見つめて、シュザン嬢は知った。今日の為に、ベネディクトがどれ程陰で練習をしていたか。今日の体の軽さはその賜物であつたという事を。そしてそれは全て自分の為であつたらしいといふ事を。シュザン嬢は自分の胸の中に、ほんのりと柔らかな暖かな光が灯るのを感じた。そして若者は心の中で誓つていた。今日の失態は必ず取り返してみせる。自分達はまだ若く、時間はまだいくらでもあつた。しかし、この若者に次の機会は一度と訪れることはない。

三・女優誕生

大舞踏会の翌日、宮内省の職員が典礼堂の高官と連れだつて、バーネミュンデ伯爵を訪れた時、バーネミュンデ伯爵は、皇帝の気が変わり、昨日の罪を問われるのだと思つた。朝一番で皇帝への拝謁を申し出たが、その時の宮内省の係官の返事は、

「皇帝陛下には御多忙であらせられます。拝謁を希望する者も多く、子爵の拝謁がかなうのは明後日となります。改めて参内なされますように。」
「しまった。何とんでも、あの時お会いしておくべきであつた。」
と思つたがもう遅い。覚悟を決めて二人の前に出た。冷や汗が額に滲んだ。一体どのような処分が下されるのであろうか？しかし、頭を深く垂れ、裁決の言葉を待つ子爵に降ってきたのは思いも掛けぬ言葉であつた。

「バーネミュンデ子爵、誠にありがとうございます。このよつな知らせを貴殿に運んで来られたことは、私にとつても実に嬉しくまた光栄な事と申せましような。」
「は？」
まるで肩すかしを喰らつたよつな気分であロイス・フォン・バーネミュンデは身体を屈めたまま二人の使者の顔を見上げた。

「御嬢様シュザン・フォン・バーネミュンデはこの度後宮に上がるを許されることと相成りましたぞ。」
「ここまで言われても、バーネミュンデ子爵には事態が呑み込めなかつた。」
「シュザン嬢、ですと？」
「左様です。」

「何故シュザン嬢が……シュザン嬢は、皇帝陛下のお気に召すような娘では御座いません。姉嬢のマルゴットのお間違いで、御座いませんか？」

「いや、昨日の大舞踏会でデヴィュータンの一人としてお目見えなされた御令嬢と云つてことで御座いますから、妹御の方に相違ありません。典礼堂の方で調べたところ、今のところどちらの御子息とも御結婚の話などはないようですよ。誠に御令嬢は強運の持ち主でいらつしやる。初めての舞踏会で皇帝陛下のお目に留まることは、」
使者が帰つた後も、バーネミュンデ子爵は呆然としていた。子爵から話を聞いた妻も姉嬢もそれは同じであつた。三人の中で最も早く現実を引き戻されたのは姉嬢であつたかも知れない。それは怒りという形をとつて彼女の心を引き裂いた。

「どうしてシュザン嬢なの……？」
それが最初に彼女が口にした言葉であつた。その声は異様に低く、彼女の常の声を知る者にはとてもマルゴット・フォン・バーネミュンデの声とは信じられないものであつた。

「どつしてあの娘、こなの？おかしいわ！絶対変よ！あんな瘦せつぼちな娘を皇帝陛下が気に入られる筈がないわ！」
「私も最初はそう思つた。しかし、確かに昨日のデヴィュータンの披露のワルツを踊つていた令嬢の方だと、使者の方は仰つたのだよ。」

「だとしたら、それは何処かよその家の御令嬢に違いないわ！あの娘、こである筈がない！私はそんなの認めなくてよ！」
「どんだん大きくなる姉の声に、自室にいたシュザン嬢が何事かと驚いて居間に降りてきた。その姿を見たマルゴットは益々声を荒げて、妹に詰め寄つた。」

「シュザン嬢、貴女、一体どうやって皇帝陛下に近づいたの？劇場で迷子になつたなんて言つて、全て計算尽くだつたのではないの？なんて恐ろしい娘、こなの！私は何も知りません、内気で大人しい娘ですって顔をして、畏れ多くも皇帝陛下をたぶら

かすなんて……」

何が何だか判らないつちにいきなり襟元を掴まれ、激しく揺すぶられて、シュザン嬢は壁に頭を打ち付けられた。一瞬目の前が大きく回り、シュザン嬢は立ち上つてくるのが出来ず思はず座り込んでしまった。そんな妹を上から睨み付けて、マルゴットは肩を上下させ荒い息をしてきたが、やがて居間の扉に妹の代わりに怒りをぶつけること自室へと去つた。

床に座り込んだままのシュザン嬢に近づいてその顔を覗き込むと、バーネミュンデ子爵は彼女の身に起こつた事実をどのよう告げたものかと迷つた。歳よりもずっと幼く見える下の娘は、外見同様、中身も幼いところがあつた。後宮に上がるということがどんな意味を持つのか、おそらくシュザン嬢は知らない筈である。男女の秘め事について、全くの白紙の方が、夫となる人物は喜ぶだろうという神話の許で、多くの貴族の令嬢達は育てられていた。中には男の子向けの本などを親に隠れて読んで、そついつた情報をいつの間にか仕入れている娘もいるよつだが、シュザン嬢に限っては、そんな行儀の悪いことをしているとは思えなかつた。社交界に入ると、何となくその辺りのことも周知から漏れ聞こえてくる話から察しが付くよつになるものだが、昨日デヴィューしたばかりの娘である。

（後宮のことは何も言わずにおく。）
結局、それがバーネミュンデ子爵が下した決断であつた。落ち着いて考えてみれば、皇帝の寵を賜るといふことは、貴族の娘にとつて最高の名譽の筈であつた。まさか妹の方がそんなことになると思わなかつたが、これはバーネミュンデ家にとつて大神オーディンが与え給つた千載一遇の栄達の際である。それならば、皇帝陛下にとつてシュザン嬢を最高の貢ぎ物として献上するのが臣としての務めである。バーネミュンデ子爵自身、女性が無垢であればあ

る程、その価値は高いと信じる一人であった。彼は娘を、手垢さえ付いていない真っ白な画布のまま、皇帝の許へ届けることにした。そこにどんな色でどのような絵を描くことも、皇帝の思いのままに出来るように…。

「シユザンナ、お前は宮廷に上がった、皇帝陛下のお世話をすることになったよ。」
これがその日、シユザンナが父親から知らされた全てであった。

それから数日間、ペーネミュンデ家は眼の回る忙しさであった。ただ一人、マルゴットを除いては。

一人の使者が訪れてから、マルゴットとシユザンナの関係は逆転した。家の中心にいたのはいつもシユザンナであった。何しろ、少しでも早くにシユザンナを後宮に納めてしまわねばならなかった。皇帝の気が変わってしまったら何もかも泡沫に帰すのである。真実は違っていたが、少なくともペーネミュンデ子爵にとってはそうであった。後宮に入るその日に着るドレスを作る為に、仕立屋はペーネミュンデ邸に泊まり込みで仕事に追い立てられた。何度も何度も仮縫いが行われ、シユザンナをより輝かせるために細かいところまで手直しを加えられた。誰もマルゴットに気を使う余裕などはなかった。彼女付きの侍女さえもシユザンナの準備のために駆り出され、しかもマルゴットの眼には、それを心浮き立たせてしているように見えた。

「シユザンナ、いい気にならない事ね。皇帝陛下がお前などにそう長く興味を持たれるとは思えない。すぐに後宮を追い出されて帰って来るのが落ちよ。そうなった女がどれ程みじめなものか、お前は知っていて…いいわ、とせ直ぐにその身でそれを味わうことになるのだから…。」

主役の座を奪われた娘は、暗い炎をくすぶらせた瞳で、新しい主演女優を眺めてい

た。彼女の一日も早い凋落の刻を願いつた。

大舞踏会より半月後、社交界デヴューの日に着たものよりも更に豪華な、それでいて清楚な薄紫色の衣装に身を包み、シユザンナ・フォン・ペーネミュンデは迎えた地下車ランド・カーに父親に付き添われて乗り込んだ。心なしか見送りに出た母親の目が潤んでいるようであった。

「お母様、そんな顔をなさらないで。私一生懸命皇帝陛下にお仕えします。休暇が頂けたら、また直ぐに帰ってきますから。」
後宮の女に休暇などあるはずもない。そんなことも知らず、自分に課せられた皇帝への奉仕がどんなものかも知らず、動き始めた地上車の中からシユザンナは母親の声を掛けた。リア・ウィンド越しに、母親の顔が歪むのが見えた。しかし、シユザンナには母親がどうしてそんな表情をするのか判らなかつた。まして母親が今回のことを白紙に戻すことは出来ないのかと、昨夜父親に泣いて訴えたことなど知る由もなかつた。

「後宮というところは、私達が思う以上に権謀術策の張り巡らされたところだと聞きます。陰湿な行為も横行しているというではありませんか。そんなところに、あのシユザンナをやるのですか？気の弱いあの子にはとても耐えられませんわ、きつと。」
「だから、あの娘付きの侍女としてヨハンナを付き添わせるのではないか。何かあっても、幼い頃からあの娘の面倒を見てくれていたヨハンナならば、きつと良い相談相手になるだろう。それに皇帝陛下の思召しに従わねば、一族郎党、どんなことになるかも判らない。」

「皇帝陛下の思召し、この一言の前には、どのような想いも風に吹かれる枯れ葉のようなものであった。専制国家というものはそういうものなのである。そしてペーネ

ミュンデ夫妻はじめ帝国の人間のほとんどは、それ以外の国家形態もあり得るのだというところが頭になかった。

数時間後、シユザンナの後宮入りを、彼女の母親と同じくらい、或いはそれ以上に悲痛な思いで受け止める人物がいた。ペネデイクト・フォン・アーデナウアーである。彼はシルバスターの舞踏会にシユザンナを誘つつもりで、彼女の都合を聞く為にペーネミュンデ邸を訪れたのだが、そこで知らされたのはシユザンナが彼の手の届かぬところへ行ってしまったという事実であった。

彼は数年前より、出会うと、いつも部屋の間から自分達を見ているペーネミュンデ家の妹娘に好意を持っていて、彼の兄弟達は、あんな痩せっぽちの何処かいいのかわかたが、彼にとって、いつも控えめで物静かな少女のはにかんだような微笑みは、どんな豊麗な女性の艶やかな笑顔よりも価値のあるものだったのである。

彼女が社交界にデヴューし、これからは堂々と交際を申し込めると思っていた矢先のことであったのに、彼の前から少女は人類社会最大の権力者の手によって連れ去られてしまった。しかもそのきつかけは先日の舞踏会で、シユザンナが道に迷ったことにあるという。誰を恨むことも出来ない、全ては自分の不明が招いたことであると、がつくりとつなだれる若者の腕に、少女の母親の掌が重なった。一人は互いの目の中に、相手が少女の身に起こった、他人が「幸運」と呼ぶところのものを決して言んではないことを読みとった。それを口にするには出来なかつたが、自分以外にもシユザンナの後宮入りを悲しむものがあるということ、が、せめてもの慰めであった。

一方シユザンナは、父親と共に宮内省に赴き、宮内尚書アイゼンエルツ伯に挨拶をした。アイゼンエルツ伯は、単なる地方の一男爵に過ぎなかつたのだが、妻を一年間

皇帝に供したのが功を奏して、自身では何の功績を立てる事もなく伯爵にのぼり、妻が後宮から戻った後、尚書の地位を手に入れた。口さがない者達からは、

「あれ程後宮のことを知っている男は他に
おるまいから、宮内尚書は奴に持つて来いの職かも知れん。」

と揶揄されているが、そのようなことなど全く意に介してはいないようであった。そして確かに、アイゼンエルツは後宮について細かいことまでよく知っていた。当然妻から得た知識に違いなかった。そして妻は今やもう後宮の人間ではなかつたから、アイゼンエルツは新しく後宮に納められる女性達に私情を交えることなく、その知識を活用することが出来たのである。

一通り挨拶を終えると、アイゼンエルツ伯はアスクの上の呼び鈴を鳴らした。間もなく執務室の扉がノックされ、一人の老女が入ってきた。

「ペーネミュンデ子爵、こちらは、これから御令嬢のお世話を致しますフロイライン・シユミットです。何分にも色々ときたりの多いところですから、外から連れていらした侍女だけでは手に余ることもあります。帝国騎士のヘンドリクスという者も、宮内省から御令嬢の執事として差し向けておりましたから、多分御令嬢の御記憶にあるのではないかと思うが。」

「かたじけないことで御座います。」
「では御令嬢には色々とお手続がありますので、そちらの方を済ませていただきます。あつと、シユミットが案内いたします。あつと、子爵、ここからは御令嬢だけをお願いいたしますよ。いくら親子とはいえ…お判りですか？」

後宮に入った女性には、たとえ親兄弟といえども皇帝の許可なくしては会うことを許されないのが不文律であった。そして、既に宮内尚書に挨拶を済ませた時点で、シユ

ザンナは後宮の人間として扱われていたの
である。

宮内尚書の執務室で父親と別れてから
の事は、シュザンナにとって信じられないこ
との連続であった。まず、シュザンナはシュミ
ットなる老女に宮内省の一室へ連れて行か
れた。そこには数人の医師が彼女を待つて
いた。そこで彼女は身体検査を受けるよう
老女から命じられた。

「皇帝陛下にお仕える以上、何の問題も
ない健康な身体を持ち主でなくては困るの
です。万が一にも陛下に何か病をお移し
するようなことがあつてはなりませんか
ら。」

簡単なものだからと言われたのに、その
医師達が彼女にしたことは、それまで彼女
が抱いていた身体検査のイメージとは全く
違つたものであつた。血液検査や尿検査は領
けるとしても、その後にはされた検査はシュ
ザンナにとって見たことも聞いたこともない
もので、シュザンナの羞恥心を無視した行
為だつた。シュザンナは知らなかつたが、そ
れは婦人科の内診であつた。シュザンナはも
つと違つた病を思い浮かべていたのだが、老
女がシュザンナに言ったとおり、女性が皇
帝にいかかわしい病を移す恐れがないこと
と、何分にもフリードリヒ四世は人妻であ
るつと構わずに自分の快楽のために奉仕
させていた為、宮内省としては、後宮に納
められた女性が皇帝以外の男性の胤を宿
していないことを、その女性が皇帝の寵を
受ける前に確認しておく必要があつたので
ある。ここで、医師達の審査に通らなけれ
ば、後宮のある西苑への門は開かれないの
が、いつの頃からか慣例となつていた。
「どうしてこのような検査の必要があるの
ですか？」

泣き出しそうな顔を両手で押さえて、身
体を震わせ診察台から尋ねるシュザンナを
見て、最近宮廷医に名を連ねたばかりの
グレーザーは溜息を付いた。彼は宮廷医と

いつもの、皇帝の生命を預かる重大な職
務であり、その一員になるといつかは医
師としての最高の名誉であると信じ、己の
知識や技術を磨いてきたつもりであつた。
しかし実際に宮廷医になつてみると、その
仕事は毎日の皇帝やその家族、そして後
宮にいる何人もの寵姫の健康チェックと今
日のような新たな後宮の住人の資格審
査がほとんどで、宮廷医に扱われる前の
方が、医師としては余程充実した生活を
送つていたような気がする。しかも彼が宮
廷医になつてから後宮に納められた女性は
今彼の目の前にいるまだ年端もゆかない少
女で両手両足の指では数えられない人数
に登る。僅か一年足らずの間に、である。
その女性達の多くが既に皇帝の興味を
失い、下賜金を与えられて後宮を後にし
た。その場合も、皇帝の胤を万が一にも宿
していないか医師達の検査を受けてから
彼女達は新無憂宮、ノイエ・サンサーシー
を出ていくのである。

フリードリヒ四世がどのように考えてい
るのかは判らなかつたが、少なくとも宮内
省の職員にとつて、彼女達は世継ぎを育て
るための器に過ぎないことをグレーザーは
感じとつていた。自分達が何ら問題なしと
書類にサインをすれば、この少女もまた
その為の器として使われるのである。

これまで見てきた成熟した肉体の持ち主
達と違い、ほつそりとした、まだ蒼さの残
る身体を見て、グレーザーは痛ましさを感
じた。それは少女の質問で更に深まった。
器が器となる為の儀式の存在さえ少女は
知らぬようであつたから。

（皇帝陛下を迎えるの場所、この娘はど
んなに心細い思いをすることだろう…。）
もし自分に、この場の権限があるのであ
れば、まだ発育が十分でないという理由で
も付けて家に帰してやりたいような気さ
えした。しかし、そんなグレーザーの思いを
余所に、彼の上位にある先重医師は

「何ら陛下の寵を受けるに差し支えありま
せん。しっかりと陛下にお仕えなされる
ように。」

といつ言葉と共に、一枚の書類をシュミッ
ト老女に手渡した。この瞬間、今来た道は
閉ざされ、シュザンナにとつて開いているの
は後宮、新無憂宮、ノイエ・サンサーシー
西苑への門だけとなつたのである。

シュザンナの住まいとして西苑に与えられ
た館へは、宮内省から地上車、ランド・カ
ーで一〇分以上走らねばならなかつた。
その道中、果たしてシュザンナは気が付いて
いたであろうか。そこでの生活は物理的な
距離以上に、これまで彼女が送つてきた生
活とは隔絶しているという事に。

邸館に到着したシュザンナの眼に最初に
入つたのは、自分に従つてここでの生活を共
にすることになつたヨハンナの姿であつた。
彼女の姿を見たとき、シュザンナは緊張の
糸が解けるのを感じた。彼女に先程のこと
を話し、傷ついた自分の心を慰めて欲しか
つた。しかし、車外へ出てヨハンナの許へ駆け
寄りつとするとシュザンナをシュミット老女が
引き留めた。

「シュザンナ様、これまでのことはいざ知ら
ず、これからは皇帝陛下にお仕えする御
身でございます。使用人に対し馴れ馴れし
い態度はお見せになられませんが、ま
してあの者は平民、皇帝陛下にお仕えす
るお方が直接お声を掛けられる身分の者
ではございません。シュザンナ様の身の回り
のことを直接させていただきますのは、帝
国騎士以上の出自の者に限らせていた
きます。」

シュザンナに対し何か声を掛けたそんな
ヨハンナの顔を、シュミット老女はシュザンナ
をせき立てるようにつけて通り過ぎた。玄關
ホールの中からまた外に立っているヨハンナ
を振り返つて一瞥する老女の瞳は、敵意す
ら感じさせるものであつた。
（このお方のお話をするのは私。お前な

ど不要じゃ。）

老女のような立場の者にとつて、その館で
の実権を握れるかどうかは大きな問題で
ある。主に付いて外から来た使用人などに
采配を振るわれるのは我慢がならないこと
であつた。そして老女にはもう一人、この
館での主導権を握る為には邪魔な人物が
いた。その人物は今回のシュザンナの後宮入
りによつて彼女が執事としてこの館にやつて
来た宮内省の職員で、ヘンドリクスといふ。
彼は過日の舞踏会で、道に迷つたシュザンナ
と会つていたのが縁でシュザンナ付きの執事
を命じられたのである。執事の席を巡つて
はヘンドリクスと、彼の後輩に当たり、彼と
同様シュザンナと会つていた「ホルビッツ」のど
ちらをあてるか宮内尚書は迷つたのであるが、
経験を重視し、年長のヘンドリクスに軍配
が上がつたのであつた。ここにも、ささやか
ではあるが、当事者にとつては熾烈な権力
争いが、幾重にも複雑に絡み合つて繰り広
げられていた。

四・そして開演のベルは鳴り…

シュザンナが後宮に納められて数週間が
経過した。しかしその間、フリードリヒ四
世の来館は一度もなかつた。フリードリヒ
四世にしてみれば、特に気に入つてシュザン
ナを望んだ訳ではない。周囲の者が勝手に
彼の言葉を解釈し、勝手に行動しただけの
ことである。近侍の者からペーネミュンデ家
の令嬢が後宮に納められたとの報告を聞
いても、別段何の感情の揺れも感じなかつ
たのは無理もなかつた。

だが、皇帝の来館を待つ方にとってはそ
うではなかつた。シュザンナは全く皇帝の姿
のない場所で一体どうやつて皇帝陛下に仕

えればいいのか、やはり自分が宮廷に上がったのは何かの間違いで、不要な人間だったのではないかと胸を痛めた。ヨハンナはそんな主を慰めたくても、シュミット老女が常に眼を光らせていて、決して彼女をシュザンナに近づけてはくれないことに苛立った。そしてシュミット老女は、皇帝の来館がないのはシュザンナが後宮の女性として至らないせいだとして、シュザンナを彼女の理想の後宮の女性に仕立て上げるのに余念がなかった。

「皇帝陛下に直接お仕えする者として、もっと誇りををお持ち下さい。」

「何事にも威厳ある態度で臨まれますように。」

「そのようなことを御自分でなさってはけません。使用人にお命じ下さいませ。」

言葉遣い、立ち居振る舞い、細々としたところまでシュザンナは一日中シュミット老女から注意を受けた。それはシュザンナを益々萎縮させ、彼女の精神を痛めつけた。もともとほっそりとした体躯の彼女であったが、後宮に入る時に新しく仕立てて持ってきた衣装の寸法が余る程に肉が落ちた。そのまま行けば、日を待たずして彼女が倒れるのは目に見えていた。いいのだらう、そうやっておれば、彼女は美家に送り返されていたに違いない。しかし、運命の女神は彼女に別の人生を用意していた。

帝国暦四七一年二月、ゴールデンバウム王朝銀河帝国第三六代皇帝フリードリヒ四世は、これまでにも何度か味わったことのある悲哀を感じていた。当時の彼の愛情をほぼ独占していた寵姫が先月亡くなったのである。その胎内に宿っていた彼の子どもと共に。

すでに住む人もなくなつた邸宅に、フリードリヒ四世は自分が植えた薔薇の様子に気がなつて訪れた。主を亡くした庭は僅かの間に荒れており、簡単な手入れで済ま

せるつもりであつたのが意外と手間取り、終わつた時には陽も陰り、外気も冷えてきていた。

（春になったら、どこか他の場所に植え替えてやらねばなるまいな。それにしても今から執務室に戻るのも難儀なことじや。）

フリードリヒ四世は、ここから最も近いのはどの女性の住まいかを、近くに控えている近侍の者に尋ねた。

「はい、先頃後宮に入ったバーネミュンデ子爵の令嬢が、確かこの隣の邸館にいらつしやる筈でございます。」

フリードリヒ四世は、全くその名に覚えがなかつたが、ひとまずその館に爪先を向けることにした。暖を取り、胃の腑を満たすことくらいは出来るだらう。

突然の皇帝の来館に、シュザンナの邸館は色めき立った。本来ならば、予めその日皇帝が訪れる女性の許には連絡が入ることになっており、その日の晩餐の支度なども皇帝の来館前に整えられることになっていたが、いきなり玄關前に皇帝がその姿を現したのだから無理もなかつた。しかも、皇帝がシュザンナの許を訪れるのはこれが初めてである。

いきなり活気ついた邸内の様子に、フリードリヒ四世も常とは違つ秀麗気を感じたのである。自分でも、寵姫を失つて傷心の筈の身が不謹慎な、とは思つたが、何やら心が浮き立つのを禁じ得なかつた。

一方、皇帝の来訪を伝えられたシュザンナの私室はまさしく戦場であつた。後宮の女は、いつ如何なる場合でも皇帝の来訪に備え完璧な容儀を整えておくこと、これがシュミット老女の教えの一つであつたから、シュザンナはこの邸館に住むようになってから、夜休むとき以外は常に盛装であつた。だから改めて容儀を整える必要はなかつた。しかしシュミット老女はシュザンナに、皇帝に会う前にもう一度言っておきたいことが

山のよつにあつた。それが、シュザンナの私室の中で、フルキューレから発射されるウン238弾のよつな勢いで、この館の若い女主人に向かつて降り注いでいた。

「よろしいですね、陛下が白と仰せになられれば、黒でも白なのです。口答えは許されません。」

「ええ、判つています。」

「体の向きを変える場合は絶対に陛下にお尻を向けはなりません。」

「ええ、判つています。」

「決して陛下よりも頭を高くしてはいけません。陛下が座つておられる場合は特に気を付けて。」

「ええ、気を付けます。」

「それから……」

次から次に浴びせられる注意に辟易としながらも、それを顔に出すことも出さず、シュザンナは皇帝を迎える為に階下へと急いだ。

吹き抜けの玄關ホールで深々と身体を屈め、頭を垂れて皇帝を迎えたシュザンナに、フリードリヒ四世は声を掛けた。

「シュザンナ・フォン・バーネミュンデ、大儀である。急に予がそなたの許を訪れたので、そなたの家の者達に随分迷惑を掛けておるよつじやな。」

「……はい。」

シュミット老女の言葉を思い出した、皇帝には全て「ヤ」で応えねばとシュザンナは緊張した頭で考え実行した。ホールの片隅でシュミット老女が洗面を作り心の中で呟いた。

（あの馬鹿娘……）

皇帝がいなければ舌打ち位していたかも知れない。

フリードリヒ四世はと言えば、これまで誰も示したことのない反応に、正直言つて面喰らつていた。大体、……という場合、これまで彼の周りの人間達は大仰に「……とんでもございませぬ、陛下。」

と自分達の迷惑や苦勞を否定して見せたものであつたのに、一体どんな顔で言つていいのか、冗談か、それとも……。

「面を上げよ。」

「はい。」

皇帝を見上げるシュザンナの表情は、瘦せて一回り小さくなつた顔の中に大きく見開いた瞳が潤んでおり、何とも頼りなげで、フリードリヒ四世にも、彼女がどれ程緊張し、怯えているかが伝わつた。それは己の美しさに自信を持ち、皇帝に対しても決して臆することなく自らの存在を主張するこれまでの寵姫達とは、全く異質の存在で、妙に新鮮なものにフリードリヒ四世の眼には映つた。

「今宵はそなたの許で休ませて貰うことにする。良いな？」

「……はい。」

まさか皇帝の言葉が夜伽の命とは思ひもせず、客用寢室の支度を早速に整えねばとシュザンナは思った。しかしシュミット老女を初めとする邸内の使用人達には、皇帝の意は明白であつた。特にシュミット老女は先程のシュザンナの言葉で皇帝が機嫌を損ねて帰つてしまつたのではないかと思つていただけに、ほつと胸をなで下ろした。

皇帝を迎へての晩餐の後、シュザンナの私室は再び戦場と化した。湯浴みの支度をと言われ、シュザンナが浴槽に這がって身体を洗っていると、シュミット老女が自分のお気に入りの侍女二人を連れて浴室に入つて来た。

「フロイライン・シュミット、一体何事ですか？」

「シュザンナ様、今日は大切な日でございます。シュザンナ様の湯浴みのお手伝いになります。ごさいませぬ。」

「そんな……、幼い子供ではないのですから自分一人で出来ます。どうぞ出て行つて下さい。それに大切な日一つて一体……」

シュザンナの抗議の声も問掛けも無視

して、シュミット老女は連れてきた帝国騎士出身の侍女一人と共にシュザンナの身体を押さえつけ、シルクの生地で撫でるようにしてシュザンナの肌を洗いはじめた。シュザンナの肌を水で弾き、水滴が玉となって転がるのを見ると、シュミット老女は満足そうに頷いた。

「些か肉が薄いのが気に懸かるが、これならば陛下にもご満足頂けよう…。」
柔らかなバスタオルで肌の水滴を吸い取ると、「コロンを吹き付けられる。」

「本来ならば、ムケ（鈴蘭）よりももう少し妖艶な香りの方が後宮の女に相応しいのじゃが…仕方あるまい。」

たゞぶりギヤザの入り、透けそつに薄い白生地の夜着を着せられ、その上からガウンを羽織らされ、仕上げに香り玉を口に放り込まれて、髪が乾くとシュザンナはシュミット老女に伴われて皇帝の寝間へと連れて行かれた。

「ここは…客用寢室ではありませんか。」
「はい、ここに陛下をお待ち下さい。」
「どうして？」
「それがシュザンナ様のおつとめでございませぬ。」
「私の？」

「左様でございます。…シュザンナ様、何があつても、決して陛下に逆らつてはなりません。全て陛下の御心のまま、お任せになるのです。よろしくございませぬ。」

「……」
訝のシュザンナの眼、シュミット老女のすつと後方に、置物に隠れてこちらを見ているヨハンナの姿が入った。両手を胸のところで組み、心配そうな、そして祈るような表情で彼女はシュザンナを見つめていた。シュミット老女の目の前では、声を掛けることもできなかつたが、せめて安心するよう眼で合図しようとしてシュザンナは考えた。しかし、それをヨハンナが受け止めることが出来たかどうかわからなかつた。シュ

ミット老女が皇帝の寝間にシュザンナを押し込むようにして入れると、扉を閉めてしまったからである。

シュミット老女自身も寝間の隣の小部屋に姿を消した。おそらく不測の事態に備え、控えの間で待機するつもりなのである。長いゴールデンバウム王朝の後宮の歴史の中には、初めて皇帝の寵を受ける娘が取り乱して、初めに皇帝が傷を受けるといふ事件もあったのである。

誰もいなくなつた廊下で、ヨハンナはしばらく寝間の方を見やり佇んでいたが、誰かがやつて来る気配に、足音を忍ばせてその場を去つた。ヨハンナと入れ替わるように姿を現したのは、実際の年齢はまだ四〇代半ばにもかかわらず、六〇歳近くに見える男性であつた。寝間の警を懲らした服を脱ぎ、夜着の上にガウンを羽織つただけの姿は、寝間以上に疲れて見えた。フリードリヒ四世である。彼は寢室の前まで来ると、小さな溜息をつき、それから観音開きの扉を押し開けて中へ入つて行つた。

皇帝が燭台の灯だけが灯された薄暗い部屋に入つて来た時、シュザンナは窓辺に立ち月の光に照らされた夜の庭園を眺めていた。扉の閉まる音で初めて自分以外の人物が部屋に入つてきたことに気が付き、振り返る。そして、フリードリヒ四世が部屋に入つて最初に眼にしたのは、月の光に透け込んで消えてしまひそのまゝシュザンナの姿であつた。

「気が付きませぬ失礼いたしました、陛下。」
慌てて皇帝の足許へ近づき、身を屈め頭を垂れる。
「何かお入り用のものがございしたら直ぐに御用意致します。何なりとお申し付け下さいませよう。…」
少し震えはしたが、何とか最後まで言えた。とシュザンナは胸をなで下ろした。これ

ならばシュミット老女も及第点をくれるだろう。服の擦れる音がして、皇帝も身を屈めたようである。意外なほど近くで声がかつた。

「いや、それには及ばぬ。」
「…左様でございますか。それではどうぞ良い夢をご覧下さいませよう。…」
もう一度深々と礼をして部屋を退出しようとするシュザンナの手を、かさついた手が掴んだ。何故かは判らなかつたが、シュザンナの心を恐怖が走つた。思わず知らず、身体が後ずさつた。しかし皇帝はその手を離そうとはしない。

「皇帝陛下……」
怯えて彼を見上げる瞳と声が、フリードリヒ四世の半ば眠つていた征服欲を刺激した。この何も知らずに後宮に迷い込んで来た小鳥を、自分の手の中にしっかりと捕らえてみたい。手を離せばこの小鳥は彼の許を飛び去り、二度と戻つては来ないような気がした。

「シュザンナ・フォン・バーネムンズ、一つ所望しても良いか？」
彼はその希望が絶対に拒絶されることとはないと判つていて尋ねた。

「…はい、何でもございませう。陛下の所望とあれば何なりと。…」
「それはそなたじゃ。…」
その後のことをシュザンナはよく覚えていない。嫌だ、止めて欲しい、それらの言葉が頭の中を駆け回つたが、その言葉を口にしてしまうとするとシュミット老女の厳しい顔がちらついた。恐怖と驚愕と羞恥と苦痛、それらが交ぜになつた中で、シュザンナ・フォン・バーネムンズは「少女」から「女」になつた。

翌朝、皇帝の起床と共に邸内は再び活気づいた。しかし、若い女主人の姿は食堂に現れなかつた。
食堂で皇帝から何事か耳打ちされた執

事が、女中頭のシュミット老女に廊下に出るよう目配せする。

「何か不都合でも起つたのだからか？控えの間で待機しては限りでは、これと言つて何もなかつた筈だが。」
「この館の主が皇帝の不興を買つたということ、この館に暮らす全ての者が不興を買つていつてある。シュミット老女は不安で波打つ心を必死で押さえて執事の後にいつて行つた。誰にも聞かれない心配のないころまで来ると、執事はシュミット老女を振り返り、皇帝からの伝言を伝えた。」

「シュザンナ様にはひどく昨晚の事が衝撃であつたらしくてな。皇帝陛下がお目覚めになられた時には、既に寝間の中に姿はなくなり、片隅で膝を抱えて震えておられたらしい。」

「まあ、何という礼儀知らずな御振舞い。を。申し訳ございません。私の教育が悪うございました。ヘンドリクス殿。」
「いや、皇帝陛下は別にその事をお怒りにはなつておられない御様子、貴女が責任を感じる必要はあるまい。むしろそんなことがついで可愛いと、シュザンナ様のことが殊の外お気に召したようなのじゃ。」

「何たる御心の広さ、ありがたいことでございます。」
「だが陛下では、シュザンナ様のお気持ちを落ち着かせることは出来ぬと仰つてな。話しかけても怯えてしまわれて、かえつて逆効果なのだぞな。それで、シュザンナ様のことは誰ぞ近侍の女性に任せたいと仰せなのだ。フレイライン・シュミット、貴女にお任せしてよろしいかな。」

「勿論でございますとも。どれ程御自分が幸福か、よく言つて聞かせて差し上げねば。…」
数十分後、シュミット老女は皇帝用の寢室で途方に暮れていた。シュザンナの精神構造はシュミット老女の理解の範囲を超えていたのである。何故シュザンナがそれ程打ち

ひしがれているのか、シユミット老女には判らなかつた。最初、彼女はシユザンナに向かつて祝いの言葉を述べた。

「シユザンナ様、この度は誠にめでたいでございます。皇帝陛下の寵を受けるなど、帝国中の女の夢でございます。その夢の叶う女人は極僅かでございます。この上はどうか益々陛下に御奉仕あつて、一日も早い御懐妊を願うばかりでございます。しかし、シユザンナは虚ろな瞳で彼女を見返すだけで、何も言わなかつた。

「これは下手に出過ぎたか？ならば…」
次にシユミット老女はシユザンナを厳しく糾弾した。

「陛下が既に食堂で食事を取つておられるというのに、この館の女主人たる貴女様が未だに夜着のままにおられるというのは何と云つてよいまいしょうか。皇帝陛下が御寛大なればこそ無事に済んでおりますが、本来であれば死を賜つても当然の所業でございますよ。」

いつものシユザンナならば、シユミット老女の小言一つで飛び上がる筈であつた。しかし、この朝のシユザンナには何の効果もなかつた。

その後もなだめたりすかしたりして見たが、シユザンナは何の反心も示さなかつた。無理矢理に立ち上がらせよつと、他の侍女を呼んでシユザンナの身体を引つ張りあげよつとした時、シユザンナの瞳から涙が溢れた。驚いて引き揚げる手の力を緩める侍女達を尻目に、シユザンナの身体は再び床に沈み込んだ。声を上げて泣くわけではなかつた。ただ涙だけが次から次に溢れ頬を濡らし、やがてそれは寢室の絨毯に黒っぽい染みを作つた。

「シユザンナ様…。」
突然寢室の扉が開かれ、ヨハンナが声を掛けた。
「ヨハンナ、ここはお前のような下賤な者の

来るといふではない。直ぐに出て行くが良し。

シユミット老女の声は無視された。ヨハンナは出て行きたくても出ていけなくなつていたのである。

「ヨハンナ、ヨハンナ…。」
シユザンナが彼女の幼い頃からの侍女に駆け寄り、その胸に取り縋つていた。

「一体誰の許しを得てここへ来たのじゃ？」
なおもヨハンナを排除しようとするシユミット老女の言葉に廊下から執事の声に応えた。

「私が許した。」
「侍女のことは私の管轄。ヘンドリクス殿の指図は受けませぬ。」
「貴女のお気持ちは判るが、これは皇帝陛下のご意向でもある。最も気心の知れた者にシユザンナ様について貰いたい」と、フロイヤイン・シユミット、勝手かとは賄ひたが貴女が難儀しているよつであつたので、私

がこの者に頼んだのだ。」
執事はシユミット老女をなだめ、部屋の中にシユザンナとヨハンナの二名だけを残して去つた。

「シユザンナ様…。」
「ヨハンナ…。」

この館に来てから初めての会話であつた。しかし、何と云つて言葉を紡いだらよいのかわからなかつた。ただ、すつとシユザンナを抱き締め、その背中を撫でるしかヨハンナには出来なかつた。可哀想なお嬢様こんな形で男女の秘め事を知るなんて…。

どれ位そつしていたであろう。先に言葉を発したのはシユザンナであつた。
「ヨハンナ、私が皇帝陛下にお仕えするといふのは、ああいつのことだつたの？」
一瞬の間があつてヨハンナは応えた。
「左様でございます。」
「お父様も、その事を存じだつたのね？」
「…はい。」

「存じの上で、私をここに寄りこされたのね。」

「…はい。」
眼を閉じたシユザンナの頬を、また新しい涙が流れ落ちた。

「フロイヤイン・シユミットはもう私に、一日も早い御懐妊を、と言つていたけれど、それは…」
「隠さないで教えて。」

「…御子は、昨夜皇帝陛下がシユザンナ様になされたようにして初めて出来るものなのです。」
「……。」

永遠かと思われるほどの時間が流れたようにヨハンナには思われた。
「…いつか、好きな人と結婚して、その人の赤ちゃんを産んで、夫となつた人がいつまでも近くにいて私達を見守つていてくれて…華やかでなくて良いから、そんな生活が私の夢だつた。でも、私にはもう誰かを好きになる事さえ許されないのね…。」

シユザンナの言葉にヨハンナは応えた。
「シユザンナ様、夢ではございませんよ。皇帝陛下を心から愛し、陛下の御子をお産みになられれば宜しいではございませんか。」

シユザンナは眼を瞑つたまま何も感えなかつた。
（シユザンナ様、まさかどなたか…。）
ヨハンナは突然思い当つた。おそらく初恋とさえ呼べないほど淡いものが、シユザンナの心の中に芽生え始めていたということに、そしてその相手にも心当たりがあつた。しかし、それはシユザンナの言つており、決して陽に当ることなく間に葬り去られるしかない。ヨハンナはシユザンナを抱く腕に思はず力を込めた。そんな形でしか慰める術を持たない自分が悲しかった。

それから間もなく、宮内省では皇帝の女性に対する嗜好が変わつたらしいという噂が拡がった。あの二月の夜以来、フリードリヒ四世は度々シユザンナの屋敷を訪れるようになっており、その分他の女性達の許に皇帝が訪れる機会は減つた。これまでに、足と金銭を使って巨星をつけておいた女性達が全て無駄に終わるかも知れないのだから、宮内省の職員達が慌てたのは言うまでもない。

五・迷宮 ラビリンズ

シユミット老女は最初の皇帝の来館で、自分の面子は立つたと思つたが、ほとつといた。あのみま行つたら、一度も皇帝の寵を受けることなくシユザンナが後宮を去るのではないかと案じていたのである。

それは別にシユザンナのことを心配していたわけではない。後宮で仕える女としての自分の立場を心配していたのである。自分の仕える女主人が、一度も皇帝の寵を受けぬまま後宮から出されるといふことは、彼女のような立場の女達にとって、他家に仕える冊輩に自分の無能ぶりを語つてい

ようなものであつた。といつて、シユミット老女はこれまでそつと目でも他の冊輩を見てきたので、他の者からも自分がそつと目で見られると思つていたのである。

彼女は、女主人が初めて皇帝の寵を受けるところまでのお膳立ては、使用人達の腕の見せ所と捉えていた。彼女達が皇帝の目に留まるかどうかはまさしく運であり、その運を引き寄せるのは使用人達の才覚であるといつのが彼女の持論であつた。皇帝の寵を受けるに相応しいと彼女達が信じているところの女性に、如何にして送り込まれてきた娘や人妻を仕立て上げるかは奥女中としての腕の見せ所であつたし、皇帝の侍従達に付け届けをするなどしてよしみ

を通じ、色々と便宜を図って貰つたといふことも奥向きに仕える者達の間では当然のことであつた。

逆にシユミット老女は、一度でも皇帝の寵を受けた後で女主人が後宮を辞することになつても、それは自分達の献身にも関わらず女主人が皇帝の気に入つてもらえなかつたからであり、責任を感じる必要はないと思つてゐた。そう思つて割り切らねば身が持たなかつたといふ事もある。次々に変わる皇帝の寵愛の対象に一言一憂してゐたのでは、精神にヤスリを掛けられてゐるようなものであつたから。

そして今回、彼女に任せられた女性はず、まだ幼さの残る少女で、とても皇帝の嗜好に適う相手とは思えなかつた。一度限りの寵愛で暇を出されても止むなしと、初めて宮内尚書の執務室でシユザンナに引き会わされた時にシユミット老女は腹をくつたのである。おそらく今度仕える女性が、自分にとって最後の主人になると覚悟してゐた老女にとつて、その事は甚だ不本意ではあつたが……

それがあの日以來、数回に渡つてシユザンナは皇帝の寵を賜つた。これは彼女の長い後宮勤めの中でも特記すべき番狂わせであつたろう。

(ひょつとしたら自分は後宮での御奉公の最後の最後になつて、金鉢を掘り当てたのではないか?)

そんな予感が老女の脳裏にちらつた。(何とて、この娘を他の者に渡してはならぬ。しっかりとこの手に握つておかねば……)

老女はシユザンナの周りに自分の対抗者を排除する決意を固めた。しかし、同様の考えを持つ者がもう一人同じ邸内にいた。執事のヘンドリクスである。彼もまた、自分の年齢からいって、皇帝の寵姫の面倒を見る機会を与えられるのはこれが最後かもしれないと感じてゐた。宮

内省や典礼省といふ部署は、他の部署以上に出世に出自が影響するところである。一帝國騎士の身分しか持たない彼のような者にとつて、唯一栄達の道が開かれてゐるとすれば、それは皇帝の寵姫の面倒を見て、その線から皇帝の恩寵のおこぼれにあずかることぐらいであつたらう。例え皇帝の寵姫にシユザンナがなれないにしても、最後の華の咲かせどころとして、誰に遠慮することもなく己の思つがままに彼女の館で采配を振るつてみたい、という願望が生まれても不思議ではなかつた。

シユザンナの邸館で彼とほぼ同等の権力を有する者といへば、シユミット老女だけである。ヘンドリクスが宮内省や典礼省との折衝を行い、財産管理も任せられたシユザンナ邸の表の顔とするならば、シユミット老女は奥向きの一切を取り仕切る裏の顔であつた。もし邸館の侍女達全員がシユミット老女の許に結集したならば、もともと後宮といふ場所は女性中心の世界である。如何に執事といへども、シユミット老女に邸館の実権を握られるのは目に見えてゐる。そこで彼が考えたのは侍女達の分断であつた。シユザンナに付き添つてヘーネミオンデ家より後宮に付いて来たヨハンナを、老女と噛み合わせることで、老女の勢力を削ぐといふのである。長年の経験により、何処の邸館でも、帝國騎士の家柄出身の者と平民出身の者との間に反目があることくらいお見通しであつた。彼はそこに油を注げばよいのである。

彼の計画は既に実行に移されてゐた。シユザンナが皇帝から初めて寵を受けた翌朝、ヨハンナがシユザンナの許に赴いたのは、実はフリードリヒ四世の意向を受けてのことではなく、ヘンドリクス個人の思惑によつてであつた。しかし、皇帝の名前を出されては虚偽であるとの明確な証拠を掴まぬ限り、シユミット老女も反対できなかつた。そしてシユミット老女よりもヨハンナの方がシユザン

ナの扱いが上手いといふことが誰の目にも明らかになつた以上、シユザンナの近くにヨハンナが付き添ふことを、シユミット老女も苦々しく思いながらも認めざるを得なくなつたのである。ヘンドリクスはこの結果に満足してゐた。

一方、宮内省の官吏達を慌てさせてゐる張本人の少女は、相変わらず鬱々とした毎日を送つてゐた。特に皇帝の来館の予定が告げられた日は、陽が傾くにつれ気が沈んで仕方がなかつた。まさか彼女が夜の来るのを恐れているなどと、ヨハンナ以外は思ひもしなかつたのであるが……

彼女は幾度皇帝の寵を受けても、それに慣れることが出来なかつた。そして皮肉なことに、まさにその点がフリードリヒ四世を惹き付けて止まなかつたのである。それまで彼が相手にしてきた女性というのは、勿論処女だつた者もいるが、皆成熟した肉体の持ち主であり、今を盛りと咲き誇る大輪の花であつた。しかしシユザンナは違つた。ほろび始めたばかりの蕾で、本来ならばその開花は何年か先の筈のところを手折られたのである。彼は新年の挨拶に訪れたかつての侍従武官に、こんな言葉を漏らしてゐる。

「グリーンメルスハウゼン、予はこれまで、花といふものは、その盛りに愛でるものと思つておつた。しかし最近になつて、また咲かぬ蕾のうちから身近に置いて手を掛け、その花開く様を楽しむといふ事を覚えた。自分で育てた花といふものは、他の者に育てられた花よりも可愛いものじゃな。」

グリーンメルスハウゼン小將が、それを、当時皇帝が興味を持ち始めた園芸の話ととらえたか、それとも動き回つて話をする花の話ととらえたかは定かでない。しかし、皇帝の両脇に控えていた侍従達にとっては宮内省の中で囁かれる噂を真実として下級官吏達に伝えるに足る立派な証拠とな

つた。宮内省の職員達が、本格的に、それまで相手にしなかつたほつそりとした体型の貴族令嬢達のリストアップを始めたのはこの頃からである。

晩年のシユザンナを知る者からは想像しがたい事であるが、この頃の彼女にとつて、皇帝の寵愛といふものは、むしろ疎ましいものですらあつたようである。出来ることならば、後宮から逃げ出したかつた。しかし、そんなことをすれば、不敬罪に問われ自分ばかりか、親兄弟は言つに及ばず親類縁者にまで累が及ぶ。もし彼女が、周囲のことを全く考えず自分の感情だけで行動する少女で、「後宮からの脱出」を實際に行つていたら、フリードリヒ四世があまり自分の体面だの皇帝の權威だのといったことに拘る性格ではなかつたことを考えると、意外と処分は軽く済み、シユザンナは再び自由の身になることがあつた。これも知れない。しかし、容姿はともかくとして、考え方や行動の面では模範的な貴族令嬢であつたシユザンナに、そんな大それたことが出来る筈もなかつた。相変わらず、いやむしろ、皇帝の寵を受けるようになつてからは以前にも増して、重箱の隅をつつくようにして口やかましく彼女の一举手一投足を注意するシユミット老女に怯え、どうでも良いような些細なことで侍女達が対立し険悪になる邸内で、館の女主人たるシユザンナは、身を縮めるようにして過ごしてゐた。そして、どの様に過ごそうと刻だけは全ての者の上に平等に流れてゐたのである。

帝國曆四七二年の春、毎年恒例となつてゐる春の園遊会に、シユザンナはフリードリヒ四世の最も新しい、そしてこれまでで最も若い寵姫として、その姿を現すことになつた。

新無憂宮、ノイエ・サンストシーの広大な庭園の一角で開かれたその催しには、主

だった貴族達はその殆どが顔を並べていた。何分にも、議会制度の存在しないこの国では、公式、非公式を問わず、多くの貴族が一堂に会する機会がそのまま国家の重要事項決定の舞台となることも珍しくはなく、まして皇帝が臨席するとすれば、欠席はそのまま不敬の現れと取られた兼ねず、出席しない訳には行かなかつたのである。

この園遊会で、シュザンナは半年ぶりに家族と再会した。とは言つても、後宮に身を置く女性には、幾重にも格式だの慣習だのといったものが絡み付いており、親しく両親と言葉を交わすことなど望むべくもなかつた。両親の側も宮内省から、娘との時間を持つ為には、幾つかの手續が必要であると言はされておられ、娘のためにも自分達の為にも、敢えて禁を犯して娘に話しかけることは出来なかつた。ペーネミュンデ子爵はただ一言、

「元氣そつて何より。より一層、皇帝陛下に御尽くし申し上げるようじに。」

然し、シュザンナの様子は、傍目から見ても、決して元氣そうに見えるものではなかつた。子爵夫人は、以前にもまして細く薄くなつた娘の身体と、かつてはほんのりと桜色に上気していた頬が蒼ざめ、すつかり色を失つてゐるのを見て、自分の予感が不幸にして的中したことを察した。後宮での生活はこの娘にとつて苦痛でしかないのだ。だが、娘を氣遣つ言葉さえ、この母親には掛けることが許されなかつた。後宮に納められるということは女性にとつて何よりの幸せであり、不満などあるう筈もない、というのが建て前である。それに異を唱えることなど許されないのだ。何も言はず、ただ娘を見つめる表情だけが、シュザンナに母の氣持ちを伝へた。そして、シュザンナにはそれだけでも十分に慰めになつた。

シュザンナにとつて、母の無言の慰めを帳消しにし、嬉しい筈の家族との再会に水を

差したのは、姉マルコットであつたかも知れない。マルコットは完璧にシュザンナを無視した。まるで、そこに誰も居ないかのよう振る舞ひ、一言も口を開かなかつた。ただ、時折シュザンナに向ける視線だけが鋭く、憎しみさえ感じられるものであつた。目の前のシュザンナが、自分より豪華な衣裳に身を包んでいることも気に入らなかつたが、何より彼女の感情を害してゐたのは、この半年の間に、人が自分のことを、「皇帝の寵姫シュザンナ・フォン・ペーネミュンデの姉」として見るよつになつたことである。これまで、シュザンナの方が、『社交界の華マルコット・フォン・ペーネミュンデ』の妹に過ぎなかつたといつたのに。

人といつものは、自分の方が優位に立っていると安心してゐた人物にその立場を逆転されると、元から自分の上位にいた者に対する以上の屈辱や反感を感じるものらしい。マルコットにとつて、シュザンナは家族に栄達をもたらす者としてより、己の立場を揺るがした敵であり、不当に得た地位から彼女を引きずり落としてこそ自身の存在が守られるのだという想いが、はつきりとした形は取らぬまま芽吹いてゐた。それは、マルコットがその人生に暮を下ろす寸前まで、彼女の精神にためたう事となるのだが、果たしてその事にシュザンナが気が付いてゐたかどうかは定かではない。シュザンナも、姉が自分のことを好意を持って見てはいないことには気が付いてゐたのだから、まさかそこまで恨まれてゐると思つていなかつたのではないかと思われ。まして自分は生家の為、青春も何も犠牲にして尽くしたという意識があつたとしたならば……。

だが、この園遊会で、シュザンナを打ちのめした出来事は、形ばかりの挨拶を済ませた家族達が彼女の視界から去つた後に起こつた。もともと肉向的で、生家にいる頃より友

人の少なかつたシュザンナである。園遊会でも話し相手になつてくれるような友人はいなかつた。一人ぼんやりと、今を盛りと咲き誇る薔薇の花を眺めてゐると、突然、すぐ後ろで声がした。

「随分、ぼつとした側室ね。私達が近づくのにも気がないなんて、お父様もこんな娘、この何処がお気に召したのかしら？」

「きつと、夜行性なのよ。普段、昼間は御用がないでしょ？この女、ひと、達に。」

「あら、嫌たわ、お姉様おたら、降嫁遊ばされて、仰ることに憤りがなくなられたのではなかつて？」

「ふん、この娘、こゝには負けるわよ。まだ一六ですつてよ。その歳でお父様をたぶらかすんですもの。はしたないつたらありやしない。そんな女にうつつを抜かすお父様もお父様だけれど……。」

声の主はフリードリヒ四世の二人の皇女であつた。一年前にブラウンシュバイク公と結婚し、昨年初孫孫エリザベトを出産したアマリーエと、リッテンハイム侯との婚儀を間近に控えたクリスティーネである。シュザンナは、慌ててドレスをつまみ上げると膝を突き、腰をかかめて、シュミット老女に教えられた皇族に対する礼を取つた。

「トルデンハウム王朝の宮廷に置いて、皇族の権威は絶対であり、それは例え皇女が降嫁し、皇籍を離れても変わりがない。二人の皇女にとつて、皇族以外の人間とは常に身を低くして頭を垂れ、自分達から声を掛けられるのを待つてゐるべき存在であつた。シュザンナは、自分の姿が皇女達の視界に入つた時点で、頭を垂れて跪き、敬意を表してゐるべきであつたのである。」

シュザンナは、自分の汗顔さを責めたが、自分の方から上位者に対して声を掛けることは許されていない。皇女達に対して非礼を詫言ひることも弁解もできず、ただただ許しを乞ふ為姿勢を低くするしかなかつた。

二人の皇女は、当然自分達に向けられるべき恭順の意をシュザンナが示さなかつたことで、彼女に対し悪感情を抱いたようであつた。只でさえ、後宮の女性といつたのは、皇女達やその子孫が帝位に就く際の障害となる男子を産むかも知れない邪魔者なのである。現に、今の皇太子ルードウィヒはフリードリヒ四世の寵姫の一人が産んだ子であり、皇后の実子である二人から見ても母弟にあたる。ルードウィヒの登場により、彼女達は至尊の冠からかなり遠くに押しやられてしまつた。唯一の救いは、彼の生母が彼を産む際に亡くなつており、二人の皇女の母親の皇后の地位を脅かすことがなかつたことである。歴代の皇帝の中には度々皇后を冊立し直す者もあり、その引き金になつたのが、新しい寵姫の男児出産という事例も珍しいことではなかつた。

皇女達は、決してシュザンナが反論できないと承知の上で、シュザンナをいたぶり始めた。あからさまに、何らかの行動を起こす必要はなかつた。ただ、その場に立つてゐるだけでよいのである。声を掛けない限り、シュザンナは顔を上げることができず、跪いたままでもいなくてはならない。更に、皇女達を見つめ返りにいた貴族達が集まつてきた。シュザンナより上位の者が声を掛けられ、シュザンナも立ち上がった。話しに加わることでもできたのかも知れないのだが、集まつてきた貴族達も、皇女達がつとめてシュザンナを無視してゐる以上、誰もシュザンナに声を掛ける者はいなかつた。彼らが談笑してゐる間も、シュザンナは膝を屈したまま頭上にその声を聞いてゐた。自分は孤立してゐると感じざるを得なかつた。

どれ程の間、そつてゐたのだろうか。突然貴族達が左右に分かれた。「アマリーエ、クリスティーネ、そろそろお父上の許に戻つて来てはどうです？ブラウンシュバイク公もリッテンハイム侯も待つておい

分のことを「私」という一人称単数で話していたが、「この頃から」妾、わらわ」と言うようになった。そのように時代が掛かった言葉を使う者など、後宮の女性の中にも既に見あたらなかったたのであるが、それ以外の言い回しも、出来るだけ古語に言い換えるように心掛けた。生活・思想のあらゆる面に於いて、開祖ルドルフ大帝の時代のものが最高であり、後宮の女性は、その優秀な継承者となるべきであるとの、老女の認識に従ったのである。

このシュザンナの変化は、当然 シュミット老女から歓迎された。

（使用人達への態度など、まだまだな所もあるが……まあ良い。形から入れと言つてはないか。私の教えに積極的に従つようになつただけでも進歩というものじゃ。追々この娘も後宮の女性として成長するであらう。典雅で威厳のある後宮の女性に……）

シュミット老女は、シュザンナを自分の手の内に捕らえたと満足の笑みを浮かべた。若い主を、自分の思い通りの女性に仕立て上げて見せる自信が湧いたのである。

だが、シュザンナもシュミット老女も気が付いていないたであらうか？それはまるで迷路を奥へ奥へと進むよつなもので、外の世界とは更に遠ざかっていく道であつたといつたと。後宮に納められて口の浅いシュザンナはともかく、シュミット老女は五〇年近くの年月を後宮の中で暮らしてきた女性である。外の世界の価値観と自分のそれとが食い違つていることにすら気が付いていなかったのかも知れない。また、もし気が付いたとしても、彼女にとっては長年の後宮生活で培われた価値観こそが正しく、それ以外の価値観など、存在するべきでない誤つたものと映つていたのかも知れない。

しかし、それを誰が責められようか？機密保持の名目の許、家族とすら連絡を取ることを禁じられるよつな外界と隔離さ

れた世界で、上から押しつけられる考えに全面的に従い生きていくことに疑問を差し挟むよつな娘であつたならば、シュミット老女は後宮に仕える者として選ばれはしなかつたであらう。

十人並み以上の容貌を持ち、従順で、細々としたしきたりもよく覚え、それなりに機転も利き、おそらく外の世界にあつたなら、良き妻、良き母となつていたのであろう少女を後宮に仕えさせたのは、彼女の両親であつた。宮廷で働いたことがあるといつのは、帝国騎士以下の家柄の年頃の娘にとつて何よりの勳章であり、両親にしてみれば、娘がよりよい縁談に恵まれるよつなといつ親心であつたに違いない。

だが、シュミット老女は後宮の侍女としての適性がありすぎた。最初に使えた先々帝の側室の一人であつた女性は、シュミット老女のことを気に入り、手許から離そうとしなかつた。七年後、先々帝の寵を失つた女性が後宮を辞することになり、シュミット老女も連れて出よつとしたが、既にその頃シュミット老女は宮内省の女性職員として中堅になつており、能力も高く評価されていた。後宮に残つて後進の女性職員の指導をするよつな言い渡された。年齢的にも、二〇代前半の彼女は、宮内省の官吏達から見れば扱いやすい相手だつたのだらう。それが、もう三年ほど後のことであつたら、知りすぎており、扱いにくい」と忌避されたかも知れないのだが、彼女は結局、極普通の女性として生きる機会を失つたのである。

後宮の中にシュミット老女は娘時代を埋めた。その後も仕える女性が後宮を去つたり、先々帝、先帝の崩御に伴つて寵姫の女性に入れ替わりなど、彼女には外界に戻る機会があつた。しかし、その時には既に彼女が後宮に身を置いてからあまりにも長い歳月が流れており、彼女は、いわゆる「嫁、ゆき遅れ」、「嫁、ゆかず後家」

と称される年齢に入つていた。彼女を後宮に奉公に上げた時の両親の目論見とは裏腹に、持ち込まれる縁談の相手は、経済的には問題が無くとも、後添えを求める子持の男であつたり、聞いたこともない辺境の地に住む男であつたり、とても「やんことなき身分の方達」の側近くに仕えきた者が、朋輩達に胸を張つて嫁げるよつな相手ではなかつた。かと言つて、年老いた両親に変わつて実家を仕切つている兄弟の世話になるもはばかられた。後宮に仕える女性が、奉公中に実家に戻るのを許されるのは、自分が病気に倒れるか、兄弟姉妹の結婚、或いは、近しい身内の葬儀の時だけである。親族の中で、自分は既に死んだも同然の存在となつており、二、三日の短い間でさえ、表面上は家の誇りと褒めそやされても、兄弟やその家族から、実体を伴つた彼女の「宿下がり」が煙たがられている事は、痛い程伝わつた。彼女にはもつ、後宮にしか居場所がなかつたのである。

「退がつても良いですぞ。勿論、残りなければ残つても構いませんが……」

担当の官吏から、暗に後宮から去るよつな言われても、唯々諾々とそれを受け入れることは出来なかつた。「福祉」といつ考へなど、髪の毛、筋もない帝国においては自分の一生には、自分が、その扶養者が責任を持つしかない。夫も子もなく、兄弟の世話にはならないと決めた以上、シュミット老女は、自分の食い扶持を自分で確保するしかなかつた。そして、僅か一〇数年分の恩給では、女性の平均寿命までの数十年間、我が身を養つていける自信など持てなかつた。まして、年老いて、身体の自由が利かなくなつた時のことを考えれば、蓄えや恩給は、どれだけあつてもこれで足りるといつことはない。出来るだけ長く勤めること、それがシュミット老女にとつて、唯一、安心して過ごせる老後の為の手だてだつたのである。

彼女もまた、その人生を時代の波に呑み込まれた、寂しい女性の一人だつた。

園遊会から数週間後、シュザンナはフリードリヒ四世を初めとする皇族達と共に初めて白兵戦といつものを見た。それは士官学校が卒業式を間近に控え、毎年行つてくる校内の対抗試合で、ここ数年、学生の間で一位になつた者は、帝国軍装甲擲弾兵団にその人ありと謳われるオフレッサー大佐への挑戦権を与えられる事になつていった。

試合用とはいへ、筋骨逞しい男達がトマホークを振り回す有様は、それまで「闘い」とは無縁で過ごしてきたシュザンナにとつて恐ろしい光景であつた。

試合は、装甲服に仕込まれたセンサーによつて、与えられたダメージを感じし、それを実戦用のトマホークの攻撃力と装甲服の防御力に換算して、一方が戦闘不能状態と表示される迄続けられる。時間制限などを付けて途中で止めさせないのは、白兵戦で戦つ時には精神力がものを言い、敵がそこにいる限り、時間が来たから逃げられるものではない、といつ装甲擲弾兵総監の意見によるものであつた。

「いくら試合で強くとも、実戦で役に立たねば仕方がない。白兵戦は体力だ。瞬発力、持続力、いずれが欠けても負ける。」

これが彼の持論であつた。

この年の卒業生の中には、他の生徒とは素人目にも実力に差がある生徒が入つていた。その学生生の試合だけは、シュザンナも安心して見る事が出来た。均整の取れた長身が織りなすその動きは、まるでトマホークを使った舞のように滑らかで美しく、白刃の軌線に気を取られている間に、勝負が付いているのである。

「ほう、これは見事だ。」

フリードリヒ四世の口からも感嘆の声が漏れる。

解説役として皇帝の傍らに侍っていた白兵戦の教官が恭しく紹介した。

「彼は、ブルーノ・フォン・シーエンコップと申しまして、士官学校でも、オフレッサー以来の逸材と低学年の頃より評判でございました。祖父の代に、遠縁の者の不始末で爵位を取り上げられ、現在は単なる帝國騎士 ライヒス・リッター に身を落としておりますが、本来は男爵家の生まれでございまして……ああ、これは余計なことでございまして。」

教官は、深々と一礼して要らぬ事を皇帝の耳に入れたことを詫言ると、再び白兵戦に話題を戻した。

「とにかく、技の切れが素晴らしいのです。破壊力ではオフレッサー大佐にかないませんが、その攻めるポイントが、私などから見ましても芸術的……彼とオフレッサーが装甲擲弾兵団にある限り、裏切り者の集まりである処の薔薇の騎士団、ローゼンリッター など恐れるに足りませぬ。」

予想通り、その若者が大会の優勝者となり、皇帝一家の前に進み出て言葉を賜る栄を得た。装甲服のヘルメットを外した顔を見ると、くすんだ金髪にダークブラウンの瞳をした端正な顔立ちの青年である。白兵戦の名手と言え、オフレッサー大佐のように、如何にも獐猛な印象を与える容姿をしているものと思っていたシュザンナにとって、それは意外であった。

「そなたの闘いぶり、実に見事であった。これから精進するように。」

皇帝の言葉に、膝を屈し、装甲ヘルメットを脇に抱えたまま深く頭を垂れる姿もなかなか洗練されている。

しばらくの休憩の後、いよいよその日一番の出し物である、大会の優勝者対オフレッサー大佐の模範試合が執り行われた。

オフレッサーのトマホークは、通常のものの、長さにして一七倍、重さにして一五倍以上ある特注品であった。それを二

〇センチに届こうという逞しい巨体が両腕で振り回すのだから、その破壊力たるやすさまじいものがある。流石に練習用という事で、実戦用のもののように手足が飛び、胸が寸断されるような事はなかったが、それでも、彼がトマホークを振り回す度に聞こえる鈍い唸りは、それを受け止めた時の犠牲者の衝撃を十分に予想させた。これまでの数年間、彼は自分に挑戦してくる若者を、彼の分身ともいふべきトマホークの一撃で粉砕してきたのである。

しかし、その年の挑戦者は少しばかり違っていた。何度オフレッサーのトマホークが振り下ろされても、その刃先が彼の身体に直に触れることはなかった。逆に、挑戦者の方もオフレッサーを攻めあぐねていた。オフレッサーのトマホークをかくくり、一瞬の間を以てその装甲服に一撃を加えては飛び下がる。その繰り返しである。生徒同士の闘いの折には、その一撃で相手に十分なダメージを与えていたのだが、オフレッサーは、渾身の一撃を急所に与えさせてはくれなかったのである。

試合時間が五分を過ぎ、一〇分に達しようとする頃、流石に両者も疲れてきたのである。動きが鈍くなったように観客の目には映った。

オフレッサーがトマホークを横殴りに振った際に、僅かにトマホークに加わった遠心力がオフレッサーの重心を乱すのを、ブルーノ・フォン・シーエンコップは見逃さなかった。瞬時に反対側に回り込み、己のトマホークを叩き込もうとした。しかし、数分の一瞬、彼が思っていたよりもトマホークがオフレッサーの身体に到達するのに時間が掛かったようである。戻ってきたオフレッサーのトマホークが、跳ね上げるようにして、それとぶつかった。

火花が飛び、若者の身体は弾き飛ばされた。若者が臀部から着地した。その後方に獲物を逃したトマホークの先端が落ちる。

残りの部分は若者の手の中にあつた。彼のトマホークは、オフレッサーの与えた衝撃に堪えきれず、柄の部分で折れてしまったのである。

トマホークの柄を投げ捨て、軍用ナイフを構えようとする挑戦者に、オフレッサーはトマホークを振り上げ、そして振り下ろした。観客の幾人かは、思わず目を瞑った。しかし、トマホークが人体に当たると衝撃音は聞こえてこなかった。挑戦者の頭上五センチと開いていないところで、トマホークが止まったからである。

すっかりと眼を開き、自分を見上げている挑戦者に向かって、オフレッサーから、その巨軀に相応しい笑いが放たれた。

「学生の身で、俺の攻撃をこれだけかわせるとはな。スピードだけは認めてやつても良い。だが、それだけでは勝てぬ。白兵戦で最もものをいうのは、やはり力だ。」

勝者と敗者、どちらにより多くの拍手が降り注いだか判らなかつた。その場に居合わせた者達は、戦場という舞台に新たな花形役者が登場することを確信した。

しかし、その俳優が表舞台に登場する機会は巡っては来なかつた。彼の存在は歴史から、そして人々から忘れ去られた。歴史が彼のことを思い出し、再び彼に登場の機会を与えるのは、この一四年後のことである。しかし、舞台は戦場ではなかつた。

帝國曆四七二年六月、皇帝フリードリヒ四世の第二皇女クリスティーネは、かねてから婚約中であつたりッテンハイム侯ウイヘルムと華燭の曲をあげた。それは、一年前の第二皇女アマリーエとラウンシュバイク公オットーとの婚儀に勝るとも劣らないものであつた。

フリードリヒ四世は、少女時代からつめてこの二人の皇女を等しく扱つていた。皇后がそれを望むからということもあつたが、当人達の互いに対する感情が

どうあるつとも、どちらか一方を優遇すればもう一方の周りを取り巻く者達が不満を持ち、宮廷内にいらぬ争いの種を蒔くことにならないとも限らない、そう案じたからでもあつたらう。そのお陰か、それとも、遅れて登場した妾腹の皇太子ルードヴィヒのお陰か、この姉妹はさしたる争いもなく成長した。しかし、それぞれが夫を持つた今、その関係がどのようになつていくかは判らなかつた。まして、皇太子は人柄や頭脳の点では人並み以上と言つて良かったが、あまり頑健と言える身体を持ち主ではなかつた。幼い頃から喘息の持病があり、度々大きな発作に襲われ、何度か冥界との境をさまよつたこともある。もしも

弟の二等辺三角形のバランスは崩れ、それぞれの夫達が自分達の権利を主張して後継者争いが勃発する恐れは十二分にあつた。

「わざわざいいことじゃ……。」

娘の晴れの席でありながら、フリードリヒ四世は何故か心が重く沈んでいくのをどうすることもできなかつた。

同じ頃、婚儀の祝砲を、新無憂宮、ノイエ・サンストシー、西苑でフリードリヒ四世同様、或いはそれ以上に暗い気持ちで聞いていたものがある。シュザンナである。

彼女はまた単なる子爵令嬢の身分しかこの時持つていない。その為、式典に出席することもできず、私邸にもつていたのである。祝砲は、彼女に、自分には決して訪れることのない未来を見せびらかしているかのようであつた。

(所詮自分は日陰の身、晴れて皆から祝福される様なことはない……諦めた筈だつたのに……結婚も、優しい夫も、暖かい家庭も……皇帝陛下の娘であるクリスティーネ様は当たり前のようにそれを手に入れようとしていて。なのに、私にはそれが許さ

れない…。」

「シュザンナはそれまで、身近で華やかに振る舞つ姉マルゴットの姿を見て、我が身と引き比べ嘆くようなことはなかったが、この時クリスティーネ皇女に対して抱いたものは、シュザンナが初めて感じる強い妬みの感情であったのかも知れない。」

帝国暦四七二年の初夏から翌年にかけて、ゴールデンバウム王朝にとっては慶事が続く。皇女クリスティーネの結婚、懐妊、皇孫の誕生である。

秋になって、クリスティーネ皇女の懐妊が公になると、宮廷内では不謹慎なことながら、貴族達が、皇女の胎内の子の性別をネタに賭を始めた。彼らにいつこの賭は自分達が今後のゴールデンバウム王朝の権力者のうち誰につくかという権力闘争の幕開けでもあった。

もし、男子が誕生すれば、皇太子ルードヴィヒに次ぐ帝位継承権第二位の座は確定的であり、それは取りも直さず、リッテンハイム侯の勢力が急激に強まることを意味する。反対に女兒であれば、第一皇女の夫であるブラウンシュバイク公の順位は変わらないだろう。子供が生まれてからどちらに寄り寄るかを決めるよりは、胎内にあるうちから態度をはっきりしておいた方が、彼らの覚えがめでたくなることは必定であった。

貴族の中には、リッテンハイム侯爵家に入りしている医師に物品を送って、クリスティーネ皇女のお腹の子の性別を教える賞おうとした者もいた。羊水を取り、その中に浮かぶ胎児の剥離した皮膚細胞を調べれば、男女の区別など簡単だといわれている。ゴールデンバウム王朝以前の社会では、胎内の子供に遺伝的疾患がないかを調べるために極めて頻繁に行われていた検査であったが、然し、クリスティーネに対し

てそれを行うのは不敬に値することであった。それはまさしく、ゴールデンバウム王朝の遺伝的優越性を疑つたものであったからである。ブラウンシュバイク公爵家にして、四〇〇年以上続く名家であり、その血統には何度が皇室の血が混じっている。「常識として」「皇室や大貴族の間で」「遺伝的な問題が起さずはない」のである。まして稀にはあるが、この検査が原因で流産や早産を起こすことがあると聞いている。クリスティーネが首を縦に振るはずもなかった。

胎児の性別が判らぬまま月日は流れ、間もなく産み月に入るといふ頃、リップシュタットの森にある、ある貴族の邸宅に、一人の宮廷医が招かれていた。「ホイス、どうだな？そなたにいつても悪い話では無かるう？」

名刺を呼ばれた初老の男は、ハンカチで額の汗を拭いながら、大きく息を継いだ。「…確かに悪いお話ではございません。然し…。」

「然し、何だ？言ってみよ。」
「然し、恐れながら、クリスティーネ様のお腹の御子は、こちらのエリザベート様御同様に皇孫でいらつしやいます。それを…もし、そのことが明るみに出ましたなら、私はどうなりますよう？大逆の罪で、一族郎党処刑されるのは眼に見えております。」

「だから、上手くやれと申してある。それに万が一、発覚の恐れがあるときはわしの手を打ってやる。」

「と申されますと？」
「そつたな、フェザンなり叛徒共の所なりそちの望むところへ亡命させよう。勿論そちの家族も一緒だ。生活に不自由しないだけのものも遣わそう。」
「はあ…。」
「そつそつ、言い忘れておつたがな、今頃そちの家族は宇宙港からわしの領地であるヴェスターラントに向かって飛び立った頃だ。」

だ。」

「な、何と仰いました？」

「そちの言つとあり、万が一といつことがあるのだな。発覚しても彼の地ならば安心だ。所定の手続き無しには、たとえ皇帝陛下の使者と言えども降り立つことはできんその間にそちの家族は安全な場所まで逃がしてやる。」

「そ、それではまるで」
脅迫ではないか、と言おうとして宮廷医は口をつぐんだ。もはや自分の取るべき道は一つしかないことを、彼は悟つたのである。

「では、この仕事、引き受けて貰えると考えた良いのだな？」
「…確かに…。」

苦渋に満ちた返答を聞き届け、その手に金貨の入った小袋を握らせると、依頼人は椅子から立ち上がり、窓際へとその身体を運んだ。窓の外は、迫り来る闇に太陽が最後の抵抗を試みているところであった。濃朱色の背景に黒々とした樹々の梢が浮かび上がり、その上には群青色の空が拡がっていた。

「…皇女の腹の中の子が、男子で無いことを祈るのだな。わしも祈つておる。」
輝き始めたばかりのまだ淡い星の瞬きを見つめながら、依頼人は低い声で言った。

期待と不安の入り交じつた周囲の関心の中で、帝国暦四七三年五月、降嫁一周年を前にしてクリスティーネは、フリードリヒ四世にとって二人目の皇孫を出産した。ただ、残念ながらこの皇孫は、第一皇女アマリーエの場合と同じく女子であった。サビーネ・フォン・リッテンハイムである。この報を受け取って落胆した者もあれば安堵した者もいた。最も落胆したのは、クリスティーネの夫で、誕生した赤子の父親であるリッテンハイム侯であり、最も安堵したのは、宮廷医ホイスであったことは言う

までもない。

もし、この赤子が男子であったならば、シュザンナの人生もまた現実とは変わったものになり得たかも知れない。だがそれは、既に起こつた事柄についてこそ言えることであり、実際にそつなつていたらどうなっていたか、誰にも確証はないのである。

皇女クリスティーネの出産に伴う宮廷のざわめきがようやく収まるうとしていたある日、宮内尚書アイゼンエルツ伯爵の許に、後宮への往診から戻つた医師からの報告が届いた。

「ペーネミュンデ子爵令嬢シュザンナに懐妊の兆候あり」
帝国暦四七三年、シュザンナ一七歳の夏のことである。

七・懐妊

アイゼンエルツが知らせを受け取る数日前から、シュザンナは体調を崩していた。最初は暑さ負けかと思ひ、それくらいで皇帝陛下のオペラ鑑賞のお供を断るわけにはいかなないと気分が悪いのを我慢して劇場に出かけた。しかし、貴賓席の椅子に腰掛けているだけで冷や汗が滲み生睡がこみ上げ、オーケストラの音さえ耳障りで、とうとう前のめりに突っ伏してしまつたのである。真つ青なシュザンナの顔を見て、フリードリヒ四世はオペラ鑑賞を途中で切り上げ、退出することを許した。私邸に戻つたシュザンナは、早速に医師の診察を受けることになった。宮内省の医師詰所からシュザンナの邸宅に駆けつけたのは、グレーザーであった。
「おめでとつございます。御懐妊のようでございます。」

幾つかの検査の後、懐妊を確信した医師の言葉に対して、シュザンナは無表情であった。嬉しいのか嬉しくないのか、自分でもよく判らなかつた。自分が母親になるといふことが不思議な気がした。

無反応な女主人とは対照的に、使用人達の歡喜は大きかつた。特にシュミット老女の喜びよつた。一際目立つた。常口頃、微笑みすら浮かべたことのない厳格な女中頭が満面の笑顔で、寝台に横たわるシュザンナに祝いの言葉を述べた。

「お手柄でございますよ、シュザンナ様。これでお腹の御子が男子であつたら、皇帝陛下もさぞやお喜びでございますよ。」

その声を聞くのさえ苦痛で、胸元の不快感を何度も飲み下しながら、シュザンナは小さな声でこれだけ言つのがやつとであつた。

「お願い、休ませて……」
医師や使用人が退出した寝室で、一人になつたシュザンナは天上を見つめて思つた。

（私は皇帝陛下を愛しているのかしらう。だとしたら、私が想像していたものとは、殿方を恋慕う気持ちは随分違つものなのね。それでも女は、その殿方の子供を身籠もることが出来るのね。）

それに対する答えはどこからも与えられなかつた。然し、シュザンナは漠然と感じていた。自分が夢見ていたような幸せな結婚によつて得られた子供であつたらば、今回の懐妊ももつと嬉しく感じられた筈だ。また一つ自分の夢が現実の前に崩れるのを、シュザンナは認めざるを得なかつた。

同じ時刻、これまで生きてきた人生の中で、もつとも大きな昂揚感を味わっている人物が同じ邸内にいた。シュミット老女と執事のヘンドリックスである。「この場合、シュミット老女の方が、よりその喜びは大きかつたかも知れない。」

後宮で働く女性達の出世競争の終点は、表向きは各屋敷の女中頭である。シュミット老女は既にそれを手にしていた。しかし、表には常に裏がある。彼女達にとって、真の意味での出世街道の頂点は、皇帝の一番の寵姫の女中頭であり、場合によってはその館の平女中の方が、他の屋敷の女中頭よりも力があるといふことすら稀ではなかつた。

いつ頃からであるか、シュミット老女は自分が若さを喪つたにつれ、宮内省の男達が自分を冷遇していると感じるようになった。自分より奥女中として未熟だと思われる若い朋輩達が、より皇帝の関心を惹きそつた女性に付けられていくと感ずることも度々であつた。自分のところに廻されてくるのは、それらの女性に比べると一段劣るよつに思えてならなかつた。一度、その疑問をやらわりと口に出してしてみたことがある。

「何だか、私がお仕えする方は寶石止まりね。寶石とまでは行かないよつたわ。」

それに対する返答はこつたつた。

「ええ、その寶石を寶石以上に輝かせるのが貴女の仕事です。若い者には無理ですからね。」

書類の手続きで宮内省まで出向いた時に、自分の半分も年齢のいつていない他家の侍女に、彼女が仕えている女性の方がシュミット老女の仕える女性より皇帝の来訪が多いという理由で、順番を譲るよつに迫られたこともある。

「何を言つのじゃ！私の方がお前などより上位の筈。若輩者のくせに身の程をわきまえよ！」

思はずかつたとなつて怒鳴りつけたが、部屋から出てきた担当の官吏は、訳を聞くと「この娘の方が貴女よりも忙しいのです、フロライン・シュミット。大人げないことを仰らず、順番を譲つてあげては如何です？」と、逆にシュミット老女を非難するよつた。

口調で言つた。その時の娘の顔を、シュミット老女は忘れることが出来ない。勝ち誇つたよつな表情、自分を蔑むよつな眼。

宮内省からの
「残りたければ残つてもいい」といふ言葉だけを頼りに彼女は後宮での生活の後半三〇年近くを生きてきたが、その大部分は、本当は宮内省の官吏達は自分の存在をよしとしていないといふ確信の針のむしつたの上であつたと言つても過言ではなかつたかも知れない。

だが、彼女は今「シュザンナ」というダイヤモンドの原石を手に入れた。宮内省の官吏達もガラス玉だと思つて自分に投げて寄つたのであるよつし、自分もそれがダイヤモンドだと気付くのに時間がかつたが、この原石は磨き方、カット一つで後宮で燦然と光輝く筈であつた。漸く、漸く積年の無念を晴らすことが出来る……シュミット老女はこの時、自分の余生が光輝に満ちたものであると信じて疑わなかつた。

シュザンナの懐妊の報は、直ちにフリードリヒ四世の許にも届けられた。

「ほつ、シュザンナが……」

これまでに二〇回以上同じ報告を受け取つたことのある皇帝は、それ程大きな感情の揺れを表に現すことはしなかつた。それに、彼は知つていた。決して、懐妊の報がそのまま慶事に繋がるとは限らないといふことを。それは、皇后や寵姫の懐妊を伝えられた回数半分くらい何度も、彼が味わつた失望によつて得た教訓であつた。

「で、どんな様子なのじゃ？シュザンナは？少しは気分も落ち着いたのか？」

「いえ、まだ御気分すくれませす、自室にてお休みになつておられるとのことでございますが……」

「そつか……。短い時間で構わぬ。少し、あれの顔を見に行つて来よう。あれはまだ歳もゆかぬし、初めてのことで心細くもあるよつ。」

。特に急な決裁を必要とするものはなかつたはずじゃなつ。」
そつ言つた、全銀河に君臨している善の初老の男は、椅子から立ち上がり、ゆつくりと薄暗い廊下へと消えていつた。

四半刻程後、フリードリヒ四世の姿はシュザンナの居室にあつた。来る途中でバラ園で咲き始めたばかりの新しい品種の花を摘み、それを見舞ひとしてシュザンナに下賜したのであつたが、これはあまり、今のシュザンナにとつて良い品とは言えなかつた。そのバラは、特に香りの強い品種であつたのである。

バラの香りに、少し落ち着いたかに見える胸の不快感が再び蠢きはじめるのを感じつても、シュザンナはフリードリヒ四世の訪問を嬉しく思っている自分に気がついた。皇帝の来館を心より嬉しく思えたのは初めてのことであつた。

それから出産までの数カ月が、シュザンナにとつて、後宮でももつとも幸せな日々であつたかも知れない。悪阻は重く、水分さえ取れない状態が続ぎ、邸外に出ることさえ出来なかつたが、毎日のよつに見舞ひに訪れるフリードリヒ四世との時間は、穏やかで、シュザンナの心を癒してくれた。特に会話が弾むと言つわけではない。ただ、こつつじやな、気分は少しは落ち着いたかなつ。」

と寝台の横の椅子に腰掛け自分を見つめていてくれる。ただそれだけで、シュザンナは悪阻の苦しみを和らぐよつに感じた。

ある日、皇帝がその手に持つて入つてきたものは、特にシュザンナを喜ばせた。繊細な象眼を施されたオルゴール。蓋を開くと、古い円舞曲がゆつたりと流れた。

「こつじやな。胎教にも良からつと思つて作らせたのじゃが、無事に子が生まれたらそれと対になるよつ、もつ一つ作らせておるのじゃ。子守歌だかな。」

円舞曲を背景音楽に皇帝の言葉を聞き

ながら、懐妊を知らされた日に自分自身に向かつて投げかけた問の答えを、シュザンナは見つけたような気がした。

(やはり私は皇帝陛下をお慕い申し上げているのだわ。愛しているのだわ。)

永遠にこの時が続くのだわ、シュザンナは信じていた。皇帝と自分と、そして生まれくる子供と三人で、こんな穏やかな時間をいつまでも持ち続けていけると…。たとえ正妃でなくてもいい。こんな時間が持てるなら…これがその時のシュザンナの偽らざる気持ちであった。

シュザンナの懐妊が公になると、それを喜ぶ者がいる一方で、快く思わぬ者も当然のことながら存在した。前者の代表は、シュザンナの両親バーネミニンデ子爵夫妻や子爵家に関わりのある縁者達である。ただ、姉マルゴットだけは、この知らせに不機嫌になった。自分を差し置いて、ほとんど高みに昇って行くかのような妹が許せなかったからである。後者の代表はフリードリヒ四世の娘達とその夫である。そして、シュザンナの懐妊をもっとも複雑な想いで受け止めたのはアーデナウアー伯爵家の三男、ヘネディクトであった。

彼は、未だにシュザンナのことを忘れられずにいた。後宮に入った以上、皇帝の胤を懐妊し、皇子、もしくは皇女の母となるのは彼女の為に言はしいことであるのは間違いないかった。皇帝の子の母となれば、たとえ皇帝の寵を失うことになっても、その将来は保証されたも同然である。幼なじみとしては喜んで然るべきである。その頭では判っているのだが、然し、感情はそれをよしとはしなかった。マルゴットとは別の意味で彼は自分達とは遠く離れた存在になっていくシュザンナの姿を苦い想いで見つめていたのである。

後宮の女性に対する将来の保証とは、逆の視点から見ると、一生、宮内省の束縛

を受けるといってもある。皇帝の子を生めば、シュザンナが再び自分達のいる世界に出てくることは、その子が亡くなりもしない限りあり得なかった。臣下に下賜される皇帝の寵姫に皇帝との子があつた場合、下賜された家臣がその子を奉じて帝位を巡る争いが生じることと考えられたとえ皇帝の寵愛を失おうとも、彼女達がか解き放たれることはなかったからである。

ヘネディクトは、ゴルトンバウム王朝の貴族社会で生きて行くには、少々純粹すぎたのかも知れない。今少し、彼の兄達のように、一人の女性に対する自分の想いが成就せずとも、他にも女性は沢山いると考えられる人間であつたならば、或いはこの四年後、姉を後宮に連れ去られた少年のように、権力者から愛するものを取り戻そうと決心出来るほど強い反骨精神を持った人間であつたならば、その人生もまた変わったものになっていたのであつた。だが彼はそうではなかった。大舞踏会での運命の悪戯を恨み、自分を恨み、それまでたしなみ程度にしか口にしなかつた酒を痛飲することが多くなつた。それまでヘネディクト・フォン・アーデナウアーは、穏やかで誠実な青年として好感を持って見られることが多かったのだが、この頃から彼は、彼や彼の周囲の人間が期待していた人生から大きく外れていったのである。

シュザンナの体調は安定期といわれる懐妊五ヶ月に入つても、いつこうに良くなるなかつた。悪阻の為に、殆ど自室にこもり外に出ることがなく、運動不足になつていたことも良くなかつたのであつた。すぐに息切れがし、体を動かすのも大儀であつた。妊娠が進むにつれて貧血状態が現れ、それに更に拍車を掛けた。

「胎児と母体の健康維持の為」という名目の許、数々の検査が行われた。

その中に、皇女クリスティーネに対しては決して行われることのなかつたあの検査もあつた。

羊水中の胎児の細胞から、胎児が男子であると知つた時の宮内省の反応は異常といつてもよい程であつた。

「これは、大手柄だ。シュザンナ・フォン・バーネミニンデにはそれなりの褒賞を与えてしかるべきである。」

フリードリヒ四世はシュザンナの胎内の子が男児と聞いた瞬間、その子が無事に産まれる可能性の低さを感じたのではないが、そして、不幸な結果に終わった場合のシュザンナの立場を考えたのではないが、

「公爵といつのはちと大袈裟かも知れぬが、侯爵の爵位には値しよう。」

宮内省内部の昂揚は、典礼省を巻き込んでトントン拍子に進み、バーネミニンデ子爵令嬢シュザンナに、侯爵夫人、マルキーゼの称号を授与してはどうかという話がフリードリヒ四世の許に上奏されるのに、さして時間はいかからなかつた。この件に対して、フリードリヒ四世の返答は「ちと気が早いのではないか。今しばらく待つてはどうか。せめて八ヶ月に入るまではな周圍があまり期待し、騒ぎ立てては、かえつて辛い思いをさせることになるかも知れぬ。」

という、消極的な反対に近いものであつたと、当時侍従を務めていたシュラー子爵は自身の日記に記している。しかし、これはフリードリヒ四世が、シュザンナが男児を身ごもつた事に、何ら感慨を持たなかつた故ではないらしい。

記録によると、フリードリヒ四世がこの時点までに女性の胎内に宿させた子は、途中で流産、死産した者も含めると全部で二二名いた。しかし、取りあはずも無事に生まれた一三名のうち、男子は皇太子ルードヴィヒを含め僅か二名に過ぎない。逆に流産死産した胎児には、一対四の割合で圧倒的に男児が多い。これは、おそらく何らかの障害があつた場合、男児の方が抵抗力が弱いと思われる。胎児の側に遺伝子上の問題がある場合にしても、母体に問題があるにしても、である。

フリードリヒ四世はシュザンナの胎内の子が男児と聞いた瞬間、その子が無事に産まれる可能性の低さを感じたのではないが、そして、不幸な結果に終わった場合のシュザンナの立場を考えたのではないが、

実際それまでに、男児を死産した寵姫がその事で自分を責め自殺した例もあつた。その時も、妊娠初期から胎児が男児であるといふ事が判つており、周圍が過大な期待をその寵姫に寄せたことをフリードリヒ四世は見て知っている。しかし、子は生きてこの世に生まれることはなかつた。女性はその不幸な結末の全ての責任をその細い肩に担わされた。周圍が有言無言の圧力を掛けたのである。父親である皇帝に何ら問題がない建て前である以上、胎児に起こつた不幸の原因は、女性か、宮廷医達に帰すべきであつた。当然宮廷医達は、自分達の身にその責務を負うことをよしとはしなかつた。我が子を失い傷心の女性にとつて、それがどんなに辛いことであつたか…。女性の死は、産後の肥立ちが悪かつたための病死として処理され、宮内省などの書類にも真実は記されていないが、その時の関係者達の頭の書庫には、その時の記録が鮮明に残されているのである。

帝国暦四七三年も暮れよつとする頃、一八歳になつたシュザンナは懐妊八ヶ月目を迎えた。精神的なストレスが妊婦には良くないからと、シュミット老女も懐妊前のように口やかましいことを言わなくなり、女主人の懐妊という慶事に館内の争いも一時納まつたかに見えた。この事はシュザンナを、皇帝の毎日の来館とともに、精神的にも安定させた。

お腹の子が男児と判つてから、シュザンナはその子にマクシミリアンという名前を付けて呼んでいた。名君として高貴な晴眼帝マクシミリアン・ヨゼフ二世にあやかつてのことであつた。勿論、公式な名前ではない。

皇子や王女には、皇帝が名を与えるのが慣例である。しかし、シユザンナからその事を聞いたフリードリヒ四世は、皇子誕生の時はマクシミリアンという名前を皇子に与えようと彼女に約束していた。

増血剤の投与によつて貧血状態も改善され、シユザンナの類は幾分以前より丸みを帯び、再び桜色にほんのりと染まっていた。胎児も順調のようである。「ここまで来れば皇子の誕生はまず間違いないと判断した宮内省と典礼省は、今一度フリードリヒ四世にシユザンナへの侯爵の爵位授与を上奏し承諾を得ると、早速に授与の手続きをとり、授与式を執り行った。

久しぶりに西苑を出て東苑に赴き、皇帝の手から爵位の授与を記した一遍の紙を頂く。ただこれだけのことに、シユザンナの胸がどんなに高鳴ったことか。それを見守る両親も、思いは同じだったに違いない。母親などは、前回会った時に比べ、はるかに元氣そうな娘の姿を見ただけで涙ぐむ程であった。

（ついでこの娘には向かないと思つた後宮での暮らしかけれど、これで何とかこの娘もそれなりの幸せを手に来れる。あのまま、陛下からも見捨てられるようなことがあつたら、シユザンナの人生は余りに虚しいものに終わってしまうところだった。）

後宮に納められてから二年、漸く娘は後宮にいる場所を見つけることが出来た。昨年春の園遊会でのシユザンナの様子を思い出して、ベーネミニオン子爵夫人は心から安堵していたのである。

式部官の音が室内に響きわたる。「全人類の支配者にして全宇宙の統治者天界を統べる秩序と法則の保護者、神聖にして不可侵なる銀河帝国フリードリヒ四世陛下、御入来！」

出席者が低く頭を垂れる前を、皇帝が玉座へと進む。彼がその軀を黄金張りの豪華な椅子に沈めると、式部官が今日の式

典の主人公の名前を明々と読み上げる。「ベーネミニオン子爵嬢シユザンナ殿」

武勲を立てた將軍や王朝に尽くした高官が踏みしめた同じ絨毯の上を、シユザンナは歩いてきた。彼らの叙勲の場合に比べれば、観客ははるかに少ない。しかし、帝国女性と生まれて、これ以上の幸せがあるだろうか？自分が主役なのだ。皆が自分を見ている。もし、これ以上の名譽があるとしたら、それは……そこまで考えて、シユザンナはその思いを頭から振り払った。それは、不敬罪にあたる考えであつたからである。

玉座の前まで進むと、シユザンナはドレスのスカート部分の両脇を僅かに摘み挙げて腰を屈め、頭を垂れた。その所作は、懐妊八ヶ月の女性とは思えぬ程洗練された。隙のない、典雅なものであつた。一年という歳月は、物慣れぬ内気で恥ずかしがり屋の少女を、臍長けた後宮の女性へと確実に変化させていたのである。

シユザンナには既に聞き慣れた、しわがれた声が頭上から降ってきた。

「シユザンナ・フォン・ベーネミニオン、日頃の忠誠に対し、汝に侯爵夫人、マルキーゼの称号を与える。帝国暦四七三年一月二二日、銀河帝国皇帝フリードリヒ四世。」

本来であれば、ここでシユザンナが立ち上がり、階、きざはしを上がって、最敬礼と共に皇帝から読み上げられた紙を受け取ることになつていただ。しかし、そうはならなかつた。

室内にとよめきが沸き上がった。椅子から立ち上がった皇帝が、自ら階、きざはしを降りてシユザンナにその紙を渡したのである。

「シユザンナ、軀に気をつけるのじゃぞ。」
「陛下……身に余るお言葉でございます。一旦顔を上げて、大きく見開いた夢見る

ような暗青色の瞳に皇帝の姿を映し込み、それだけを言つと、シユザンナは再び頭を垂れた。それはシユザンナの人生が、最も光輝に彩られた瞬間であつた。

この瞬間を、シユザンナと同じ色の一對の瞳が、憎悪の炎を灯して見つめていた。（許せない。姉の私を差し置いて二つも上の階位に昇るなんて……）

シユザンナの幸せそうな表情と、流石にいかたデザイナーがデザインしたドレスでも隠せなくなつた腹部の膨らみを、頭を垂れた姿勢のまま上目遣いに睨み付けて、マルゴット・フォン・ベーネミニオンは、あのお腹を思いきり踏み潰してやれたらどんなに気分が良かるうかと思つていた。

マルゴット以外にも、シユザンナを祝福せぬ者はいた。それぞれに色の異なる四対の瞳の持ち主。彼らはシユザンナのすぐ後ろから、彼女を、まだ憎悪とまでは行かぬが明らかな悪意を持つて見つめていた。読心術が出来たなら、互いに同じ事を考えていることに気付いて苦笑したかも知れない。

（あの腹の子を、何とかしなくては……）
それは、シユザンナの胎内に宿る子が男児と知つたときから、一組の夫婦の心の平穩を許さぬ命題だったのである。

侯爵号を授与されてから二ヶ月後、帝国暦四七四年一月の末に、シユザンナは陣痛に襲われる。

既に数日前から、いつ出産が始まってもおかしくない状態であるとの診断が下つており、宮廷医の詰め所には、産婦人科と小児科の医師が必ず待機する事となつていた。ベーネミニオン邸に駆けつけた医師団は、オレンブルク、ホイス、フリードマンの三医師と数名の看護婦である。

当時の大貴族出身の女性には珍しくないことであつたが、シユザンナの出産はかなりの難産であつた。陣痛が弱く、なかなか出産が進行しないのである。手術によつて胎

児を取り出すことも考えられたが、それは皇帝の寵姫の身体にかなり大きな傷を残すことになる。進んだ医療技術によつていずればその傷もきれいに消えるであろうが、出来ることならば侯爵夫人の身体にメスを入れることは避けるべきである。モニターで見える限り、胎児は心拍もすっかりとしており、緊急を要する状態に陥らない限り、手術は行わないというこで医師団の意見は一致した。

後に、オレンブルク医師が知己のグリルメルスハウゼン子爵に話つたところによれば、陣痛開始から胎児の誕生までに要した時間は七〇時間近い。当然、医師や看護婦達も疲れていたはずである。三人の医師は一人が休息をとり、二人がシユザンナの経過を見るといふローテーションで事にあつた。胎児の出産時は、ホイスとフリードマンがシユザンナの側に控えており、三人の中で最も上位であつたオレンブルクは仮眠のため、別室に下がっていた。この時、シユザンナには栄養補給のためブドウ糖液とビタミン剤が点滴投与されており、側管から陣痛促進剤もシユザンナの陣痛の様子を見ながら微量調節されながら投与されられていたよつである。出産の一時間ほど前に、この陣痛促進剤入りのバイアルが空になり、新しいものと交換されている。しかし、このバイアルには所定の用量よりかなり高濃度の薬剤が混入されていたよつで、シユザンナは急激に強い陣痛を起し、胎児を娩出した。大量の出血も見られ、シユザンナの周囲は慌たてた。応援のためにオレンブルクが呼ばれてシユザンナの寝室に入った時、母親であるベーネミニオン侯爵夫人は大量の出血のために人事不省であつたが、誕生した皇子は弱々しいながらも声を立てていた。しかし、その命の炎はあつという間に燃え尽き、後には静寂だけが残されたといふ。

更に、医師団の責任者としてオレンブルク

八・喪われしもの

を暗澹たる思いに突き落としたのは、看護婦が床の上に見つけて、無言のまま責められた顔で彼に提示した空のアンブルであった。それは既に何人かの者の靴に踏みつけられ、容器それ自体は粉々になっていたのであるが、ラベルを読み取ることは未だ可能であった。そこには抗血液凝固剤の名前が記されていたのである。母体の異常な出血も、それならば説明が付いた。この類の薬剤は、胎児に移行すると、胎内死や誕生後の各種臓器からの出血を引き起こす。最も恐ろしいのが脳内出血であり、胎児の体内に移行した薬剤の量によっては、狭い産道を通ってくる際の圧力で容易に誘引される。勿論、妊娠中の女性に対してであって、どこにても投与しなくてはならない場合もあるが、その場合は細心の注意を払って、女性の血中に於ける薬剤の濃度や血液凝固能を見ながら慎重に投与するのだ。しかし、今回、ヘーネミュンデ侯爵夫人にその必要があったとはとても思われなかった。第一、そのような重篤な副作用を有する薬剤を、責任者たる自分に何の相談もなく使用するなどあり得ないことであった。(この中の何者かが龍姫とその胎内の皇子の命を狙ったのだ。)

それを公にするべきか否か？ オレンブルクは迷った。結局彼は、出来る限り穏便に事を済ませる道を選択した。たとえ、その薬剤を点滴内に混入したのが誰であつても、その場の責任者である自分も罪に問われるのは必須であつたから、公式記録には、この出産について口一行こう記されている。

「帝国暦四七四年三月一日、ヘーネミュンデ侯爵夫人シユザナ、男児を死産」

三月一日になって、シユザナは意識を回復した。眼を覚ました彼女がまず最初に気になったのは、生まれたばかりの我が子のごとであつた。そこで、付き添っていた看護婦に声を掛けた。

「私の赤ちゃんはどこへ会いたいわ。連れてきて貰えるかしら？ それとも、私が赤ちゃんの所に行つた方がいいのかしら？」

看護婦は、困つたような顔で唇を噛みしめ、何事かためらっている様子であつたが、やがて、無言のまま部屋を出ていってしまった。その様子が違和感を覚えたシユザナは、屋敷の中が余りにも静まり返っていることに気がついた。どうしたのだらう？ 陛下の御子が生まれたというのに、少しも華やいだ気配がしない。それとも、赤ちゃんがよく眠れるように、皆、静かにしているのだらうか？

少々荒々しく扉が外から開かれ、先程の看護婦を従えて、シユミット老女が入ってきた。看護婦にしてみれば、辛い宣告だけに、気心の知れた邸内の人間から伝えて貰つた方が、褥婦のためにも良いと考えてのことであつたのだらう。

「フロイトイン・シユミット、赤ちゃんはマクシミリアンは何処ですか？」

先程と同じ質問を発したシユザナに、シユミット老女の言葉が、ナイフのように突き刺さつた。

「そのような者はおりませぬ。」

「どこに？ どこへ？ 何処か他の場所に移されたのですか？」

「いいえ、この世の何処にも、そのような赤子はおりませぬ。」

「判らないわ。どういふことなの？」

シユザナの心の中で、不安が膨らんだ。

「シユザナ様、貴女様は、折角の陛下の御子を、きちんと世に送り出すことをなす

来なかつたのでございます。皇子様は生きてお生まれになりませんでした。貴女様は生きておられるというのに！ 陛下の御子を、命に代えてもお守りするのが貴女様のお役目でございますよ！ 貴女様のせいでございます！ 貴女様さえもつとつかりしていらつたやれば、皇子様も亡くなられずに済んだのでございませぬよ！」

これは無理な注文といつてよかつた。あの状況下で、シユザナに何が出来るのか？ しかし、シユミット老女の頭の中では、これは真実であつた。「自分の骨折りによつて、折角授かつた陛下の御子を、この娘は死なせてしまったのだ。しかも男子を、無事に皇子が生まれていたらならば、当然自分に寄せられたであろう宮内省の官吏共の賞賛の声も、朋輩達から向けられたであろう羨望の眼差しも、全てはこの娘の不始末の為に虚空に消えてしまった。皇子の命と共に。」

「そんな…そんな筈がない…だつて、だつて、私は聞いたよ、赤ちゃんの産声を聞いたよ、そんな筈がない、そんな筈がない、そんな…そんな…嘘、嘘よ…嘘でしょ？ お願ひ、嘘だと言つて！」

シユザナは悲鳴のような声を上げて、シユミット老女に絶り付いてしまった。しかし、未だその身体につながれた点滴のチューブや点滴台がその邪魔をした。よろけて倒れたシユザナは、床に突っ伏したまま号泣した。シユミット老女はその姿を、怒りに燃える眼で見下ろした。そして、そんな一人の傍らで、若い看護婦は、凍り付いたように立ちすくんでいた。

その日の夜、シユザナの意識が回復したと聞き、出産後初めて彼女を見舞つた皇帝フリードリヒ四世に、シユザナは何度も謝つた。

「申し訳ございません、何と言つてお詫ひ申し上げればよいのか…私は…私は…」

「謝らなくてもよい。運悪かつたのじゃ。あなたの責任ではない。そなただけでも無事でよかつたよ、予は心から喜んでおめでとう。何か欲しいものはないか？ そんなことぐらゐしか、予にはしてやれぬ故、遠慮なく申してみるがよい。」

皇帝の言葉に感謝しつつ、シユザナは願つた。我が子を一度、よいからこの胸に抱きたい。彼女はまた、一目たりとも自分が生んだ子の顔を見ていなかったのである。赤子は翌日には埋葬されるはずであつたから、その夜を逃せば、彼女は一生、その子を見るこゝろがかなわなかつた。

無言のまま頷いたフリードリヒ四世は、シユザナの枕元の呼び鈴を振つた。程なくシユミット老女が現れたが、皇帝は彼女に執事のヘンドリクスを呼ぶよう命じた。これはフリードリヒ四世が命じようとした内容が、女性よりも男性に向いた内容であつたため、別にシユミット老女を軽んじてのことではなかつたのであるが、シユミット老女にとっては自分の非を皇帝に責められているような気分であつたらしい。

(これといつのも、あの小娘が陛下の御子を死産などするからじゃ。)

皇間の怒りが、再びシユミット老女の胸の中で響き始めた。しかし、皇帝の御前であつては、それを体外に解き放つこともできない。ただ、一礼をしてきびすを返し、執事を、この一件のために汚点をつつけられた自分に成り代わり、この館の実権を握ることを皇帝陛下より許されるであろう執事を呼ぶために、シユザナの寢室をあとにした。

シユミット老女と入れ替わりシユザナの寢室に駆けつけた執事ヘンドリクスは、フリードリヒ四世から、シユザナを新無愛宮ノイエ・サンスーシー、内にある安置堂まで連れていく手配をするよう命じられた。私邸から安置堂までは地上車、ランド・カーで走つても五分は掛かる。その上

安置堂の内部には十幾段かの階段も昇らねばならない。

「世の中に生きている価値があるのは、健康な者だけ」という思想の許、皇帝ですら自分の脚で移動するよう設計された宮殿である。車椅子などが登れるようなスロープがつけられている筈もない。屈強な男の手を借りねば、平坦なところですら足許のおぼつかないシュザンナは、安置堂に入ることもできなかつたのである。

厚い雲で月の光も遮られ、僅かに雲の切れ間からちらつく星の輝きだけが間に抵抗している庭園の、数本の銀杏、イチヨウの樹に取り囲まれた一画に、安置堂はあった。宮内省と典礼省の官吏、そして近衛兵が数人、寝ずの番をして、名前さえ与えられずに葬られる皇子を守っていた。

（こんな暗いとこで…）
そう思っただけで、シュザンナは赤ん坊のことが哀れでならなかつた。祭壇に安置された棺の中に、皇子は眠っていた。赤みを帯びた金髪の柔毛が頭を包み、生まれたばかりにしては長いまつげが影を落としていた。

「抱いてやってもよろしいでしょうか？」
シュザンナの言葉に、控えていた官吏は慣例に反すると拒否しようとしたが、それをフリードリヒ四世が制した。

「抱いてやるがよい。時間の許す限りな…。」
棺の蓋を開け、胸に抱いた我が子は、まるで水のように冷たく、棒切れのように固く突っ張り、「も」でしかなくなっていた。少しでもその身体を温め柔らかくほぐしてやりたいと抱き締めても、その身体がシュザンナの身体に寄り添ってくることがなく、シュザンナは我が子と自分との間に、埋めようのない隙間があることを感じずにはいられなかつた。

シュザンナは耐えた。叫びたいのを懸命に耐えた。しかし、涙だけは溢れるのを押し

えられなかつた。肩を振るわせ、祭壇の前に行きシュザンナに、フリードリヒ四世が声を掛けた。

「シュザンナ、そのよつなごころには、そなたも身体が冷えてしまふ。ここにきて座るがよい。」

「すめられるまま、作り付けの椅子に腰掛けてどれほどの時間が経つたのだらうか？もやを透して朝の光が安置堂の中にまで忍び込んで来た。」

「そろそろ、御遺体を棺の中に御戻し頂きませんと…。」

官吏の一人が皇帝とその寵姫のいずれにということもなく声を発した。

「誰か、はさみかナイフを持っておりませぬか？持っていたら妾に貸してたもれ。」

近衛兵の一人が軍用ナイフをシュザンナに渡した。しかしその目は注意深く皇帝の寵姫に注がれていた。もしも、彼女がそのナイフの刃先を己に向けるようなことがあつてはと用心したのである。鞘から抜き取られた刀身が白銀色に輝いた。次の瞬間、シュザンナは我が子の巻き毛を一房切り取つていた。

（マクシミリアン、お母様と一緒に…いつまでも、一緒に。だから、寂しくないわよね？）

その髪を手に、頬を濡らしたままシュザンナは何度も振り返り、安置堂を後にした。それが、シュザンナが我が子を見た最後であつた。

シュザンナの男児死産、これによつて、しばらく続いていたシュザンナとシュミット老女の蜜月は終わりを告げたと云つてもよい。シュミット老女は、事あるごとにシュザンナを責めた。何かシュザンナが彼女の意に叶わぬ行為や言葉の口にする度、それを責め、

「そのよつなごころだから、大切な陛下の御子を殺してしまつたのです。」

と、全てそこに結びつけたのである。

シュザンナはこれに対して、当初無抵抗であつた。萎んだ風船のような腹部、吸つ者もおらず、熱を持つて痛む乳房、それらは皆、彼女に襲つた子息のことを思い出させたやがて、身体は癒え、シュザンナは殆ど懐妊前と変わらぬ体型を取り戻した。僅かに白く浮き出す幾筋かの妊娠線以外は、懐妊の名残は消え去つていた。それさえも、現在の医学ならば数カ月で完全に消し去ることが出来ると宮廷医達は保証して見せたが、シュザンナは特にそれを望まなかつた。それは、その白い線が、確かに自分があの赤子を自分の胎内で育んだのだという証のように思われたからである。

四月も半ばに入り、バラの蕾も膨らみ始めた頃、シュザンナは再び皇帝の外出に随行することを医師から許可された。ただしそれは、フリードリヒ四世が望めば、という話である。フリードリヒ四世はこの当時、毎日とは行かぬまでも三日のうち二日はシュザンナの許を訪れて見舞つており、その関心は相変わらず、シュザンナの上にあつたよつである。しかし、シュザンナの社交界復帰は、春の園遊会まで待たされることになつた。これには訳がある。

シュザンナの死産は、それを望んでいた者にも望んでいなかった者にも、等しく一つの歎きを与えた。「皇帝の寵姫」を堂々と糾弾できるという歎きを、それに火を付けたのはフリードリヒ四世の二人の皇女達である。

彼女達は、シュザンナの子が死産であつたという事が公にされると殆ど同時に、父帝の許を「お慰め申し上げる為」に、次々に訪れた。そして、折角授かつた弟を失つたことを悲しみ、そんな結果を生んだ若い寵姫の非を鳴らして見せた。それから、悲しいことは早く忘れてしまつようすすめ、フリードリヒ四世にはルードヴィッヒもいるのだし、何より、「自分や娘」は父帝と血も

つながつており、どんな寵姫であろうと、肉親である自分達ほど父帝の事を思つてはいない」と念押しをして帰つていった。それは別々に訪れたにも関わらず、何故か余りにもよく似た論法であり、フリードリヒ四世は寂しげな微笑みを持って娘達を送り出したのである。

父帝の許から辞した後、皇女達は南苑に住む実母である皇后の居室で互いの姿を発見することになる。しかも、目的も全く同じであつた。

「お母様、あの女はよくありません。折角授かつた父上の御子を死産するなど、後宮の女としては失格です。」

「そつですとも。後宮の女達の務めは皇帝の血統を残すこと。それはゴルドンパウ△王朝にとって必要なことだからこそ、お母様はあの女達の存在を石を噛む思いで我慢なされているというのに、その御寛大さに応えぬとは、後宮追放も当然でございませう。」

二人の皇女は異口同音に、シュザンナの後宮追放を要求した。それに対して皇后エレーノレは、あまり関心無さげに心えた。その言葉は、彼女達を半分落胆させ、半分喜ばせた。

「シュザンナ・フォン・バーネンコンス、バーネン・ミュンデ侯爵夫人をどうなされるかは、全て陛下がお決めになること。妾にはそのよつな力はない。それはそなた達にも判つておるはずでありませう。陛下のお気持ち、他の女に移れば、あの者も後宮から退くことにならうが…。」

「では、あの女を追い出せるかどうかは、お父様次第ということなのですね？」

「落胆を隠せぬ様子でアマリーエが確認した。お父様のお気持ちは如何なのでしょう？あの者が後宮に納められて、もう二年半になります。そろそろお父様も、あの女に飽きていらした頃なのではございませぬ。」

か？」

第一皇女クリステイーネが一縷の望みを掛けて尋ねた。

「宮内省では、あの者が後宮に納められてからというものの、あの者によく似た細身の若い娘を捜し回り、その中の幾人かを陛下に差し出したようじゃが、あの者ほどに陛下の御心を捉えた者はおらなんだようじゃ。流石に、あの者が懐妊後、お相手を務められぬようになってからは、時折、お情けを掛けられる娘もおったようじゃが、せいぜい二、三度お相手を務めると、陛下の足は、もう娘の方に向くことはなかつたという。」

皇女達は顔を見合わせて溜息をついた。「ただ、出産をしようと女子、おなごは変わることも多い。身も心もな。本人はそのつもりが無くとも、殿方には変わったように映るらしい。はたしてその辺りを、陛下がどのように感じられるか……まして、あの者をお気に召したのが、あの者が持つていた未通女、おほこ、さ故というのであれば、子を産んだための者に興醒めなされることは充分あり得よう。」

皇女達の噂が輝いた。その後、シュザンナが療養している間、ブラウンシュバイク公爵家並びにリッテンハイム侯爵家に近い貴族達が、あちらこちらで、シュザンナの皇子死産に対する落ち度を高らかに歌い上げた。また、新しく後宮に納められた娘の数も、僅かな間に片手一杯にした。これは両家から宮内省に、何としても皇太子につく男児を儲けるために、新しい寵姫の出現が望ましいとの圧力が掛かったためであった。皇女達とその夫達は考えたのである。たとえ、ペーネミュンデ侯爵夫人に替わる寵姫が現れたとしても、その時はその時、今生えている雑草を枯らすことこそ先決である。この雑草は思った以上に根が深く、実を結び種が飛び散ってからは退治するのみなかなか

困難なように思われた。たとえ、その後、無数の雑草の芽が生えたとして、根も浅く、丈も低いものならば、自分達の玉座への道を妨げるものではないと判断したのである。

三月末から四月初めに掛けては、シュザンナに対する糾弾の音が最も宮廷内で高かった時期であり、そのような中にシュザンナを放り込むことに、フリードリヒ四世も医師団も、また、シュザンナ擁護派の官吏達も二の足を踏んだ。その為にシュザンナの社交界復帰を遅らせたのであるが、シュザンナに対する誹謗は、別の噂によって影を潜めることになった。

「皇帝の女嬪の何れか、或いは兩名が共謀して、ペーネミュンデ侯爵夫人の出産に立ち会った医師に皇子を殺害させた。」

この噂は刺激的で、多くの貴族達からまるで叛徒達を殲滅して凱旋した將軍のように歓呼の声を挙げて迎えられるのである。噂の発端は、シュザンナの出産に立ち会った三名の宮廷医のうち二名が、相次いで死したことにあった。フリードマンはシュザンナの死産に責任を感じての服毒自殺、ホイスは休暇を取って郷里に帰る途中で宇宙船の事故に巻き込まれて、と発表されたのであるが、何処にも、そしていつの時代にも、そのような事象を下コマ仕立てにしたい人間はいるものなのである。きつと、用が済み、その存在が邪魔になつた医師達は企みが発覚する事を恐れた皇帝の女嬪の手で始末されたに違いないと、その脚本家は筋書きを作つて見せた。シュザンナは一躍悲劇の主人公に仕立て上げられ、彼女に対する糾弾の嵐は急速に静まることになった。帝國曆四七四年の春の園遊会は、そのような空気の中で行われたのであった。そしてシュザンナはその噂を耳にする事になる。

彼女の耳にその噂を入れたのは、財務尚

書のカストロプ公爵オイゲンであった。彼は通算一五年間に渡る財務尚書時代の間に、先祖から受け継いだ財産を何倍にも膨らませたことで知られている。然し、そのやり方があまりにも露骨だった為、大貴族の間ですら好意的に迎えられる人物ではなかつた。数年前にも何度目かの収賄疑惑が持ち上がったのだが、巧みに法の網の目をかいくぐり、時の司法尚書ルীগ伯爵に「みごとな奇術」と皮肉られたほどである。

カストロプ公自身は、末は國務尚書の座をもと考えていたようであるが、何分にも人望が無き過ぎた。それが更に、公爵に蓄財への傾倒を強めたという事は言えるかも知れない。自分もドルフ大帝以来の名門であり、まして公爵家の当主となれば、身の上で皇帝フリードリヒ四世の女嬪達に引けを取らないという自負は、彼に自分より若くして権力の階段を駆け上がるつもりでいる皇女の夫達への複雑な感情を育んでいた。そこへシュザンナの男宿死産に彼らが関与しているという噂である。カストロプ公にしてみれば、二人の大貴族の評判を失墜させられるという暗い歎息を感じたとしても、不思議ではなかつた。勿論、それが真実であつたとしても、証明されることはなく、ブラウンシュバイク公とリッテンハイム侯が罪に問われることもないであらうという事は、自分の経験からも判っていた。だが、何も彼らだけが聖人君子の衣をまとつていゝのを、指をくわえて見ている理由は、カストロプ公にはなかつた。

園遊会に現れた美しい被害者が、御機嫌うかがいの貴族達の挨拶を受けているのを発見したカストロプ公は、シュザンナに近づいていった。彼がシュザンナの座る椅子にたどり着いた時、丁度、人波がシュザンナの周りに曳いたところであつた。「ペーネミュンデ侯爵夫人、お身体の方はもうよろしいのかな？」

突然掛けられた声に、シュザンナは内心嫌悪を感じた。彼女も、カストロプ公の噂は、後宮に納められる以前より聞き知っていたからである。だが、三年前ならともかく、今のシュザンナはそれを表面に見せるようなことはなかつた。艶然と微笑み、公爵の、おそろくは形ばかりの氣遣いに感謝してみせる。

「ありがとうございます、財務尚書閣下。御陰様で外にも出られるようになりましたわ。御心配をお掛けいたしました。」

「いやいや、氣丈なことだ。折角掛つた皇子を、あのような形で殺されて尚、そのようにお氣持をしつかりと持つておられるとは……。男の私でも真似できませんな。並みの男など足許にも及ばぬ。」

「殺されて……この一言がシュザンナの鼓膜を打つた。その只、似たようなことを言ってくる者はいた。然し、彼らは『殺されて』とは言わなかつた。『亡くされて』と言つた。シュザンナは作り物の笑顔が自分の顔から剥がれ落ちていくのを感じた。

「公爵様、殺されて、とは一体……？」

「ご存じなかつたのか、侯爵夫人には？ 貴女の生んだ皇子の死には、ほれ、あそこにいるブラウンシュバイク公と。」

カストロプ公は顎をしゃくって、離れたところから立っている皇帝の二人の女嬪をシュザンナに示して見せた。

「向こつのリッテンハイム侯が絡んでいるのもうばらの噂ですぞ。貴女の出産に立ち会つた宮廷医を抱き込んで皇子を殺害させた。立ち会つていた宮廷医二名が立て続けに亡くなつたのはご存じていらしたかな？ それもまた、彼らが口封じに行つた行為の結果と言われておるが……。真実は全て闇の中、証人がおらぬ以上、誰も彼らを罰することは出来ませぬ。もし侯爵夫人が懇意になさつておられる医師があつたならば、皇子の命も消されることなく済

朝が君臨した約五〇〇年間のうちに、彼らが流した毒物によって傷つけられた遺伝子は、皇室との婚姻というぎりびやかな衣装に身を包んで彼らの許に逆流し、今や彼ら自身の血を汚していた。決して公にされることはなかったが、本来、遺伝的に優れているとして現在の地位を得た筈の大貴族の方が、市井の平民よりもはるかに異常児の出産率が高かったのである。そしてそれは、権力の中枢に近い家柄ほど顕著であった。

シュミット老女はその毒物を、彼女が後宮生活で最後に仕えた、まだ年若い女主人の体内に忍び込ませることで、自分が夢見て遂にその手に掴めなかつた栄光に別れを告げたのであった。多分、あれを口に含んだシュザンナは、元氣な子をその手に抱くことは無い筈である。もし、再び懐妊するようなことがあつたとしても、それは女主人の破滅への序曲となるかも知れなかつた。別に女主人に取り立てて恨みがあるわけではない。ただ、そつせねば後宮を出ていく事に耐えられなかつたのである。

（私が去つた後で皇子の誕生など、そんなことは決して許さない。貴女の栄光は私とだけ、共にあるべきなのだから。）
どこか胸に呑み込めぬ痛みを抱えながら、シュミット老女は新無憂宮 ノイエ・サンスーシー 西苑と東苑を繋ぐ門をくぐつた。二度とこの門を通ることは無い筈であつた。

シュミット老女の後ろ姿を、露に濡れた薔薇の花だけが見送つていた。

九・女後継者

シュザンナの男子死産……この出来事

は、ペーネミュンデ家の後継者決定にも大きな影響を与えた。彼女が無事に皇子の母となつておれば、シュザンナの両親も彼女の将来に不安を感じることはなかつたであろうが、死産となると話は別である。制度上の保証が与えられない以上、娘の将来が皇帝の気持次第の不安定なものであることに、何ら変わりはない。

もしも娘が皇帝陛下の寵を失つことになつても、女一人で生きていくのに何の不自由も感じないように、ペーネミュンデ子爵とその夫人は、シュザンナにペーネミュンデ家の全ての財産を相続させることにしたのである。これは親心から出た、いわば保険であつた。

ただ、後世の歴史家の中には、このペーネミュンデ子爵夫妻の決断が、シュザンナ・フォン・ペーネミュンデを重なる非劇の迷路へと追い込んだのだと言つる者もいる。彼女が両親から莫大な財産を得ていなくなつたならば、彼女はこの数年後、フリードリヒ四世の寵愛を競争相手に奪われた際に、生活の糧を得るためにも、下賜金を賜つて早々に後宮を出ざるを得ず、もつと穏やかな人生を送つていたであらう。しかし彼女には、皇帝の寵愛を失つても、それまでと同様の生活が続け、体面を保つだけの財力があつた。財力というものは、一般的には人を幸せにするものであるはずなのだが、時によつてそれが無ければ味わわなくて済んだ苦しみを与えることもある。ペーネミュンデ家の私有財産という、経済的基盤があればこそ留まる事の出来た後宮での生活は、彼女にとつて、怒りや嫉妬といった人間の負の感情に彩られたものであつた。そしてそれが、今では誰も知らぬ者のない、「あの暴挙」に彼女を走らせることになつたのだというのが、その歴史家の見解である。

しかし、特に愚鈍な質でも無いが、全知全能とはほど遠い極々普通の人間であつた。

ペーネミュンデ子爵夫妻に、将来起る悲劇を予見できる善も無く、両親にしてみれば、これは全くの善意であつた。何分にも姉嬢のマルゴットの妹への態度が心配であつた。彼女がシュザンナのことをよく思つてはいない事は、ペーネミュンデ子爵夫妻も感じていた。自分達が健在な間はよい。しかし、自分達に何かあつた時にマルゴットがペーネミュンデ家の実権を握つていては、シュザンナの生活をいざというときに支える者が誰もいないのである。

ただ、困つたのは、マルゴットの処遇であつた。妹が侯爵夫人 マルキーゼ の称号を得てからというものは、マルゴットは生家の爵位に不満を漏らし、父親に対しては、それをはつきりと口に出しては、曰く、「お父様ももつと何かで業績をお上げになられれば、爵位だつて子爵ではなく、侯爵悪くても伯爵には進めておられるでしょう。向上心のない父親を持つと娘も肩身が狭いわ。」

と。そして、更に自身の結婚についても、次のように言つたようになつた。
「妹に侯爵があるというのに、姉の私が子爵家の人間というのは我慢がならないわ。しかもそれがあの娘。この夫やその先祖の業績によるものとが言つたのであれば判るけれど、あの娘。自身に対する爵位なのよ。あの娘。何が何をしたというの？ 皇帝陛下を騙して、誑し込んだだけじゃない！ 私は絶対いやですからね。シュザンナより下の爵位のまま人生を終えるなんていつかは、私の夫になる人には、ペーネミュンデ家を子爵から侯爵に引き揚げてくれる人を迎えるか、そつでなければ自分が侯爵家の当主になる人のところに嫁がせて頂戴！ ペーネミュンデ子爵家、なんてどうにでもなれだわ。」

何代にも渡つて続いて来た家名を誇らしく思い、重要なものとして生きてきた父親にとつて、これは非常に辛い言葉であつた。

どこに出しても恥ずかしくない娘と姉嬢のことを自慢してきたが、自分達夫婦は娘の育て方をどこかで間違えたのであつたか？ 心の内で不満を感じるのには致し方ないとしても、それをこつともあからさまに口にせずとも良いではないか。

しかし、ペーネミュンデ子爵はそれを決して口に出すことはなかつた。出して見たところで、それはまるで火に油を注ぐようなもの、姉嬢のいらだちを増すだけだと感じていたからである。今のマルゴットには、「子爵家に誇りを持て」という父の言葉は、本来空高く飛翔できる筈の身を地上に縛り付けておく鎖としか捉えることは出来ないであらうと、本能的に感じていたのであつた。

いずれにせよ、帝国暦四七四年一月、シュザンナは正式にペーネミュンデ家の後継者として典礼省に認められた。両親がシュザンナを跡継ぎに決めてから、半年以上の時間を要したのは、跡継ぎが男子ではなく女子であつた為である。

一心、家長は男子というのが伝統として定着していた帝国では、女子の家督相続というのは忌避される傾向にあつた。たとえ女子しか子供が居ない場合でも、然るべきところからその娘の伴侶となる男子を求め、その者に家を継がせるというのが不文律となつていたのである。例外は、突然の家長の死によつて、縁組みの決まつていない女子しか後継者候補が残されていない場合である。しかし、この場合でも、駆け込み乗車的に娘達の伴侶として名乗りを上げる男性がいれば、相続権はその男性の方が優先される。それは、次男二男に生まれて生家の家督を継ぐ機会に恵まれない男子を救済する為の策でもあつたのだが、その為には辛酸をなめる女性が居たことも、また事実であつた。

実際、帝国暦四三〇年代に、このよつなケースで一つの家門が途絶えている。

当主の二人の娘達に、それぞれ複数の求婚者が現れたのだが、娘達の存在はどこかに消し飛び、求婚者達の争いがその親族を巻き込んで繰り広げられた。まずは一人の娘を手に入れるために、そして婚約が成立すると、今度は自分の許嫁以外の娘の婚約者と、相続権を争うために。

姉妹の父親が健在な間は、それもまだ水面下での鞘当て程度で済んでいたが、父親が第二次ティアマト会戦で戦死すると、その争いは顕在化し、いわゆる「泥沼状態」となった。兄弟仲が希薄な場合が多い貴族社会にあって、例外的な仲が良いことで有名であった娘達は、お互いと婚約者との板挟みになって苦しみ、婚約の解消を願いつたが受け入れられず、結局、二人で私領にあった湖に身を沈める事で、現世の悩みを解決した。自分達の勝手で、家名を断絶させるなど言語同断、余りにも短絡的であると、二人のつた行動を批判する者も多かったが、それまで二人を追い込むほど、その名前を手に入れるための争いは熾烈だったのである。

正式に婚姻がなされていない限り、婚約者と言えども相続権はない。二人の婚約者達は、いずれもその家名を手に入れることなく終わった。それ以来、この家名は断絶されたままになっている。

ヘーネミュンデ家の場合も、他家の次男や三男を姉妹の婿として迎える方が良いとの典礼省の意向があったのであるが、ヘーネミュンデ家がシュザンナを後継者にと望んでいるらしいとの噂が宮廷内に拡がる。各家の嫡子の中からマルゴットを妻にと望む者が複数、子爵の許に名乗りを上げた。彼らの殆どはマルゴットへの愛情からではなく、皇帝の寵姫の姉という肩書きに価値を見出して求婚してきたのであった。シュザンナへの皇帝の寵愛が、永遠のものではないにせよ、なにがしかの恩恵には与れると期待するのは、当然と言えば当然である。

あつたらう。

その中にはカストロフ公オイゲンの長男マクシミリアンもいた。彼はこの当時三〇を少し出た年齢であったが、父親の膨大な財力の許、何の職にも就かず遊興の毎日を送っていた。

後に、ローエングラム王朝の創始者は、ゴールデンバウム王朝の大貴族を次のように定義している。曰く、
「自分の手を決して使わず、遊び暮らす事を人間の価値と捉えている放蕩者が七割と、能力も無いのにその血統によって権力にしがみつく者が三割、そして大神オーディンの気まぐれで、生まれる場所を間違えた、極一握りの有能な者で構成された集団」

その分類に従うとすれば、マクシミリアンは第一のグループに属し、その父親は第二のグループに分類されるだろう。カストロフ公は、ヘーネミュンデ家の財力にも着目していた。おそらく、娘の持参金として、彼の満足するだけのものを用意できるであろう。しかし、やはりシュザンナとよしみを通じることで、ブラウンシュバイク公及びリッテンハイム侯に対抗しようというのが息子にマルゴットに求婚するように命じた第一の目的のよつであった。もしそれを看破したならば、マルゴットは決してカストロフ公達を許さなかったに違いない。

だが、マルゴットには、シュザンナが後宮に納められるまでの数年間に味わった「社交界の華」としての自負があった。

「ほら、ご覧なさいな、公爵家からの縁談よ。見る人はちゃんと見ているのだから、私の価値を、シュザンナなんかよりも、ずっと貴婦人としての尊厳を備えているって判つていらっしゃるのよ。流石に公爵家の方ともなると、そこら辺の貴族とは違つたわね。」
有頂天になってはしゃぐ娘に、ヘーネミュンデ夫妻は宮廷内での公爵の評判や、マク

シミリアンの素行の悪さを理由に、その縁談には賛成しかねる旨を述べたが、それはマルゴットに怒りを持って迎えられないことになった。

「お父様もお母様も、どうして私の幸せの邪魔をなさろうとするの？ シュザンナにはかり甘くて、どうして私にはそんなに意地の悪いことを仰るのか、私には判らないわ。」

公爵という、臣下としてはこれ以上無い地位しか眼に入らなくなった娘には、両親の心配の原因など、取るに足りない事のよつに映っていた。

結局、この縁談は、ヘーネミュンデ夫妻の気持ちとは裏腹に、成立の方向へと動いていった。何分にも、相手は公爵家、しかも現職の財務尚書の息子である。たとえ公爵の子息の風評がどうあろうとも、何度も私邸に公爵からの使者の訪問を受けては、ヘーネミュンデ子爵も断りきれなくなっていた。超主流とは言えないまでも、カストロフ家が権門の一員であることは疑いようの無い事実であったし、彼らに逆らつて宮廷社会で無事に済む筈がない。公爵の意に背いた場合、何らかの報復があることは覚悟せねばならなかった。

一〇月に入って、マルゴットの婚約が正式に典礼省に受理されると、その相手が公爵家の嫡子ということから、マルゴットの配偶者がヘーネミュンデ家を継ぐ可能性はなくなった。しかも、もう一人の娘シュザンナは皇帝に仕える身で、結婚など、皇帝の寵愛が失せるまで考えられない。となれば、妹娘の配偶者を後継者にするということを考えることさえ不敬罪に値した。典礼省としても、シュザンナの家督相続を認めざるを得なくなったのである。

マルゴットとマクシミリアン・フォン・カストロフの結婚式は、年が明けて帝国暦四七五年の四月に執り行われることとなった。皇帝の寵姫と、胡散臭い噂が絶えないとは言

うものの、財務尚書という頭職に就いているカストロフ公との繋がり、皇帝の二人の女傭から警戒心を持って迎えられたことは言つまでもない。

長女に生まれながら、後継者とならず他家に嫁ぐ娘の為に、ヘーネミュンデ子爵夫妻は出来る限りの支度をし、また、貴族社会でも破格と言える持参金を、カストロフ家で娘が自身の狭い想いをせずに済むようにとマルゴットに持たせて送り出すことに決めた。

婚約の披露パーティーにはシュザンナも招待されて出席した。両親は、姉妹が妹を自分の結婚式に列席させることを頑として拒むのではないかと、密かに察していたのだが、それは杞憂に終わった。むしろマルゴットは、自分から結婚式への列席を依頼したのである。おそらくシュザンナが一生身に纏つことのないであろう純白の花嫁衣装、それに身を包んだ自分の姿を見せつける為だ。

だが両親は、招待の裏に込められた残酷さに気が付いては居なかった。決して彼らにとつて喜ばしいとは言えない縁組みではあったが、自分の望み通りの結婚によつて、姉妹の妹に対するわたがまりが氷解し、両者の関係が良くなる兆しかと、その効用を認めたのであった。

帝国暦四七五年年頭、ヘーネミュンデ家はもう一つの慶事に湧くこととなった。シュザンナが再び懐妊したことが明らかになったのである。

シュザンナが後宮に納められるまでに、三名の女性がフリードリヒ四世の子を懐妊しているが、複数回懐妊したのは、皇后を含め僅か四名に過ぎない。それ以外の九名は、一回のみの懐妊であった。これは、フリードリヒ四世の興味の対象が次々と移り変わったためでもあったし、また、懐妊自体が非常に稀であったためでもある。その

ことは、フリードリヒ四世が、その生涯に於いて、自身の快樂の為に奉仕させた女性の数が一〇〇人を下らないことから、納得できよう。

宮廷内では、シュザンナの強權にあやかりたいと、宮内省長、バーネミニンデ邸への訪問の赦しを請うものが続出した。リヒテンラーデ侯爵、ポーンテン侯爵、シャーヘン伯爵、グルラッ子爵…その中には後に帝国の間諜となる者達の姿もあった。この前後三年間程が、シュザンナの權勢の絶頂期であったと言えよう。それは彼女自身の幸福感とは、また別のものではあったが。

シュザンナをバーネミニンデ家の後継者に定めたのは時期尚早であったかも知れないと、内心、マルゴットの縁組みにまだ賛成しかねていたバーネミニンデ子爵は、いくらかの後悔を伴ってその報を受け取った。だが、もし生まれてくる子が皇子であったならば、カストロフ家もマルゴットの二をなわがしるには出来ないだろうという期待もあった。

シュザンナはいえ、前回の二の舞にだけはするまいと、自分と自分のお腹にいる子の安全を確保する為に宮廷医達にも手を配ることにした。前回の懐妊の時と同様の体調の変化に気が付いた時、彼女の頭に最初に浮かんだ宮廷医は、後宮に納められるとき、彼女の身体検査を担当し、また一度目の懐妊を確認した医学博士のグレイザーであった。医師団の中でも若手の彼ならば、まだ、どの門閥貴族とも繋がり無く、純粹に医師として自分達を守ってくれるかも知れない。懐妊が確定すると、シュザンナはグレイザーに、自分の医学顧問になってくれるよう依頼した。

グレイザーにしてみれば、これは渡りに船であったかも知れない。五年前に宮廷医の一員となった頃の、溢れんばかりであった医師としての情熱は失せ、替わりに權勢欲と金錢欲が彼の根を下ろし始めて

いた。權勢欲と言っても、宮廷医ではたか知れている。せいぜい侍医長になるが関の山、それ以上のものは求めるべくもない。だが、金錢ならば、やりよつによつてはどれだけでも手に入れられるということ。彼はこの五年間に先達達から学んでいた。

「喜んでお引き受けいたしますよ。皇帝陛下やその周りの方々のために働きますのは、臣としては何物にも替え難い喜びでございます。侯爵夫人の御依頼とあれども、手に入れてご覧に入れますよ。また、何か御心配事がございしたら、何なりとご相談下さいませ。微力ながらお力になります。」

グレイザーが右手を胸に恭しく頭を垂れるのを、シュザンナは満足の微笑を持って受け入れた。

「ではグレイザー博士、これは今月分の顧問料という事です。これから妾は悪阻も始まるつし、お腹も大きくなり、何かと博士のことを頼らねばなりません。前回、あのようないふことがあり、誠に陛下には申し訳なく思っているのです。どうか、お腹の子が無事に生まれるよう、妾とこの子を守って下さいませませう。」

まだ膨らみすらない腹部を手で庇うようにして、シュザンナは最初の報酬をグレイザーに与えた。両者の関係は、これから一年後、シュザンナがその生涯を閉じる間際まで続くことになる…。

一度目の懐妊の折に比べると、今回の懐妊による体調の変化は軽いものであった。前回のようないい悪阻もなく、覚悟していたシュザンナは拍子抜けするほどであった。

「今度こそ、元気な御子が誕生なされる証拠でございますよ。」
周囲の者達はそう言いつてシュザンナを喜ばせようとしたが、顔に浮かべる笑みとは裏

腹に、それらの言葉はシュザンナに取ってあまり心地よいものではなかった。今、お腹にいる子が無事に生まれることは勿論嬉しい。しかし、同時にそれらの言葉は、彼女に前回の悲しい思い出をまざまざと思い出させる。当人達にはそのつもりはないのであるが、シュザンナには、彼らの言葉が前回の皇子死産を、暗に非難しているように思えてならなかったのである。

懐妊四ヶ月に入らうかという頃、シュザンナは皇帝の許しを得て、後宮に入つて以来初めて実家に帰ることとなった。もう間もなく執り行われる姉マルゴットの結婚前に家族と水入らずで過ごす時間を作ってやりたいというフリードリヒ四世の心遣いがあった。

当初フリードリヒ四世は、フロイデンの山荘で、シュザンナとバーネミニンデ夫妻としてマルゴットの四人を過ごさせようと考えたようであったが、これには、医師団から異議が唱えられた。いくら体調が良くとも、懐妊中の女性の長時間の移動は好ましくないというのがその理由である。フリードリヒ四世もそれをもっともな事と認め、新無憂宮、ノイエ・サンヌシーからさほど離れていないバーネミニンデ邸へ、シュザンナを送り出したのである。

バーネミニンデ邸は、シュザンナを好意的に迎え入れてくれた。両親は勿論であるが、マルゴットも公爵家に嫁くという満足感からか、常になくシュザンナに対しても鷹揚であった。この時彼女は、自分を幸せだと信じていたので、前回あれほど腹立たしかったシュザンナの懐妊も気にならなかつた。逆に、体に気を付けて元気な子を産むように、と言葉を掛ける余裕さえあったのである。

館の中はマルゴットの婚禮の支度で活気に溢れていた。持参する身の回りの調度品や宝飾品が運び込まれていたが、中でもシュザンナの目を引いたのは、仮縫いの為に仕

立屋が持ち込んで来た数々のドレスの中の純白の花嫁衣装であった。

それを身につけて、仮縫いをしている姉をソファアに身を預けて見つめながら、シュザンナは溜息を付いた。

「お姉様、きれいだわ…本当に素敵…」
心からの感嘆の言葉であった。

「そう？ 皇帝陛下の御側室様からそのように仰って頂けるなんて光栄だわ。」

「本当にきれいな…羨ましいわ。」
更に妹が漏らした言葉に、マルゴットは

「より自分の優位を誇りたくなつて言った。栄華を誇って、どんなに豪華なドレスでも思いのままの貴女でしようけれど、花嫁衣装ばかりは、金輪際着る機会がないものね。」

一瞬、周囲の空気が凍り付いた。シュザンナの顔も、四分の一瞬ほどの間、微笑を浮かべた仮面と化した。周りの者がシュザンナの表情を盗み見るより早く、生身の顔に戻つたので、誰もその事に気付かなかつた。マルゴット以外には。

マルゴットは幸せだった。妹の栄華が完全ではないということ。自分にも、そして妹にも確認させることが出来たからである。この四年あまりの間に自分が味わつた苦痛には比べるべくも無いが、妹の心に痛みを与えることが出来るものを、自分は手に入れた。例え皇帝陛下の子を産もつと、皇后陛下がおわす限り、シュザンナは公式の妻ではない。そして、皇帝陛下から臣下の誰かに下賜されれば別だが、そうでなければ、おそらく一生誰の妻にもなれはしない。皇帝陛下の寵を失って後宮を追い出されたとしても、皇帝の命以外で、他の男性に身を任せることなく、叛逆に等しいのだから。もし皇后陛下が望み、皇帝陛下もそれを認めれば、折角生んだ子供すら、皇后陛下の許に連れ去られ、皇后陛下を「お母様、ムッター」と呼んで育つことになるのだ。現実に、寵姫達に宮廷内での力

を持たせないために、生まれた子供は全て自分の子として手許に引き取って育て、決して産みの母親のことを「母」と呼ばせなかつた皇后もいた。シユザンナは一時の榮華と夫や子供を引き替えにしたのだ。

「ヘーネミュンデ邸で数日を過して新無憂宮、ノイエ・サンスーシーに帰ったシユザンナの身に、異変が起こったのは、それから一週間程後のことであった。

突然の出血……それが新しい哀しみの前奏曲だった。出血の量そのものは大したものではなかったが、急いで駆けつけた医師は幾つかの検査の後、難しい顔をしてシユザンナに告げたのである。

「誠に残念な事ながら、お腹の御子は既にお亡くなりになっておられます。胎児の大きさが、前回の検査の時とほとんど変わっていないことから察します。前回の検査から日を置かずしてお亡くなりになられたのでございませう。このままにしておきますと、やがて大出血を起こす可能性がございます。早急に然るべき処置を取る必要がございます。」

「然るべき処置」とは？」

「侯爵夫人の胎内から、御子を取り出します。」

「お腹を切って、取り出すのか？」

「いえ、そこまでのことは致しません。胎盤ごと子宮から剥がして外に出す方法がございますれば。」

「そのようなことをしたら、この子が死んでしまう。また、お腹の中にいるのじゃ。流産したわけではない。出血だって僅かではないか。この子はまだ生きてある。具合が悪いだけじゃ。適切な治療をすれば助かるのである。……お願いじゃ、この子を助けて欲しい。妾の命がどうなっても構わぬ。この子は助けて欲しいのじゃ。」

しかし、シユザンナの願いは聞き届けられなかった。

「侯爵夫人、確かに御子はまだ侯爵夫人の

胎内に留まっております。しかし、既に心音はなく、先程も申しましたとおり、今心臓が止まった訳ではございません。もう何日も前から、心臓は動いておられなかったのです。もう、如何にしまして、御子を御救いすることは出来ませぬ。これは稽留流産と申しまして、放っておきますと、侯爵夫人のお身体のためにもなりません。」

シユザンナの意向は全く無視され、シユザンナは宮内庁病院へと担がれるようにして連れ去られた。経緯が東苑の執務室にいたフリードリヒ四世に伝えられ、「処置」の許可が出されるとすく、なおも抵抗するシユザンナを注射で眠らせて、その処置は行われた。

シユザンナが気が付いたとき、既にそこは病室の寝台の上であった。一瞬、自分がどこにいるのか判らなかつたシユザンナであったが、注射をされるまでのことを思いだし、自分が何をされたかを悟った。

宮内庁病院の最上階、皇帝とその家族にしか使用を許されぬ特別室に、若い女性の悲しい叫び声が響いた……。

この流産は、シユザンナばかりではなく、マルゴットの人生にも大きな影響を与えることになった。シユザンナの懐妊によって、更なる宮廷内での勢力拡大を狙っていたカストロフ公とその息子にとって、シユザンナの胎内の子が陽の目を見ることなく消え去ったことは、期待が大きかつただけに裏切られたと感じる気持ちも強く、それはそのままマルゴットに対する態度にも現れたのである。また、非公式の情報網から得た胎児の死亡原因が、その遺伝子的欠陥にありそうだとこのことも、カストロフ公侯爵父子にベーネミュンデ子爵家との縁組みを後悔させるに十分であった。

全く健康な男女の間に来た子供であっても、一〇〇人中十数人はそのような理由のために妊娠の極初期に流産してしま

うことがある。ましてこの頃、貴族に限った胎児の死亡率は三〇パーセント近かった。おそらく、皇族と、それに特に深い血縁を持つ大貴族の子女に絞れば、その比率はもっと高く、四〇パーセントを越えていたのではないかと思われる。公にされることは無かつたが、アマリーエ皇女、クリステイーネ皇女も、第一子出産後、何度が懐妊、流産を繰り返していった。皇族に於いては、既に流産や死産はごく普通の現象になっていたと言っても良いであろう。それを、貴族達は、高貴な血筋になればなる程、生殖という動物的な行為には向かない為だと納得させてもいた。

宮廷医達も、シユザンナが後宮に納められた当時の検査結果から、シユザンナの流産をそれ程重要視することは無かつた。彼らによって、「徹底的に」「身体的にも精神的にも」「最高の健康状態に」「管理されている」筈の後宮の女性が、加齢以外の原因で、後宮に入る以前より「命の器」として「劣化」している筈がないし、また、あつてはならないのである。そして、シユザンナはこの時、まだ二〇歳にも満たない。懐妊や出産に高齢故に不向きだとは、とても言えない年齢であった。勿論、皇帝の寵愛が深いということも手伝ったのであるが、歴史が示すとおり、彼女はその後後宮に居ることを許されたのである。

しかし、医学に直接関わっている者達には、統計的にも経験的にも当たり前の事実であっても、そうでない者達には大きな意味を持つことがある。宮廷医の一人が、カストロフ公の質問に対して漏らした「ベーネミュンデ侯爵夫人の流産は、お腹の御子に、致命的な欠陥があつた為。」の一言は、まさしくそれであった。

遺伝子を重視する「オルデンバウム王朝に於いては、不幸にして胎児に何らかの問題があつたと判明した場合、原因は両親のいずれかに遺伝的問題があつたためと考え

るのが一般の傾向であり、その責任は、多くの場合、より身分の低い家門出身の者に負わされた。自分の高い者ほど、完璧に近い遺伝子を有するという考え方が、その社会基盤であつたのだから、当然と言えば当然である。」

シユザンナの胎児に先天的欠陥が有つたとすれば、それはシユザンナに何らかの遺伝的欠陥が有つたからであり、それと同じ欠陥が、姉であるマルゴットの「重らせん構造」の中にも隠されている可能性がある……それは、つまり、マルゴットにはカストロフ家の後継者を産む資格がないということと、同義であつた。

「由緒あるカストロフ家に、遺伝子に問題がある者など迎えるわけには行かぬ。」カストロフ家から、婚約解消が伝えられたのは、婚禮の一ヶ月前のことであつた。(またしても、シユザンナが私の幸せを奪っていく……)

シユザンナの最初の懐妊の折に、その胎児の死をあれ程願つたことを忘れ、無駄になつた数々の嫁入り支度を目につつ、マルゴットは流産した妹を恨んだ。特に、出来上がったばかりの花嫁衣装が目に入ると、如何に自分が失つたものが大きいかを感じられてならなかつた。おそらく、今回の事で、自分のことを妻に望む者は一度と現れないだろう。カストロフ家が婚約を解消したという事実の前には、自分の遺伝子が正常であるといつどんな診断書も検査報告書も、役には立たないであろうという事を、マルゴットは容易に想像できたのである。それはまさしく、他の令嬢や令息に同じ疑惑が湧いた場合に自分がとるのであるという態度であつたから。

更に彼女の感情を逆撫でしたのは、両親の態度であつた。自分がこれ程屈辱的な思いを味わっているにも関わらず、両親の自分に対する思いやりが少ないような気がしたのである。両親には、ずっと自分の側

に付いて欲しかった。自分の嘆きに耳を傾け、ずっと慰めの言葉を掛けていて欲しかった。それなのに、今回の原因を作った妹の所に、何かとついで見舞いに行こうとする。しかも、見舞いに行くには事前に宮内省に許可を取らねばならず、その為には直接宮内省に行つて必要な手続きを取らねばならない。毎日何時間も家を空ける両親に、彼女は怒りさえも感じていた。

「ヘーネミニンデ子爵夫妻にしてみれば、マルゴットのことを軽視していたわけではなかった。宮内省に口参していたのは、何もシュザンナを見舞う為だけではなく、たのである。夫妻には、婚約を破棄され、行き場を失つた姉妹の為に、何とか家督の一部なりと継がせられないかと交渉するという目的もあったのだ。」

だが、それは認められなかった。男子であれば、資産を分与し分家を起すことも可能であるが、女子とあつてはそれは認められないと言つのである。女子は他家に嫁ぐか、何らかの理由によつて独身を通過する場合には、当主が扶養すること……それは各貴族が闇雲に資産を分割し、財力が零細化することを防ぐための智恵でもあつた。シュザンナがヘーネミニンデ家の後継者と定まつた以上、彼女が亡くなるか、或いは廢嫡するしかマルゴットに相続の権利は生まれない、と告げられ、夫妻が頭を抱え込んだことは言うまでもない。皇帝の寵姫を廢嫡など、出来よう筈もなかつたのだから。良い返事が貰えぬ以上、その事をマルゴットに話すわけにも行かず、夫妻は姉妹のために払つている努力を、彼女の前で口にするとはなかつた。であるから、そのような両親の心遣いは、マルゴットの預かり知らぬ所であつた。

彼女には、妹にとつても今回のことがどれ程辛い出来事であつたかなどと思いを馳せる余裕はなかつた。人は、一度手にした幸せが自分に背を向ける時、その幸せを

手に入れる以前より、他者の痛みに敏感になる者と、逆に周囲への憎しみや怒りといった負の感情を募らせる者とに別れるようである。マルゴットはまさしく後者であつた。もつともそれは、何も彼女に限つたことではない。当時のゴールデンバウム王朝の門閥貴族の間では、数百年に渡る特権を振りかざした生活の中で育まれた他罰傾向が、極めて強かつたのであるから。

この時の流産以来、シュザンナはより一層後宮に引きこもり、それ以外の場所に足を運ぶことは、フリードリヒ四世に随行する場合以外は殆どなくなつた。

彼女には、流産が胎児側の理由によつて起つたとは信じられなかつた。彼女の血縁者の中に、これまで遺伝子に問題がある者など聞いたことがなかつたし、自分もいたつて健康である。今回の流産は、皇帝陛下に自分の全てを捧げて仕えるべき身でありながら、皇帝陛下の許を離れ、里帰りなどした自分への天罰のような気がしてならなかつた。折角授かつた皇帝陛下の御子を、またしても自分の至らなさをから無に帰してしまつた……そついつ罪の意識が、シュザンナの頭から離れなかつたのである。

二度と皇帝陛下のお側を離れまい。全身全霊でお仕えするのだ。私の身も心も、時間も、何もかも全てを陛下のために捧げ尽くそう。皇帝陛下のお姿以外のものをこの瞳に映すことも、皇帝陛下の声以外のものを聴くことも極力避けよう。それ以外に、この罪を償ふ方法はない……。シュザンナは、病的なまでに思い詰めていた。

その決心は、まず、毎日のように見舞いに訪れる両親に対して示された。彼女はヨハンナに両親の接待を命じたが、決して自分で両親に会おうとはしなかつたのである。

「シュザンナ様、お父様、お母様がお帰りになられました。」

「自筆に『も』のシュザンナの許に、ヨハンナが両親の帰宅を告げに来た。」

「そつ……。」

寢床の上で、シュザンナは手を組み一瞬瞠目した。

「シュザンナ様……。」

「お父様もお母様も、私のことをひどい娘だと思つてしまつた。折角お見舞いに来て下さつても、会おうとしないなんて……。」

「そのようなのは無いと存じますよ。お一方には、私から、お嬢様の御気分が勝れないのでと申し上げましたし、心配はなさつておいでのようございましてたけれど、お怒りにはなつていらつしやらないと存じます。」

「でも……。」

「それほどまでにお気になるのですら、お会いになつてご覧になられては？」

「駄目！ 駄目よ！ それは出来ないわ。陛下のことだけを考えるのが、私の務めなの。お父様やお母様に会つたりしてはいけないの。それなのに、こつしてお父様達のことを考えてしまつ……考えまいと思つても、考えてしまつ。ねえ、ヨハンナ。どつしたらいいのかしら？ 胸が苦しいわ。」

ヨハンナは、シュザンナの脇に腰を下ろし、そつとシュザンナの髪を撫でた。シュザンナの瞳からは、涙があふれていた。

そんなシュザンナの心を優しく受け止めて、彼女が望む形で慰めを与える事が出来たのは、実家からそつと付いてきた忠実な侍女ヨハンナのみであつた。

使用人達の前で威厳を保つため、決して自分の苦しみや哀しみを見せないシュザンナも、子供の頃から自分を見てきたヨハンナの前でだけは、泣くことが出来た。心の裡に溜まつた思いを、そのまま吐き出すことも出来た。ヨハンナは頷き、共に涙を流してくれ、肩を抱き、背中を撫でてくれた。それがどれ程救いであつたことか、やがて彼女は知るようになる……。

記録によれば、シュザンナが生家へ立ち戻ることは一度と無かつた。むしろ、肉親を忌避さへしてしまつたのである。そして、シュザンナと両親にとつて、シュザンナの里帰りの際のものが、今生での最後の対面となつた……。

一〇・皇后風邪

帝国暦四七六年、ゴールデンバウム王朝自体は、激んだまま時を過ごしていた。敢えて、何らかの変化をとうなららば、この年、國務尚書が交代したことぐらいである。ゴールデンバウム王朝最後の國務尚書、リヒテンラーデ侯クラウスである。シュザンナにとつては、後宮に納められてから最も穏やかに過ぎていつた年であつたかも知れない。振り返つてみれば、まさしく嵐の前の静けさであつた。

勿論、ささ波はあつた。シュザンナの二度目の懐妊も不調に終わったことから、宮内省は皇帝に新しい寵姫を提供すべく奔走していた。なりふり構わなくなつて来たと言つても良い。典礼省にある貴族の戸籍を調べ、一五歳から一八歳くらいまでの娘を片づ端から当たつてみた。戸籍には載つていない隠し子がいないかと、それぐらいの娘がいてもおかしくない貴族の男性を次々に探つた官吏もいる。何人かの新しい娘達が後宮に納められた。どの娘も、シュザンナ同様ほつそりとした身体付きの娘ばかりであつた。

某伯爵家の令嬢もいた。突然、辺境の惑星から「父」と名乗る人物に呼び出され、宮内省の官吏の許に連れて来られた庶出の娘もいた。金で、有力貴族に「養女」とし

て買われた平民の娘もいた。皇帝陛下に仕えるのだと大言ひで来た者もいれば、嫌がるのを無理矢理に連れて来られた娘もいた。皆それぞれ的人生と、彼女達を差し出した父や兄弟、養父、そして彼女達を後宮に連れてきた宮内省の官吏達の人生を、その薄肩に背負って来た者達ばかりであった。そのうちの何人かがフリードリヒと四世の寵を賜ったが、懐妊した者はなく、宮内省の官吏達を落胆させた。

そんな中で、一日宮内省に目を付けられながら、結局後宮に納められることなく終わった娘がいる。ウエストパーレ男爵の一人娘、マグダレーナである。大体、爵位を持つ家柄の唯一の血筋の者を後宮にと考えること自体、当時の宮内省が、どれ程皇子を得るために焦っていたかが知れるというものである。

マグダレーナはこの時一六歳、生き生きと輝く黒い瞳と、漆黒の髪を持つ少女だった。とにかく幼い頃より活発で、頭の回転が速く、周囲の者を

「これが男児であつたらならは。」
と嘆かせたといふ。何代かに渡つて私財を投じて学校を運営してきた家柄の影響が、学問や芸術に対する造詣も一〇代半ばの少女としては驚くほど深く、しばしば父親の舌をも巻かせた。

自分が女であるという理由で、男性に遠慮する必要など全く認めておらず、射撃や乗馬の腕前も、そこら辺の貴族の子弟にならば負けはしなかった。反骨精神豊かといつか、強者から弱者への抑圧にはかなり強い反感を感じる質らしく、女学生時代、上級生の下級生に対する嫌がらせに雄弁をふるって立ち向かい、上級生達が色を失うという一幕もあつたと伝えられている。勿論、大人しく控えめな女性を帝国貴婦人の理想としていたコールデンバウム王朝の貴族社会にあつては、そついつた風評は、決して好意的に語られることはなかつたので

あるが、帝国貴族の中にあつてはリベラル派として通つていた父、ウエストパーレ男爵は、娘を粹にはめようとはしなかつた。

しかし、何といつても、彼女を周囲に強く印象付けたのは、その美貌であつた。帝国暦四七五年の秋に大舞踏会で社交界の花とつた。後宮に納められた当時のシュザンナは、そよ風にも揺れる儂げな桜草に例えられたが、それに倣うなら、うならば、マグダレーナの美しさは大輪のバラ、それも燃えるような紅バラであつた。

美しさと健康、この寵姫としての必須条件をマグダレーナは完璧なまでに満たしていた。もし、宮内省の官吏達に不安があるとしたら、マグダレーナの知的水準が、皇帝の寵を賜るには高すぎるのではないかと、いつ一点であつたらう。全くの白痴では困る。しかし、余りに才気煥発で、閣僚や官吏達を凌駕するような娘でも困るのである。

「もし、ウエストパーレ男爵令嬢が皇帝陛下の御子を身ごもれば、さぞかし聡明な御子になられるような気はするが……。」
「表向きのこと口に出さなければいいぞ、あの跳ね返り娘は。」

「第一、皇帝陛下のお好みではないのではなにか？陛下のお好みは、やはり大人しく控えめで、どこことなく儂げな娘なので、は？」

「しかし、健康といつて見れば、あの娘の上をゆく娘が貴族の中にも思われぬ……。」

話を進めるべきかどうか、官吏達の意見がまとまらぬ間に、マグダレーナを後宮に迎えることは不可能となつた。年が改まつた帝国暦四七七年、惑星オーディンを襲つた疫厄が、ウエストパーレ男爵の命を奪い、少女は一七歳にならずして、男爵家の当主となつたからである。

といつ前例はそれまでになつた。勿論、コールデンバウム王朝五〇〇年の歴史の中で、皇帝と名家の女当主との情事が皆無だつたわけではないのであるが、それは単なる噂として伝承されているに過ぎず、記録には記載されていない。「前例」に拘る官吏達にとつて、それから逸脱した行動は、厳に慎まねばならなかつた。

我が身を掠めつた運命を、マグダレーナ・フォン・ウエストパーレ男爵夫人、パロトニンが知つていたかどうか、それを知る者は誰もいない。だが、歴史は彼女に、別の形で登場を要請することになる。

ウエストパーレ男爵の命を奪つた疫厄は、彼のみならず、多くの生け贖を求めた。帝国暦四七七年一月、惑星オーディンは突然悪性の風邪に襲われたのである。発端は開発が始まつたばかりの辺境の惑星から、ペットとして持ち込まれた数匹の小動物であつた。この小動物の体内に潜んでいた新種のウイルスが、人類、ホム・サヒエンスに取り付くや否や、極めて悪性の高い風邪様症状を現したのである。こついつたことは、人類による宇宙開拓が始まつて以来、それまでに何度も起こつており、その度に、検査の強化が叫ばれたのであるが、どんなに検査を強化しても、それまでの検査では検知不可能な新しい病原体といつものは、広い宇宙に必ず存在するものであり、地雷を踏むまではその存在に気が付かないものなのである。このウイルスの感染力は、さまざま、瞬間に惑星全土に拡がり、犠牲者の数を増やしていった。口の悪い者の中には、「この風邪のことを「真の共和主義」と呼ぶ者もいたといふ。平民も貴族も、この風邪の前には完全に平等に見えたからである。

まさか、それを証明する為ではなかつたのであつたが、この病原体は新無憂宮、ノイエ・サンズシーの奥にまで侵入を果た

して見せた。皇后エレオノーレがこの病の為に斃れたのである。エレオノーレは一週間、病と闘つた。一時は熱も下がりに、回復に向かうかと思われたのだが、病状が急変し、肺炎を起こして亡くなつた。歴史上、この疫厄のことを「皇后風邪」と呼ぶのはその為である。

皇后の葬儀で、シュザンナは久しぶりにフリードリヒと四世の二人の皇女と出会うこととなつた。勿論、皇女達は皇帝、皇太子に次ぐ位置に、それぞれの夫と娘と共に並んでいる。シュザンナは、寵姫とはいえず、子もないことから、他の貴族達に混じつて、爵位その他で付けられた順位に従つて並んでいた。もし、彼女に子があれば、皇子なり皇女なりの生母として、皇族の列に加わることが出来たのかも知れない。シュザンナは、フリードリヒ四世や皇女達と自分との間の距離に、自分が奪われたもの大きさあらためて感じざるを得なかつた。

それは、リッテンハイム侯に抱かれていた幼女の姿が目にとまつた時、言いつつない感情を道連れに、更に大きくなつた。何事もなく、あの子、マクシミリアンが生まれていたら、リッテンハイム家のサビーネとはおよそ半年違いの我が子は、間もなく二歳になつていた筈であつた。今頃は一人で歩き回り、片言のおしゃべりもしていただであつと思つて、涙が視界に紗を掛けるのを、どつすることもできなかつたのである。

だが、シュザンナの瞳の中で盛り上がる涙を、亡くした子と思つてのものと同じく者は、参列者の中に誰もいなかった。シュザンナに好意的な者は、敬虔な臣下として、皇帝に関わる人の中で最上位に君臨した皇后の死を悼む涙と受け取つたし、シュザンナの存在に警戒心を抱く者の眼には、皇后亡き今、宮廷内の女性の中で最も権力に近づいた歓喜の涙と映つた。

皇后の葬儀から数日後、シュザンナの私邸に飛び込んだのは、父、ベーネミニオン子爵が危篤だといつ知らせであった。しかし、シュザンナは父の見舞いに行かなくてはならぬ。たとえ彼女が行きたいと思っても、伝染性で、しかも悪性の風邪である。おそろしく、皇后を喪ったばかりのフリードリヒ四世や宮内省が許可しなかつたのである。しかし、シュザンナは、自分の意志で、見舞いには行くまいと決めていた。

その後、次々ともたらされた、父の死の知らせにも、母が倒れたという知らせにも、母が亡くなったという知らせにも、葬儀にさえ、執事ヘンドリクスを通して儀礼的な見舞いの言葉を送つただけで、ベーネミニオン子爵を訪れる許可を申請しようとはしなかつた。

自分は両親の死に目にあつたことよりも、皇帝陛下のお側にいる事を優先するのだ。皇帝陛下以外の者のことなど、親と言えども考へてはいけない。そのすれば、きつと大神オーディンも、自分の皇帝陛下に対する忠誠を認め、以前実家に立ち帰つた罪を許して下さるに違いない。……自分のことを哀れと思ひ召して、死者の国、ニバルヘイム、からマクシミリアンを、再び自分の許へと帰して下さるかも知れない……何の合理性も認められない妄信の世界に、シュザンナははまり込んでいた。皇帝との関係以外は全て断ち切り、「皇帝の為だけの自分」を作り出すことが、自分の務めであり、また幸せなのだ。

ベーネミニオン子爵の当主となつたシュザンナには、生家のありようをどうしようとしていく気持ちはなかつた。そんなことは、自分が子供の頃から父に仕えていた執事に任せておけばよいのだ。自分には、もっと他に考へるべき大切なことがある。皇帝陛下の事だけを考へるといつ大切な役目か……ただ、いくら後継者として定められているとは言つても、実際に家督を継ぐとなれば、

名義の書き換えなどの手続きも必要である。大貴族に対する優遇措置から、相続税は免除されているが、国務尚書を通じて皇帝から相続を認められ、初めて新しい当主と認められるのだから。

シュザンナは、自分の執事ヘンドリクスに生家の執事と相談し、諸事取り計らうように命じた。ヘンドリクスにしてみれば、これは、今まで以上に莫大な資産を自分の管理下に置く千載一遇の機会であつたに違いない。彼は、「新しい当主」の執事として、ベーネミニオン子爵を訪れ、ベーネミニオン子爵家の執事から、子爵家の財産管理の職責を奪つと解雇した。二人の執事の間、幾ばくかの鞘当てはあつたようであるが、結局、現在、より権力を持つている者に、勝利の女神は微笑んだ。

「子爵夫妻もお亡くなりになり、子爵邸に住まれるのはマルゴット様お一人。御当主様は他の御館にお住まいとあらば、パーティンなどがこの屋敷で催されることもあるまい。とあれば、使用人の数も減らして当然である。」

ヘンドリクスは、二〇名以上いた使用人の中、厨房係、運搬手、園丁、マルゴット付きの侍女、他に雑用係を一名程残すと、あとの者は執事同様解雇した。勿論、残つた使用人達を束ねるのは自分である。

ベーネミニオン子爵邸には、姉マルゴットのみが取り残された。彼女から見れば、自身を総て持ち出された気持ぢであつた。財産目録は言つて及ばず、めぼしい名画や調度品の数々も運び出されてしまつたのだから。勿論、何人かの使用人はいる。しかし、彼らは家族ではない。いや、マルゴットから見れば、「人間」でさえなかつたのかも知れない。

（自分の屋敷にだつて、絵や彫刻くらいあるでしように、何も持ち去ることはないじやないの！お父様やお母様のお葬式にさへ顔をsausなかつた癖に、こつこつものに

は執着するのね、シュザンナらしいわ。屋敷の中がこんな風になつてしまつては、恥すかしくて、誰も呼べはしない……）
急に殺風景になつた様に感じられる邸内で、マルゴットは妹を恨みますにいらなかつた。

一・灰色の時代

男女の真に良好な関係というのは、一方だけの気持ちで何とかなるような代物ではない。これは平民の男女である。やんごとなき身分の男女であると同じである。

そして、面白いことに、相手が強く自分を求めてくると、その相手から逃げ出そうとする人間がかなりの確率で出現する。フリードリヒ四世の女性関係をつぶさに調べてみると、彼はまさにそつこつタイプ

の男性であつた。彼は女性から積極的に求められると、かえつてその女性から離れるのである。彼の人生で、その寵を長期（と言つても数カ月の者が殆どであるが）に渡つて受けることが出来た女性といつのは極限られている。そして、その女性とフリードリヒ四世の関係を見てみると、面白いことに気が付く。

彼の女性に対する好みは、四〇代半ばで急激な変化を遂げるのであるが、どうもそれは容姿に限つたことではない。女性

の為人、ひととなり、についても同様のことが言える。
成熟しきつた豊満な女性を好んだ時代、フリードリヒ四世の爪先が向いた女性といふのは、どちらかといつてフリードリヒ四世を包み込むような母性型の女性が多か

つた。フリードリヒ四世の世話を何くれとなく見て、彼の愚痴を聞き、彼の全てを受け容れてくれるような、そんな女性達である。

そして、後半生の彼が好んだのは、逆に、自分が保護し、守る必要を感じさせるような、どこか儂げな少女達であつた。このことは、彼の生い立ちにも深く関わつていると見る向きもある。

フリードリヒ四世には一〇人の兄弟がいたが、その中で無事に成人したのは、彼を含めてわずか三名、皆男児であつた。兄は思考の柔軟性には欠けるが、勤勉な努力家であり、弟は、長兄ほど教養があるとは言えなかつたが、快活で、活力に富み、人を惹き付けて止まぬ何かを持っていた。その間に挟まれて、彼、当時のフリードリヒ大公の評判はすこぶる悪かつた。彼には、兄ほどの勤勉さも、弟ほどの行動力もなかつたからである。彼自身、幼少の頃より、兄や弟に自分は遙かに及ばぬ者と諦めていた節がある。

彼の侍従武官であつたグレルメルスハウゼン中尉だけは、父帝オトフリート五世から兄弟と比較され、叱責されて溜息を付くフリードリヒ大公を、こつこつ励ました。「殿下、お氣になさいますな。殿下には、兄君に勝る行動力があります。弟君より思慮深つございます。決してお二方に劣つてなどおりません。自信をお持ち下さい。」

それは、主君に己自身の境遇を投影し、皇位には就けなくとも、人間性まで否定しないで欲しいといつグレルメルスハウゼンの皇子に対する願望であつたのかも知れない。彼自身、三男では、生家の子爵号を継ぐこととはあるまいといつ認識の許に暮らしていた。しかし、跡継ぎとして周囲からもてはやされる兄と自分との間に、人が言う程の差があるとは、頭の何処かで認めたくな

かつたのも事実であつたのだから。

だが、周囲が自分には何も期待していないと知りつつ宮廷内で過す事は、息が詰まる思いであつたのだらうか。フリードリヒは一〇代後半から、新無憂宮、ノイエ・サンスルーシーを抜け出しては町に繰り出し、遊興に耽るようになった。このことが、一層父帝を怒らせ、また、宮廷社会における彼の評判を落すことになる。

しかし、結局、出来の良い兄や弟の頭上に至尊の冠が輝くことはなかつた。彼らのいや、彼らの支持者の争いの中に、二人の皇子の人生は暮を閉じ、誰も注目していなかつたフリードリヒ大公のみが、オトフリート五世の臨終の枕元に立つこととなつたからである。

「漁夫の利を得た無能な皇帝」……自身に突き刺さる、決して好意的とは言えない視線の中で、フリードリヒ四世は皇帝として歩み始めた。

公式の記録には一切残されていないが、兄二人の戦死によつて、生家を継ぐことになつたグリルメルスハウゼンの遺した手記によれば、即位直後、彼は、政務に自分の考えを反映させようと試みよつたことがあつたらしい。しかし、「前例」の名の下にそれらは一蹴された。彼の意見は、それまでの常識から見れば、余りにも平民に対して甘いものであつたからである。

「リヒャルト殿下であれば、そのように非常識なことをお考えにはなりませんまい。ものを知らぬにも程度がございませうぞ。」

当時の閣僚の言葉の前に、フリードリヒは一度と自分の意見を口にしなくなつた。全て閣僚に任せ、自身は書類に署名するに専念した。

しかし、そんなればなつたで、また非難の声が挙がつた。

「クレメンツ大公であれば、もつと斬新なお考えで帝国を改革し、我らを導いて下された筈。全く我らは悪い時代に生まれた。

まさしく『灰色の時代』じゃ。」

前述の手記の中でグリルメルスハウゼンはこのような宮廷の様子を見て、以下のように述べている。

「フリードリヒ四世陛下は、決して才気走つたお方ではない。しかし、また、決して多くの宮廷貴族達が思つているような暗愚な方でもない。閣僚達に指し示された陛下のお考え自体は、お若い頃より市井の者達と交わり、御自身の肌身で感じられた現実に即してあり、間違つてはいなかつたと思つ。陛下は、能力が身分によつて決まつているなどという迷信をお信じになつてはおられなかつたし、下々の暮らし向きについて、歴代の皇帝や御兄弟に比べ、ずつと熟知しておられた。

もつと、平民や下級貴族出身の者を登用し、出身階級による役職・階位の制限を撤廃する。税制も、抜本的改革を行い、大貴族への免税を廃止し、平民への負担を軽減する。それらが実行に移されれば、少なくとも民衆の間では、名君としての地位を確立されたことである。しかし、陛下には閣僚達を罷免し、自らの思つたところを押し通すだけのお強さはなかつた。また、自分も含めて、陛下を後押しし、それを可能にするだけの力を持つた味方も、周囲にいなかった。これは何も、陛下だけのことではない。ゴールデンバウム王朝に於いて改革を行おうとすれば、必ず、既得権を失つた大貴族達が反対を唱えるだらう。それを組み伏せる為には、皇帝自身が余程強力な指導力を発揮するか、或いは複数の極めて優秀な協力者が現れねば無理である。そのような人材が、前例ばかりを尊ぶ宮廷から輩出されるだらうか？ 答えは『否、否』である。

ゴールデンバウム、黄金樹からこぼれた種は、新芽を出しても、余りにも巨大な成木の影に光を妨げられ、伸びることも出来ず枯れていく。既に、名君も、功臣も育つ環境にはないのだ。おそろしく、これから育つのは、朽ちた大樹の足下にうずたかく積み重なつた、怨念という腐葉土から芽生える、ゴールデンバウム、黄金樹、以外の樹木に違いない。そしてそれは、いずれは「ゴールデンバウム、黄金樹」の森を、完全に呑み込むことになるだらう……。」

さて、自身を取り巻く不満の渦の中で、フリードリヒ四世は、これらの現実から逃れる為、酒宴や狩獵、賭博といった遊興に以前にもまして興じるようになった。漁色も、それらに新たに加わつた逃避場所の一つであつた。周囲もそれを勧めた。出来の悪い「灰色の皇帝」に、政務に首肯を交う込まれるのは御免蒙りたかつたからである。

フリードリヒ四世は、女性に安らぎを求めた。皇帝としての責務から逃避しているという罪悪感を、一時でも忘れさせて欲しかつた。自分のしていることを、仕方ないこととして許して貰いたかつた。温かく柔らかな胸の中で……。

そつ、幼い頃、覚えが悪いと家庭教師に叱責された時も、弟から乗馬や剣が下手だと笑われた時も、彼はそつやつて心の平安を得たのだ。乳母の腕の中で。

だが、至尊の座について一〇年経つた、周囲の状況も変わつてくる。彼がフリードリヒ大公であつた頃からの閣僚が次々に去り、新しい閣僚が彼を取り囲むようになつてきた。彼らも、フリードリヒ四世が皇帝になつた経緯については知つていたが、彼ら自身の地位に就けたのはフリードリヒ四世自身であり、心理的に皇帝に頭の上からぬ所があつた。彼は、彼の閣僚達が許す範囲ではあつたが、施政に於ける自由を手に入れたのである。

己には力がある。それを知つたとき、人間はそれを確認したくなるものである。たとえその力が僅かなものであつても、また

虚構の上に成り立つものであると知つていよう。

後世の歴史家が指摘するフリードリヒ四世の治世の特徴は、半ば自暴自棄気味に行われた数多くの土木事業にあるのだが、その費用は、父であるオトフリート五世が国庫に蓄えた財力を吐き出す事によつて賄われた。これによつて、ゴールデンバウム王朝の疲弊が早まつたと言われるくらいである。それらの土木事業を、単なる自己顕示欲の現れと見る者も多いのであるが、その事業の多くは、治水や灌漑、道路建設といったものが対象であり、痴癡帝シギスムント二世が情熱を燃やしたような、皇帝個人の為の建造物は殆ど皆無であつた。現実に、その時整えられた社会資産は、次王朝時代も、人々に、地味ではあるが恩恵を与え続けた。もしかすると彼は、王朝とか体制の変遷を超越したものを、後世に遺したかつたのかも知れない。

フリードリヒ四世の女性の嗜好の変化も、彼が自分の力に僅かながらも自信を得たその現れであつたのかも知れない。保護される側から保護する側になれる、という確信を彼に与えたのは、シュザンチであつた。世慣れぬ内気な桜草は、後宮の中に植え替えられ、彼の保護の許、しっかりと根を下ろし、書は花開いた。

シュザンチが、皇帝の寵姫として周囲から尊重されるようになってからも、彼女はどこか頼りなげな存在にフリードリヒ四世の眼には映つた。第一子の死産という悲劇が彼女を襲つた為かも知れない。女婿一人に関する宮廷内の黒い噂を、フリードリヒ四世が果たして知つていたかは別として、傷心のシュザンチによつて、救いは、フリードリヒ四世の常ならぬ気遣いであつたことは、彼にも判つていたであらう。フリードリヒ四世にしてみれば、精神的に自分が他人を支えるという経験は、始めての事であつた。

だが、第二子流産の後、二人の関係は微妙に変化しつつあった。シュザンナが自分に課した「全てを皇帝の為に」という誓いは、逆にフリードリヒ四世にとってシュザンナを重苦しいものとしていったのである。

それまでのシュザンナは、決して自分から積極的にフリードリヒ四世を求めようとはしなかった。気が向いたときに、彼がシュザンナの許を訪れば良かったのである。たとえそれが毎日の日課となろうとも、彼には自分の選択の結果、シュザンナの許を訪れているのだという確信があった。

しかし、シュザンナが自分の全てを、時間も含めて、フリードリヒ四世に捧げることが義務と考えるようになると、彼女は無意識のうちに、フリードリヒ四世の行動を縛るようになっていった。皇帝が彼女の傍らにいない限り、彼女の義務は果たされなかったからである。

皇后が存命中は、皇帝の私人としての時間の全てを自分のものにするのが無理であることを、シュザンナも了解していた。皇帝の妻が、自分ではなく、皇后エレオノールである以上、随行するのが自分でない場合があっても、やむを得なかった。

が、皇后がみまかった今、執務に費やす以外の皇帝の時間は、全て自分の為にある筈であった。執務が終われば、西苑にある自分の館に皇帝は足を運んでくれるという期待、次の演奏会に劇場に随行するのは自分だという期待……。いつしかその期待は、彼女にとって、自分に当然与えられて然るべき権利と刷り変わっていった。自分はいくら程までに皇帝に尽くしているのであるから、皇帝もまたそれに応えるべきであるという無言の圧力は、フリードリヒ四世にとって荷が重かった。彼には、それまで人から期待されることも、また、権利を求められることもなかったからである。

何より、フリードリヒ四世を閉口させたのは、シュザンナが執拗なまでに子供を欲し

たことも知れない。彼女にとって、何よりも皇帝への奉仕は、世継ぎ足りうる健康な男児を、この世に送り出すことであったのだから、当然といえば当然であったのかも知れないのだが。

次第にフリードリヒ四世がシュザンナの館を訪れぬ夜が増えていった。それと並行して、皇帝の寵を賜う少女の数も増えた。殆どは一夜妻の類であったが、それでも一個中隊になるうかという少女の中には懐妊する者も出る。何しろ、皇帝は避妊など考える必要がなかったからである。

記録によれば、帝国暦四十七年以降、フリードリヒ四世の子を身ごもった女性は三人いる。一人はシュザンナ、一人はヨハネス八ツ八伯爵令嬢フレリア、そして残る一人は帝國騎士出身のエミリエ・フォン・ザイラーである。フレリアは懐妊四ヶ月で流産、エミリエは母子ともに出産時に死亡している。

フレリアの懐妊は帝国暦四十七年の七月に判明した。出産に至らなかったとはいえず、自分以外に懐妊する者が出たという事は、シュザンナにとって脅威であった。もし、皇帝の子が他の女性の腹から生まれるようなことがあれば、当然、自分に与えられる皇帝の時間は激減するに違いない。まして、その子が男児であれば、その娘が皇后に冊立され、皇帝の側に自分の居場所すらなくなるかも知れない。

「警告……シュザンナが皇帝に他の娘達の許に行くことを妨げようとした行動を、この一言で片付けるのはたやすいことである。だが、シュザンナにとって、その行動は、自分に与えられた当然の権利を守るための戦いであった。彼女の全ては皇帝の為にあり、その皇帝を失っては、自分の存在理由など、どこにも見つけることが出来なかった。彼女にとって、競争者の排除は、自分の存在意義を求める戦いだったのである。「陛下がいらいしやしませんか、まるで陽が翳ったかのようでございます。」

それは、寂しさを訴える言葉から始まった。それにやがて、「昨夜はたむけにお泊まりでいらしやいました？」

という、やんわりとした非難が加わるようになった。皇帝が彼女から遠ざかれば遠ざかる程、シュザンナの戦いは激しさを増した。特に、出自が男爵家以下の娘が相手の場合、その言葉には毒が籠もった。伯爵家以上の出自の娘に負けるのなら、それもやむを得ないという気持ちでどこかにあったのかも知れない。「オールマンバウム王朝は純然たる階級社会であったから、上の階級の者に下の階級の者がかわらないのは当然と諦める事が出来た。しかし、自分より下の身分の者が、皇帝の寵を受けるといふことは、彼女の誇りがどうにも許さなかったのである。」

皇帝の寵が、以前のようにシュザンナ一人に定まらなくなると、次々に移る皇帝の興味の新しい対象を求めて、宮内省はいわゆる自転車操業の様相を呈した。それまでにリストアップしてあった貴族令嬢達も使い果たし、宮内省の官吏達は宮廷から市井へと、皇帝に捧げる供物を求めて走り回った。

「君は戦士だ。銃弾やヒムこそ飛んでこないが、君が勇敢な戦士であったという事を私は知っている。」

これは、過労死した職員の前で、当時の宮内尚書が送った甲文の一節である。それを聞いて、宮内省の官吏達は嘔きあつた。「俺達が走り回った距離を考えれば、天上ヴァルハラ についても不思議ではないさ。」

そして、天上ヴァルハラ に届くほど宮内省の職員たちが命と靴底をすり減らした結果、帝国暦四十七年秋、シュザンナが死の直前まで戦い続けることになる少女

が、宮内省の地上車 ランド・カー に乗せられて、新無憂宮 ノイエ・サンステーの門をくぐった。アンネローゼ・フォン・ミーゼル、後のグリューネワルト伯爵夫人、クラフィン・フォン・グリューネワルトである。

伝聞によれば、フリードリヒ四世の最後の寵姫となった女性は、母性と優さ、その両方の特性を備えていたようである。為人ひととなり は前者であつたらしいが、生前の彼女を知る人々が、彼女の容姿を形容する際、必ずと言って良いほど触れるのが「けがらふような微笑み」であり、光の中に融けてしまふような、どこか儂げな透明感溢れる美しさは、晩年まで変わることがなかったという。また、出自が貧しい帝國騎士の家柄であつた為に、宮廷内において忌避され、フリードリヒ四世の庇護なくして立ち往かなくなつたことも、フリードリヒ四世の保護欲を刺激したものとされる。

だが、彼女も最初から皇帝の寵姫となつたわけではなかった。「いくら光つても、皇帝の目にとまらねばただの石」

シュザンナが後宮に納められた当時に使われたこの比喩は、アンネローゼ・フォン・ミーゼルが五〇万帝國マルクで、父、セバスチャンから買い取られるようにして後宮に連れてこられた時生きていた。もし、彼女が後宮に納められたのが、今少し早かつたならば、或いは、今少し遅かつたならば、フリードリヒ四世の興味は彼女に向いたかどうか、定かではない。

当時の後宮の様子を検証すると、アンネローゼが後宮に納められた時期は、シュザンナが三度目の懐妊をした時期と重なっていた。この度の懐妊は、一回目の懐妊の時と同様に、極めて悪阻が重く、彼女は私邸を出ることが叶わなかった。無論、皇帝を私邸に迎えても、十分にもてなすことすら出

来ない有様であったから、他の女性の許に皇帝が足を向けるのも無理ないことと、それ程咎めることも出来ず、いた。皇帝の子を身こもっているのは自分であるといふ精神的優位性も働いていたのである。皇后の座が空席になつて居る状況下で、皇帝の子を出産すれば、男子であれば間違いなく、女子であったとしても、かなりの確率でシュザンナが皇后に冊立されるであろう事は、誰の目にも明らかであった。シュザンナは、これで確固たる自分の居場所を確立できると思つていたに違いない。後から振り返れば、その時期に皇帝の身近にいながらたといつて、シュザンナにとつて不運であつたといふことになるのだが……。

両親を失い、喪に服していることを理由にペーネミュンデ邸から一歩外にも出ようとなつたマルゴットの許に、リッテンハイム侯からパーティーへの招待状が舞い込んだのは、そんな時であつた。(どつしどつ、今更社交界になど出て、婚約を解消された哀れな姿を晒したくないけれど、相手はクリスティーネ皇女御夫妻。断るのは不敬に当たるかも知れない……) 迷つた末に、マルゴットは諸 ヤ の返事を送ることにした。

二二・血と水と

リッテンハイム侯の私邸でマルゴットを待つていたのは、思いも掛けない熱い歓待であつた。無聊を困つていたマルゴットにとって、それは感激に値するものであつた。宴が果て、退出しようとするマルゴットにリッテンハイム侯が声を掛けた。

「お待ちなさい、フロイライン・ペーネミュンデ。私邸には使用人がいるとは言つても、この時間から家路につくのは若い御婦人にはお勧めできません。どうです？今夜はここにお泊まりになられては？」

夜が更けているとは言つても、地上車ランド・カーで帰れば一時間も掛からない距離である。来たときの車も、そのまま外に待たせてあつた。マルゴットは下重に断つた。だが、リッテンハイム侯は引き下がらうとはしなかつた。

「遠慮なされるものではありませんぞ。特に美しい御婦人はな。もしフロイラインに何かあつたら、冥界のお父上やお母上に顔向け出来ません。他にも遠方から足を運んで頂いて、我が屋敷にお泊まりいただく方もおられます。その中には遠縁の若い者達もおります。貴女のような美しい御令嬢が相手になつて下されば、彼らも長い夜を退屈せずに済みましよう。よろしければ運転手の方にも部屋を用意致しますし、おやお、そつだ、運転手はこのまま帰らせては如何です？御令嬢は明朝、陽が高く昇つてから、誰か信用できる者に送らせましよう。そつだ、クリスティーネ？」

「そつね、貴女、その方がよろしくですよ。クリスティーネ皇女にまでそつ言われては、断る理由がなかつた。」

他の客人達が姿を消し、リッテンハイム家に逗留するものだけが残つた。マルゴットはリッテンハイム侯の縁者だといふ、自分と同じ年頃の兄弟に挟まれて談笑し、久しぶりの社交界の余韻に浸つていた。その兄弟は、コルフト伯爵の子息達で、兄の方は自身が既に伯爵の爵位を持つて居るといふ。父の伯爵はブラウンシュバイク公の従兄弟に当たり、兄弟の姉がリッテンハイム侯の妹の義弟と婚約中だといふ系図を言葉の筆で頭の中に描かれて、マルゴットは感嘆した。「すこいではありませんか、名門中の名門、栄達は、約束されたも同然ですわね。」

「いやいや、とんでもありませんよ。我々は結局、傍流でしかありません。フロイラインこそ、今をときめく皇帝陛下の寵姫、ペーネミュンデ侯爵夫人の姉君、主流中の主流ではありませんか。」

妹の名前が出た事で、マルゴットの表情が微妙に変化したのを、兄弟は見逃しはしなかつた。

「何か、悪いことを申しましたか？」

「久しぶりに、人間から優しく尋ねられ、マルゴットは思わず涙がこぼれた。

「何か、悲しいことやお辛いことでもあるのでしたら、何でも仰つて下さい。広いお屋敷に使用人とお暮らして伺つております。使用人どもには、貴女の繊細なお気持ちなど理解できませんよ。」

マルゴットは、自分の胸の裡を語つた。妹が後宮に納められてからの自分の凋落ぶり、縁談の不調、両親の死、そのあとの妹の仕打ち……この六年間に我が身を襲つた不幸と、まるで姉の不幸を言ふかのような妹の増長ぶり。六年前の大舞踏会まで、何から何まで、妹が自分に勝るものなどなかつたのに、全てがあの日から変わつてしまつた。妹に出来て自分に出来なかつたことがあるとしたら、それは皇帝陛下をたぶらかすという大罪、それだけだつたのに……。

「妹御を恨んでおられるのですか？」

「恨む？とんでもありません。どつして私がああ娘、こを恨みますよ。ただ、私にはあ娘、こが許せないだけです。人の道に外れたことを平気でし続けているあの娘、こが。」

「復讐なさりたいのですか？」

「復讐など、いいえ、違いますわ。私はあ娘、このことを恨んでいないと申し上げたではありませんか。たとえ、どんな仕打ちをあ娘、こがしよつとも……私は、本来あるべき姿に、全てを戻したいだけです。人間は、皆、自分の身に相応の場所にいてこそ幸せなのです。シュザンナだつてそつですわ。あ娘、この為にもあ娘、こが居るべき場所に引き戻してやる事こそ、姉としての愛情だと信じております。」

「コルフト家の兄弟にも、それが苦しい言い訳だと判つて居た。この令嬢は妹を恨んでいる。復讐したがつて居るのだ。しかし、彼女は復讐者にはなりたくない。あくまでも心優しい哀れな姉、妹の被害者を演じたいのだ。」

「では、フロイライン、ペーネミュンデ侯爵夫人に相応しい場所とは、どこなのでしょう？」

「コルフト伯爵の許に、マルゴットは瞬眼を宙に浮かせてから、その瞳に冷たい光を宿した。

「……あ娘、こは、後宮に納められるまで、誰にも見向きもされぬ、目立たない娘、こでした。お客様がいらしても、部屋の間で隠れるようにして立つて居るよつた、気の利かない娘、こだつたのです。それが大神オーディンがああ娘、こに定められた居場所ならば、そこがああ娘、こに相応しい場所でしょう。」

「コルフト兄弟は眼を見合はすとそつと振り返り、今日のホストに小さく頷いて見せた。リッテンハイム侯が首肯するのを見て、二人はマルゴットに今日はもう休むよつたと言つた。」

翌朝、遅めの朝食を取つて辞去しようとしたマルゴットを、リッテンハイム侯が諷があるからと小サロンに案内した。マルゴットにソファアに腰を下ろすように手で勧めて、リッテンハイム侯も深々とその前の席に身を沈めた。

「フロイライン、昨夜は楽しんで頂けましたかな？」

「はい、とても。お招き下さつて、本当にありがとうございます。」

「いやいや、若い連中も、フロイラインのことが大層気に入つたよつたですよ。あれから」

「私、何かお気に触ることでも？」

「いや、そつではない。彼らが腹を立てていたのは、貴女にではなく、貴女の妹御に対してです。」

「シユザンナに、ですか？」

「そつです、フロイライン。私も聞いて驚きました。が、ペーネミニオンデ侯爵夫人は外見とは裏腹に、恐ろしいお方だ。皇帝陛下をたぶらかし、親の葬儀にも顔を出さず、貴女が住んでいると知りながら、調度品の数々を御自分の住んでおられる後宮の館に運び出してしまわれたとか。本来ならば御長女でいらっしゃるフロイライン、貴女がペーネミニオンデ家の家督を継いで当然であったのに、全くひどいことをなされるものだ。聞けば、貴女の縁談が不調に終わったのも原因はペーネミニオンデ侯爵夫人にあるというではありませんか。侯爵夫人に人としてのお気持ちがあれば、貴女に対して、そのような仕打ちの出来よう筈がない。」

「そんなことまで……。」

マルゴットは後悔した。少々喋り過ぎてしまったよつたと気が付いたのである。昨夜はアルコルも入っていたし、久しぶりに聞く優しい言葉が嬉しくて、何も考えず、問われるままに返してしまつたが、皇帝陛下のお側近くに仕える女性のことを、たとえ妹にせよ、人の前で非難したのは間違いだつたと悔やんだ。

「どうか、そのようなことは御捨て置き下さい。」

彼女は、リッテンハイム侯に、自分の発言を忘れてくれるよう懇願した。しかし、侯爵に、その気はなかつた。

「フロイライン、貴女も御存知の通り、貴女の妹御は現在懐妊中であらせられる。御子が生まれれば、おそらくは皇后に冊立されることになりましよう。しかし、そのように冷酷で強欲な皇后を戴くことが、

我々臣民にとって幸せであるか？もしかすると我々は、大きな岐路に立たされているのやも知れませんか。」

「と申されますと？」

マルゴットの問いかけに、リッテンハイム侯は唇に薄い笑いを浮かべて応えた。

「本来、皇帝陛下とは、我々臣民にとって慈母たる存在。太陽のような存在でなくてはならない。しかし、失礼ながら妹御には、その資格があまりにならぬように亡くなられたエレオノーレ皇后は、我が妻の母だから申すわけではないが、それはそれは良く出来たお人だな。皇帝陛下の寵姫達に、一度たりと怪気を起こされなかつたという。皇帝陛下の御子は国の宝。ゴールデンバウム王朝の未来を照らす光であると申されて、むしろ、皇帝陛下に御自分の眼にとまつた娘を差し出されたくらいだな。」

「何とお心の広いことではないましよう。」

マルゴットは感嘆した。

夫の愛人達に嫉妬してはならない。むしろ、自分が若さを喪つたと気が付いたら、夫の為に側室を見つつけ、閨房の事は若い側室に任せるのが貴婦人としての度量というものである。これは、現代の女性から見れば余りにも女性を蔑ろにした考えであるが、当時のゴールデンバウム王朝の貴族社会では、当たり前の事として通用していた。

「一度、型を作り、これが正しい女性のあり方であると示してしまえば、女性は皆自分からその型に我が身をはめ込み、完璧ではないにせよ、それに近づこうとする。女性は、きつめの型に身を合わせることに喜びさえ感じる生き物である。かつて何世紀も前に廃れた筈のコレットやパニーが、今や帝国中の女性の胸を締め上げているのを見て判る。それは何も身体だけではない。精神的にも、父は娘を、夫は妻を、自分の望む姿に仕立て上げる権利と義務

を持つのである。野放図に女性を蔓延らせたいけない。」

これは帝国暦一五〇年頃にハイゼンベルグ博士によって著された、当時の女子教育の聖書「バイブル」美しい樹 シェーン・パウム」の一説である。

世の多くの令嬢達同様、マルゴットも、それに従って育てられていた。実際に、彼女たちに夫が出来、その夫が愛人を持つた時に、その女性がどのように振舞うかは、観念としての理想像とはまた別物であるが、未だに夫を持たず、当然の事ながら夫の愛人とも対峙した経験のないマルゴットの言葉の中に、エレオノーレ皇后への賞賛以外の成分は何も入ってはいなかった。

「誠に。」

マルゴットの言葉に、リッテンハイム侯は頷いて見せた。

「それに引き替えると、フロイライン、貴女の妹御は陛下を独占しようとして、陛下が他の女性の許を訪れるのを邪魔なされるそつですな。御自分の欲のみで、お国にとつて何が大切かが判つておられない。大体、御自分が陛下のお側にいられたのは、皇后陛下の大きな御心のお陰でありましよう。それを忘れて、他の女性が、陛下にお仕えするのを許そつとなされなない。」

「……。」

「私も、貴女のお話を聞くまでは、若くして後宮に納められ、何かとお寂しいのかと思つておりましたが、どうやらそつではないようですね。」

「それは……シユザンナを皇后陛下と同列に扱つのが無理と申すものです。」

「一体、侯は何を言いたいのか？マルゴットはリッテンハイム侯の真意を測りかねていた。そんな訝しさがマルゴットの表情に出ていたのであるか？リッテンハイム侯は、漸く彼の本題に入った。

「そつで、フロイラインにお願いなのだが……どうか帝国を救つていただきたい。」

「帝国を救つて。」

思いがけない展開に、事態が呑み込めず戸惑つたマルゴットに対し、リッテンハイム侯は更に信じられない一言を放つた。別にそれは、マルゴットの想像力が常人に比して劣つていたのではない。むしろ、マルゴットの想像力はリッテンハイム侯が期待した以上のものだったと言える。

「左様、フロイライン、貴女は人間の幸せは分相応の場所にいることだと仰つたそつだが、私も同感です。皇后の器に相応しくないものが皇后に冊立されるなど、万民の為にもあつてはなりません。貴族の多くが、これまで私同様、妹御の外見に騙されている今、妹御の眞の姿を知っている貴女には、帝国を正しい道に戻す義務があるのです。何にしても、フロイライン、貴女の境遇には同情いたします。こつ申しては何だが、私は宮廷内でそれなりの発言力がある。貴女のこと、私も力を尽くさせていただきます。帝国が正しい姿になれば、フロイラインも、本来貴女がいるべき場所に居ることが出来ましよう。」

リッテンハイム侯のこの言葉を、マルゴットはこつ理解した。

（侯は、私にシユザンナのお腹の子を産ませるなど言つておられるのだ。シユザンナが死ねば、私がペーネミニオンデ家の当主だ。）

妹殺し……流石にそれは、重い命題であつた。コルフト子爵に馬車で旧ペーネミニオン子爵邸へと送られる途中も、マルゴットはすつと上の空であつた。傍らの青年が、鋭い眼でそれを見つめていることなど、気が付くはずもなかつたのである。

数時間後、マルゴットを送り届けたコルフト子爵がリッテンハイム邸に戻つた。

「どんな様子だったかね？」

侯爵の質問に、コルフト子爵は唇の片端を上げて笑つて見せた。

「侯爵もお人がお悪い。フロイラインは充分考え込んでいらつしやいましたよ。まあ、妹やお腹の子を言せよと言つたのですから、無理もないでしょうが。」

「人聞きの悪いことを言つたではない。私は一言だって、そのよつなことを言つてはあらぬ。何ならば、録音して於いた記録を聞いてみるかね？」

「いや、結構です。侯爵がそんなへまをなさるとは思つておりません。しかし、フロイラインが果たして、本当にごちらの思い通りに動いてくれるでしょうか？」

「動かすのさ。飴と鞭を使つてな。」
「手すからフランダースに赤みの掛かつた琥珀色の液体を注ぐ、リッテンハイム侯は若い貴族に手渡した。」

「飴と鞭、ですか？」

「そつだ。飴は君たちだ。私が見たとさう、どうも彼女は君に好意を持つたよつだ。そろそろ二〇代も半ば、適齢期を過ぎようとしてゐる。しかも一度力ストロブ家との縁談が破談になつてあり、どうしても結婚相手としては敬遠される。焦りがある筈だ。このままで嫁ぐことなく終つてしまつとな。しかも、家の実権は大嫌いな妹が持つてゐるといつのだから、何とかして伴侶を得たい筈だ。そこを君がくすべる。」

「では、鞭といつのは？」

「フランダースの中身を光にかざしつ、コルプト子爵が尋ねた。」

「鞭の方は、ヘーネミュンテ侯爵夫人に対するフロイラインの嫉妬心を利用して貰つた。心配はいらない。私の許に集まつてゐる貴族の何人かが、近々舞踏会を開く予定だ。君がフロイラインをそこにエスコートすればいい。あとは周りの者達が上手くやつてくれる。ヘーネミュンテ侯爵夫人をわざと持ち上げさせるのだ。フロイラインの前で、それだけで十分。フロイラインは妹に対する憎しみを導かせることださう。御婦人といつのは、かつたさう、我々男ではとても

思いつかないよつな常軌を逸した行動に出られるものだからな。」

「女と小人は養ひ難く、ですか？しかし、もしフロイラインが我々の名前を出すよつなことがあつたら、どうなさいます？証拠が無くとも、我々がフロイラインをそのかしたといつ噂が出るだけで、噂は噂はありましよう。」

「ふむ。肉を焼くにも、火加減が大切。火からおろすのが早すぎても、また逆に遅すぎても、肉がますますなる。丁度良いところで皿に取るが肝要だ。」

「二人の門閥貴族は、顔を見合わせると互いのグラスを掲げた。」

それからの一ヶ月ほど、マルゴットの心は千々に乱れたと言つて良い。コルプト家の兄弟、特に兄の方は、幾度もパーティーに誘つてくれた。しかし、彼らがマルゴットを迎えに訪れる度に、マルゴットはいたたまれない思いをした。

「これはまた、本当に殺風景なお宅ですね。」

リッテンハイム邸から送つて来た時、ヘーネミュンテ邸を目にしたコルプト子爵が口にした言葉である。それを聞いたとき、マルゴットは顔から火が出るよつな気持ちであつた。だが、おそらく、大多数のものはヘーネミュンテ子爵邸を見てそのよつな感想は持たなかつたであらう。マルゴットが負い目を感じたのは、彼女が、より豪華な装いであつた生家を知つていたからに他ならない。

「これといつのも、シュザンナのせいだ。」
妹に対する怒りが燃え上がるのは感じたが、しかし、自ら妹に復讐の鉄槌を振り下ろすのはためらわれた。

コルプト子爵やその弟にエスコートされて連れて行かれるパーティーでも、彼女は自分の気持ちが引き裂かれるのを感じた。周囲の者から妹に対して好意的な言葉を聞くと、マルゴットの胸は灼け付くよつに

痛んだ。ついつい、周囲に自分に対する妹の仕打ちの数々を口にしたり。逆に、シュザンナへの非難は、耳に心地よかつた。だが、それも、シュザンナの存在そのものを否定されると、何故か腹立たしいのであつた。

コルプト子爵達は、フランドルシユバイク家やリッテンハイム家と繋がりのある自分達の出世を、シュザンナが宮廷内の悪い噂を信じて妨害している、とマルゴットにこぼして見せた。シュザンナが皇帝陛下の側について自分達を譏言し続ける限り、自分達は安心して結婚もできない。いつ前線や辺境の惑星に送り込まれるか判らないから、といつのである。

その時のコルプト子爵の眼の中に、意味あつた光を感じたのは、あながちマルゴットの思い込みだけではなかつたであらう。たとえそれが、偽りの光であつたとしても、もしも帝国に、同盟にあるよつな演劇があつたとしたら、主演男優賞は無理でもおそらく彼は何らかの演技賞を受賞していたに違いない。

「コルプト子爵は、もしかしたら、本当に私との結婚を考へておられるのかも知れない。でも、シュザンナのせいで、将来に希望が持たず、ためらつておられるのかも……。」
マルゴットの中に、まさかと思つた、反かな期待が膨らんでいつたのも無理からぬところであつたかも知れない。

現実的に人を害する事に対する罪悪感で、自分が好意を寄せる男性の為にならば自分が身を捨てて尽くすべきだといつ恋愛ロマンス・スマ……の間でマルゴットの心は揺れ動いた。彼女の心の秤、はかり、を一方に傾けたのは、コルプト子爵のこの一言であつたかも知れない。

「間もなく、叛徒達がまた大攻勢を仕掛けてくるらしい。今のこの状況でそんなことになつたら、私も弟も、きつと前線に送られる。もう一度と貴女に会えなくなるかも知れない。」

マルゴットは決心した。もつこれ以上妹に自分の幸せの邪魔はさせない。妹がコルプト子爵を死地に向かわせるといつのである。自分がそれを阻止してみせる。たとえその為に、自分がどうなるかとも、自分の大切な人の役に立てるのであれば、女として最高の幸せではないか……。

帝国暦四七八年一月初旬、マルゴットは新年の挨拶と見舞いの名目で、新無憂宮ノイエ・サンスーシー、西苑の妹の館を訪れた。シュザンナが後宮に納められてから、彼女が妹の館を訪れたのは、この時が初めてである。

自分の館の調理人に、シュザンナが後宮に入る以前、好きだつたケルシー、巴旦杏（はたんきょう）のケーキを作らせて、無味無臭の劇物、それは、彼女が最近眠れないからと、かかりつけの医師に処方させていた睡眠剤だつたのであるが、それを何日分も粉砂糖に混ぜて振り掛けたものを手土産に、シュザンナ邸に入ったマルゴットであつたが、シュザンナは最初、姉に会つたはしなかつた。

「私のことを見下してゐるんだわ。」
マルゴットの中で、その日その場所を訪れた理由が更に輪郭をはつきりと浮き出させたよつな気がした。自分を蔑ろにした報いを思い知らせやると、あれだけの量の睡眠剤が一度に体内に入れば、シュザンナの命を奪つことは無理でも、お腹の子を害することは出来るさう。少なくとも、シュザンナがこれ以上大きな権力を持つことだけは防げる筈である。

「でも、折角来たのだし、せめて一目だけでも会つて帰りたいわ。一緒にティータイムを過ごすくらい、いいでしょう？お父様もお母様も亡くなられた今、たった二人の姉妹なんですから。」

マルゴットの言葉に、シュミット老女が去つてから、実質上女中頭を務めてゐるヨハンナ

が頷いた。

「マルゴットお嬢様、ありがとうございます。そのように気にかけていたのだと聞いてお判りになれば、シユザン様も、さぞ心強いことだと思います。ただ、シユザン様がどの様な態度をお取りになられても、気になされないで下さいませるか、シユザン様は、御懐妊中と言つてもあつて、少々神経質になつておられるのです。御存知のように、これまで二度、御子を亡くされておられますので……。」

お茶の支度をさせまじやうと、奥に消え去つていくヨハンナの背を見ながら、マルゴットは思った。ヨハンナは昔同様、善人だ。人を疑つてを知らない。悪意というものが存在することさえ知らないようだ。単純で、皆、人が、自分や自分の主人に優しいと思つてゐる。きつと、これまで何一つ、世の中の不条理にぶつかることなく生きてきたからだ。シユザンも同じだ。あの娘には、これまで甘いお酒しか注がれていなかった。その分、私の杯には苦汁だけが注がれてきた。そろそろ、あの娘、この杯にだつて、苦いお酒が注がれたらいい筈だ……。

だが、湯気の立ち昇るコーヒポットと二人分のコーヒカップ、クリームをたっぷり入れたクリーム、それにマルゴットが持つてきたケーキを載せたワゴンを押して、ヨハンナがシユザンナの寢室の扉を開けたとき、マルゴットはその光景に嘩然とした。「全人類の支配者にして全宇宙の統治者、天界を統べる秩序と法則の保護者、神聖にして不可侵なる銀河帝国フリードリヒ四世陛下、私は陛下に全てを捧げてお仕えいたします。全人類の支配者にして全宇宙の統治者、天界を統べる秩序と法則の保護者、神聖にして不可侵なる銀河帝国フリードリヒ四世陛下、私は……。」

寝台の上で、書きめした顔をして、シユザン

ナはいつ終わるとも知れない呟きを繰り返して、まるで呪文のようだ。それはマルゴットの眼にも異様なものと映つた。「ちよつとヨハンナ、シユザンナは一体何をやってゐるの？」

マルゴットはヨハンナを廊下に連れ出して妹の行動について説明を求めた。

「陛下がこの御館にお出でになつておられる間は、普通に陛下とお話もなさるのですが、それ以外の時は、ずっと陛下を讀める言葉を唱えておいでなのです。陛下以外のことを考えたりするのは、自分には許されないことだと仰つて。」

「それは確かに、陛下のことを一番に考えるのは判るけれど、でも、何もそこまで……どうしてシユザンナは、そんなに思い詰めてゐるの？」

「前回の流産を、御自分が陛下の許を離れ御実家に戻られたのが原因だと思つておられるようなのです。陛下にお仕えする以外に御自分には何も許されてはいない。たとえ御両親や御姉妹のことでも考えるのは罪である。その罪を犯してしまつたら、流産という罰が当たつたのだと。私達使用人にも、本当に必要最低限のことしかお話にはなられません。それさえも、陛下以外のことにお気持ちを向けてしまつたと、ひどく御自分を責められるのです。ですから、私共は、出来る限りシユザンナ様の御様子を見て、御言葉の出る前に、御身の回りの事をさせて頂いてあります。」

「それって、何かおかしくくない？普通じゃないわ。宮廷医だつて診に来るのでしょうか？何らかの処置を取らないの？」

マルゴットは、自分がここへ来た目的が何であつたかを忘れ、思わず妹の心配をしてゐた。

「はい。お医者様方は、出産や流産、御懐妊等で、女性の気分が滅入ることは良くあることだから、心配するには及ばない。とにかく、シユザンナ様の御心に沿つように

心掛けよと。」

……私にはまだ経験がないから、何とも言えないけれど……大変ね、お前も。」

マルゴットの言葉に、ヨハンナはやや疲れた微笑みを見せた。

「一番大変なのは、シユザンナ様でございませぬ。ここは、余りにも外の世界と違つておりませぬし、気の休まる時がございませぬ。何か慰めになるものがあればよろしいのでございませぬが……。」

マルゴットは、シユザンナの後宮での生活が決して自分が思つていたように、光輝に満ち溢れたものではないことを知つた。皆から羨望の眼差しで見られるのは、その私生活のほんの一部分でしかない。殆どの者は、その一部分が全てだと思つてしまつ。けれど、その杯に入つてゐるのは、甘い美酒だけではなかつた。マルゴットの中で、シユザンナに対する害意が空気の抜けた風船のように急速に萎んでいった。シユザンナを許したわけではないが、心の秤、はかり、は、私邸を出た時とは、反対に傾いたのである。

結局、この日、シユザンナは、マルゴットの持つていったケーキを食べなかつた。食べられなかつたといつた方があつてゐるのかも知れない。ケルシー、巴田舌(はたんきよつ)の香りが強くて、身体が受け付けなかつたのである。

「また、お見舞いに来るわ。食べたいものがあつたら教えて頂戴。うちの料理人に作らせて持つて来るから。生まれた家の味のところが、シユザンナもいいでしょ。」

玄関前の車寄せまで見送りに出たヨハンナにさう言いながら、マルゴットは、どこか安心してゐる自分に気が付いた。帰りの地上車、ランド・カー、の中で、後部座席の背もたれに身を持たせ掛けて、マルゴットは、一つ大きく溜息を付いた。

マルゴットの気持ちに変化が現れたからといつて、運命の女神達は、決してシユザン

ナに好意的であつたとは言えない。シユザンナは姉の訪問から日を置かずして、二度目の流産を経験することになった。突然の腹痛、そして出血……医師が駆けつけた時には、既に流産防止のいかなる措置も、間に合わなかつたのである。いまだ冬の色の空を窓から見上げながら、シユザンナは泣くことすら出来ず放心状態であつた。胎児が体内から去ると共に、あれ程シユザンナを苦しめていた悪阻も嘘のように収まつたが、それはシユザンナにとって何の慰めにもならなかつた。

(どうしてこんな事になつてしまつたのだらう？陛下のことだけを考へてゐるつもりだつたに……。考えられるとしたら、お姉様がいらしたとつてあれで、私の陛下への心が蔑ろになつたのだらうか？)

皇帝陛下以外のことを考へてはいけな、そう思いながらも、ついつい皇帝から思考は離れ、そんな事を考へてゐる時に、シユザンナの私室の扉をノックする者があつた。

「誰です？」

窓の外を見つめたまま、扉の方を見ようともしないでシユザンナは尋ねた。

「ヘンドリクスでございませぬ。入つてもよろしくございませうか？」

扉の向つからの返答に、シユザンナはまた暫しの間、皇帝陛下以外のことを考へねばならないと予感し、少し気が重くなつた。だが、ヘンドリクスが自分に話をしに来る時は、どうしても自分の耳に入れねばならない話があつてのことなのだ。そうでなければヘンドリクスの一存で決裁するよつとに命じてある。

「お入りなさい。」

シユザンナは入室の許可を、最近めつきりと白髪の増えた執事に与えた。

部屋の中に入つてきたヘンドリクスは、極めて事務的に用件を伝えた。

「シユザンナ様、姉君マルゴット様が、先程御亡くなりになりました。」

一瞬 シュザンナは瞳を大きく見開き、その後瞳目をした。
(私の心を乱した罰が当たったのだ。)
姉の死を悲しまない自分に、シュザンナは満足した。

典礼省に出された記録に寄れば、マルゴット・フォン・ペーネミュンデの死は、狐狩りの最中の落馬によるものとなっている。

その狩りを主催したのはリッテンハイム侯であり、彼女をその狩りに誘ったのはホルプト子爵である。マルゴットの使用人達の記憶に依れば、マルゴットは当初、妹の身に不幸が起つたばかりであるし、今回の狩りは辞退したい旨、ホルプト子爵に伝えたい。しかし、ホルプト子爵は、どうしてもマルゴットと会って話したいことがあるからと、狐狩りへの参加を強く希望し、結局マルゴットは、彼の希望に従った。

彼ら同様、その狩りに参加していたマグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人は、マルゴットの落馬の少し前に、彼女が馬に乗るところを目撃している。ホルプト子爵が手綱を取り、マルゴットに乗るよう促していた。マグダレーナの見るところ、馬はかなりの悍馬で、卓越した乗馬技術の持ち主が騎乗すれば名馬かも知れないが、あまり馬に乗る機会がない御婦人に勤めるには適当な馬ではないのに、と不審に思った。案の定、マルゴットが馬上の人となり、ホルプト子爵が手綱を放した途端、馬はすごい勢いでね回り、駆け出した。必死に手綱にしがみついて助けを求めるマルゴットを乗せたまま、馬は大跳躍し、数の中に姿を消した。乗馬ズボンを履き、男性同様両足で馬の身体を挟んで乗っていたマグダレーナとは違って、乗馬服とは言っても、ドレスとタイルのマルゴットは女鞍で横乗りであり、そのような場合馬上に身を留めるのは極めて困難なことであつたらう。漸く馬が取り押さえられた時、その背中には誰も乗っ

ておらず、捜索の結果、マルゴットは変わり果てた姿で発見されたのである。マルゴットの死により、ペーネミュンデの名を継承するのは、シュザンナ一人となつた。

一三・龍姫

さて、シュザンナの懐妊による悪阻、流産姉の死による形ばかりの服喪、これらによって生じたフリードリヒ四世の閨房の空白に送り込まれたのが、アンネローゼ・フォン・ミューセルである。彼女はこの時僅か一五歳、シュザンナが後宮に納められた年齢より、更に幼かつた。

ただ、シュザンナとアンネローゼとの間には、決定的な相違があつた。後宮に納められるといつことの意味さえも理解していなかつたシュザンナと違い、アンネローゼは、自分に求められている「奉仕」の内容も、その求めに応じなかつた場合、どのような事態がミューセル家の者の上に降りかかるかといつことも把握していた。それは、彼女が生家の貧しさ故に、常に「現実」と向き合つて生きて来るを得なかつたといつことでもある。

アンネローゼは一五歳と幼くはあつたが、弟を出産後、しばしば病臥するようになった母を幼い頃から助け、母が亡くなつた後は、主婦として一家を切り盛りせざるを得なかつた。妻を亡くした父親は、すっかり生きる意欲を喪つて、ミューセル家の経済は悪化の一途を辿るのみであつたから、それは決して生易いものではなかつた。酒に溺れる父と二人きりの生活であつたら、アンネローゼも、自分に科せられた責任を放棄し、自堕落な生活に身を落としていたかも知れない。

しかし、彼女には、自分の手を必要とする五歳違いの弟がいた。また、母を喪つた前の、家族思いで仕事熱心だつた父の記憶が、父と母がどれ程仲睦まじかつたかを見て育つた彼女には、父の変化もやむを得ないものとして映つたのであろう。弟の方は、成長した後、父ペラスチャンを憎悪している事実を隠そうとしなかつたが、アンネローゼは、生涯一度も自分と五〇万帝國マルクを引き替へした父に対する恨みを口にはしなかつたといふ。

母クラリベルが存命中に住んでいた高級住宅街ならばともかく、平民階級の居住区域で、しかも、その中であつても決して立派とは言えない造りの家に、場違いな人物が訪れたのは、枯れ葉が道に舞い降り始めた頃だつた。

「突然の訪問に驚かれたかも知れませんが、非礼は、何とぞご容赦願ひたい。私の名前はホルピッツ。宮内省に務めております。」席を外そうとするアンネローゼに、慇懃に、しかし、有無をいわさぬ口調で、宮内省の官吏は言つた。

「いや、御令嬢にも、同席して頂いて結構です。御令嬢にとつて、これ以上はないお話なのですから。」

思わず顔を見合わせた父と娘に向かつて、「運命からの使者」は話を続けた。先日、偶然、お宅の前を通りかかり、御令嬢のお姿を拝見致しました。その後、いろいろと調査させていただきました結果、皇帝陛下のお側に上がるに差し支えなかつたということに相成りました。その後、続く静寂。それを破つたのは、父親が発した、呻きとも付かぬ、押しつぶされた声であつた。「アンネローゼ……。」

宮内省の官吏を前に、自分を見つめる父の目の中に、彼女は父の苦悩を見て取つた。亡き妻に日に日に似てくる娘。これから娘の「人生」といふ画布に描かれたであろう極彩色の絵が、灰色一色に塗りつぶされ

るのをどうにも出来ない無力感。それは、冷たくなつていく妻を救えなかつた、あの時の繰り返しであつたらう。

「私、参ります。」

「すまん……。」
そう小さく応えたときの父の泣き出しそうな顔を、アンネローゼは一生忘れられなかつた。

フリードリヒ四世が自分の身体の上を初めて通り過ぎていった時、アンネローゼは「自分の人生」は本当にもう終わったのだと感じた。たとえ、誰か恋い焦がれる相手が出来たとしても、自分にはもう、その人に愛される資格はない。彼女は、止めてもな涙が溢れるのを感じた。それがどのような涙なのか、流しているアンネローゼ自身にも判らなかつた。だが、少なくとも、人類社会最大の権力者に、我が身を捧げた歡びの涙でないことだけは確かであつた。そのような涙を流すことは、臣民として許されないことではないか？アンネローゼは、我が頬に光る滴を皇帝に気づかれまいと、皇帝から顔を隠したが、フリードリヒ四世は彼女の涙に気が付いたようであつた。身を起こして問うて来たのである。

「何と申したか……アンネローゼ、であつたかな？辛かつたのか？それは悪かつた。詫びと言つては何だが、何かそなたの願いを聞いて取らせよう。何なりと申してみるがよい。」

「単なる気まぐれかも知れないと思つた。しかし、大貴族との約束は反故同然という「常識」の中で、フリードリヒ四世が皇太子時代の借金を、皇帝になつてから約束通りに居酒屋の店主に返済したという話は、彼の数少ない美談として知れ渡つている。たとえ今宵限りの一夜妻として打ち捨てられたとしても、もしかしたら、ここでの約束は果たされるかも知れない。アンネローゼは、自分が一番気に掛かつていることを皇帝に願つた。」

「弟の将来を保証していただけますか？」

「ほう、弟がおるのか。何歳かな？」

「一〇歳でございます。」

「ふむ。ならばそろそろ、将来進む道を決めねばなるまい。何になりたいのか、聞いておくがよい。」

「この一言が、五〇〇年近く続いたゴールデンバウム王朝を滅ぼすことになるのだが、アンネローゼもフリードリヒ四世も、この時、そのようなことを知る筈もなかった。アンネローゼの弟は、将来何になりたいかと言つ姉の問いに、軍人になりたいと答えて、幼年学校の入学式から遅れること二ヶ月程で、帝国幼年学校に編入される。編入試験に於ける優秀な結果もさることながら、皇帝の口添えがなければ、貧乏貴族の息子に許される待遇ではなかった。」

更に一ヶ月後、一夜妻に終わらず、なおも皇帝の興味を繋ぎ止めていたアンネローゼは、彼女に与えられた瀟洒な館を訪れたフリードリヒ四世に、もつ一人、弟の親友を幼年学校に通わせたいのだがと、恐る恐るお伺いを立てることになる。

「一人も二人も同じである。そなたの弟も、一人くらい、顔見知りの友が欲しかろう。良きように計らつてやるがよい。」

幼年学校編入のお礼をと、初めてアンネローゼの弟と引き会わされた時の、刺すように峻烈な表情を浮かべ自分を睨み付ける蒼水色 アイスマル の瞳を思い出しながら、フリードリヒ四世は、鷹揚に、新しい寵姫の願いを許した。

もしも、今暫く、入学時期より時間が経過していたならば、いくら皇帝の思召しとは言え、その友人は、次年度、一期下の学年にしか編入を許されなかつたであろう。幼年学校では、当然の事ながら、軍事的な専門教育が行われている。いくら一般の学科の成績が優れていたとしても、専門教科において、あまりに大きな隔たりがあ

れば、年度途中からの編入を幼年学校側が認める筈がなかった。そつなつておれば、銀河の歴史も、また今とは異なつたものとなつていた筈である。

ある歴史学者は言つ、全ての事象は必然である。と。もし、それが真実だとするならば、全ては、細心の注意を払つて偶然を装い、「その時」の為に動き始めていたと言えるのかも知れない。

シュザンナが宮廷に再びその姿を現すようになったとき、彼女の留守中に忍び込んだ「雌狐」は、しっかりと自分の巢穴を後宮に確保してしまつていた。シュザンナが外に出られなかつた帝国暦四十七年初冬から四十七年早春まで、アンネローゼは皇帝が足を運んだ殆どの音楽会や演劇に随行し、フリードリヒ四世が彼女に与えた寵愛が、決して一時のものではないことを伺わせたのである。

「妾が、妾が皇帝陛下のお側にあらなんだを良いことに、泥棒猫めが！」

シュザンナは怒りにふるえたが、今更どうすることもできなかつた。ただ一つ、彼女にどうして救ひだつたのは、宮廷内で誰一人として彼女と知己を得ようとする者がいないことであつた。皆アンネローゼ・フォン・ミューゼルという小娘のことを忌避しているようである。だが、その理由を知つた時、シュザンナを襲つたのは、安心よりも更に激しい怒りと哀しみであつた。

「何々、あの娘の出自は帝国騎士、しかも下町で平民以下の暮らしをしていただけと申すのか？陛下は一体、何を思われてそのように下賤な者にお心を留められるのじや！？」

公爵令嬢や侯爵令嬢、せめて伯爵令嬢だといふのであれば、皇帝の寵愛がアンネローゼ・フォン・ミューゼルに向けられるというのも頷ける。しかし、貴族とは名ばかりの平民同然の娘が皇帝の寵を賜るなどと

言つては、まるで、自分、シュザンナ・フォン・バーネミニオンが平民以下だと暗に言つているようなものではないか。これ程までに皇帝陛下のことだけに我が身を捧げている自分に對し、それは余りにも酷い仕打ちに思われた。

しかし、悪いのは皇帝ではない。皇帝を誑かし、そのような行動に走らせたあの女である。園遊会の会場で、正式に紹介され、自分に膝を屈して挨拶をするアンネローゼを見て、シュザンナはよりその感を強くした。アンネローゼの煙るような微笑みが腹立たしかつた。

（あの笑顔で陛下を騙してあるのじや。陛下を騙すことは出来ても、この妾を騙すことは叶わぬ。何の苦勞も知らぬ成り上がり者めが！）

シュザンナはこれみよがしにアンネローゼを無視して自分の周りに人を呼び集めた。アンネローゼのほつからシュザンナ達の方に声を掛けることは出来ない。ただひたすら、宮廷での礼儀に乗つ取つて、頭を垂れ、声が掛かるのを待つている。その様子を見て、アンネローゼを侮蔑の瞳で見つめる他の貴族達の視線が心地よかつた。

（判つたか、雌狐めが。ここはお前などのいる場所ではないのじや。今に見ておるがよい。必ずやお前に相心しい場所に、叩き出してくれる。）

アンネローゼを横目で見下ろしながら、シュザンナは彼女の頭上で彼女の信奉者達と会話を楽しんだ。いや、正確に言つたらは会話を楽しんでいるふりを装つた。六年間の歳月は、シュザンナを無視される側から無視する側へと変えていた。しかし、シュザンナは、今自分がしていることが、かつて二名の皇女達によって自分に加えられた仕打ちと同様であるといふことに、気が付いてはいなかつた。

シュザンナが取り巻きの貴族達を引き連

れてその場を離れてから、漸く立ち上がり、一人佇むアンネローゼの目の前に、突然、サクランボを入れたカクテルが差し出された。

「？？」

驚いて差し出された手の方を向くと、そこにはほぼアンネローゼと同じ年頃の黒髪の少女が立つていた。

「フロライン・ミューゼル、大丈夫、気にしないことよ。貴族社会では良くあることなのだから。ここはね、陰謀と中傷の巢窟なの。自分が気に入らないと思えば、あの手この手で嫌がらせをしとくるわ。それに対抗する手段はただ一つ。自分が正しいと思うように生きて、周りのことは気にしないことよ。」

「ありがとうございます。フロライン：フロライン何とお呼びしたらいいのでしょうか？」

カクテルを受け取りながら、黒髪の少女の名前を尋ねたアンネローゼに、少女は答えた。

「私はマグダレーナ。みんなはウエストパールの男爵夫人と呼ぶわ。夫はまだいないのだけれどね。どちらの呼び方もいいわ。貴女の好きな方で。」

「では、私もウエストパールの男爵夫人とお呼びします。私のことはどうがアンネローゼとお呼び下さい。フロライン・ミューゼルなどという呼ばれ方に、まだ慣れなかつて...。」

この黒髪の少女は、その後、アンネローゼの宮廷内での擁護者として、少なからずアンネローゼと彼女の弟の人生に影響を与えていくことになる。つまりは、シュザンナの人生にも幾ばくかの影響を与えることになるのである。更に付け加えるならば、アンネローゼ・フォン・ミューゼルがフロライン・ミューゼルという呼称に慣れる暇、いとまはなかつた。彼女はそれから日を置かずして、「グリーンニューワルト伯爵夫人」という

称号を得ることになるからである。

アンネローゼが伯爵夫人の称号を得るに至った経緯を、当時の宮廷の人々はフリードリヒ四世の偏愛によるものと理解していたよつであるが、実際のところには「この話の口火を切ったのは皇帝ではない。フリードリヒ四世は、爵位などというものに対してどちらかというところ無頓着であつたよつで、当初、アンネローゼに爵位を、とは考へていなかったらしい。ただ周囲から、皇帝が、生家に爵位もなく、また後ろ盾となる大貴族もない市井の小娘に執着するのは、皇帝の権威という見地からも問題がある」といふ非難の音が挙がつた為、

「あの者に、爵位があればよいのだな？」と、直系が絶えていたグリューネルト家の名跡を与えた、というのが真相である。記録には、皇帝がアンネローゼに爵位を与えるよつ指示を出したとしか残されていないが、如何にもフリードリヒ四世が、積極的にアンネローゼに爵位を与えたがつたかよつに受け取られたのであるよつ。

だが、このことがまた、宮廷内でのアンネローゼに対する風当たりを強くすることになった。宮廷という場所が、いかに新参者に対して閉鎖的な場所であつたかよつことであるよつ。貴族達にとつて、爵位を与えるに相応しい人間は、既に何世代も前に定められており、それ以外の人間が自分達と同列に並ぶといふことは、許しがたい行為であつたのであるよつ。

この事は何も、ゴールテンパウム王朝に限つたことではない。歴史をひもといてみれば、生まれた家柄によつて、その子の生き方（職業、住居、衣服、食料等）が厳しく定められていた例はいくらもあつたし、そこまで厳しくなくとも、例えば、フランスのブルボン王朝末期には、三世代以上続いた貴族の家柄の者にしか、一切の昇進が認められなかつた。それに比べれば、平民であつても提

督になることが夢とばかりは言い切れなかつた。ゴールテンパウム王朝は、まだ血統主義が緩かつたと言えるのかも知れない。

アンネローゼが伯爵夫人（グランドプリン）の称号を得ると知つた日の、シュザンナ邸の様子は、すさまじいものがあつた。シュザンナ以降に後宮に納められた女性の中で、新たに爵位を受けた者はそれまでになつた。しかも、シュザンナの場合には、懐妊によつて侯爵夫人、マルキーゼの称号を得たのであるよつ。

「あの小娘本人に、伯爵夫人の称号の価値があるよと申されるのか、皇帝陛下は……！ 妾は、後宮に納められてからも、マクシミリアンを懐妊するまで、ずっとフロライン・ペーネミュンデ、ペーネミュンデ子爵令嬢と呼ばれておつたと申すのに……！」

部屋の中を何度も往復しながら、シュザンナは親指の爪を噛みしめた。立ち止まると怒りで身体が震え出しそつで、歩き続けるしか出来なかつたのであるよつ。

「ヨハンナ、ヨハンナ、そなたはさつと思つて、皇帝陛下にとつて、妾はあの小娘程の価値もなかつたのであつたか？ だとしてたら、こんな悲しいことはないよつ。」

幼い頃から自分の側についている忠実な侍女に、シュザンナは救いを求めるよつな眼で問い掛けた。

「いいえ、そんなことはございませぬ。シュザンナ様の代わりになれる者のおつた筈がございませぬ。ただ……、これまで、あちらのお方ほど御出自の低いお方は居りませぬんだ。皇帝陛下も、今はただ物珍しさも手伝つて、あちらのお方に眼が向いてお出でなつてございませぬよつ。しかし、きつとそなた、飽きられる時が参ります。陛下とあちらのお方では、余りにもこれまで生きていらつたやいませぬ世界が違ひます。やはり、シュザンナ様でなつてはと思われる日が参りますよ。さうかそれまで、さ辛抱な

さいませ。」

「さつであつたよつ……こんなことが許されて良い筈がないのじや。陛下のお隣にいるのがあの娘などよつ、そんなことが許されて良い筈がないのじや……！」

ヨハンナの言葉は、頭では理解できた。しかし、感情はそれを納得できなかつた。おそろしく誰か何言つても、シュザンナの気持ちを鎮めることなど出来なかつたに違ひない。

シュザンナは暖炉の上の鏡を見た。その中には、これまでに自分が見たことがないほど険しい表情の自分がいた。かつて夢見るよつに見開かれていた瞳は、暗い炎で燃え上がつてくるかよつであつた。

（これは妾ではない……）

シュザンナは近くにあつた花瓶を鏡に向かつて投げつけた。乾いた音と共に、花瓶は砕け散り、鏡には放射状に亀裂が走つた。

しかし、一人であつた筈の鏡の中の若い女性性は、亀裂に囲まれた破片一つ一つの中から、人数を増やしてシュザンナを睨み付けていた。

（マクシミリアン、そなたが生きておつたならば、あのよつな下賤な者に、陛下の御心が捕らわれることもなかつたであつたよつ……せめて、あの時、そなたと共に死んでおれば、このよつな思いを味あわずとも済んだ。何故、母を遣して逝つてしまつたのじや……これも、そなたを守つてやれなつたこの母への報いなのであつたか？）

シュザンナの問いかけに答える者は誰もいなかった。

シュザンナは、さつしても「あの女」に対して虚心していることは出来なかつた。「あの女」の許に、皇帝が足を運んだと知れば、さつしてもその事をなじりたくなる。

陛下、陛下は騙されておいでなので。下賤な生まれのあの者に、妾ほどの真心のあはす者がございませぬ。あの者が愛してお

りますのは、ただただ、金銭と権力だけだございませぬ。陛下には何故、それがお判りになりませぬ？ あの女は陛下の御寵愛を良いことに、妾を陛下から引き離さつとして居るのでございませぬ。陛下のことだけを思い、陛下の御為だけを考へているこの妾を、それは妾があつたの正体に気が付いて居るからに他なりません。」

口を酸っぱくして、グリューネルト伯爵夫人と名乗る雌狐の正体を説くシュザンナに、他意はなかつた。彼女にとつて、「あの女、アンネローゼ・フォン・グリューネルトは、まさにその通りの人物であつたから、しかし、フリードリヒ四世の見解はまた違つた。アンネローゼは積極的にフリードリヒ四世の来館を求めたりはしない。それが自分に対する奉仕の尺度であるといふのであれば、確かにアンネローゼよりシュザンナの方が上であるよつ。だが、アンネローゼの館に行くよつ、アンネローゼはシュザンナ邸では味わぬ安らぎを、彼に与えてくれた。

「陛下のお口に合ひますか？ どうか、判りませぬけれど……。」

さつ言ひながら切り分けてくれたケーキは、全てアンネローゼの手作りだと言つた。「ほつ、これを自分で焼いたのか？」と尋ねるフリードリヒ四世に、アンネローゼは少しはにかんだよつに頬を染めて、

「はい、家に居りました頃、弟たちによく焼いておりましたので、ついつい、こゝでも厨房に入つては色々作りたくなつてしまつたのでございませぬ。ヨルヒツツさん御夫婦からはそんなことをしては後宮の女性らしくないと叱られてしまひますけれど……。もし、何か陛下のお好みのものがございませぬら仰つて下さいます。練習しておきますから。」と答えたものであつた。その他にも、晩餐に手作りのフリカッセが並んだこともある。それらは宮廷の料理人達が作るものに見かけは劣つていたが、味の方はなかなかのもので、かえつて調理した者の飾らぬ人柄を

感じさせ、フリードリヒ四世は好感を覚え
た。

また、園芸という共通の趣味があったの
も、アンネローゼの許を訪れる楽しみにな
っていた。多くの貴婦人達は、花の名前や
その花言葉には詳しいが、実際の手入れの
こととなると何も知らない者が多い。土い
じりで手が汚れたり荒れたりするのを恐
れて、実際に自分で育てることが少ないか
らである。しかし、アンネローゼは違ってい
た。薔薇の話をして、

「そろそろ剪定の時期ですわね。」
とか、

「雨が多いから、黒点病が心配ですわね。」
などと、手入れの話が自然に出てくるので
ある。流石に薔薇の手入れは、棘で手に傷
を付けてはいけないからと執事に止められ
たよつであるが、温室で蘭の世話をしてい
るといので、見に行くと、これがまた見
事であった。花壇に花の苗を植えているの
を見たこともある。

手芸も得意なのか、テーブルクロスやクッ
ションカバーは言つに及ばず、ベッドカバ
ーも彼女の手作りだと言つし、とにかく、ア
ンネローゼの館は至る所に、女主人の手が
入っていた。それはシュザンナが言つよつに
金銭や権力を得るためではなく、ただ周
りの者が心地よく過ごせるようにとい
う想いから出たものであり、しかもそれを彼
女は楽しみながらやっているよつにフリー
ドリヒの眼には映った。

(その手の掛けよきを、愛情でいづのではな
いのか?)
シュザンナには言えなかつたが、ふとそん
なことを、フリードリヒ四世はアンネロー
ゼの館で感じるのだ。それは彼が若い頃、
宮廷の気詰まりな雰囲気から逃れる為に
訪れていた下町の酒場で、店主が彼に与え
てくれた、素朴ではあるが心の込もった心
遣いに似ていた。
「そなたの弟は、良い姉を持って幸せだな

その姉と引き離され、さぞかし予のことを
恨んでおるつな。」

半分本気で、また半分はアンネローゼを
からかつつもりで、こう言つたことがある。
一瞬アンネローゼの顔から、いつも自然に
浮かんでいる柔らかい微笑が消え、悲しげ
な影がその上を通り過ぎていったよつにフ
リードリヒ四世には見えた。だが、その後
アンネローゼはまるで自分に言い聞かせる
かのように、空を見上げてこう言つた。

「いつかは弟も私から離れて行かねばなり
ません。私が弟の側にいては、あの子の為に
ならない時がきつと参ります。それが思つ
ていたより早かつただけです。それが思つ
ても、あの子にとつては過分な御配慮を頂き
勉強に勤しむことが出来るのですもの。き
つと弟も陛下に感謝致しますよ。」
アンネローゼの言葉に頷きながら、僅か
な時勢の言い回しをフリードリヒ四世は聞
き逃さなかつた。アンネローゼは現在形で
はなく、未来形を使つたのだ。密かに思つ
た。

(流石にアンネローゼも、弟も予に感謝し
て「いる」と言えなかつたと見える。しか
し、将来的にもせよ、あの弟が予に感謝す
る口など来るのだから?)

アンネローゼの気持ちに偽りは無いであ
る。だが、あの弟の方は自分への憎しみを
糧に生きているよつに思えてならなかつた
まだ、自分の心を偽る術を知らない子供
だからなのか?年月を経れば、他の者と同
様、あの蒼灰色の瞳に媚びを湛えて平身
低頭し、恭順の意を示すよつになるのだろ
うか?だが、それでは面白くない。フリー
ドリヒ四世の中には、密かに滅亡への憧憬
があった。
(予のよつに無能な者が玉座に就くよつで
は、ゴールデンバウム王朝も終いだ。それ
は決して悪いことではない。不死の人間がい
ないよつに、永遠の政権もない。どんな大

樹もやがては枯れる。そしてその後には新し
い樹が育つ。だが、せめて倒れるならば、皆
の記憶に残るよつな、そんな鮮やかな倒れ
方をしたいものだ。立つたまま朽ち果てて
白蟻に食われ、腐食し、気が付いたら無く
なつていた。そんな終わり方だけはしたく
ない。例えば雷に打たれて、例えば嵐に吹
かれて、そんな鮮やかな幕引きをしたいも
のだ。)

あの少年は、もしかしたら王朝にとつての
雷や嵐ではないか?フリードリヒ四世には
そんな予感があった。勿論、今はまだ、小
さな気流の渦でしかない。だが、あのまま
育てば、帝国全土を覆う雷雲になるのでは
ないか?黄金樹、ゴールデンバウムを倒
し、旧弊に害された大地を洗い流す大洪
水を起こすのではないか?

「感謝などはよい。ただ、自分を見失わず、
自らの求めるところをなしつる人間になつ
てくれればな。今の世の中、それが存外難
しい。」
フリードリヒ四世は、しわがれた笑いと
共に、乾いた手を若い寵姫の瑞々しい手に
重ねた。

この後も、後宮、或いは宮廷社会に於け
る勢力図は、圧倒的にシュザンナが優位で
あった。また、フリードリヒ四世の心に占め
る女性達のそれは、シュザンナとアンネロー
ゼの二名に塗り分けられたまま膠着状態
が続く。時折、他の女性の姿がフリードリ
ヒ四世の視界を掠めることもあつたが、そ
れは本当に一時のことであつた。先に名前
を出したエミリエ・フォン・ザューモその一
人である。

エミリエもまた、アンネローゼと同じく帝
國騎士の出身の娘であつた。彼女がアンネ
ローゼと違つていたのは、結局彼女は死ぬま
まで、自分の後宮入りを受け入れられなかつ
たといふことであつたかも知れない。後宮
に納められる前、彼女には許嫁がいたので

ある。
宮内省の官吏がエミリエを見出した時、エ
ミリエは一八歳であつた。しかし、線の細い
容姿は、彼女を年齢以上に幼く見せてお
り、十分、皇帝の好みの範疇に入るものと
判定された。

エミリエは後宮入りに難色を示し、また
エミリエに後宮入りの話があること知つた許
嫁の青年は、彼女を連れて同盟領に亡命
することを思い立つた。しかし、結局これは
未遂に終わる。行動に移す前に、彼は憲
兵隊に連行されたからである。それまでに
も、極稀にはあつたが、後宮に納められ
ることが内定した女性の恋人や親が、女
性を連れて亡命をはかるといふ事例があつ
た為、特に恋人がいたといふ情報があつた
女性の場合、その身辺調査は極めて苛烈
なものがあつた。亡命の計画がなくとも、
万が一を恐れて、相手の男性を拘束し、暴
行を加えるなどして、女性への未練を断ち
きらせることなど珍しくもなかつた。それ
が、実際に捕らえて調べてみると埃が出た
のだから、その青年がどの様な目にあつた
かは言つてもないだろう。

結局、エミリエは、青年の釈放を条件に、
後宮に納められることを承諾した。
生命の創造を司る神は、余程の無能者か
或いは皮肉屋なのか?エミリエはただ一度
の寵で身籠もつた。だが、それすらも、彼
女には婚約者に対する裏切りに思われた
のである。懐妊を知らされて泣き伏した
といふ。

己とお腹の子の死を願つ日々。その末
に彼女は望んだものを手に入れることを
許される。彼女は胎児を死産し、また自
らもその短い生涯を閉じるよつになつたの
だから。

エミリエは、結局爵位を授与されることは
なかつた。アンネローゼの伯爵位授与の際の
シュザンナの怒りが、宮内省や典礼省の官
吏達の記憶に新しかつたせいかも知れない。

勿論、お腹の子が無事に誕生すれば、皇子又は皇女の生母に相応しい身分を与えねばという意見はあったのだが、子が亡くなった以上、それも無用の議論であった。エミリエの遺体が生家の墓地に埋葬された後、彼女の新しい墓標に取りすがって泣いていた隻眼の青年がいたことを知る者は殆どいない。そのような涙なく、歴史という名の大河には、跡形もなく呑み込まれ消えていくのである。

一四・陽は翳りぬ

シュザンナとアンネローゼ、そしてフリードリヒ四世の三角関係に、大きな変化が見られたのは帝国暦四十九年に入ってからである。この年の春、シュザンナは四度目の懐妊を果たしたのであった。

今回も、悪阻は決して軽いとは言えなかったが、
「悪阻が重いのは、皇子様だからですよ。」
という周囲の言葉が、第一子懐妊の時のことと重なって、彼女にはむしろ喜ばしかったくらいであった。

ただ、心に掛かるのは、自分の体調が悪いために、フリードリヒ四世の爪先の向かう先が、どうしてもグリューネホルト邸になることであった。この時はやはり、シュザンナも、より強力な寵姫候補の登場を願ったものである。その娘は、もしかしたら、あの「女」を追い落とした後、シュザンナに向かって牙を剥くかも知れなかったが、お腹の子さえ無事に生まれれば、シュザンナの地位は安泰だという自信のようなものがあった。

しかし、その安泰も、子供が無事に誕生しての話である。「これまで経験から、シュ

ザンナは細心の注意を払い、安定期までの数日月を私邸の中で過ごす事に決めた。シュザンナ自身にも、何らかの予感があったのかも知れない。この子を喪ったら、皇帝の気持ちも完全に自分から離れていくのではないかという……。

シュザンナの館は、異様なまでの緊張感に包まれて日を過ごした。使用人達は、シュザンナの唾毛一本の動きさえも見逃すまいと神経を張りつめていた。自分の思い通りに物事が進まない場合、シュザンナは全てが崩れさるような気分に見舞われ、「絶望」の権化のようになり、それは使用人達の上に跳ね返るようになっていたからである。

コートの入れ方が悪いと、カップを投げつけられた侍女もいた。髪のかし方が乱暴だと、いきなり平手打ちをされた者もいた。執事のヘンドリクスも、度々、ほんの些細なことから厳しく叱責された。

「無事に出産なされれば、少しはお気持ちも落ち着かれるのかしら？」

侍女達の間で、そんな呟きが漏れたが、朋輩のその言葉に、希望的返事を返せる者は、ヨハンナくらいのものであった。ヨハンナは知っていたのである。シュザンナが使用人達に当たった後で、自己嫌悪に陥っては泣いていることを。

「ヨハンナ、助けて。私はあなたと子どもをつりじゃなかったのに、どうにも止められないの。悪いことをしてしまっただけ。ああ、でもこんなことを考えるのもいけないのよね。こんなことを考えていると、また、この子を奪われる。陛下のことだけを考えていなければならぬのに、でも、さっきのことが思い出されてならないの。どうしたらいいのかしら？」ヨハンナ、助けて。

「大丈夫ですよ、さいますよ、シュザンナ様。今は御懐妊中ということもあって、気が昂ぶっておりますのです。皆その事を判っておりますから……。」

その姿は、確かに決して見よいものではなかった。だが、皇帝陛下だけを頼りに生きておられるシュザンナお嬢様にとって、自分への見舞いがグリューネホルト伯爵夫人の館を訪れたついでに扱われたという事は、どれほどの衝撃であったことか……。それなのに皇帝陛下は、シュザンナ様の荒れ狂うお姿に恐れをなして逃げ帰ってしまったわけでも、

「予が行くと、また今回のようなことがあるかも知れぬ。胎児のためにもよくあるまいし、暫く、ベーネミュンデ邸を訪れるのは見合わせることにしようと思う。」などと、近侍の者を通して伝えていらした。そして、予ではないのに、陛下がお側にいて下さることが、シュザンナ様の何よりの願いなのに。陛下のお気持ちがお腹の上にあると信じられれば、シュザンナ様は、きつと心の平安を取り戻せる筈なのに。

ヨハンナは、鎮静剤を与えられ、涙の後を頬に残したまま眠るシュザンナを痛ましそうに眺めた。

その日、フリードリヒ四世がアンネローゼの館を訪ねた翌朝、東宛に行く途中でシュザンナの見舞いに立ち寄ったのが良くなかった。と後から振り返ってヨハンナは思わざるを得なかった。皇帝陛下は少々、無神経だったのだ、と。

本来、フリードリヒ四世の来館は喜ばしいもの筈であったのに、どう考えても世で言うところの朝帰り、しかも、自分が一番行って欲しくないところからやって来た、となれば、シュザンナお嬢様も嫌な気分なのかも知れないが、お嬢様が平静を保てなかったのも無理はない、と思つのである。せめて、一旦東宛なり、南宛なりに戻ってから、出直しておられれば、シュザンナお嬢様があれ程に激昂することもなかったであろうに、と。

陛下、どうか私に、あの女に触れた手で触らないで下さいませ。ああ、考えただけでも汚らわしい。」
泣いて喚いて、周りの者に当たり散らす

その姿は、確かに決して見よいものではなかった。だが、皇帝陛下だけを頼りに生きておられるシュザンナお嬢様にとって、自分への見舞いがグリューネホルト伯爵夫人の館を訪れたついでに扱われたという事は、どれほどの衝撃であったことか……。それなのに皇帝陛下は、シュザンナ様の荒れ狂うお姿に恐れをなして逃げ帰ってしまったわけでも、

「予が行くと、また今回のようなことがあるかも知れぬ。胎児のためにもよくあるまいし、暫く、ベーネミュンデ邸を訪れるのは見合わせることにしようと思う。」などと、近侍の者を通して伝えていらした。そして、予ではないのに、陛下がお側にいて下さることが、シュザンナ様の何よりの願いなのに。陛下のお気持ちがお腹の上にあると信じられれば、シュザンナ様は、きつと心の平安を取り戻せる筈なのに。

ヨハンナは、鎮静剤を与えられ、涙の後を頬に残したまま眠るシュザンナを痛ましそうに眺めた。

結局、シュザンナが我が子をその胸に抱くことは、今回も叶わなかった。「胞状奇胎」……それがシュザンナに伝えられた胎児の状態であった。

「これまでよりも早く、急にお腹が膨らんできた……それはシュザンナにとって、胎児が無事に成長している証と思われていたのであるが、実はそうではなかった。それが判った時、胎児は胎盤を形成する絨毛細胞に呑み込まれ、既に存在していなかったのである。シュザンナの子宮を満たしていたのは異常に増殖した絨毛だった。ガンではないが、極めてガンに近い細胞と言っても良い。超音波診断によって、それが判明した時、シュザンナは宮廷医達を睨み付けて叫んだ。

「また妾から、お腹の子を奪うのか?!」
と。答えは

「ヤー。」
であった。

「お気の毒ではございますが、既に御子は助かりません。そればかりが、絨毛細胞をきちんと取り除いておきませんと、これが肺や脳など体内各所に取り付き、増殖いたします。絨毛ガンに変化したこととございませぬ。処置を誤らねば恐れることとございませぬが、甘く見ますこととんでもないことになりかねませぬ。この上は、一刻も早く処置をお受け下さいますよう……。」

慇懃ではあるが機械的な侍医長の言葉に、シユザンナはグレーザーの姿を捜した。しかし、彼もまた、侍医長と同じ意見なのか、シユザンナと眼があつても黙つて俯いてしまふ。誰ぞ、シユザンナと胎児を守つてくれる者はいなかつた。

「もつと早くに気が付いておつたならば、お腹の子を助けることが出来たのではないのか？」

シユザンナは宮廷医達の責任を問つたがそれに対する返事は、ただ沈痛な表情のまま首を横に振る姿ばかりであつた。胞状奇胎には、肉眼的に全ての絨毛が囊胞化している全胞状奇胎と、一部の絨毛が囊胞化している部分胞状奇胎があるが、どちらも染色体の異常によるものである。全胞状奇胎は、遺伝学的に雄核発生により全ての染色体が父親由来であり、部分胞状奇胎の多くは、二倍体 トリソミー、中でも「種子受精によるものが多い。つまり胞状奇胎は、おそらくは受精した瞬間に決まつていた運命であり、医師達の力では如何ともし難いことであつた。

「掻爬……いくら既に胎児が死んでいると聞かされていても、それは母親にとって「子」を喪つ」といふ決定的な最後通告である。決して、心穏やかに迎えられるものではない。自然流産した場合以上に、わが子の死に責任を感じやすい。もしかしたら、まだ

生きていたのではないのか、もしかしたらまだ助けることが出来たのではないのか、どうしても、そついつと気持ちが湧いて出る子供の死に自分も荷担した、子供を守つてやれなかつたという悔恨の情に苛まれることも多い。実際、それが精神的外傷、トラウマとなつて、後々の人生にまで影を落とすこともあるらしい。

シユザンナにどうしても、それは同様であつた皇帝に仕えるからといって、世の女性との間に、それ程心理的差異があるわけではない。しかも、今回、シユザンナは随胎の時だけではなく、胎盤の完全な掻爬を目的に、もう一度同じ処置を受けねばならなかつた。それはシユザンナにとっては、悪夢をもう一度見る思いであつたことだろう。更に一ヶ月後、過酷な宣告がなされた。

「下絨毛性「ナド」トロン(HCG)の値が下がりませぬ。子宮筋層にまで胞状奇胎が侵襲しているが、既に絨毛ガンになつてい

ることも考えられます。」
「もつ、妾には子が産めぬと申すのか？」
思いも掛けない事態の展開に呆然としたシユザンナであつたが、最も気になることを医師に確認することは忘れなかつた。子が産めなくなつた自分に、果たして皇帝が価値を見いだしてくれるのか、それはシユザンナにとつて避けては通れない問題であつた。

「子宮の全摘という外科的治療も考えられますが、私共と致しましては、侯爵夫人のお歳やお立場を考えまして、薬物に依ります治療をと考えておりますが、如何でしょうか？」
「薬物治療を行えば、また陛下の御子を産むことは可能なのじやな？」
尚も尋ねるシユザンナに、医師は説明を続けた。

「はい。再び御懐妊可能なお身体に戻られることは、保証いたします。現実に、この病を得た女性が、数年後、元氣な子供を授

かつた例は幾つもございますので、その点は御心配には及びませぬ。ただ、「ナド」トロン濃度が下がりますが、再発ということもございませぬので、暫くは御懐妊は控えていただくこととなります。御懐妊はこの病を増悪させますので……。」

シユザンナは天井を仰ぎ見た。その「暫く」がシユザンナには問題であつた。ガン化していなければ、数カ月で良いと医師は言うが、もしガン化していたら年単位での経過観察が必要になる。シユザンナにとっては数日であつても、皇帝が他の女性の許を訪れるのは堪えられないことであつた。もしかしたら、その数日の間に、相手の女が身籠もつて、自分を追い落とすかも知れないのだから。

自分が皇帝陛下の御子を身籠もれぬ間に、他の女達が皇帝陛下の御子を生んだら……それはシユザンナにとって考えるだけで恐ろしいことだつた。そして、今、皇帝の子を身籠もるとしたら、シユザンナの脳裏に真っ先に浮かぶのは、あの女、だつたのである。

更に、シユザンナにはもつと恐れるものがあつた。それは彼女自身の年齢である。シユザンナは間もなく二四歳になつてしまつたが、彼女が後宮に納められてからといつても、新たに皇帝の寵を賜つたのは殆どが一〇代の少女ばかりである。現に、この時皇帝を取り巻く女性の中に、二〇代の女性は彼女しかいなかった。そして、省内省の官吏達が皇帝に差し出す少女達はほとんど低年齢化しているようであつた。もし、官吏達が皇帝や自分達の風評を気にせず、また、後宮の女性の役割を、ただ皇帝の快楽に奉仕することのみに限定したならば、まだ初潮すら迎えていない少女が、皇帝の寝所に送り込まれる可能性さえあつたのである。

かつて、フリードリヒ四世の嗜好が豊満で成熟した女性であつた頃は、三〇代の寵姫

も存在したといつたが、今の後宮にあつては「成熟する」とは、田熟する」ととはなり得ず、「朽ちる」と同義であつた。シユザンナにとつて、「刻」の流れは「あ」の女、以上破壊らしい、敵、だつたのである。

第四子を喪つて私邸に戻つたシユザンナは使用人達にとつて、以前にもまして扱いにくい存在となつていた。またしも、懐妊中の方が将来への希望があつただけ、まじだつたと言える。

彼女はすつと待つていた。フリードリヒ四世が訪れるのを。しかし、今回、皇帝は見舞いに訪れようとしなかつた。これまでならば、彼女が病院にいる間から、自分で育てた薔薇の花を携えて、必ずシユザンナの許に見舞いに訪れたものであつたのに。

フリードリヒ四世の側から見れば、四度目の懐妊も不幸な結末を迎えたシユザンナを見るに忍びないといふ思いもあつたであろう。アンネローゼの館からシユザンナの屋敷へ回つたと知つて荒れ狂つたシユザンナの記憶も新しい。今少し、シユザンナの気持ち落ち着いてからと、無意識のうちに彼女との対峙を避けていたと言つてよいだろう。

だが、シユザンナの眼から見れば、事態は全く異なつた様相を呈す。これまでと異なるフリードリヒ四世の振る舞いは、全て「あの女」の差し金と映つた。

「皇帝陛下が妾を気に掛けて下さらぬ筈がない。あの女が、妾の許に陛下が足を運ばれるのを、邪魔してあるのに違ひない。下賤な者は、人の情けの何たるかも知らぬと見える。」

「あの女」に対してシユザンナが怒りを募らせている、そんな時、彼女の心を逆撫でするような出来事が起つた。

「あの女、アンネローゼ、フォン・ゲリューネワルトにしてみれば、それは決して悪意

からではなかった。彼女は後宮に納められる前、周囲に何人が出産した女性を見ていた。その中には、いわゆる「産後の肥立ちが良くない」状態に陥った者もいた。

市井の人々の中には、十分医師に診てもらったものの出来ない者も存在する。しかしだからと言って、彼らが何もせず手をこまねいていた訳ではない。少しでも症状が良くなるようにと、彼らなりの智慧を使っていたのである。アンネローゼは近所の年配の主婦から、産褥に付いている女性の身体にいいとされる料理を教えられ、床に就いている女性の許に運んだこともあった。

フリードリヒ四世からシユザンナの状態を聞いたアンネローゼは、そのうちの幾品かを自ら作り、シユザンナの許に届けさせた。彼女にしてみれば、シユザンナの回復が早まるようにという、極自然な善意であったのだが、シユザンナには、それは取れなかった。

玄關の扉を開いたのが平民出身のヨハンナでなかったら、こぼつけられたアンネローゼの使用人は、来た道を、来た時と同じ姿で帰ることになったかも知れない。だが、ヨハンナは、自身も、アンネローゼが作ってよこした民間療法の料理を聞き知っており、いくらかの社交辞令的成分は加味されていたものの、感謝の言葉をその料理と交換したのであった。

その日の夕餉のテーブルに並べられた皿に、シユザンナは不思議そうな表情を湛えていた。

「目慣れぬ料理だ。この、黒いほい色をしたポターシユのようなものは何じゃ？」
給仕係の娘は質問に答えられず、シユザンナの表情が興味から不審へと変化し、一瞬、食堂に緊張が走ったが、横からヨハンナが救いの手を差し伸べた。

「シユザンナ様、それは、黒い胡桃のお粥でございます。」「胡桃は、ごちんも、血行を良くし、生理不順など、女性のホルモ

ン・バランスの乱れを整える作用がございます。色は、今ひとつ悪くございますが、味は決して悪くはございません。どうか安心してお召し上がり下さいませ。」

ヨハンナの言葉に、シユザンナは秋眉を開き、一同は、女主人の機嫌を損ねずに済みそうであると、安堵の溜息をそっと洩らした。

「そうか、ホルモンのバランスをの、ではこのスープは、これも何か意味があるのか？」
「はい、それはほうれん草と鶏のレバー、クコの肉のスープでございます。ほうれん草とレバーは貧血に、クコの実は滋養強壯の作用がございますので、体力の回復に効果がございませぬ。そちらの、鯉の唐揚げを甘酸っぱく仕上げましたものも、病後などで体力の落ちていらっしゃる方には、良いと聞きます。」

「ほう、川魚といえば、鱸、すずき、か鱈、ます、しか食したことがなかったが、なかなか美味しそうではないか。」
「お気に召したならば、よろしゅうございませぬ。デザートには、ルバーブとバナナがフランが用意してございます。ローズヒップとラズベリー・リーフのお茶と一緒に召し上がり下さいませ。どちらも、女性の体調を整え、お肌にもよろしいのでございませぬ。」

シユザンナはヨハンナに満足の微笑みを与えた。
「ヨハンナ、そなたはいつも妾のことを気に掛けてくれる。妾にとって掛け替えのない人間じゃ。ありがたく頂くとしようぞ。」
「そなたは平和であった。しかし、ヘンドリクスの一言で、全てが変わった。」

「シユザンナ様、恐れながらその料理は、あのグリーニューエルト伯爵夫人が作られたものでございます。先ほど、伯爵夫人の館の者が、ヨハンナに渡しておられます。この眼ではっきりと見ております。後宮で皇帝陛下の寵を競う相手に、毒物を送るといふことは、昔からよくあることにごさいませぬ。」

すれば、ご注意なさるに越したことはございませぬ。後宮で信じられますのは、御自分の館の使用人だけでございます。ヨハンナはその点、少々、人が良すぎるようでございます。それとも、何か、他に思うところがあったのか……。」

ヘンドリクスが、横からその出処をシユザンナの耳に入れた瞬間、食堂に竜巻が発生した。ヘンドリクスは、シユミット老女が去つて以来、シユザンナの信頼や好意を背景に自身の人当たりの良さも手伝って、平民出身の身でありながら侍女達をとりまこめ、実質上の女中頭となっているヨハンナに、シユミット老女の時に感じたと同じような警戒感と、より強い反感を覚えていた。

確かに、「後宮」では彼の意見が正論である。周囲は皆敵、と考えるのが妥当であった。親切だの好意だのといったものはまやかしたと言つのが、長年の間に定着した「後宮の常識」であった。それは、何も後宮だけのことでない。宮廷社会、貴族社会そのものが、権力を巡る、打算と策謀の舞台であり、良き友人と信じていたものが、実は最も悪意ある敵だったといつことは、いくらかでもあることであった。果たして彼が、本

当にアンネローゼの行為に悪意を感じていたかどうかは別として、女主人が憎んでいる競争相手とヨハンナとの親密さをことごとくに印象づけることによつて、シユザンナの心の中に於けるヨハンナの地位を下落させることが出来ると計算したことは確かであった。競争は、館の外でだけ行われている訳ではない。シユザンナの館の中でも、行われていたのである。

シユザンナの顔から笑みが消え、これまで決してヨハンナには向けられたことのない表情がそれに替わった。
「下賤な者が口にするものを、この妾にも食せと？あの女が作ったものを、妾に食せよと申すのか？あの女が作ったものなど、何が入っているか、判ったものではない……」

「シユザンナは妾を殺すつもりか？」
「妾はテーブルの上の食器類を巻き上げ、その上の料理と共に辺りに飛び散った。」
「結局、平民出の者は、平民出の者でしかないといつことが……。妾はそなたのことを信じておつたのに……。妾の信頼を良いことに、ヨハンナはあの女を通じておつたのか？」
「一旦芽生えた不信は、まるで天に向かつて伸びる豆の木のように、急速にシユザンナの心の裡で成長した。」
「……まさか、まさかヨハンナ、妾がこのような病に取り付かれたのは、そなたが妾に何か盛った為ではあるまいな？」
「何を仰るのです、シユザンナ様、どうしてそのようなことを私が致ししょう？幼い頃からシユザンナ様にお仕えして参りましたこの私が、何故、シユザンナ様を害するようなことを……。万が一を思い慮って、これらの料理は毒味をしてございます。」
「信じられるものか！調べても、痕跡のない新しい毒物を使っておるかかも知れぬではないか？それに、あの女の息の掛かった者がいくら調べたと言つても、当てにはならぬ……！」

「まさか、まさかヨハンナ、妾がこのような病に取り付かれたのは、そなたが妾に何か盛った為ではあるまいな？」
「何を仰るのです、シユザンナ様、どうしてそのようなことを私が致ししょう？幼い頃からシユザンナ様にお仕えして参りましたこの私が、何故、シユザンナ様を害するようなことを……。万が一を思い慮って、これらの料理は毒味をしてございます。」
「信じられるものか！調べても、痕跡のない新しい毒物を使っておるかかも知れぬではないか？それに、あの女の息の掛かった者がいくら調べたと言つても、当てにはならぬ……！」
「まさか、まさかヨハンナ、妾がこのような病に取り付かれたのは、そなたが妾に何か盛った為ではあるまいな？」
「何を仰るのです、シユザンナ様、どうしてそのようなことを私が致ししょう？幼い頃からシユザンナ様にお仕えして参りましたこの私が、何故、シユザンナ様を害するようなことを……。万が一を思い慮って、これらの料理は毒味をしてございます。」
「信じられるものか！調べても、痕跡のない新しい毒物を使っておるかかも知れぬではないか？それに、あの女の息の掛かった者がいくら調べたと言つても、当てにはならぬ……！」
「まさか、まさかヨハンナ、妾がこのような病に取り付かれたのは、そなたが妾に何か盛った為ではあるまいな？」
「何を仰るのです、シユザンナ様、どうしてそのようなことを私が致ししょう？幼い頃からシユザンナ様にお仕えして参りましたこの私が、何故、シユザンナ様を害するようなことを……。万が一を思い慮って、これらの料理は毒味をしてございます。」
「信じられるものか！調べても、痕跡のない新しい毒物を使っておるかかも知れぬではないか？それに、あの女の息の掛かった者がいくら調べたと言つても、当てにはならぬ……！」

ることになる。それでも、政治体制が変わるまでの数年間、ヨハンナは家族の重荷となつて、家の外に出ることもなく過ごした。彼女が周囲から受け入れられるには、ゴールデンバウム王朝という枷が人々から外れる必要があったのである。

後年、シュザンナ・フォン・ベーネミュンデを子供時代から知る者として、彼女の許に話を聞きに訪れた者がいる。その時、彼女は既に九〇歳近くになっており、甥やその子供達の世話になっていた。

「突然の解雇、それも懲戒処分ということでお辛い人生だったことでしょう。さぞベーネミュンデ侯爵夫人のことを恨んでおられるでしょうね。」

訪問者の質問に対し、彼女は決してシュザンナを非難するような言葉を発しなかった。

「あれ程目下の者にお優しいお嬢様は、他にいらつしやいませんかでしたよ。ただただ、皇帝陛下のお気持ちだけを支えに生きておいででした……。」

ヨハンナがついて、シュザンナはいつまでもベーネミュンデ子爵邸にいた頃の少女のままであった。

ヨハンナが去った数日後の中で、シュザンナは怒りと、一抹の寂しさの中にいた。自分では、それと自覚していなかったかも知れないが、シュザンナは彼女の一番の理解者を、その身辺から喪ったのである。

一人で私室に閉じこもるようになって過す彼女の姿、ある思いが明確な形となつて、その姿を現そうとしていた。

煙のような微笑の下に、「あの女」は魔法の素顔を隠している。一体、宮内省の役人どもは何を見ているのか？ 男達が、皆あの仮面に騙されるというのであれば、皇帝陛下の御為にも、自分があの魔法を宮廷から葬るしかない……シュザンナの中に、アンネローゼに対するはつきりとした害意が芽

生えたのである。

幸いにして、シュザンナの胞妹奇胎は、ガン化してはいなかった。化学療法によってヒト絨毛性ゴナドトロピン（HCG）の濃度は下がり、その後の経過観察でも再び数値が上昇することはなかった。体力的にも、半年ほどで、医師団から懐妊の許可が出された。

しかしシュザンナは、宮廷内での自分の勢力はまだ衰えぬものの、皇帝の心の中の地図は大きく書き替えられていることに気が付かずにはいらなかった。本来自分がいる筈の場所に、いつも「あの女」が立っているのを見ない訳には行かなかったからである。果たしてシュザンナが健康に何の支障もなかったら、そのような状況が招聘されることなく、時間が流れたかどうか、それは不明である。しかし、シュザンナにとってはそうではない。何事も無いのに、出自で勝る自分が、「あの女」に負けるはずがないのである。それに、その原因を作ったのも、ヨハンナを抱き込んだ「あの女」のせいのようにシュザンナには思われた。

「泥棒猫奴が！ 許さぬ、必ずや、自分がしたことに相応しい報いを受けさせてやる……。」

信賴篤かったヨハンナですから、シュザンナの逆鱗に触れて追放された。いつ自分達にシュザンナの怒りが向けられるか判らない……そんな不安に怯える使用人達が、恐る恐る遠巻きに見守る中で、シュザンナは「あの女」に突き立てる爪を研いでいた。

一五・皇孫誕生

帝国暦四七九年は、ゴールデンバウム王

朝の後宮に限ってみれば、皇帝の第一の寵姫の榮が、シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人から、アンネローゼ・フォン・グリューネワルト伯爵夫人に移った年として人々の記憶の中に埋もれる。ただそれだけの年であつたかも知れない。しかし、銀河全体を視野に入れると、この年は、おそらくは人類の歴史が続く限り、その名を忘れ去られることのないであろう人物の一人が、表舞台に初めてその姿を現した年でもあつた。

ゴールデンバウム王朝が叛徒と呼ぶ処の自由惑星同盟がエル・ファシル星系に持つていた拠点を、この年、帝国軍は手中に収めることに成功した。同盟側の司令官を捕縛するといつおまけまでも付けてである。本来であれば、この作戦は大成功と満足されて良い筈であつたのだが、一般国民に対する発表とは裏腹に、軍部の中枢は、実に苦い空気に占領されていた。それは、惑星上に取り残されていた筈の三〇〇万人の民間人が、帝国軍の監視の眼をくぐり抜けて、後方星域へと脱出してしまったからである。

彼らはレーダー透過装置すら付いていない船で、ただ、太陽風だけを動力として、帝国軍の索敵レーダーに堂々とその姿を映しながら、悠々と脱出してしまったのである。この計画の立案、遂行の責任者は、その前年に士官学校を卒業したばかりの中尉であつた。中尉の名はヤン・ウエンリー……後に、「魔術師」「奇跡」「ミラクル」という修辭をその名前に冠して呼ばれることになる、自由惑星同盟最後の元帥である。

為政者は、気まずさを感じるとき、それを隠蔽するために、それより民衆の興味を引く話題を提供したがるものである。その話題が明るいものであればなおのこと望ましい。帝国の幹部がそれを意識していたかどうかは判らないが、エル・ファシルから派

遣軍が帰還すると時を同じくして発表された、皇太子ルードウィッヒの婚約は、軍の失態を民衆に忘れさせるに十分な効果を有していた。

皇太子の婚約者シュテファニーの生家ツヴァイク家は、祖父の代に帝国騎士から男爵の称号を得たばかりの宮廷貴族としては新しい家柄で、貴族とはいえ権門の一員ではなかった。その為、彼女は、それまで数年間に渡って皇太子との仲を取り沙汰されながら、正式な交際相手として認められてこなかった。一説には、宮内省がこの令嬢との婚約をはかる度、大貴族達、特に妙齡の令嬢を持つ者や皇帝の女嬪一名から、家柄が皇妃に相応しくないと反対の声が上がった為という。シュテファニーは、自分は日陰の身で終わるものと覚悟を決めていたらしい。いくら皇太子と言えども、権門からの支持がなくては、至尊の座へ至る道もまたその玉座も、共にイバラに覆われたものになるといつことを、彼女は歴史から学んでいたのである。その良い例が、暗黒帝マクシミリアン・ヨーゼフ二世であつた。

ゴールデンバウム王朝屈指の名君として名を残している彼もまた、母親は権門の出身ではなかったが、当初、後継者争いから遠く離れたところにいた。病弱な長兄、共和主義者達に歴史的大敗を喫し離宮に軟禁された次弟、そして、権力抗争の中で破滅した末弟……偶然が絡み合い、歴史は彼の頭上至尊の冠を輝かせることになったが、それでも尚、強力な後盾を持たぬ彼の皇位継承に異を唱えるものは多かつた。夫の身の危険を察知した侍女上がりの皇妃シークムンデは、自ら拳銃を持って夫の警護に尽くしたが、結局、マクシミリアン・ヨーゼフ二世は、毒物によって殆ど失明状態となった。

権門の後ろ盾のない自分との結婚が、皇太子にとって危険なことであるとの認識の許、半ば人生を諦めていたシュテファニーを

陽の当たる場所へと導いたのは、フリードリヒ四世の言葉であった。

「ルードヴィヒはどうかやら本気のよつた。

ここまであの娘のことが気に入っておるのあれば、妃として迎えても良いのではないかな？折角、そなた達が皇妃候補をあげてみて、本人にその気がないのでは何にもならぬ。このままでは、いつまで経っても、皇太子は独身のままであろう。」

勿論、使い古された反論の言葉が玉座に向かつて飛んだのだが、フリードリヒ四世はそれらに一切注意を向けることなく言い放った。

「予でさえも皇帝に収まっておるのじゃ。誰が皇太子妃になっても、皇妃になっても構わぬではないか。」

「ここまで言われては、誰も反対は出来なかつた。既に皇帝の裁可は下つたのである。勿論、玉座から遠く離れた場所、フリードリヒ四世を非難する声は上がった。曰く、

「帝王学を学んでおられぬ方は、結局皇帝の器ではない。」

「皇妃殿下が生きておれば、あのよつた家柄の娘が皇太子妃になることなど、決してお許しになられなかつたであらうに……。」

といった類のものである。しかし、フリードリヒ四世は、それが耳に届かなかつたのか、それとも無視したのか、全く意見を交えずようとはしなかつた。

一部の大貴族達とは逆に、一般民衆の皇太子婚約に対する受け止め方は、極めて好意的であった。彼らは、権門出ではない女性を伴侶として選んだ皇太子に対して、親近感を感じたのである。皇太子妃決定は、街角で、農村で、辺境の砦屋で、歡喜の声を以て迎えられた。

異様なまでの昂揚感が帝国全土を覆つた。宮廷の内外で、公に、また私的に、数多くの祝賀パーティーが催された。そんなパー

ティーの一つで、ある一組の男女が出会つたことが、シユザンナとがって関わりのある人物の生涯を決めることになる。

出会つた一組の男女は、どちらも伯爵家の子女であった。フォルクン伯爵の四男カール・マチアス・フォン・フォルゲンと、ハルテンベルク伯爵の妹、エリザベートである。

カール・マチアスは、それまで、社会たの人生活だのというものを真面目に考えたことのない人物で、貴族の子弟のみが通つた大学を七年掛けて卒業した後、父親の後押しで軍務省に官僚として入省した。しかし、その勤務態度は、決して模範的とは言えないものであつた。もし、軍務省の管轄が、乗馬と撞球、ビリヤード、ダンスであつたならば、彼にもエリートとして栄達の道があつたのかも知れないが……。

ただ、社会人としての評価とは別に、女性の間での彼の評判は悪くなかつた。それは風采の良さと巧みな話術、女性に対する優しい立ち居振る舞いに拠るところが大きかつたようである。しかし、誰か特定の女性と関係が続けるといふことは、エリザベートと出会うまで皆無であつた。それはカール・マチアスにとつて、女性を自分を守る為毎日常替る服の一部のよつなものであつたといふことがも知れない。また女性の方でも、はつきり言つて生活力のない彼に、自分の人生を預けようといふ気持ちにならなかつたからである。

エリザベートの方は言えば、カール・マチアスとは反対に、二〇代に入つても、それまで浮いた噂一つない、どちらかと言えば「お固い」女性であつた。それは年齢の離れた兄、ハルテンベルク伯爵の影響であつたのかも知れない。彼女の兄は、「警察官僚がたまたま貴族の服を着て歩いている」と評されるほどの堅物で、将来の内務尚書候補と目されていた。彼は、自分同様、妹にも規律ある生活を要求し、エリザベートはそれに応えていたのである。

彼女の頭の中の辞書に、「恋愛」は存在せず、あるのは「恋愛」だけであつたから、カール・マチアスがパーティーで彼女に声を掛け、ダンスの間耳許で彼女を賛美する言葉を紡ぐのを、エリザベートは彼の本心であると信じ切つてしまつた。カール・マチアスのことをよく知る女性であつたならば、彼が別れ際に言う

「じゃあ、今度のパーティーでね。」
という言葉が、
「さよなら。」
であるといふことを知つていたのであろうが、彼女はそうは取らなかつた。エリザベートはカール・マチアスの姿を、パーティー会場で追い求めるようになったのである。

「参つちやつたよ。」
数週間後、カール・マチアス・フォン・フォル

ゲンは、軍務省で隣の席に座つて二歳年下で、尚且つ職場の先輩でもある友人に声を掛けた。言葉とは裏腹に、その表情は困惑や苦悩といったものとは無縁である。むしろ、どこか自慢気さえある。

「どつしたんだい、カール？参つちやつたと言いなから、結構嬉しそつぢやないか。」
「どつちもどつちもないさ。最近知り合つたばかりの女に、昨日もしつこく纏いつかれてさ。お陰で、眼を付けていた他の御婦人、他の男に取られちまつた。」
「そんなに嫌ならば、はつきり言つてやればいいじゃないか？俺に近寄るな、って。」
「そんなこと言えるわけがないだろう、ベネディクト。御婦人に優しいという、唯一好意的な俺の評判を落とす気か？」

隣の席の若者は、書類から眼を離すと、椅子の向きを変えて、カール・マチアスの顔を見つめた。
「本気じゃないのなら、あまり気を持たせろのはかえつて罪だぜ。」
「ふん、お前に言われたくはないね。お前だつて、あつちつちで浮き名を流しているじやないか。その数から言つたら、俺より上だろつ。」
「僕は最初から遊んだつて言うてるからな。それでいつて女性としか付き合つてはいない。」
どこか投げやりな表情の友人を見やつて、今度はカール・マチアスの方が表情を曇らせた。
「全く、お前は変わつていよ。わざわざ評判を落とすようなことをして回るんだから、かつては模範的貴族青年だつたといふのにさ。何も俺を見習つて、放蕩に耽ることもあるまいに。」
「僕は君に、省内のことを教えた。君は僕にそれ以外のことを教えた。五分と五分持ちつ持たれつだ。」
若い軍官僚一人のやり取りに、上司から叱責の声が飛んだ。
「カール・マチアス・フォン・フォルゲン、ベネディクト・フォン・アーデナウアー、無駄口を止めて仕事をしろ！」
二人の青年貴族は、顔を見合わせ、首をすくめると、それぞれをデスクの上で待つてゐる書類に眼を移した。
（全く、穀潰しの放蕩息子どもが。）
上司は小さく舌打ちをした。二人は彼にとつて頭痛の種であり、出来ることならば軍務省から放り出したかつたのだが、どちらも伯爵家の子弟とあつては、帝国騎士の彼に、それ以上のこと出来なかつた。

年が明けて帝国暦四八〇年六月四日、皇太子ルードヴィヒとツヴァイク男爵令嬢シユテファニーは成婚の日を迎えた。新婚旅行に向かう為、新無憂宮、ノイエ・サンズーシーから宇田港までの道のりを、古式ゆかしく六頭立ての馬車に揺られてパレードする皇太子夫妻に向かつて、沿道からは歡呼の声と、紙吹雪が舞つた。
これは、おそらく、ゴールデンバウム王朝に於いて、帝国全体が歡びに沸き返つた最

後の日であつたに違いない。

しかし、このようににも例外というものは存在する。この場合、例外は、皇太子の極身近に存在した。二人の姉とその夫として彼の父親に仕える女性の一部である。

ブラウンシュバイク公、リッテンハイム侯爵夫妻にとつて、皇太子の成婚は、自分達の娘が皇位継承者になる為の大きな障害となつた。皇太子はあまり頑健な質ではない。皇帝になつてもその治世が長く続くとは限らない。彼らにとつて上手く行けば、ルードヴィヒが至尊の座に付くことなく、皇位継承者が交代することだと、あながち現実離れした話ではないのである。

しかし、皇太子が結婚し、その妃となつた女性が懐妊すれば、皇太子に何かあつても血統という点から言つてならば、皇太子の子供が次の皇太子に定められる可能性が極めて高い。もしその子が女児であれば、ブラウンシュバイク家、或いはリッテンハイム家の政治的力で、皇女をその椅子から追ひ出し、自分達の娘をその席に座らせることも、さほどの抵抗もなく受け入れられるかも知れないが、男子であつた場合には、強く反対する者も現れるに違ひなかつた。後宮の女性達にとつてもそれは同じである。皇太子に嫡子が生まれれば、自分達がたとえ男子を出産しても、その子が皇太子に立てられる可能性はかなり低くなるのであるから。

シュザンナは、皇太子の婚約が決まるとすぐに、皇太子の住まう館に結婚の祝いの品を届けはしたものの、複雑な想いに捕らわれていた。それは、成婚パレードが新無憂宮、ノイエ・サンズシーを出立するのを見送つた時、更に深くなつた。

皇太子妃は自分より低い出自の娘である。それなのに、あやうく臣民の歡呼の聲に迎えられ、陽の当たる場所を歩いていく。それに引き替え、自分はどつたさう？ 皇

帝陛下の寵姫と人は言つけれど、それはどこか、後ろ暗さが付き纏う。結局、公的に認められた存在ではないのだ。自分の立場には、法的な根拠も後盾もない。しかも、それすらも最近には、「あの女」のせいで揺らいでいる。何代も続いた子爵家の娘にも関わらず、私の方があの「皇太子妃」より、そして「あの女」より不遇だ。そんなことが許されて良いのだろうか？ 身分が上の者の方が、あらゆる面で優れており、大神オーディンの恩寵も篤い筈なのに、どうして自分にだけ、運命の女神達はそっぽを向くのだろうか？ 運命の女神達は私の方を向かないと言つたならば、向かせるまでだ。そして、必ずやこれまでの負債を返して貰わねば。何としても…。

負債といへば、「あの女」に対する負債はどうなつて居るのださう？ 私は、皇帝陛下の御為だけを考へる為、両親の葬儀にさえ出席せず、出来る限り「俗世」と隔絶した生活を送つてきた。この「あの女」は、あるう事が、皇帝陛下を放つたらかして、フロテンの山荘に弟を抱き、好き勝手なことをして過して来たといつた。しかも、弟の友人だとか言つて、平民の少年までも、神聖なる天領に入れたと！ 何故、そんな不敬な振る舞いを働く女が陛下の寵を受けるのか？ 運命の女神達の秤は狂つて居るとしか思えない。

シュザンナは頭痛を感じ額に手を当てた。そして、乱暴にサイドテーブルの上の呼び鈴を振つた。その音さへも、シュザンナには腹立たしかった。

その後も、まるで潮が引くかのよう、シュザンナ邸へのフリードリヒ四世の訪問は回数を減らしていった。帝国暦四八〇年の後半になると、全くといつて良いほど、その爪先がシュザンナの館を向くことはなかつた。そして、宮内省の官吏達が驚いたことに、新しく後宮に納められる少女達に興味を

示すこともなくなり、もつぱらグリューネワルト伯爵夫人がその寵を独占することになる。

これは、それまで、寵姫候補を捜すのに苦労していた宮内省の職員にとつてありがたい反面、新たな心配を提示した。グリューネワルト伯爵夫人に、一向に懐妊の兆しが見られないのである。皇帝の寵が彼女一人に集中している以上、皇帝の子を生んで貰いたいという彼女の願いもまた、彼女一人に集中せざるを得ない。何しろ、皇帝の血統に、男子は皇太子のみなのである。もし、今、皇太子に何かあれば、皇孫である一名の少女のどちらかが、「トルテンバウム王朝初の女帝として立てられることになる。伝統、前例を気にする彼らにとつて、自分達が関わっている時期に、それまでの前例にないことが起るといふのは、何としても避けたいところであつた。また、國務尚書直々に、何としても男児を、という通達を宮内尚書になつたばかりのノイケルンを通じて行われていたのも事実であつた。

國務尚書リヒテンラーデ侯が、そのような通達を出したのには訳がある。彼は、権力に執着しない無私の人であるとの印象を周囲に与えていたが、実際には、更に磐石の地位を宮廷内に於いて築きたいという野望を持つていた。何か新しいことがしたいと言ふ訳ではない。ただ、彼には、これまで通りに宮廷を、そして帝国を運営していくことに、絶大なる自信があつたのである。自分以上にそれが出来るものは、当代にはいないと思つていた。そして、帝国は、未来永劫、これまでと何ら変わることもなく存在するものであり、それを變えることは罪悪であるという信念があつた。そして、自分が帝国を動かすのを妨害する者がいるとしたら、それはフリードリヒ四世の女婿達であらうと踏んでいたのである。

彼らの娘達を皇帝にする訳には行かなかつた。そんなことになれば、きつと自分は

権力の中枢から排除され、ブラウンシュバイク公、又はリッテンハイム侯の取り巻き連中によつて、宮廷は牛耳られる。そうなれば帝国は、彼の私利私欲で好きなように変えられてしまつたさう。自分は彼らから帝国を守らねばならない。その為に必要なのは、皇女達の生んだ少女より皇位継承者として相応しく、現皇帝フリードリヒ四世の治世の後も彼に権力を与へ、しかも彼の意のままに出来る、直系の皇子の出現だったのである。

宮内省の官吏達は、折角収まつたフリードリヒ四世の漁色を、再び煽動せねばならなかつた。その遺伝子を、後世に伝えて貰う為に。しかし、フリードリヒ四世は、なかなか彼らの思つたとおりには動いてはくれなかつた。

「今少し、グリューネワルト伯爵夫人以外の女性をお側に置かれましては？」
「この近侍の薦めにも、」
「予は、やはり、アンネローゼが良い。」
「と、耳を貸さうともしない。皇帝と國務尚書の板挟みになり、宮内省の官吏達にとつては気の休まる時のない日々が続いた。」
「陛下、私に対するお氣遣いでございませう。どうか御無用になさつて下さいませ。今日も、コルビッツが、宮内省に呼び出されておりました。コルビッツは向も申しませんでした。おそろしく、陛下があまり私の許にお越しになられては、御世継ぎのこともあり、心配なのでございませう。陛下の御子を私が身籠もらぬ以上、宮内省の方々の御心配ももつともなごでございませう。」

小首を傾げるようにして自分の眼を見つめながらこう言つた若き寵姫の手を、フリードリヒ四世は引き寄せながら応えた。「アンネローゼは、予のことが嫌いなのかな？」
「とんでもございませぬ。このように良くして頂き、弟やその友人の将来まで保証して

下さいました。弟たちが勉学にいそしめま
すのも、陛下のお陰でございます。」
フリードリヒ四世はふと、先日聞いたア
ンネローゼの弟の噂を思い出した。

「ふむ。そついえは、そなたの弟は、幼年学
校ですと首席を通しておるそつじやな。
特に艦隊運用、戦略論、戦術論では抜き
ん出た成績で、教官連中の中にも舌を巻
く者があると聞いたぞ。」

アンネローゼの表情が和らいだ。
「私は、難しいことは判りません。学校で
どのようなことを学んでいるのかも。ただ、
学校に通わせて下さっている陛下への感謝
の気持ちを現す為にも、一生懸命勉強す
るようには、とは常々申しております。」

アンネローゼは弟の栄達を生き甲斐にし
ているのである。とフリードリヒ四世は
思った。宮廷内でのような理不尽な仕打
ちを受けようとも、黙ってそれに堪えてい
るのも、自分が何らかの行動を起こすこと
によって、その反動が弟の身に及ぶのを恐
れてのことに見える。

（全てを我が身に受け止めて、たわみつつも
決して折れず、己の陰の若木を庇い続ける
か…。）

「そなたは、まるで、柳のようじゃな。」

「柳、でございますか？」

「いや、なんでもな。」

ついで、口をついて出た言葉を打ち消して
フリードリヒ四世は寵姫の弟のことに話を
戻した。それが一番、彼女にとって楽しい
話題と知っているからである。

「来年、弟も卒業であろう。卒業後はどう
する？士官学校に進むのか？」

「いいえ、任官したいと申しております。」

「そつが、任官といっても、色々な部署があ
る。前線と後方勤務では大違いじゃ。ど
のような処に配属を希望するのか、機会が
あったら聞いておくがよい。」

姉とは違った意味で、一五歳に満たない
少年の成長を楽しみにしている自分に、フ

リードリヒ四世は気が付いていた。
「子の事は気にするでない。予は、もつ子
供はいらぬと思つておる。皇太子も妃を迎
えたことだしな。フレイヤ、エミリエ、そして
シュザンナ…この数年、予の子供を身籠も
つた者達は、皆不幸な結果に終わつておる
予はこれ以上、同じような目に遭う者を
作りたくはない。子を得てそなたを喪つよ
り、子供など授かずとも良いから、こう
してそなたと過ごしたい。そなたは、予だ
けでは不満か？」

「いいえ。しかし…。」

「血統など、途絶える時は途絶えるものよ
生きている花は造花より美しく見える。滅
びるからこそ愛しいものもあるのだ…。」

アンネローゼの青玉色、サファイヤ・ブル
の瞳が一瞬見開かれ、表情が凝結し
た。彼女は、初めて皇帝の望んでいるもの
の片鱗に触れた気がしたのである。何故だか
自分より四〇近くも年長の初老の男性が
痛ましく思われた。

帝国暦四八一年秋、帝国は一つの朗報に
湧く。それは皇太子妃懐妊の報である。翌
年には、男子か女子かはさておき、直系の
皇孫が誕生する筈であった。

しかし、それはまだ予定ではない。シュ
ザンナを始めとする後宮の女性達が、懐
妊を果たしても、なかなか無事にその子を
胸に抱けなかつたように、皇太子夫妻が無
事にその子を迎えることが出来るとは限
らなかつた。

宮内省はじめ、皇太子夫妻の生活の安全
に責任を持つ部署の間は、極めて強い緊
張感の中で皇太子妃の出産までの半年以
上を過ごすことになる。

同じ頃、貴族の子弟が出入りする高級
酒場で、頭を抱え込んでいる青年貴族がい
た。カール・マチアス・フォン・フォルグンであ
る。

「どうして俺が前線に行かねばならん
だ？これまで一回だって、俺は前線に行つ
たことはない。行つたって役に立たな
い。上層部だつて判つていそつなものなの
に。」

「ただ、会計士官として、だろつ？しか
も大佐待遇だ。もし戦闘になつたら、机の
後ろに隠れていれはいじやないか。上手く
行けば将官に出世できる。そつすれば、花
嫁にも何よりの贈り物になるじやない
か？」

何とか慰めようとする友人の手を振り
きつて、カール・マチアスは赤く充血し濁つた
瞳をその顔に向けた。

「ベネディクト、お前は本当に肝が座つてい
るのか、それとも、馬鹿なのか、どつちだ？
俺だけじゃない。他人事みたいに言つけれ
ど、お前も行くんだろ？カプチュランカな
んで、極寒地獄だと聞かせ、叛徒どもが攻
撃してこなくたつて、俺は行きたくない
よ。」

「だが、エリザベート嬢の兄上の要求通り、
それなりの小金も蓄えたり、あと、この結
婚に彩りを添えるとしたら、何らかの功
績だろつ？俺達のような後方勤務では、
そんな機会は滅多に巡つてくるものじや
ない。婚約はしたものの、未だにハルテンベルク
伯は、君と妹御の結婚に不満なんだろ
つ。」

そつ、彼、カール・マチアス・フォン・フォル
グンは、軽い気持ちで手を出した相手の女
性から、余りにも真剣に慕われるうち、い
つしか人生を彼女と共有したいと本気で
望むようになり、つい一ヶ月ほど前に晴れ
て婚約の運びとなつたばかりであった。

一年前にエリザベート・フォン・ハルテンベル
クと結婚したいと言出した時には、両家
の親族の間に暴風雨が過ぎた。カール・マ
チアスという人間と「結婚」という言葉の間
には、数億光年の隔たりがあるものと信じ
られていたからである。特に、エリザベート
の周囲でこの縁談に対する反対意見は強

かつた。一番の強硬派は彼女の兄ハルテンベ
ルク伯で、どうやって妹との生活を立てる
つもりなのかと、厳しく詰問してくる。正
業とは言えなかつたが、ある手段を講じて
伯爵を納得させるだけの資産を調達し、
漸く婚約の許しを得た後も、伯爵が将来
の義弟を決して好いてはいないという事は
誰の目にも明らかであった。

「そつが。」

大きく伸びをしながら、まるで吐き捨て
るように、カール・マチアスは言った。

「お前と同じようなことを、俺の兄貴も言
いやがる。伯爵から気持ちよく妹婿として
受け入れて欲しいなら、お前が無能者では
ないといつてこそを見せて来い、つて言つん
だ。だけど、それが俺には、死んで来いと
言つてるように聞こえてならないのさ。」

「まさか、そんなことはないだろつ。いくら
何でも兄弟でそんな…。」

信じられないといった表情のベネディクト
を見やつて、カール・マチアスは薄い笑いを
口許に浮かべた。

「お前は相変わらず人がいいな。いくら悪
ぶつてみても、御育ちの良さが伺えるつて
ものだ。俺のように、子供の頃から一族の
お荷物だとな、そこら辺の処が、嫌でも目
に付いちまつたのさ。お家第一、邪魔者は排
除しろつてな。」

「こつまで言うてから、カール・マチアスは舌
を潜めた。

「考えても見る。畏れ多い事ながら、皇族
の皆様方になつて、一生を精神病院や離
宮で監禁されて過ごされた。元皇帝候補
は数知れない。だろ？まして俺達がやつて
いることを考えたら…。まあ、ばれたりし
てはいないと思つけれどもな。ばれるとし
たら、むしろハルテンベルク伯の方になつろ
つ。そつなつたら、まず、婚約は破棄だつて言つ
て来るに違いない。」

ベネディクトは、黙つて、両手で包んだグ
ラスの中で、ブランドーが氷と不規則な模

様を描きながら融合していく様を見つめた。

(シユザンナ：僕のしていることを知ったら君はどつ思つたのさうさ。)

黙りこくつてしまつたベネディクトを見て今度はカール・マチアスが慰め役に回つた。「大丈夫だつて。サイオキシンの密売をやつていゝ連中は、それこそ星の数ほどいゝ。警察も全ての星に被せられる程に大きな網は持つていないさ。それにしても、俺達、色男を気取つていた筈なのに、女一人を手に入れる為に、何をやってゐるんだか。」「

表情筋だけを僅かに笑顔用に設定して、ベネディクトは更に、記憶の中にある少女のはにかんだような笑顔に語りかけた。

(ねえ、シユザンナ。僕のことを愚かだと思つたかい？君が皇帝陛下の御子を身ごもる度に喜ばなくてはと思ひ、喪つ度に悲しまなくてはと思つた。努力しなくては、そう思つて出来なかつたらさ。そして今度は、皇帝陛下の御寵愛そのものを、君が失いかけてゐると知つた。君の為に悲しまねばならぬことの筈なのに、グリユーネワルト伯爵夫人を憎んで当然のこの筈なのに、僕は心のどこかでそれを喜び、伯爵夫人に対して感謝してゐる。君が後宮から出てくるかも知れないから。だ、だ、だ、さうなつて初めて気が付いた。君が後宮を出てきて、僕には君を迎えに行けるだけの何もないといつことに。金も、地位も、名譽も、権力も。僕は、この一〇何年問を、何と無駄に生きてきたことだらう。ただただ、君に相応しくない人間になる為だけに、時間を過してゐたよな気がする。地位や名譽や権力を手に入れるには時間が掛かる。でも、金銭だけなら、金銭だけなら何とかなるかも知れない。僕は妄想を抱いたのさ。カールが、恋人との結婚を彼女の兄に許して貰つた為、彼女との生活を支えるだけの経済力を証明せねばならぬやつてサイオキシン麻薬に手を

出した時、僕は彼を止めるどころか、仲間に入れてくれるよう頼んだのだ。そんな汚れた金は、いくらあつても君を迎えるに相応しくない。冷静に考えれば判つた筈なのにね。結局、君は僕にとつて永遠に高嶺の花なのだ。もう、君をこの手にしたいとは思わない。それは余りにも僕には大それた事になつてしまつたから。でも、でも、何か一つくらい、君の為に役に立つてから死にたいよ。)(

出した時、僕は彼を止めるどころか、仲間に入れてくれるよう頼んだのだ。そんな汚れた金は、いくらあつても君を迎えるに相応しくない。冷静に考えれば判つた筈なのにね。結局、君は僕にとつて永遠に高嶺の花なのだ。もう、君をこの手にしたいとは思わない。それは余りにも僕には大それた事になつてしまつたから。でも、でも、何か一つくらい、君の為に役に立つてから死にたいよ。)(

した。大貴族や裕福な家庭の子弟が多い幼年学校にあつては、殆どがそのまま士官学校に進んだり、或いは軍医学校等の専門学校や大学へ進む為、これはかなり珍しいケースと言える。

宮内省の官吏達が、後継者問題について一息入れることが出来たのは、帝国暦四八二年六月のことである。皇太子夫妻に男児が誕生したのだ。ひとまずは、ブラウンシュバイク家のエリザベート、リッテンハイム家のサビーネ以外に、皇位継承者たる「男子」が生まれた。それも、おそらくは最も問題の起こらぬ形で、いつうてみれば、かえつて、他に男子が誕生することは、皇位継承権争いの火種ともなりかねず、グリユーネワルト伯爵夫人が懐妊しないのは、むしろ歓迎すべき事なのかも知れないと、宮内省の官吏達は考え始めた。

「可哀想な皇子様。大丈夫、私達が付いてありますよ。皇子様の望まれることでしたら、どのようなことでも、私共が致しますから。」「

その事を知つた多くの者は、姉グリユーネワルト伯爵夫人が、皇帝の寵愛を良いことに弟への特別待遇を願つたのであつたと邪推したが、これは真実とは異なる。確かに彼女は弟の任官に際し、フリードリヒ四世に、彼女にしては珍しく願ひ事をしてゐるが、それは、弟が彼の親友と同じ部署に配属されること、配属先を実際に戦闘が行われている前線にして欲しいといふことだけだつたのである。

ただ、残念なことに、この出産には犠牲が伴つた。皇太子妃シユテファニーが、胎児の生命と引き替えにその命を落としたのである。エルウィン・ヨゼフと名付けられたその赤子は、生まれたときより母の胸に抱かれることなく、乳母達の手によつて育てられることになつた。

「可哀想な皇子様。大丈夫、私達が付いてありますよ。皇子様の望まれることでしたら、どのようなことでも、私共が致しますから。」「

「あん奴の助けなどなくても、俺は直ぐに少尉になつていた――！」

皇太子ルードウィヒの落胆は、待望の皇族男子誕生にも関わらず大きかつた。シユテファニーは、かつてシークムンデ皇原がマクシミリアン・ヨゼフ二世に対して行つた献身には及ばぬ迄も、何とかして皇太子の力になりたいと思つておられ、少しでも皇太子の身体によいと思はれる事があれば、それを自分でも実践し、悪影響がないと判つてから皇太子に勧めてゐた。食事から生活

習慣に至るまで、である。その甲斐あつてか、皇太子は成婚後、以前より体調も良かったのである。

「格別なるお計らい」を知ると、

「あん奴の助けなどなくても、俺は直ぐに少尉になつていた――！」

「格別なるお計らい」を知ると、

「格別なるお計らい」を知ると、

一六・終わりの始まり

帝国暦四八二年七月、一人のまだ少年と言つてもいい若者が、その華々しい軍歴の最初のページを開いた。ラインハルト・フォン・ミューゼル、グリユーネワルト伯爵夫人の弟である。

幼年学校の卒業生は、準尉としてその軍歴をスタートさせる。士官学校の卒業生は少尉からのスタートとなる。五年間で一階級の昇進を困難と思うか、それとも足りないと思つたか、それは本人の才覚と自信の程度によつて価値判断が違つてあつた。少なくとも、ラインハルト・フォン・ミューゼルは、五年間の間に、少尉より上の地位に自分は進める人間であると考えていたようであつた。そして、それは任官時に既に既定の事実となる。彼は皇帝フリードリヒ四世の指示によつて、異例の事ながら、士官学校卒業生と同列に叙せられたのであつた。

の意を伝え、階級章だけは有り難く頂くことにしたのだ、とも記されている。

それより、彼の怒りをかかったのは、軍務省の人事課が彼と彼の親友に示してきた任官先であった。皇帝の寵姫の弟にもしもの事があったとは、と心配する人事課から、最初に示されたのは近衛隊であった。ここは貴族の子弟にとつて垂涎の場所である。帝都にあって、敵の弾丸が飛んでくる気遣いは全くといってないし、皇帝の一番近くに仕えているという、他の部隊に対する優越感を抱くことが出来る。しかも、ここに入隊する為には、容姿もそれなりでないといけない。つまり、貴族としての誇りを十分満足させてくれる場所なのである。しかし、金髪少年は「貴族としての誇り」など欲してはいなかった。

次に示されたのは、軍病院の事務であった。ここは仕事柄、結構、本来の報酬以外の収入が期待できる。それを見越しての事であったのだが、それも彼には気に障った。

結局、彼が自分が望む場所、つまり軍功を立てる前線に任官するためには、姉に頼るしかなかった。それはつまり、皇帝を頼るといつことに他ならない。彼にとつては意に反する事であったよつだが、大事の前の小事と自らを納得させたのである。

姉は、弟からの頼みを聞くと、僅かに眉根を寄せて、心配そうな表情になった。「ラインハルト、どついても、前線に行きたいの？危険を承知で。」

「はい、姉上、一刻も早く昇進したいのです。その為には武勳を立てなくては。」

「私には、昇進よりも、あなたとジークが無事な方が嬉しいわ。」

そう言いながらも、アンネローゼは皇帝に弟の願いを伝えた。弟は後方勤務ではなく、前線で戦いたいと申しております。実際に危険に身を晒して戦つことで、陛下の御恩に報いたいのでございませう。何卒、

弟の我侷をお許し下さいますよつに……。フリードリヒ四世は、その言葉に目を細めた。自分の眼に狂いはなかった。アンネローゼは弟を文官にしたかったよつだが、あの者は後方で情眼を貪つて過すよつな人間ではない。予の心臓を突き刺す刃を研ぎ澄ませ、足音を忍ばせて近づいてくるが良い。予が生きている間に、その手が予に届く処まで。

（それまではまだ、自分も王朝も枯れ果てずにいたいものだ。）

と、常になく自分の長命を願っている自分、フリードリヒ四世は気が付いた。

「あの女」の弟が、幼年学校卒業の身でありながら、皇帝の命により、慣例を無視して少尉として任官したという事実は、当然の事ながらシュザンナにも伝わった。

シュザンナはまた、「あの女」の弟のことを実際にその目で見たことはなかった。彼女に「あの女」の弟の情報を伝えた者の話に拠れば（その一言で、情報提供者はシュザンナの不興を買い、冷水を浴びせられた方がましだと思わざるを得ない視線で睨まれたことになったのだが）、まるで名手の手になる彫像のように隙のない容姿の持ち主だといつ。一五歳ながら一七五センチを越す勢いで、すくすくと育っていると聞いて、シュザンナはいい知れぬ不快感を感じた。「あの女」が後宮に姿を現し、弟が幼年学校に入った頃には、自分の肩辺りまでしか背が届かなかったであろうと思われるのに、今や自分より背が高い。おそく年齢からいつて、まだまだ伸びるであろう。それは成長期の男子であれば当然のことであったのだが、シュザンナには、自分を押しつけようとする。「あの女」の勢いそのものを体現しているかのように思われてならなかった。

（あの女が、陛下を言いくるめて、また何の軍功もない弟を少尉に仕立て上げたのに違いない！御政道を私する売女奴が！）

シュザンナは、自分のこの思いを聞いてくれる者が欲しかった。自分の意見を、もっともだと全面的に支持してくれる者が欲しかった。私邸の使用人達では駄目である。彼らは、彼女から見ても、余りにも「人間として」格下で、自分の意見を聞かせるだけの価値もない存在であったから。たとえ自分が何か言つたとしても、それを理解するだけの頭脳を有しているはずがないのだ。平民や帝国騎士の家柄の者に。

（おお、そつじや、グレーザーならば……）

グレーザーならば、出自は劣るものの、一応医師の資格も取っていることでもある。使用人達に比べれば、遙かに自分達に近い知能を有しているだろう。宮廷医として、高い教養を持つ者達に囲まれ、薫陶を受けているのだから、世の中の「常識」も知っているに違ひなかった。

「明日の朝、一番で妾の許に伺候するよつ、グレーザーに申し伝えよ。」

シュザンナは、極めて事務的な口調で、側に控えていた侍女の一人に命じた。

翌朝、グレーザー医師は、朝一番というには少々遅い時刻になつてから、その姿をシュザンナ邸の前に現した。シュザンナは食事の最中であつたが、彼の到着を知らされると、食堂に案内するよつ、侍女に命じた。

「申し訳ございませぬ、皇帝陛下が御発熱おそばされまして、陛下の方に回つてから参りましたので……。」

不機嫌そうなシュザンナの顔を見て、グレーザー医師は遅刻の言い訳をした。

「侯爵夫人には如何なされました？」

グレーザーの質問を無視して、シュザンナは尋ねた。

「陛下が御発熱？おお、それでは、早速にお見舞いに伺わねば。お一人で、どんなにか心細い思いをしておられることか……。どんな御様子なのじや？」

「お見舞いの必要はないかと存じますか……。」

グレーザーの返答は、シュザンナの気に入らなかつた。

「何故じや？」

運はれてきたばかりのスープの皿が、中身と共に、テーブルから絨毯の上にとその位置を変え、形状も変えた。慌てて侍女達がスプーンの破片とスプーンの染みの片付けに駆け寄つたが、それには眼も呉れず、シュザンナはまるで自分が皇帝の許を訪れるのを、グレーザーが妨害しているかのよつに敵しく問いつめた。

「何故、妾が御見舞い申し上げてはならぬのじや？」

「皇帝陛下は、軽くお風邪を召したただけで御心配には及びませぬ、御側にはグリューネワルト伯爵夫人がお仕えしておられますれば、陛下も見舞いは不要との仰せでございませぬ。」

「妾は不要じやと申すか？」

「そ、そつではございませぬが……。」

グレーザーは我が身の迂闊さを責めた。この御婦人の前で、グリューネワルト伯爵夫人の名前を出したらどつとなるが、散々経験してきた筈なのに、と、まるで、彼のこれまでの経験が事実だと立証するかのよつに、シュザンナの顔は般若もかくやと思われるほどに、険しい表情になった。

「あの女……全てはあの女が来てから……。貧乏貴族の小娘が、グリューネワルト伯爵夫人などと僭称しおつて、陛下の御心をたぶらかす。あの女を放置して於いては、必ずや帝室に災いとなるよつ。」

シュザンナをなだめるつもりで、グレーザーは余計なことを口の端に乗せた。

「私を知る限り、グリューネワルト伯爵夫人が、陛下に何かお願ひするよつなことはないかと存じますか……。」

握りしめたシュザンナの手が、昨日知らされた情報を思い出して震えた。グレーザー

の知らぬ事を自分が既に察知していたという事は、僅かに彼女の自尊心をくすぐったが、しかし、その内容は、決して彼女にとつて喜ばしいものではない。

「聞いておるぞ。此度、あの女の弟が任官するに当たり、普通、幼年学校の卒業生は準尉として任官すべきところを、陛下の御指示で、少尉に任じられたというではないか。いずれ、あの女が陛下にせがんだに違いない。」

「シユザンナは漸くテールの上を拭き終わった侍女に、指先で弾くような仕草で席を外すよう命じながら、尚も競争相手を糾弾した。

「はあ、その事なら、私も聞き及んでおりますが、その弟は自ら望んで前線勤務に就いたとか、またやら、安楽や栄達を望んでの事とも思えません。」

「そう思わせようとしておるだけじゃ！小賢しい孺子、こぞう、奴ー！」

グレーザーの返答は、またしてもシユザンナの氣に入らなかつた。愚かな医者奴、見せかけに騙されおつて、と思つたが、所詮、グレーザーも帝国騎士の出身、自分とは思慮の深さでも違つただ、そのまま口に出すのは留まることにした。だが、グレーザーにも、「あの女」やその弟の本当の姿を

教えておかねばならない。それは、氣が付いている者の務めである。彼女の頭の中で、彼女達大貴族は、その為存在していた。愚かで、何も判らない怠惰な下級臣民を正しく導く為、である。

「そういうこともありませんよか…。」

あまり積極的とは言えないグレーザーの肯定を受けつつ、窓の外にシユザンナは視線を向けた。眩しいほどの光が外には溢れている。

『グリユーネルト伯爵夫人の弟は、それは見事な金髪を持ち主で、まるで陽の光を頭に纏っているようだと申します…。』

情報提供者の言葉が思い出された。

「そうじゃ、あの孺子、こぞう…。」

シユザンナの瞳が輝いた。

「は？」

グレーザーが聞き返すのに、窓の外から視線を彼に移しながら、シユザンナは心の裡の期待を押しさえ切れぬ表情で応える。

「あの孺子を亡き者にするのじゃ。」

「えっ…。」

グレーザーは思わず息を呑んだ。これまでも、「あの女」グリユーネルト伯爵夫人に対して、やや常軌を逸しているのではないかと思われる過激な発言はあった。しかし、ここまではっきりとした、現実的な害意をシユザンナが口にしたことはなかつたのである。

尚も、シユザンナは、自分の思い付きに酔つように続けた。

「あの女の方は、宮廷内では手は出せぬだが、弟の方は都合の良いことに前線におる。前線なれば戦死することもあつた。さすれば、あの女の嘆き悲しむ姿が見られるというものじゃ。」

「あの女」の悲嘆にくれる様を想像すると、背筋がぞくぞくするほどの興奮を覚えた。

「しかし、そのように都合良く敵の手に掛かるかどうか…。」

だが、シユザンナの考えは、グレーザーの考える遙か先を行つていた。

「そう仕向ければよい。それで駄目なら、何も銃弾は前からのみ飛んでくるとは限らぬ。」

それを彼女が口にした時、グレーザーは今度こそ何も言えなくなつた。その沈黙をシユザンナは自分の考えが、余人の思いつかぬ優れたものである故と感じ、幾分かの優越感を以て、教諭するように付け加える。

「と、そういうことよ。」

更に沈黙が食堂を覆つた。それを破つたのはシユザンナの方であつた。

「グレーザー、あの孺子、こぞうの任地を調べ、然るべく計らえ。費用はいくら掛かつても構わぬ。良いな？」

「は、はあ…。」

曖昧な返事と共に、グレーザーは、ハンカチで汗を拭く真似をして、自分の表情をシユザンナに隠した。女性性は変われば変わるものだと思つて、かつてシユザンナが後宮に納められた時、彼女はグレーザーの目にもその運命が痛々しく見える、可憐な少女だつた。それが一〇年以上の月日を経て、このように荒んだ姿を自分の前に晒すつとは思わなかつた。そして、哀れなのは、彼女が自分の気持ち如何に荒れているかに氣が付いていないことであつた。妬心も程々ならば可愛いが、こつもあからさまで、皇帝陛下でなくとも逃げ出したくなるつ。その事に、果たして、ベーネミュンデ侯爵夫人が氣が付く日が来る。たつつか？

しかし、今、一番グレーザーを悩ましているのは、引き受けざるを得ないであろう、憂鬱な「任務」であつた。確かに侯爵夫人は自分にながしかの報酬は与えてくれるだろう。だが、もし、万が一、シユザンナの目論見が公になるようなことがあつたら、彼もまた安寧な生活に別れを告げねばならなくなるかも知れない。どこまで侯爵夫人

に付き合つか、それが肝心なところであつた。

「まあ、良いだろう。任地を調べ、その指揮系統さえお教えすれば…。侯爵夫人がそれをどのようにお使いになられようと、自分には関係ないと思つぱねることだつて出来る。」

数日を待たずして、グレーザーはシユザンナに、「あの女」の弟の任地と、その最高責任者の氏名を伝えた。任地は惑星カプチユランカ前線基地B3、ペードライ。

基地司令官はヘルターという四〇代後半の大佐であつた。もう何年にも渡つて辺境勤務に就いており、家族とも離ればなれになつていふという事まで、その報告書には記されている。

シユザンナは、その人物に宛てて、自分に協力するよう書簡をしたためる事にした。

「最近、宮廷内には、下賤な生まれにも関わらず、皇帝陛下の御心を惑わし、御政道を私する雌狐が棲み付いておる。此度、その雌狐の弟が、本来、幼年学校卒業生は準尉として任官のところを少尉として、そなたの許に赴任する運びと相成つた。これもまた、グリユーネルト伯爵夫人を僭称せんしょう、する雌狐の横車によるものであるつ。このようなことが許されては、軍人として職責を真面目に果たしているそなた達が氣の毒でならぬ。また、帝国の行く末も心配である。よつて、妾は雌狐奴の専横ぶりに天誅を加えるを決意した。そなたの力を貸すよつに、弟の方をカプチユランカの氷原に葬つて欲しい。成功の暁には、そなたの昇進について、妾が力となるう。配属についても、そなたが家族と暮らせるよつ、取り計らおう。これは、そなたばかりではなく、そなたの指示に従つた者全員について同様である。」

だが、結局、シュザンナのこの目論見は成果を得ないまま幕を閉じる。数週間後、シュザンナは、軍務官の伝報によつて、カプチュロンカ山の岳地帯にあつた叛徒軍の基地を攻撃した際に、ヘルダー大佐が戦死したことを知らされたのである。

(あの孺子「こそう」は?)

戦死者名簿の中に、彼女の求める名前は見つからなかった。そればかりか、「あの女」の弟は敵情偵察に出た折に、共に行動していた準尉と二名で反乱軍兵士八名を倒し、叛徒どもの装甲車を奪い、そのコンピュータに入つていたデータを使ってB3、ペー・ドライへの敵襲から自軍を救つた功績により、少尉から中尉へ昇進し、艦隊勤務を命ぜられてイゼルローン要塞駐留艦隊に配属されるという。イゼルローンは難攻不落を以てなる要塞である。叛徒共に彼の命脈を断ち切つて貰つたという彼女の計画は、より困難なものとなつたと認識せざるを得なかつた。

(何といふ事! つづく) 悪運の強い姉弟じゃ。あの孺子一人仕止められぬとは、叛徒どもは何をしておるのじゃ。それにもまして、そんな叛徒どもの手に掛かつて殺されるヘルダーも情けない。階級章だけは立派なものをつけておつても、やはり平民は平民に過ぎぬわ。()

シュザンナは不甲斐ない協力者を、心の中で罵つた。そして、急激な怒りと落胆が落ちてくると、シュザンナの心に、それらとは異なつた色調の暗雲が拡がり始めた。ヘルダー大佐が誰か生者に自分の依頼の内容を漏らしてはいないかという事である。特に、あの手紙が誰かの手に渡つてゐると厄介であつた。しかし、数刻の後、シュザンナの頭からその不安は消え去つてゐた。

(何、構つておかない。どう見ても、妻の方が筋が通つてゐる。まともな思考の持ち主であれば、あのように下賤な女の専横を許すまじとする妻の考えを支持こそすれ、

糾弾してゐると思へぬ。何か言つて来る者があつたらしたら、その者も帝室の敵じゃ。()

彼女の中で「正義」とは、「彼女の意に叶ふこと」であり、それ以外の価値観は、既に存在を許されなかつた。

この世の中には、シュザンナが言つたように確かに運の良い者と悪い者がいるようである。一体誰が、どのようにしてそれを決めるのか、それはおそろく誰にも判らないであろう。どれ程努力をしても、自分が望むものが手に入らぬ人間もいれば、他人ひとから見ると、幸運が自らその腕の中に飛び込んでいく者もいる。古いにしえの人々が言つたように、個人に付いては守護天使の力、とでもしておくほか無いのかも知れない。

「あの女」の弟、ラインハルト・フォン・ミューゼルが無傷でカプチュロンカを後にしたとは全く逆に、彼より半年前に彼の地に赴任した若き軍官僚二名は、再びオーディンの地表に自分の脚で降り立つことはなかつた。二名は、同惑星上で行われた同盟軍との戦闘中、前後して戦死したのである。

カール・マチアス・フォン・フォルマンは、帝国暦四八二年初頭、帝国側の探掘プラントに侵入を果した同盟側の陸戦部隊によつて、その命を絶たれた。二階級特進し少将として、オーディンで自分と婚約者の二伯爵家によつて、盛大な葬儀が行われた。

彼の命を奪つた、おそらくは薔薇の騎士連隊、ローゼンリッターの一人と思われ、銀灰色の髪をした兵士は、カール・マチアスにトマホークを打ち込んだ後、自分が倒した人物が何者であつたのかを確認するつもりであつたのだらうか、所持品を調べた。その中には、当然、エリザベットの写真もあつた。彼は常に彼女の写真を携帯していたからである。

勝者の青灰色の瞳が、装甲ヘルメットの中で、その写真に吸い寄せられるのを目撃したものは、いらない。しかし、カール・マチアスの遺体が収容された時、彼の遺品を生家や婚約者の許に送らうと整理していたベネディクト・フォン・アーデナウアーは、何か違和感を感じた。故人が常に携帯していた婚約者の写真が、ロケットごと紛失してゐたのである。だが、それは、戦死の手続きには不要なことであり、書類に記載されることもなく、ベネディクトの死とともに霧散した。

ベネディクトも、友人の死から遅れること約一年、ラインハルト・フォン・ミューゼルがカプチュロンカを離れた半年後に前線基地B3、ペー・ドライが玉砕した折に、基地司令官マーテル大佐らと共に戦死したのである。

彼の家族は、彼の戦死を覚悟してゐたのか、その知らせを受け取つた時それ程驚くこともなく、取り乱さなかつたらしい。だが後に、アーデナウアー家に、送り届けられた彼の遺品の中に入つてゐた立体写真を見た時には、父である伯爵をはじめ、兄弟達の顔色が変わつた。

「...馬鹿な奴だ...」
アーデナウアー伯爵はそう呟き、兄弟達は沈痛な面持ちで、父と立体写真を見比べた。母親は声は立てないものの、既に涙の中に沈んでゐる。
「女一人のことで、人生を棒に振りおつて...」

重苦しい沈黙が何分か室内を占拠した後、伯爵はその写真を、暖炉の中に投げ入れた。
「あなた!」
息子の形見の品をどうして、という妻の非難の顔を肩越しに見やつて、アーデナウアー伯爵は言つた。
「後宮の女性の写真を後生大事に持つていたと知れたら、叛逆罪に取られかねん事

くらい判つてゐるだろ?」軍務官が、これを表沙汰にしないで届けてくれただけでも有り難いことなのだ。少しは...少しはあれの行動の理由が判つたのだから...。しかし、この写真のことは、今後一切、口にしてはならぬ。良いな?」
「でも...」

母親の瞳に涙のヴェールを通して、炎の中に投影される息子の姿がぼやけて映つた。その隣には、少し目を伏せて微笑んでゐる少女の姿があつた。一年前の大舞踏会で、息子のパートナーだつた少女である。

やがて、小さな投影機は乾いた首を立てて、その映像を永遠に消し去つた。後には焼け焦げた残骸だけが残つてゐた。

数日後、シュザンナの許に、アーデナウアー家の紋章の入つた書簡が届けられた。差出人はクラウディア・フォン・アーデナウアー、アーデナウアー伯爵夫人である。

そこには、ただ一言、彼女の三男ベネディクトが、カプチュロンカで亡くなつた事だけが記されてゐた。伯爵夫人にしてみれば、ただそれだけの短い文面の中に、彼女に対する息子の、そして自分の複雑な想いを閉じこめたつもりであつたが、それがシュザンナに伝わることはなかつた。

シュザンナの中で、ベネディクト・フォン・アーデナウアーの名前は、あの園遊会で彼と彼の兄弟達の会話を耳にして以来、忌避すべき領域に入つてゐた。まだ世間というものを知らなかつた自分の気持ちを踏みこじつた「不実な男」...それは、彼女が後宮に入つてから伝わつて来る、彼女についての風聞が証明してゐた。彼の死について、今更自分が何らかの感慨を覚える必要性は無い筈であつた。
シュザンナは、物憂げな表情のまま、その書簡を、肩かこの上で自分の白い手から解き放つた。

カプチエランカにおけるB3、ペー・ドライの玉碎から数カ月後、シュザンナ邸を六〇代の男性が三〇代前半の憲兵少佐を従えて訪れた。憲兵少佐は年配の男性の息子であり、任官の折、シュザンナの口添えで、前線ではなく後方勤務についたという経緯がある。息子の士官学校の同期生のうち、前線に出て戦闘指揮官としての栄達を夢見た者の殆どは、この一〇年余りの間に、その半数近くが天上、ヴァルハラの間をくぐったが、息子は生き延びており、いわば、シュザンナは彼ら父子にとって恩人であった。

「おお、久しいの、クルムハツハ子爵」
「はい、御無沙汰致しております、侯爵夫人」
「今日は何じゃ？何か妾に願ひ事かな？」
陳情を受けるという事は、彼女にとつて喜びであった。それは、取りも直さず、彼女が皇帝の寵愛を受けており、皇帝に対して影響力を持っていると人々が認めているという証であったから。
「願ひ事など、とんでもございせん、いつも侯爵夫人に助けて頂いているばかりでは申し訳ない、何か私共でお役にたてる事があれば、と思っております」ところ、先日、グレゴールが面白い噂を仕入れて参りまして……」
ことさらに恭順の意を示しながら、クルムハツハ子爵は、隣の息子に、聞いたことを話すよう促した。

目で続きを促したシュザンナに、子爵の息子が語った内容は、シュザンナの心を浮き立たせるに十分であった。
「何？それでは、ヘルダー大佐の戦死は、叛徒どもによるものではなく、味方に殺されたと申すのか？」
「はい、左様でございます、侯爵夫人、大佐の遺体が発見されました場所は、戦闘のありました場所から離れておりまして、実

際に大佐が叛徒どもの手に掛かる現場を見たものは誰もいないようなのです。当時副司令官であったマーテル中佐の報告書を見ましても、その辺りの詳しい経緯は書かれておりません。そして、その時、最も現場に近い場所にいましたのが、侯爵夫人のお嫌いなグリーニューベルト伯爵夫人の弟とその副官だったことから、生き残った基地の士官達の中では、ヘルダー大佐は彼らに殺されたのではないかと噂が一時あつたようでございます。マーテル中佐が大佐に昇進し、基地司令官に任命されると、そのような噂を無責任に流すべからずという通達が出され、それ以上噂が広がることはなかつたようでございますが……」
「おお、おお、確かにあの女の弟ならば、上官殺しであるのが平気であるであらう。しかし、それにしても、その動機は何だと、士官達は言つておつたのじゃ？」

まさか、ヘルダーがああ女の弟を殺そうとしたので……といふことはあるまいなと思ひながら、シュザンナは尋ねた。
「それに関しましては、こんな噂がございませぬ。大佐はもつ何年も夫人と離れて暮らしており、かなり寂しい生活であつた。美しい少年に目が向いたのも無理はないのではと……」
「何？ヘルダーは男色家であつたのか？」
驚愕と嫌悪感をない交ぜにしたシュザンナの質問に、グレゴール・フォン・クルムハツハ少佐は、黄色く眼を光らせて、やや意地悪い微笑みを浮かべた。

「さあ、それは小官には判りかねます。ただ、人と申すものは、少しでも面白おかしく人の行動を脚色したがるものでございませぬから、まあ、とにかく、グリーニューベルト伯爵夫人の弟御は、寢室に連れ込みにあつたといふ相手と見られましても不思議ではございません。理由は言わずとも判りてございませう……」

「その辺りの痴話喧嘩が元で、ミューゼル少尉がヘルダー大佐を殺害したのではないが、それならば、マーテル大佐がこの問題を封印したのも納得できる」といふのが、私が聞いた噂でございます。」
「では、では、妾の名前が取り沙汰されたりはしておらぬのじゃな？」
クルムハツハ少佐はシュザンナのその言葉で真実を悟つた。彼は、決して愚鈍な人間ではなかつたし、言葉尻を捕らえて真実を導き出すのは、彼の仕事といつても良かった。
「はい、侯爵夫人のお名前は、一切出てはおりませぬ。」

少佐が確約すると同時に、クルムハツハ子爵が息子に替つて話を引き継いだ。
「如何でございます、侯爵夫人。この噂、侯爵夫人のお役に立ちませぬか？私的な理由で上官を殺したとなれば、如何にグリーニューベルト伯爵夫人の弟と言へど、銃殺は免れませぬ。また、グリーニューベルト伯爵夫人に対しても、痛手となりましよう。まして、その私的な理由といふのが、男色にまつわる痴話喧嘩となれば……」
「しかし、単なる噂では銃殺には出来まい？証拠が必要ではないのか？」
B3、ペー・ドライは既に勝ち、當時を知る者は殆どいない。どうするつもりか、といふシュザンナの疑問は、クルムハツハ子爵父子にとつても、簡単に解決できる問題ではなかつた。

暫くの間、居間に静寂が流れた。最も、自らの所有する脳細胞を忙しく立ち働かせていたのはシュザンナであつた。あの女とあの女の弟に関わることは、そのまま自分の人生を左右する。真剣に考えざるをえなかつたのである。やがて、彼女は、クルムハツハ子爵とその息子に向かつて、彼女の頭の中に構築された解決案を切り出した。
「クルムハツハ少佐、妾があなたの後を盾になる故、そなたが、その証拠を掴んで来ることは出来ぬか？」

「証拠を掴んでこい？それは一体？」
「あの孺子、こそ、の許へ行き、そなた直々に、あの孺子、こそ、の埃を叩き出して欲しいのじゃ。」
「成る程……」
クルムハツハ少佐の眼が意地の悪い光を湛えて輝いた。
「侯爵夫人の知謀は素晴らしいものでございます。私などは、相手がグリーニューベルト伯爵夫人の弟だといふことで、些か慎重になりすぎた嫌いがあつたかも知れませぬ。お任せ下さい。証拠など何とでもなおります。」
「何とでも……」
「はい。」
シュザンナの問いに、クルムハツハ子爵は自信あり気に応じた。

「まずは、本人に聞き出しましよつ。それから彼と一緒にいたという幼年学校の同期生にも。今までの処、どうも、この二人は仲が良いようですが、同年齢の上官といふものは、下位の者から見れば、穢な存在です。内心では、機会があればその脚をすくつてやりたいと思つているかも知れませぬ。そうであれば、今は彼の艦の副長をしているといふその少年から、我々にとつて有益な情報を得ることが出来るかも知れませぬ。それでも駄目な場合は……」
「どうするのじゃ……」
「我々の求める証拠を作るまでのことです。私が『調査』の為に自由に動き回れるよう便宜を図つていただけませんか？」
「いいも、それで、妾の長年の懸念が消失するといふのであれば、どれだけであらうと協力は惜しまぬ。期待してあるぞ、クルムハツハ少佐。この件が片付いたら、そなたは中佐じゃ。その後のことも、妾に任せておくがよい。クルムハツハ子爵、そなたは誠に良い御息をお持ちじゃ。」

三人の人間が、それぞれに満足し、外の春の光より明るい自分の未来を描いてい

た。

帝国暦四八三年五月六日は、帝国にとつて、そしてシュザンナにとつて、忘れ得ぬ恥辱の日となる。帝国にとつては、難攻不落と豪語していたイゼルローン要塞の外壁が、叛徒達によつて初めて傷つけられた日であり、シュザンナにとつては、またしても「あの女」の弟である「金鬚の孺子」が自分の放つた刺客の手をはねのけた日となつたからである。

自由惑星同盟を僭称する叛徒達の第五次イゼルローン遠征部隊は、雷神の鎚トウル・ハンマーの射程内に引きずり込むべく後退する要塞駐留艦隊を並行追撃することによつて、主砲の使用を封じ、ウラン238ミサイルと液体ヘリウムを搭載した三隻の無人戦艦を要塞にぶつけることに成功した。要塞を死守するという大義の下、雷神の鎚トウル・ハンマーが発射された為、駐留艦隊も大きな被害を受け、駐留艦隊司令官ワルテンベルク大將をはじめ、多くの将官が宇宙空間に漂つた原子の粒に帰した。しかし、駆逐艦に乗っていた「あの女」の弟の名前は戦死者名簿の中に無く、代わりに、本来戦闘とは関係無い善の憲兵が数名、名前を連ねていた。その中に、グレゴール・フォン・クルムハツ少佐の名前もあったのである。彼は、シュザンナに頼ることなく、自らの命という代価によつて、大佐に昇進したのだ。

更にシュザンナを激昂させたのが、「金鬚の孺子」こそ、「の昇進の知らせであつた。駆逐艦一隻で敵の巡航艦を撃沈させた武勳により、少佐から中佐に階級を上げるという。わずか一年足らずの間に、四階級昇進したことになる。これは、大貴族の子弟の中にも前例のないことであつた。「何と言つてか！あの姉弟は、きつと天使ではなく、悪魔に守護されておるに違いない――！」

シュザンナには、金鬚の姉弟を守っている大きな黒い翼が眼に見えるようであつた。その翼は、じりじりと、帝国全土をその下に抱え込もうとしていた。

(何とかせねば……何とかせねば……。このままでは帝国があつた者達に滅ぼされてしまふ。悪魔に帝国を乗っ取られてしまふ……)

シュザンナが言つたその悪魔の翼がどうかは判らないが、帝国全土を暗い影が覆つたのはそれから数日月後の事であつた。皇太子ルードヴィヒの急逝である。

皇太子は妃を喪つてから、生きるということに興味を無くしてしまつたかのようであつた。あれ程、皇太子妃が心を砕いた健康も、投げやりな生活の中で急激に彼の肉体から縁遠くなつた。

もともと、幼い頃より病弱で、侍医や近侍の者が細心の注意を払つて保つてきた命である。本人が彼らの忠告を無視するようになつては、如何ともし難かつた。

皇太子の死因については、色々な憶測が飛び交つた。姉やその夫達が、皇太子が美権を握る前に彼を葬ることで、自分の娘に少しでも玉座を引き寄せようとしたのだ、妃を喪つた皇太子が、発作的に自殺したのだといった類のものである。

こつこつと噂が流れたのは、彼の死が、然たる病死といふよりは、事故死に近いものであつたからであらう。彼は、持病であつた喘息の発作を起こして亡くなつたのであるが、もつと厳密にいうならば、喘息の発作の苦しさに、医師から与えられていた薬を許容量を超えて使用した為、心臓に負担が掛かり、心不全を起こしたのが、医学的死因である。

噂を流した者達は、この「許容量を超えて」という点に注目したのであらう。二人の皇女とその夫が、何らかの操作によつて皇太子に許容量を越えた薬剤を摂取させ

ただ、とか、結果を知つていながら、皇太子は、敢えて自分から大量の薬剤を使つたのだ、とか、皇太子の死をドラマチックに仕立てる事は可能であつたから。

しかし、この件については、宮内省から宮廷医達の厳正なる調査の結果、全くの偶発的な悲劇であつたと発表があり、一件落着となつた。それらの噂が、宮廷の柱の陰で囁かれることはあつても、堂々と語られることは封じられたのである。

余りに早く、また急な皇太子の逝去は、皇帝の後継者問題に真空地帯を生んだ。彼の息子は、幼すぎるという理由で皇太子孫としてたてるとは時期尚早とされた。もし、母親が権門の出であつたならば、そのような意見は一蹴されたに違いないのであるが、しかし、見方によつては、それ故に彼は幼い命を狙われずに済んだのかも知れない。

確固たる後継者なしに、「トルテンバウム王朝は、行き先の見えない歴史の大海を漂流し続ける。時に帝国暦四八四年三月のことである。

一七・朽ちゆく大樹

皇太子の早世、後ろ盾のない皇嫡孫、権門中の権門が抱える皇帝の二人の孫娘、そして新旧の寵姫達……急激に透明度が下がつた未来への展望は、その後、益々混沌の度合いを深めていつた。

次に宮廷を、つまりは帝国全土を牛耳るのは誰か？宮廷貴族達の関心は、もつぱらそちらの方に向いており、帝都から遠く離れた場所が続いている戦争や、その為に平民達が被わされている人的、経済的負担に思いを致す者は、殆どいなかった。

彼らにとつて、戦争は遙か彼方の事柄で彼らの日常とは直接関つてくるようなことは稀であり、現実感が希薄であつたのかも知れない。勿論、大貴族の子弟にも軍人は多かつたのだが、彼らは特権を利用して前線勤務を避ける傾向が強く、また、もし強い功名心を持つて前線にその身を置いても一〇人中九人までは、最初の戦闘が終わると、安全圏まで逃げ帰つてしまつた。

この年、帝国軍宇宙艦隊司令官に就任した「トル・フォン・ミョッケンベルグ元帥は、自身も伯爵家の次男で、権門の家柄であつたが、また、生粋の軍人でもあつた彼も、あまたの貴族達同様、自分達特権階級の優越性を疑つたことはなく、決して平民達に対して同情しては居ない。しかし、宮廷内の権力争いについては面白からぬ気持ちを持つていたようである。

「我々は軍人だ。叛徒共と戦い、これを殲滅するのは本懐とするところである。しかし、自分達を叛徒の群から守つて軍の重要性に、新無黨派、ノイエ・サンズシーにたむろする連中は、今少し気が付いても良いのではないか？つまらぬ権力争いの道具に、軍の人事を使つて欲しくはない。指揮官として送り込むのならば、もう少しましな人材を送つて欲しいものだ。戦場は実力がものをいう世界なのだから。」

艦隊の組織がまるで三次元チェスの盤であるかのように、宮廷内の各派閥から高級士官として送り込まれてくる貴族の子弟の大半に、彼は決して満足できなかった。彼にとつて艦隊は我が子同然であり、それが能力のない部下の為に、転ばなくとも良いところを転び、傷つかなくとも良いところで傷つくの看過できなかったのである。しかし、彼は完全なる実力主義者とはなり得なかつた。決して人を見る眼がなかつた訳ではないが、彼の眼とその眼に映る光景との間には、「階級制度」という色眼鏡が掛かつており、どんなに能力があるつと

も、平民や下級貴族が大貴族を指揮する姿を想像することは出来なかつたからである。

彼が理性の面でも感情の面でも認めることが出来るのは、血統がどうあろうと無能な者は無能だ、ということまでであり、血統がどうあろうと有能な者は有能である、というもう一つの眞実は、理性の面では認めることが出来ても、感情が許さなかつた。

帝国軍では、第二次ティアマト会戦後「軍務省にとつて涼すべき四分」の結果失われた人材を補充する為に、それまでの前例を無視する形で、一〇年ほどの間は平民出身の将官の誕生が相次いだ。しかしミュッケンベルガーにとつて幸いであつたことに、彼が士官学校を首席で卒業し、少尉として任官した頃は、第二次ティアマト会戦から五〇〇日近い日にちが経過してあり、ブルース・アッシュビー率いる「叛徒」達によつて失われた高級士官達の穴埋めも殆ど完了していた。一旦緩んだ階級格差の反動として、平民出身の高級士官達は様々な方法で排除されつつあり、ミュッケンベルガーの感情は、さほど傷つけられることなく、軍人として三四年間を過ごしていた。現在、帝国軍三長官の一人となつた彼の下に、平民出身の艦隊指揮官はいない。

さてこの頃、新無窮宮、ノイエ・サンスリー、西苑にあるシュザンナの館は、すっかりかつての賑わいを失つていた。以前ならば、皇帝への取りなしを頼む人々が、彼女の館のホールから外へ溢れ出さんばかりであつたのに、今や日参する者と言へば、仕立屋か宝石屋、あとはグレイザーのようにグリーンエルト伯爵夫人とその弟の動向を探らせている人間くらいのものである。彼女の館がそのように寂しくなつたことの一因には、老練な宮内省官吏でもあつた

執事ヘンドリクスが、急な心臓発作の為に他界したことも関係していたのかも知れない。彼の後任として執事になつたのは、入省して一〇年に満たない青年といつても通用する人物であつた。宮廷内の細部に至るまで熟知し、それを積極的に活用していた前任者とは違い、帝国騎士の中にあつては格式があることされる家に生まれたその青年は、おっとりとした性格で、余り人間関係に気を使う方ではなかつた。また、だからこそ、最近、とみに激昂しやすくなつていゝシュザンナの許に送られてきたのだとも言えた。少々、鈍感なくらいでなければ、ベーネミュンデ邸の執事は務まらないと、宮内省の幹部達は判断したのである。

一方グリーンエルト邸の方も、決して賑やかとは言えない日常を送つていた。これは、彼女が宮廷内で派閥を作ろうとなつた事とも関係している。彼女は、自分が皇帝の寵愛を受けていることは知つていたが、決して、それを使つて宮廷内に自分の影響力を及ぼそうとはしなかつた。それは、おそらく彼女に取り得る最も正しい選択であつたに違いない。宮廷内での権力争いから少しでも離れた場所に身を置くことで、彼女は、自分達の出自以外に、自分と弟への攻撃の理由を与えなかつたのである。もし、彼女が派閥を組み、皇帝を通して自分の影響力を私邸の外に与えたら、対抗する派閥からの報復が必ずやあつたであらう。彼女は、自分の居場所を西苑の、それも私邸のみに限局することで、自分に向けられる敵意を最小限に抑え、積極的なものとは言えぬまでも、当時の閣僚達の好感を得たのだ。

しかし、シュザンナの眼から見れば、その振る舞いすらも、アンネローゼの自己中心的な所作と映る。「あの女は、皇帝の御寵愛を、全て我が身に独占するつもりなのじゃ！誰にも、その余光すら与えぬつもりと見える。あの金髪

の孺子、こそつ、以外にはな。」
彼女はグレイザーにそう言つて、アンネローゼを糾弾したが、もし、アンネローゼが皇帝に影響力を行使して政、まつりことに口出しをしていたならば、間違いなくそれも、皇帝の威光を嵩に着た身の程知らずの振る舞いと弾劾したに違いない。数少ないグリーンエルト邸の客人は、ベーネミュンデ邸と同じく、いつも同じ顔ぶれであつた。しかし、主人と客人の関係は全く異なる。ベーネミュンデ邸のそれは、あくまでもシュザンナにとつて主従関係であつた。アンネローゼにとつて、自分の訪問者の関係は、友人であり、あくまでも対等であつた。

彼女を訪れる友人は、この頃、マグダレーナ・フォン・ヴェストパレ男爵夫人以外に、新たにドロテア・フォン・シャウハウゼン子爵夫人が加わつてゐる。彼女は平民出身で、幾多の障害を乗り越えてシャウハウゼン子爵が獲得した愛妻であり、宮廷に入入りするようになったのは、またつい最近のことであつた。「ヴェストパレ男爵夫人は、結婚なさらないの？」
新妻の子爵夫人は、自分と同じ幸せを黒髪の友人にも味あわせたいと思つたのであつたか？こつ尋ねたことがある。質問を発した者によつては、嫌みとすら取られかねない質問であつたが、シャウハウゼン子爵夫妻は、宮廷にあつて、白い鴉、からすと同じくらい稀有な、善良な人種として知られてゐた為、それは善意からとしか受け手に取られなかつた。

「少なくとも、今は夫を持ちたいとは思われないわね。」
やや首をすくめ、両の掌を上に向けて、マグダレーナはそう応えた。「あら、どつして？貴女みたいにきれいで頭も良くて、なんでも出来る人だつたら、選り取り見取りでしょつに。」

ドロテアはそう言つて不忠議が、アンネローゼは何も言わず、ただ二人のやり取りを穏やかな表情のまま見つめてゐる。彼女にとつて、その話題は自分が入り込めない聖域として、精神の地図に記載されてゐる。「選り取り見取り、と言つても、並んでゐるのがくてもない代物はかりでは、買つ気にならないわ。品物も男もね。大体、宮廷にいる男共と来たら、女の悪口を言つしか能の無い人ばかり多くて、とてもとても一緒に暮らしたいとは思えない。」
この言葉に、聞き手二人は顔を見合わせ、そつ、つい先日、あるパーティの席上で、マグダレーナはある門閥貴族の男性に、

「女の癖に横紙破りな。」
と非難され、今口にしたとおなじ台詞を叩き返したのである。衆目の会するところ、やりこめられたその男性は、それから暫く、社交界に顔を出さなかつた。
しかし、マグダレーナも、決して男性に対して興味が無い訳では無いらしく、少し表情を緩めると、黒い瞳を悪戯っぽく輝かせてこつ言つた。

「むしろね、なんの門地も無いよつな、帝国騎士や平民の男性の方が私には面白いわ。彼らの中には、少年時代を過ぎて、まだ自由な発想を持ち、既製の概念に縛られていない人間がいるのよ。今のところ私が付き合つたことがあるのは芸術家はかりだけれど、きつと、他にもいるに違いないわ。彼らの方が、私と波長が合つてゐると思うの。」
「でも、いるかしら？貴女のお気に入りの芸術家以外にそんな人が、芸術を生業なりわい、としてゐる人は、他の人が出来ないことをやって見せないといけなから、独創的にもなるでしよつけれど……。」
シャウハウゼン子爵夫人は、その点に関しては懐疑的であつた。彼女は善良ではあつ

だが、その思考は決して独創的とは言えず、良く言えば常識人であり、悪く言えば退屈散歩手前であった。

「ええ。」
ヴェストパーレ男爵夫人はシャウハウゼン子爵夫人に頷いてから、アンネローゼの方を向いた。

「例えば貴女の弟さんよ、アンネローゼ、今はまだ大佐だけれど、この間、母校で起こった不祥事を見事解決して、今度准将になるって聞いたわ。一七歳の閣下なんて、ゴールデンバウム王朝始まって以来の事でしょう？ みんなどは、全て貴女の七光だなんて言っているけれど、私にはそうは思えない。弟さんには、これまでの常識を越えた何かが働いていると思つた。そして、あの赤毛のハンサムさん……。」

「そう、貴女の弟さんのお友達からも、私は輝きを感じるのよ。上手く言えないけれど、これは、もつと勤ね。何か新しいものを生み出す者のみが放つ光を感じる、とても言つておきましょつか。」

マグダレーナは、「独創的」「創作的」という言葉が、現王朝に於いて持つ危険性を知っていた。この国では伝統を重んじる余り、変化が忌避される。そして、変化をもたらす者は、国体を乱す罪人として処断されかねない。マグダレーナは話題を変えた。

「アンネローゼ、もつと切れ、パイを頂いてもいいかしら？ うちの料理人でも、こつは上手く焼けないわ。」

「ええ、どうぞ、男爵夫人。」
アンネローゼも、まるで、テーブルの上の菓子がずっと話題であつたかのように、マグダレーナの求めに応じてパイを切り分けると、熱いコーヒートを添えて黒髪の友人に勧めた。

ヴェストパーレ男爵夫人がどこからか仕

入れてきた情報は、その後間もなく、真実であつたと知れることになる。ラインハルト・フォン・ミューゼルは、若年一七歳にして大佐から准将へと階級を進めたのである。

大佐から准将へ……これは、軍籍にあるものにとつて、一つの閑所である。

一兵卒からの叩き上げの者の場合、最初の閑門は準尉と少尉の間が存在する。下士官から士官への閑門である。それを通過しても、時間との戦いの末、大佐を自分の軍歴の最後を締めくくる階級とする者は多い。後に、自由惑星同盟最後の宿将と謳われるアレクサンデル・ビュコック元帥が、「魔術師」ヤンと共に、伝説的な人物として、死後、かつての敵味方どちらの陣営からも敬愛されるようになった理由の一つは彼の為人、ひととなり、もさることながら、一兵卒から元帥へという脅威的な未達に、人々が夢を見るからなのかも知れない。

士官学校の卒業生は、最初から少尉として任官するため、第一閑門については問題がない。しかし、彼らにも乗り越えねばならない壁がある。それを乗り越えるために必要なのが、大佐から准将へのパスポートであつた。准将は、その権限は未だに小さいが、更に上を目指すための大切な足場なのである。

ラインハルト・フォン・ミューゼルの昇進理由は、公然とは語られなかったが、マグダレーナの得た情報通り、この年四月に起こった幼年学校での殺人事件を、見事解決に導いた功績によるものであつたらしい。

事件解決から何カ月も遅れて昇進が発表されたのは、その事件が現職の校長による犯行であつたこと、事件が起こつた学年の首席を、入学以来守り通してきた生徒が、実は赤緑色盲という根絶された筈の「劣悪な」遺伝子の持ち主であつた為である。これはどちらも帝国軍部の威信を損なう不祥事であつた為、帝国軍幹部として

は表沙汰にすることは避けねばならなかつた。その為、事件のほとぼりが冷めるまでラインハルト・フォン・ミューゼルの昇進は見送られていたのである。

「この情報を得たシュザンナは、当然の如く不機嫌の極みであつた。」

「閣下じゃと？ 閣下じゃと？」

サロンの中で、折りたたんだ扇子を手にしたまま歩き回る。彼女のそんな姿を、やや俯き加減の姿勢のまま、眼だけでグレーザー医師は追っていた。こんな時に声を掛けることの愚を、彼は経験によつて、すつかり学習済みである。

ドレスの衣擦れの音が止み、シュザンナの手の中で、豪華な扇子が部屋の空気に鞭をくれた。

「一七歳の閣下じゃと？ あの孺子、こぞつが！？ しかも、その昇進の理由が、劣悪な遺伝子を有する者が幼年学校に潜り込んでおつたのを発見したからと申すのか？ 汚らわしい！ どこが軍功じゃ！」
額の汗をハンカチで拭いながら、グレーザーはシュザンナの言葉を訂正した。
「それは付随的なものに過ぎませぬ、侯爵夫人、ミューゼル准将の昇進の理由は、イエーガー校長の殺人を見逃さなかつた功績によるもので……。」

グレーザーは、自分を睨み付けるシュザンナの瞳に気が付き、慌てて口を開きかけた。
「判つてある。しかし、それにしても、校長はあの孺子、こぞつ、の恩師だと言つてはないか？ 本来ならば恩師を庇つて当然のところ、その罪状を暴き立て、さも得意げに憲兵隊に突き出す、その心根が許せぬのじゃ。己の栄達しか考えておらぬ証拠じゃ。放校処分になつた生徒達も気の毒じゃ。自分が障害者であるという事を隠し、栄えある帝国軍幼年学校に入ったことは許せぬ所業だし、祖父の罪を孫が償つるのは当然じゃが、あのような者の昇進にそれを利用

されるとは……。」

「しかし、親兄弟であるつと、罪人を匿うことはならぬ、というのが決まりでございますから……。」

「教え子であれば、恩師の罪を自分が被つても救つのが筋ではないか？ この殺人は自分がやりましたと言え、それで良い。」

「それは無理というものでございます。殺人が行われた時、ミューゼル准将、いや、まだその時はミューゼル大佐でございましたな、彼が父親の葬儀の為に幼年学校を離れておりましたことには、複数の証人がおります。宮内省の人間も、彼の姿を墓地で見っておりますよ……。」

グレーザーの言葉は、「あの女」の弟の擁護とシュザンナには映つた。

「グレーザー、そなたはあの孺子、こぞつの肩を持つのか？」

「め、滅相もございません。」
「もつ、道理も何もあつたものではない。」
と、グレーザーは思つた。この女性にあるのは、ただ、あの「グリューネルト伯爵夫人」とその弟の破滅を望む心だけで、その前では、法も常識も、影が薄くなりつつある事を、彼は肌で感じていた。

グレーザーが辞去した後、シュザンナは私室に引きこもつた。サイドテーブルの上には、かつて、フリードリヒ四世が彼女のために作らせたオルゴールが佇んでいる。

シュザンナはそつと蓋を開いた。中から姿を現したのは、ゆつたりとしたメロデーと赤みを帯びた金髪の小さな房であつた。シュザンナは、その髪の毛の塊を両手に包み込むようにすると、その持ち主の香りを確かめるかのように、愛しげに、自らの鼻先にあてがつた。

「マクシミリアン、そなたが生きておれば、今年には幼年学校に進んでいたかも知れぬ。陛下の血を引くそなたがいれば、きつと、

あのような不祥事は、畏れ多くて起さずと考える輩もおらなんだであらう。そなたが入学するかも知れぬとあれば、数年前から、入学者に対する資格試験はもつと厳格に行われ、色言などという劣悪な遣伝子を持つ者の入学が見過ごされる筈もなかつたであらう。そうすれば、あの金髪の孺子が、手柄顔で昇進などということも起さなんだ筈しよ。そなたがいないせいで、帝国はほとんど悪い方向に向かつて行く。母を許して給れ。そなたを守つてやれなんだ母を。しかし、母は、そなたの分も、きつと帝国を守つてみせる。下賤な奴等の好きにはさせぬ。」

どれくらいそうしていただろうか？ シュザンナは髪の毛の束をオルゴールに返し蓋を閉めた。一度眼を閉じ、再び開いた時、シュザンナの瞳の中に、先ほどの柔らかな光は無かつた。ただ、怨嗟の炎だけが、その瞳に尖锐な輝きを与えていた。

一八・薔薇の騎士 ローゼンリッター

帝国暦四八五年初頭、国務尚書リヒテンラーデ侯は、腹心のゲルラッハと共に、宮内尚書ノイケル、軍務尚書エレンヘルクを執務室に迎えていた。

「困ったことになったものだ…。」
「しかし、本当のですか、その噂は？」
「判らぬ。しかし、王朝のためには、この噂今のうちに何とかして消すに限る。火は小さいうちに消せと申すではないか。」
彼らに肩間にしわを寄せて悩ませる、或いは悩んでいるふりをさせているのは、最近宮廷や軍部の極々一部で囁かれるようになった流言であった。

「ヘルマン・フォン・リユーネブルク准将は、ゴールデンバウム帝室に繋がるさる御方の落

とし胤ではないか？」
というのが、その中身である。

ヘルマン・フォン・リユーネブルクなる人物は帝国暦四八二年も押し追つた頃、カプチエランカにおいて、戦闘中に同盟側から帝国側に亡命し、大佐として任官した。それから三年の間に、一階級昇進し、この時の階級は准将である。

彼の亡命は、敵味方の双方に少なからぬ波紋を投げかけた。リユーネブルクは、「叛乱軍」において、帝国から同盟に亡命した者や、その子弟で構成される「悪名高い」薔薇の騎士連隊、ローゼンリッターの第一代連隊長であつたからである。だがそれはあくまでも「現場」に於ける「士気モラル」の問題であり、帝国の中枢部を占める人々にとっては、取るに足らない出来事ではない。そのよきなことは、これまでも何回となく繰り返されて来た。彼の前にも、五人の連隊長が、「我が非を認め悔い改めて」帝国に帰順したのだ。

しかし、彼が名乗っているのが母方の姓であり、しかもそれが、途絶したとはいえず、歴とした伯爵家だという情報が流れると、宮廷内には、この逆亡命者に対して前の五人に対して感じなかつた政治的な注意が喚起された。一体、何の為に帰つてきたのか、という疑問である。

（母方の姓を棄つているといことは、奴は、おそらく、正式の婚姻によつて生まれ、子供ではあるまい。しかも、奴の出生が、母親の亡命前のことだとすると…）

銀河帝国の開祖ドルフは、いわゆる「性的モラル」に対しては極めて厳格であつた。その現れが、同性愛者に対する過酷なまでの弾圧であらう。彼らは、国を滅ぼす元凶の一つとして、厳しく取り締まれたのである。ドルフは、自分がその生涯に何人かの寵姫を持った為か、男性側の女性関係に対しては、かなり鷹揚なところがあつた。優秀な男性には、多くの子孫を残す権

利と義務がある、というのがその理由である。しかし、その一方で、子供を産む側の女性に対してはそうではなかつた。彼にとつて女性とは、優れた男性の血統を維持する為の道具であつたから、女性の胎内に宿つた命の起源は明確にしておく必要があつた。女性が勝手にどこかの誰とも判らぬ男と関係を持ち、その子を産むような事態は、忌避すべき事態であり、殊更に、女性の貞操については厳しくならざるを得なかつたのである。

その結果として、私生児に対しては、正式な婚姻によつて生まれた者ではないとして、法の上でも、歴然とした差別が行われている。それから逃れられるとしたり、それは、その子の父親が余程の権力を握つており、しかも、その子のことを公然と認知した場合のみに限られるのだ。

そんな社会の中で、未婚の貴族令嬢が懐妊、出産などということは、著しく家名を汚すことになる。余程のメリットがある場合を除いて、無理にでも墮胎させるか、それが出来ぬ場合であっても、誕生直後に殺すなり、養子に出すなり、しかるべく処置するのが、決して表には出せぬが、貴族社会に於ける常識であつた。ならば、身一つとなつた後も、母親と一緒に暮らすことを許されたヘルマン・フォン・リユーネブルクといふ男の誕生は、母親たる伯爵令嬢を保護下に置いていたリユーネブルク伯にとつて、何らかのメリットがあるものだったのだと考ええるのも、また想像の域にある。つまり、その子の父親が、「余程の権力を握っているか、或いは握るであらう人物」であり、その子のことを、我が子として公的に認知する筈だつたという確信であり、更に、その事が、一家にとつて利益となり得るといふ計算である。

それが、リユーネブルクの父親が帝室に繋がる人物だという憶測を生み、噂の伝播者達が、リユーネブルクの年齢及び亡命

前の彼の母親についての記憶をまさぐるうちに、更に、具体的な人物の名前にぶつかった。先帝オトフリート四世の第一皇子リヒャルトである。

ヘルマン・フォン・リユーネブルクを連れて亡命した女性の父、リユーネブルクから見れば祖父に当たる人物は、当時、末弟クレメンス大公と皇位を巡つて激しく対立していたリヒャルトの熱烈な支持者の一人であつた。そして、リヒャルトの妃の有力候補として、彼の娘の名が上がつつたことも事実である。

だが、その令嬢は、一〇歳を出たばかりの若さで、独身のまま、突然社交界から姿を消してしまつた。伯爵は、令嬢を、病氣療養の為にオーディンから五〇光年ほど離れた領地へ送つたのだと説明したが、その後、令嬢の姿を見た者は宮廷内にはない。程なく、皇太子リヒャルトは、父帝の死逆を企てたとの理由で死を賜り、彼に組み込ま一派も、主だつた者達は一族諸共正の対象となつた。勿論、リユーネブルク伯爵とその一門も例外ではない。だが、令嬢の名は死者の列に記されてはいない。官憲がリユーネブルク伯領へ踏み込んだ時、邸内は既にもぬけの殻であり、令嬢の姿も忽然と消えていたのである。全ては三年前のことになる。

「それにしても、一体誰がそのようなことを言い出したのでございますか？ 本人が広めておるとしたら、これははつきりとした不敬罪ですぞ。確かな証拠でもあれば別ですが…。」

エレンベルクの質問に、リヒテンラーデ侯は苦笑しげに顔を歪めて見せた。
「本当の火元は判らぬ。また、汗顔について、卿の言つ、確かな証拠」を出されては、ちと困ることになる。」
「しかし、御落胤騒ぎなど、これまでにもあつたこと。それ程深刻に受け止められる必要がありましょつか？」

宮内尚書の言葉に、ゲルラッハが応じた。「宮内尚書、國務尚書閣下が心配しておられるのは、『この時期、だからなのです。現在、陛下には世継ぎたる男子がおられませぬ。そこへ、兄君の御落胤を名乗る男が登場する。リヒヤルト殿下の無罪が明らかとなつております以上、その者が本当にリヒヤルト殿下の御子と判明すれば、誰もその者の皇位継承権を認めぬ訳にはいきませぬ。』」

「良いではないか。むしろその方が、宮内省としては安心できる。このままお世継ぎが無い状態が続くより、むしろありがたい位じゃ。」

ノイケルンの言葉は、烈気を孕んだリヒヤルト侯の声で遮られた。

「卿は判つておらぬやうじゃな。もし、リヒヤルト殿下に繋がる者が皇位に付いた場合、今、ここに居つておる我々が、どのような立場に立たされることになるか。我々はリヒヤルト殿下一派からも、クレメンツ殿下一派からも、憎まれて当然の人間よ。自分達の推す皇子こそ、次の皇帝に相応しいと思つておつたのに、実際に皇位に就かれたのは人望薄かつたフリードリヒ殿下。現在の主だつた者達は、陛下も含め、彼らから見れば、自分達の手にあるべき正統な権利を奪つた仇と映らつて。帝位に就かぬまでも、もし、その者が権力を握るよつなことになるれば、我々を排除しようとするに違いない。」

室内に静寂が立ちこめた。

「まさか、その為に叛徒どもの許より立ち戻つたではありませんまいな？我々に復讐する為に。」

「馬鹿なことを！そのよつなことの出来よう筈がないではないか！帝国には、既にリユーネブルク家の縁者等誰も残つてはあらぬ。皆、墓石の下か、叛徒共の所だ。立ち戻つたとしても、たつた一人で何が出来よう？少なくとも、伯爵家の血を引いておる

のだ。それが判らぬ程、愚かな人間ではあるまい。」

宮内尚書と軍務尚書のやり取りに、閣僚筆頭たる人物が割つて入つた。

「リユーネブルクなる男が、リヒヤルト殿下の血を受け継いでいるかどうかは判らぬ。リユーネブルク伯の令嬢が、懐妊故に社交界から身を隠したという証拠もない。だがフリードリヒ殿下より遙かに勤勉で教養もあつた兄君が皇帝になつておられれば、という声は、未だに巷に溢れておる。無実の罪で死に追いやられた悲劇の皇太子への同情もある。そこへ、御落胤ではないかという男が現れたらどうなる？人は、薄幸の貴公子には弱い。いや、むしろ自ら進んで、そついつ人間を作り出したがるものだ。状況証拠は揃つておる。奴を抱き出して、我々を追い落としに掛かる輩が、そのうち必ず現れよう。」

「しかし、アルベルト大公とは異なり、彼は軍人です。風采や弁舌だけでは支持者は得られません。何より、武人としての実績能力が認められないと、その点、如何なのか、軍務尚書？彼の軍部での評判は？」

ノイケルンの質問に、干レンベルクが答へた。

「調べてみたところ、奴の軍隊内の評判は決して芳しいものではないよつですな。帝国が如何に寛大かを知らしめる為に、彼のような亡命者には、待遇の面でかなりの配慮がなされておるのだが、それだけでは不服として、更に上の階級を狙つておるらしい。奴の上官に言わせれば、礼を尽くしているように見えるが、どこか不遜な態度が鼻に付く、というのです。軍人としての能力となると、正直、私にも判りかねる。だが、敵ながら、あの驍勇を以て鳴る薔薇の騎士、ローゼンリッターの連隊長まで務めた男だ。全くの無能者ではないと考えた方がよい。」

「今はまだ、リユーネブルクの後ろ盾になりそつな人間は、縁戚関係にあるハルテンベルク伯位のものですが、武勳を挙げる機会に恵まれれば、将来は判りませぬな。」

ゲルラッハが腕を組んで、貴族の縁戚関係の資料に眼を通しながら呻いた。

「警務局長の干リッヒ・フォン・ハルテンベルクですな？彼はなかなかの切れ者で、内務尚書になるのも時間の問題と言われておりますな。そつなれば、四四七年生まれと若いだけに、長期に渡つてその座を占めることでしょう。大過なく勤め上げれば、國務尚書も夢ではない。財務尚書にとつては、手強い競争相手、という訳ですな。」

ノイケルンの最後の一言を、ゲルラッハは彼にしては珍しく、少々気色ばんだ調子で否定した。

「滅相もない。私などは、財務尚書でさえも身に余ると思つておりますのに。もし、彼が國務尚書になるのでしたら、大人しくそれに従つつもりでございますよ。宮内尚書、しかし、もし、ハルテンベルク伯の政治力に目を付けて、閥閥を組んだとしたら、はリユーネブルクという男、かなりしたたかな人間でございますな。」

ゲルラッハの言葉は、そのまま、リユーネブルクとその夫人を知る者達の間での常識であつた。

リユーネブルクの妻は、エリザベトといい、淡い褐色の髪と、同じく褐色の美しい瞳を持つた有名な佳人であつたが、二〇歳を少し出た頃、熱烈な恋愛をした。勿論、相手はリユーネブルクではない。その恋人は三年前にカプチエラン力で戦死している。それ以来、世捨て人のよつになつてしまひ、心配した伯爵が何度か新しい縁談を示したのだが、決して承知、ヤーの返事を与えようとはしなかつた。それが、一五歳の時、意外なほどあつさりリユーネブルクと結婚したのである。その理由を、強引にリユーネブルクが彼女に近づき、「事実」を先行

させた為と周囲は見えていた。更にその強引さの原因は、「どつしよつもない程の狂おしい恋心」ではなく、「兄である伯爵の政治的影響力が欲しかつただけ」といつのが、もつぱらの評判である。

「人格的にも問題あり、ですか？あまり、帝国にとつて好ましい人間とは言えませぬな。」

「國務尚書のお考えは？我々を集められたからには、何かお考えがあつてのことと推察いたしますが……。」

干レンベルク元帥が、リヒヤルト侯の意見を促した。

「ふむ、真偽のほどは別として、このよつな噂が流れること自体、帝国にとつて危険な事じゃ。出来ることならば、静かに消えて貰いたい。噂にも、噂の主にもな。」

「それで？」

「これまで、奴はどこに配属されていたのか？前線ではあるまい？」

「左様、帝都防衛隊の陸戦部隊所属、となつております。」

軍務尚書は、手許の資料を見ながら応へた。

「奴めを前線に出してやるが良い。出来るだけ無能な指揮官の許でな。上手く行けば、叛徒どもが片付けてくれるだろう。」

干レンベルクは、片眼鏡のレンズを光らせて、首肯した。

数時間後、軍務省人事局長ハウプト中將は、ヘルマン・フォン・リユーネブルク海將を、グリーンメルスハウゼン艦隊の陸戦部隊に配属するよつにとの指示を受け取つた。手続きの為、コンピュータに登録されているリユーネブルクの個人ファイルを開いたオペレーターは、ふと既視感、デジャブに捕らわれた。戦死した場合の連絡するべき人物のリストも、そこには入つていたのであるが、その中に、知つた顔を発見したのであ

る。

（愛する者を、何度も、わざわざ安全な帝都から前線に送り出すなんて、この女性ひと は余程男運が悪いのか、それとも彼女がそういう運命を呼び寄せているのか…。）

そのオペレーターは、二年前にも、彼女をモニターの中で見ていた。人目を引く美貌の持ち主であったから、彼の頭蓋骨の中に組み込まれたコンピュータに、何の苦もなくコピーされていたのであろう。その時開いていた個人ファイルの持ち主の名前はカール・マチアス・フォン・フォルゲン、彼と彼女の続柄は婚約者となっていた。

（また、この女性の許に、戦死の知らせを送る羽目にならねばいいが…。）

オペレーターは、常ならば決して漫然なかつたであろう感傷に、一瞬陥りかけたが、自分の職務を果たす為、指先をキーボードの上で躍らせて、次の書類へと眼を移した。

帝国暦四八五年三月から五月に掛けて、ヴァンフリート星域では、戦いのための闘いの一つが繰り広げられた。別に、ヴァンフリート星域が軍事的に重要な拠点であるとか、資源の宝庫であるとか、彼らにとって価値のある場所であったからではない。しかし、彼らがつき込んだ兵力は両軍あわせて艦艇六万一千六〇〇隻、将兵七四三万五七〇〇名、前年交わされた戦闘の全てを凌駕する大規模なものとなった。

シュザンナにとって、この会戦の意義はどうでも良いことであった。彼女にとって興味があったのは、あの女の弟が斃れるかどうかであったからである。しかし、残念ながら今回も戦死者の名簿に彼の名前はなく、代わって彼の少将への昇進が載っていた。ヴァンフリート412で、叛徒達の基地司令官を生け捕りにした功績によるという。

（あのね、またしても…。）

齒噛みする彼女に、漸く愁眉を開かせた話題が聞こえてきたのは、戦闘の事後処理も済み、人事が確定した後のことであった。あの女の弟の、上司に当たるグリーンメルスハウゼン中将が大将に昇進する祝いのパーティーで、金髪の孺子を叩きのめすることする男が現れたというのである。

この情報をもたらした人物は、到底穏やかに談笑しているとはいえない。霧囲気でもテラスを抜けて奥庭へと向かう二名の姿を見掛けたのだと言った。パーティー会場での諍いの原因は、どうもその男の美しい奥方にあつたらしい、というのも、シュザンナを満足させた。

「ふん、如何にもあの女の弟のしそうな事じゃ。人妻に手を出すとは。姉弟揃って道徳心の欠片もないと見える。」

「はあ、しかし、私の聞いております限り、ミューゼル少将は女性関係には極めて潔癖で、これまでに浮いた話などないと言つてございましてが…。」

急遽、自毛から呼び寄せられたグレーザー医師は、そう言つて自分の頭の中に仕舞つてあるラインハルト・フォン・ミューゼルの交友関係を読み返した。

「潔癖な振りをしておつただけに決まつておる。あの女の弟なのじゃ。女と見れば見境ない好色な人間に決まつておるが！ 閨下と呼ばれるようになって、いよいよ正体を現したに違いないわ！」

憎まげに決めつけるシュザンナの姿に、思わず漏れそうになる溜息を呑み込んで、グレーザーは額の汗を拭いた。

「グレーザー！」

鞭のような声がかんた。

「はい、何でもございませうつか？」

「その男について、もっと詳しいことが知りたい。もしも妾の眼にかなう男であれば、妾が後ろ盾になつてやつても良い。あの女やあの女の弟に敵意を持つ者は、皆、妾の眷属じゃ。」

（敵の敵が味方とは限るまい。）

と思つたが、それを自分の胸の中に押し留めて、グレーザーは頭を垂れた。

数日後、グレーザーがシュザンナにもたらした情報は次の通りであつた。

その男、ヘルマン・フォン・リューネブルク少将もまた、グリーンメルスハウゼン子爵の麾下で働き、あの女の弟同様、准将の身でありながら、金髪の孺子を配下に置き、いよいよに扱つていたという。惜しむらくは、彼が眼を離れた際に、金髪の孺子が敵の司令官を捕らえ、それを自分の功績として報告してしまつたことであつた。それがなければ、昇進したのはリューネブルクだけ、あの女の弟は昇進できなかった筈である。

（それにしても、あの女の弟を押さえ込もうとするとは、頼もしいではないか。）

シュザンナはリューネブルクに興味を覚えた。この男ならば、自分の手となり足となり、憎いあの女の弟を、この世から排除してくれるかも知れない、という期待を抱いたのである。しかし、彼の出自や経歴の項目に眼を移した時、シュザンナは落胆の色を隠せなかつた。

「叛徒達の許からの亡命者なのか？」

「はい、そのようでございますな。元をたどれば帝国貴族、それも伯爵家に繋がる血筋と言つてございしますが…。」

「二度の裏切りを働いた、ということか？」

シュザンナにとって、人間とは帝国臣民であることが、まず絶対条件であつた。叛徒達の暮らす星の空気を吸い、水を飲んだ者を、人間とは認められなかつた。その上亡命者ときては…。

これは、おそらく、帝国と同盟、どちらの陣営に於いても言える事であつた。ところが、亡命者に対する世間の眼は冷たく厳しい。建て前としては、敵方から亡命してきた者は、「真実に気が付き、正道に立ち戻つた」として、「厚く遇される」という事になつては、実際にには常に軽蔑と不信の眼で見られ、邪魔者扱いされるのがおちである。他の者達と同等に扱つて欲しければ、他の者の数倍の功績を挙げねばならないが、それが軍隊のような場所であれば、かえつて自分に対する猜疑を掻き立てることにならないとも限らない。

亡命という行動は、ある意味で裏切り者の烙印を両陣営から一度に押されると言うことに他ならない。一度裏切つた者は再び裏切るかも知れない…その思いが受け入れる側にはつきまとう。

「信ずるには値せぬ。」

シュザンナは吐息と共に、手にした書類をテーブルの上に投げ出した。商談は成立しなかつたのである。

果たして、それが彼女にとって正しい選択であつたのか、それは判らない。ただ、彼女が忌み嫌つ「金髪の孺子」の赤毛の副官は自分の父に、ヘルマン・フォン・リューネブルクについて、暗営でこのように記していた。『陸戦隊の指揮官としては、極めて有能と認めざるを得ない。ただ、性格的にラインハルト様の麾下に加えるにはどうか？ 余りにも強い個性はラインハルト様のそれとぶつかり、彼等を迎えるのではないかと？ もしも彼がラインハルト様の前に立ち塞がる場合は、自分がその対処に当たるほかないと思つ。ラインハルト様が御自分で直接彼と対峙するのは、何としても避けるべきだ。』

帝国暦四八五年八月二〇日、帝国軍はイゼルロン方面に再び大軍を送つた。この時、空へ上つていく戦艦の群を、地表から寂しげに見送る老人の姿があつた。リヒャルト・フォン・グリーンメルスハウゼン子爵、階級は大将である。前回の出兵までは、彼もまた、見送られる側であつた。しかし、今回は軍務省高等参事官という重いばかりで実

用性のない飾りを付けられ、地上に繋がれ
てしまった。

彼は戦場で死にたかった。どうせいつか命
が果てるならば、せめて出来るだけ華々し
く散りたかった。だからこそ、若い僚友た
ちの迷惑な顔を見て、常に戦場に我
が身を置いてきたのである。しかし、七六
歳で後方勤務に回されては、もう二度と
実戦に赴くことは出来ないであろう。
(結局、わしには、死に方さえもままなら
んかったようじゃな。如何にもわしらしい
わい。)

ふっと、口元が自嘲的に歪む。
(だが、わしにも出来ることがあるはずじ
や。わしの夢を託すべき人間を見つけたの
じゃからな。誰も見たことのない夢を。)

それを、「あの方」も望んでいるのだとい
う思いが、この老人にはあった。「あの方」が
些か性急に過ぎる程、その人物に力を与
えようとしているのが眼に見えたからであ
る。「あの方」は言ったのだ。彼に「か歴と
した貴族の家名を与えてやりたいと。」

「箔を付けてやるつとのお考えで？」
グリーンメルスハウゼンの問いに、「あの方は
箔がつくのはあの方ではなく、家名の方が
も知れないとも口にした。その時、「あの方
」も、「あの方」が階段を駆け上り、薔
薇の花が薔薇の花であるうちに摘み取って
くれることを望んでいるのだといつことが
推測から事実へとグリーンメルスハウゼンの中
で化学変化を遂げた。

(美しい眼をしてあった。あれほど霧気に満
ちた美しい眼を、わしは見たことがない。
あの眼を閉じさせてはならん。)

その眼を閉じさせるかも知れない人物に
グリーンメルスハウゼンは心当たりがあった。
少々、現在の「彼」の手には余るかも知れ
ない人物。良き友人がいるとは言え、「あの方
」の邪魔を受けずに進むのは至難の業
である。短い期間であったが、「彼」と「あ
」の人物との関係を見ていると、彼らはお互

いに対して、対抗意識の範疇を越えて、敵
意を抱いているとしか思えなかった。その対
立は、思想とか観念といった「理性」の範疇
にあるものではなく、そう、自分が自分と
して生きていく為の生存圏の奪い合いのよ
うな、もっと感情的で本能的な理由に起
因するものよつてであった。このまま行け
ば、いずれ両者がぶつかるのは目に見えて
いる。そうならば勝者も、決して無傷では
済まないであろう。
(いざとなつたら、わしはわしのやり方で
邪魔者を排除するか……)

グリーンメルスハウゼンの脳裏に、自分の書
斎にある黒い表紙の文書の一ページが浮か
んだ。
グリーンメルスハウゼンが病を得て床に伏し
たのは、それからまもなくの事であった。最
初は何といつこともない夏風邪だったのだ
が、それをこじらせて気管支炎、肺炎へと
病状は進み、一向に回復の兆しを見せな
かったのである。

医学の進歩は、かつて死病と恐れられた
ガンさえも、恐ろしい病気ではなくなったが
感染症ばかりは、結局のところ本人の体力
免疫力と病原体との勝負であり、医師や
薬剤では如何ともし難い場面と遭遇する
のも止むを得なかった。

一月末、グリーンメルスハウゼンは一人の
女性を私邸に招いた。招いたといつより、
彼女の方から見舞いに訪れるよう、仕向け
たといつた方がよいのかも知れない。彼女の
夫は半年前まで、グリーンメルスハウゼンの艦
隊に所属しており、上司と部下の関係だつ
たのだから。

「御加減は如何でしょうか？グリーンメルスハ
ウゼン閣下。」
淡い香りの秋バラを携えて、グリーンメルス
ハウゼンの病室に案内された女性は、寝台
の上に半身を起き上がりさせている老人に
声を掛けた。淡い褐色の髪と、玉のよつな

褐色の瞳、造形的には極めて高水準にあ
る容姿である。しかし、どこかその瞳に
は力がなく、果たして現美を見つめている
のか疑わしいところがあった。
「よく来て下さつた、フラウ・リユーネブルク
わざわざ、こんな古いほれの見舞いの為
に。」
「いいえ、とんでもございません。きつと、夫
も閣下の事を心配しておりましょ
う……」

暫くは、差し障りのない天候のことか
グリーンメルスハウゼンの昔語りで時が過ぎた
そろそろ帰らないと、とエリザベート・フオ
ン・リユーネブルクが辞去の支度を始めた
時、グリーンメルスハウゼンが言葉を掛けた。
その日、彼が最もエリザベートに言いたかつ
た言葉である。

「フラウ・リユーネブルク、かつて貴女の許嫁
いいなすけ、であったカール・マチアス・フ
オン・フォルゲンじゃが。」
元婚約者の名前が出た途端、エリザベ
ートの表情が変わつた。表情がなかつた瞳に
光が宿り、頬に赤みさえ射したように、グ
リンメルスハウゼンの眼には映つた。

「カールの事を御存知でいらつしやるのです
か？」
期待を込めた眼差しで尋ねてくるエリザ
ベートに、グリーンメルスハウゼンは、じつとよ
うにゆっくりと応えた。

「ふむ、よく知つておるよ。おそろしくは、貴
女が知らぬ事までな。知りたいかな？」
「はい、カールのことでしたら、どんなこと
でも。」
「いいやろ。…カール・マチアス・フオン・
フォルゲンは処刑されたのじゃよ。戦死刑
という刑があるならば、まさしくそれじゃ
な。」

「まさか、そんな！一体、カールが何をし
たといつのです？それは確かに、余り誉め
られた生活態度ではなかつたといつ入は
いるかも知れませんが、でも、それは私と出会

う以前のこと。婚約した頃には、軍務省の
仕事の他にも、きちんと生計を立てられ
る事業を始めていました。それがどうし
て？」
エリザベートの疑問はもつともであった。
グリーンメルスハウゼンは一度ほど頷いてから
話を続けた。

「フラウ・リユーネブルク、貴女は婚約者の
始めた事業が、どのようなものであつたの
か、御存知でいらしたかな？」
「いいえ、カールは私には何も教えてはくれ
ませんでした。仕事のことは全て自分に任
せておけばいい、何も心配しなくて良いか
らと。」

不審そつな表情を浮かべる見舞客に、グ
リンメルスハウゼンは、決定的な一言を漏ら
した。
「彼がやつていたのは、サイオキシンの麻薬の
密売、そして、それに気がついたので、フラ
ウ・リユーネブルク、貴女の兄上ハルアンベル
ク伯じゃ。」

「！」
無言のまま顔面蒼白になつたエリザベ
ートに、グリーンメルスハウゼンはその後の顛末
を語つた。ハルアンベルク伯とフォルゲン伯が
この不名誉な事実をカール・マチアス・フオ
ン・フォルゲンもろとも葬る為、軍部に圧
力を掛けて彼を最前線に送り出し、彼に
「名誉の戦死」を与えたのだといつ事実を。

「何故、わしがそのようなことを知つておる
のか、不思議に思つておられるようじゃな
フラウ・リユーネブルク。人は、大きな秘密
になればなるほど程、内容が他人、ひと
には語れぬものなら語れぬ程、自分の胸
の裡に留めておくことが難しいものなのじ
やよ。そして、わしの許には、どういふ訳か
その手の裏の事情といつのが集まつて来て
な。これまで、わしは、それらの話には耳を
使つただけで、決して口を使つたことはな
かつたのじゃが、わしはもう長くはない。貴
女にとつては辛い話だろが、今語つておか

ねば、貴女が真実を知る機会は永遠に失われるじやろ。おそろく、兄上は、貴女の幸せを考えてそうしたと言つたのだらうが果たしてどうかな？カール・マチアス・フォン・フォルゲンの罪状が明らかになつた時、最も甚大な被害を被つたのは誰か、考えてみればすぐ判る事じや。この話を聞いて、貴女がどうするか、それは貴女次第じや。」

身体を小刻みに振るわせて沈黙を守る女性の姿を、グリーンメルスハウゼンは幾ばくかの良心の呵責とともに見守つた。おそろく彼女は、彼が予想したのとさして変わらぬ行動を取るに違ひなかつた。そしてそれは、彼女と彼女の兄、そして夫の破滅を招く筈であつた。
(別に強制したわけではない。決着を付けるのは彼女自身なのだから。)

帝國曆四八五年二月五日、ヘルマン・フォン・リュウネブルクは第六次イゼルロン攻防戦において、かつて自らが捨て去つた薔薇の騎士、ローゼンリッター、連隊によつて絶命する。彼の妻エリザベートが、元婚約者の死の責任を問つて、兄ハルテンベルク伯を殺害した四日後のことである。
彼がその戦場で戦死したのは、或いは彼にとつて幸運だつたのかも知れない。妻の「兄殺し」が公にされたあとであつたならば果たして軍に身を置くことさえ許されたかどうか判らないからである。家族の罪は自分の罪も同じ、というのが、その頃の風潮であり、誰か一人の不祥事が、家族全員を未来を閉ざすことなど珍しくもなかつた。彼は、義兄の死を知らぬまま亡くなり、この戦死により大将に二階級特進した。逆亡命をはかつた軍人としては異例の階級であつた。

あつた。

グリーンメルスハウゼン自身は、帝國曆四八六年一月に不帰の人となつた。フリードリヒ四世は、訃報を伝えた近侍の者から「グリーンメルスハウゼン子爵に上級大将の地位を贈られましても如何でしょうか？」と上申されたが、「死者に階位は不要であらう。少なくともあの者が天上、ヴァルハラで、それを手にして喜ぶとは思へぬ。」と否定した。フリードリヒ四世が、グリーンメルスハウゼンの霊前に手向けたのは、自らが育てたバラの花束だけであつたと、宮内省の記録には記されている。

一九・策謀

帝國曆四八六年二月、前年末の第六次イゼルロン要塞攻防戦より断続的に続いてきたイゼルロン回廊での帝國と同盟との戦闘は、ひとまず小休止となつた。

第三次ティアマト会戦の凱旋パーティーの当日、シュザンナはいつにもまして不機嫌な顔を首の上に載せていた。不機嫌の原因は、パーティーに自分が招かれなかつたという事よりも、「あの女」の弟が今回のパーティーの実質上の主役であるを知つたことにある。彼は叛徒軍の攻勢の前に混乱状態にあつた帝國軍を、三分間の時間と二度の斉射三連だけで救つたのである。今回の戦闘に於ける武功第一と、軍幹部も認めざるを得なかつた。
「私はあの女の弟を生かしておいては不利になる」と思い、幾度も後日の害を除こうと試みた。」

まるで側に誰もいないかのようにその形のよい珊瑚色の唇から漏れ出る言葉に、シュザンナと共に彼女のサロンに存在していた人物は僅かに身じろぎをした。宮廷医のグレイザーである。
「なのに、その間、あの勅にさわる子供は生きつづけ、背も伸び、あまつさえ閣下と呼ばれる身に成り上がった！二〇歳にもならぬ身で中将とは、帝國軍の権威も失墜の極みというものじやな。あの孺子こそ、閣下とは。閣下とは！」

侯爵夫人には、自分の言葉が殺人計画の告白であるという事など思ひもつかないのであらう。自分を「共犯者」と信頼してのことなのか、それとも自分を無視してのことなのか、おそろく後者のだらうが……。大体、この御婦人には、他の者の心情などというものが全く念頭にないらしい。昔はこれ程までひどくはなかつたのだが……。そんなことを思いながら、宮廷医師はシュザンナのささくれた心に、もう一本、注意深く針を突き刺した。
「この度大将に昇進すると聞き及んでおります。」

そこ、あの金髪の孺子は、この僅か三ヶ月足らずの間に、少将から大将まで、一挙に階段を駆け上つたとしていた。彼が刺した針は、彼の期待以上にシュザンナの心のツボを刺激することに成功したらしい。シュザンナは、未だ公式に発表されたことではないが、金銭と情美による情報網から得た更に不快なことを思い出したのである。
「あの女がクリューネワルト伯爵夫人を称するさえ不遜だならぬものがあるというに、今度はあの女の弟までがロートエングラム家を……名譽ある伯爵家を名乗ることになるうとは！」
ロートエングラム家はルドルフ大帝以来の世襲貴族の名門で、これまでに閣僚と提督をそれぞれ一〇名以上、輩出している。第九代ロートエングラム伯爵コンラート・ハインツは

帝國曆二五三年のエーリッヒ三世の宮廷革命に参加した三提督の一人で、エーリッヒ三世の即位後、元帥に叙せられ、軍務、内務、國務の三尚書を歴任し、爵位も侯爵に上つた。次男フリーリップの起こした事故で皇女マグダレーナが死亡したため引責して公職を辞し、爵位も一代限りで伯爵に戻つた。その後はしばしば当主が早世して直系の血統が保たれず、遂に家系が途絶えて廃絶されていた。多くの貴族がその門地を欲して、宮内省や典礼省に色々と働きかけていたこともシュザンナは知っている。しかし、名門中の名門であるだけに、それなりの業績を上げた人物でなければ家名が泣くと、なかなかロートエングラム家再興の許可は下りなかつた。それが、「あの女」の二〇歳にも満たぬ弟に許されるとは！
「ロートエングラム伯爵家との縁組みを望み、金髪の孺子こそ、に言い寄つた名家の姫君は数多けれど、ことごとく、形ばかりは鄭重にあしらわれたと聞き及びます。」
「何と見苦しい。」

シュザンナの言葉は、グレイザーには質量と硬度を持った実体のあるものとして彼女の口から、名家の姫君、達を粉砕するべく発射されているように感じられた。
「もはやあの生意気な孺子こそ、を、ふさわしいやり方で葬ることは出来ぬのだらうか、グレイザー。」
「お気持ちは判りますが、金髪の孺子こそ、ももはや無名の一士官ではありませぬ。帝國軍上級大将にしてロートエングラム伯爵家の門地を継ぐ身とあれば、不慮の死は司法省や典礼省の看過しえぬところとなりましょ。」
「同盟とやら称する叛徒共も、誠に不甲斐ない。金髪の孺子こそ、一人、戦場で殺してしまつてごとなかなわぬとは。」
とばかりの悪罵が自由惑星同盟に投げつけられるのを聞いて、グレイザーもさすがに苦笑するほか無かつた。

「叛徒共のだからしなさは残念ですが、幸いにして、グリューネルト伯爵夫人には懐妊の兆候が全く見られませんか」
「子供など生ませるものか！」
即座に返ってきたその声は、グレーザー

すら慄然とさせた。グレーザーの視線の先でシュザンナは彫刻のように凝然と座していた。まるで「憎悪」と題された彫像のよう

に。
「あのような下賤な女が国母などと呼ばれるのは、私が許さぬ。」

「一応ミューゼル家も貴族の一員ではありません。爵位はありませんが、帝国騎士の称号を、代々所有しておりますからな。平民や賤民というわけではありません。」
「平民以下の生活だったというのではないか。」

「はあ、それは確かに左様ですが。」
「いずれにしても名家とは到底言えぬ卑賤の女、これ以上つけあがらせるわけにはいかぬ。思い知らせてやらねば。」
シュザンナの記憶裏に、数週間前の屈辱が甦った。

皇帝がシュザンナと会おうとしない以上、彼女の方から皇帝に近づくことは許されない。しかし、映像などに頼らず、皇帝の姿を拝す為の手段が無い訳ではない。私人として皇帝が足を運ぶパーティーや催し物に出席すれば、その姿を、遠巻きにでも眼にすることは出来る。今では、彼女を祝宴に招待する者もすっかり少なくなつたが招待状など無くとも、極自然の体を装って皇帝と同じ空気を吸うことの出来る場所が残っていた。例えば、劇場である。

何度シュザンナは、フリードリヒ四世の姿を追い求めて、劇場へ足を運んだことだろう。だが、そこで突きつけられるのは、厳しい現実であった。何故なら、皇帝の傍らには必ずと言ってよいほど、「あの女」が従っていたのだから。貴賓席で皇帝と並んで座る「あの女」の姿…それは、何度眼にして

も、シュザンナにとつて慣れることの出来ない光景であった。本来、あの席は、自分の為の席の筈なのだ。そして、彼女が求めて止まない相手は、彼女が舞台上で繰り広げるドラマに目もくれず、貴賓席の彼に注ぎ続ける熱い視線に気が付いてさえくれなかつた。しかし、それでもシュザンナは、オペラグラスを手に、劇場へ足を運ばずにはいら

れなかつた。皇帝に「逢う」為に。
帝国歌劇場で上演されたオペラに、フリードリヒ四世は例によって「あの女」を同伴した。あの日、遂にシュザンナは、その苦しさに堪えかねて、帰館しようとする退席する皇帝の後を妨げる、背後から声を掛けた。皇帝の歩みを妨げる、本来、それは許されぬ振る舞いと知りつつも、自分を抑えることが出来なかつたのである。

「陛下、陛下！」
フリードリヒ四世にも、シュザンナの声は届いた筈だつた。しかし、皇帝は僅かに歩みを緩め、階段上のシュザンナを振り返つただけで、微笑み一つ与えずに去つていった。その時、確かに、「あの女」が憐れむような顔で自分を見たように、シュザンナには見えた。それは、勝ち誇つた笑いよりも深く

シュザンナの胸に爪を立てた…。
（あのような下賤な者に哀れみを掛けられる程、自分は凋落したのか！？）
「陛下っ…！」

お叱りを受けても良い、御言葉を賜るとさえ出来たなら…、そう思つて発した言葉も無視された。その後、自分がどんなに惨めな気持ちで手摺りに身体を支えられていたか、誰にも判りはしない…。
「ですが、どうやって…。」

グレーザーの声が、シュザンナを現実に戻した。
（妾が味つた屈辱、何倍にもして返してやらねば、妾の気が済まぬ。あの女を、これ以上ないという恥辱にまみれさせるにはどうしたらよいものか？…そうじゃ！）

一瞬の思考の後、シュザンナの顔に邪悪な笑みがこぼれた。

「あの女が懐妊、みこも、つて、しかも腹の中の子が、陛下の胤でなければよい。」
グレーザーの返事はなかつた。ただ、大きく見開かれた瞳が、シュザンナを映している。その表情は、シュザンナに、自分の考えが実行に移され成功した瞬間の、「あの女」が受ける打撃の大きさを確信させた。それを言葉にすることで、彼女は更に己の思い付きに酔つた。

「そうなれば陛下の恩寵も褪せるだけではない。後宮の女として許されぬ不義。当人も弟も死を賜るは無論、これまでの増長にふさわしい厳罰を受けるであろう。」
「…確かにそうなりましような。」
「もはやグレーザーは辟易とした表情を隠そうともしなかつた。確かに同性に対する嫉妬のすさまじさは異性の想像を超えるものがある。しかし、それにしても、シュザンナの悪意は他者の同情を引くようなものではなく、極めて不快なものであつた。ですが、グリューネルト伯爵夫人に密通をさせることなど可能でしょうか。相手の男を何びとに致しますか？」

「必要なのは男ではない。子種じゃ。誰そ男の子種を保存しておき、そなたの立場を利用して受精させてしまえばよい。謝礼を励みに適当な男の精を集めるのじゃな。」
（人工授精か？）

グレーザーは再び息を呑んだ。後宮で繰り広げられた権謀術策は数多い。その結果、実際に、密通の疑いを掛けられ、死を賜つた寵姫も存在する。しかし、ここまで「悪意」という名の鎖で相手を締め上げようとする計画は、グレーザーにも覚えがなかつた。だが、相手は大切な金庫である。どのようにすれば、その金庫の扉が大きく開くかは、判っているつもりであつた。

「…かしこまりました。仰せのように男の精を集めは致しますが、どのような男のものがよいか、御注文がありましたらお聞かせ下さいませ。」
シュザンナの眼が妖しい光を帯びた。出来るだけ、「あの女」を貶めるにふさわしい男を思い描くのには歓びを覚える。
「無論身分は卑しいが良い。知能も低く、学問も修めず、容貌は猿人のように醜悪で、性格は残忍にして粗暴、酒に溺れやすく…ああ、あと何かならうか。そうじゃ、奇形児の生まれる可能性が高ければなお良い。」
「はあ…。」
「それに、おお、そつであつた、性病の菌を持つていて、あの女に感染、うつ、せるような男であれば、申し分無い。」
既に自分の計画が成就したかのような暗い満足感に、シュザンナは眼を閉じてしばし浸つた。その顔に美しいが何とも冷たい微笑みが浮かんだ。

グレーザーは汗でもいらない額の汗を拭いて、巧みに吐息を隠した。
「そこまで悪く揃っている男となれば、広いオーティンにもそつありふれてはありますまいな。完璧を期するために、多少の時間の猶予と、何よりもいい材料を見出すための費用をお願いできますでしょうか？」
「費用はいくら掛かってもよい。」
それだけがこの女の取り柄だ、とグレーザーは思った。そつでなければ、誰が好き好んでこのように不快な負の感情の濁流に身を晒すだらうか。グレーザーはこれまでにもシュザンナの要求に医師としての知識や技術を様々な形で提供してきたが、その見返りに、受当な報酬の二割り増し、三割り増しの金額を彼女の財布から引き出していた。グレーザーから見れば、シュザンナが世間の相場というものを知らず、そついうことに鷹揚であつたからこそ出来た芸当である。

しかし、シュザンナ側から見ると、むしろ

高額の報酬を支払つたが故に、グレーザーを信用する事が出来たとと言える。もしも、彼の求める報酬が僅かなものであったならば、シュザンナは、彼を重用しなかつたに違いない。ヨハンナが彼女の許を去つてからというものは、シュザンナは、「人間」を信用しようとはしなくなつていた。幼い頃から仕えていた使用人さえ、自分を裏切つたのだという思いは、人間、特に、平民や帝國騎士階級全体への不信へと成長していったのである。

「衣食足りて礼節を知るといふ。何不自由ない満ち足りた暮らしをしている大貴族の間ですら、己の欲望の為にならば、嬰兒殺しのように非道なことが行われるのだ。下級階級の者程、その本質はおぞましいものである。結局、人間の善意や忠誠などは己の欲望を成就するための、見せかけだけの欺瞞に過ぎぬ。」

これが、後宮に入つてからの一五年間に、シュザンナが学んだことであつた。

彼女にとつて、今や人を見る指標は、為人、ひととなり、等という数量化出来ないものではなく、シュザンナとその人間の間に動いた金品にあつた。自分に何が頼む時、より多くの付け届けをする者こそ、自分のことを高く評価している人間であり、また自分が何かを命ずる時、多くの報酬を与えている者程、自分の為に動いてくれる筈だと、シュザンナは考えたのである。

グレーザーは、例えどがシュザンナの言いつけ通りに運んだとしても、その後、シュザンナが皇帝の寵愛を再び得ることは難しいことを知つていた。部屋を退出する前に、これだけはシュザンナに言つておかねばと思つた。自分に責任のないことでまで責められては適わなかつたからである。

「ですが、恐れ多いことながら、侯爵夫人、グリューネルト伯爵夫人が失墜したとしまして、その後、陛下は新たな女性に興味を抱かれるかもしれませぬ。その点は私

めの力の及ばざるところ、予めお教し頂きたく存じます。」

グレーザーは、シュザンナに頭を下げつつ、シュザンナが後宮に納められた頃のことを思いだし、感慨に耽つた。内気そうなの、何とも心細げな、また蒼い肉体を持つた少女：あれから一五年の歳月は、彼女を寒さに震える哀れな小鳥から、今自分の目の前にいる何とも氣位が高く権高な猛禽に変えた。人は、おかれた状況によって信じられないほどの変容を遂げるものだという生きた見本と言えよう。

ベーネミュンデ侯爵夫人が、後宮に於ける競争、レースの最終的な勝者ならばよい。しかし、そつでないならば（おそろくそうではないとグレーザーは読んでいたのだが）、いずれ彼女の策謀が露見しないと限らない。その時のための保険の必要をグレーザーは感じていた。どこに保険を掛けるか？彼の脳裏に、豪奢な金髪を持ち主の姿が浮かび上がった。

（何とかして、グリューネルト伯爵夫人の弟と面識を持ちたいものだ。：。それとなく恩を売つておくか。姉の身辺に氣をつけるよつとに知らせて。：。侯爵夫人にばれないよつと、今のところは秘密裡に。：。あの金髪の若者よりも宮廷工作に長けた人物にも、この事、知らせておいた方がいいかも知れぬ。折角の保険が簡単につぶされてはかなわんしな。）

数日後、國務尚書リヒテンラーデ侯クラウスは腹心である財務尚書ケルラッハ子爵と共に執務室にあつた。この時彼の脳裏にあつたのは、国政のことでも、最近とみに厳しさを増している財政のことでもなかつた。権力を巡る彼自身の競争相手についてである。長年の彼の巧妙な陰謀によつて、今や宮廷に残る彼の競争相手は、皇帝の女

婿である一人の大貴族くらいのものであつた。

しかし、この一、二年のうちに、急激に力を持ちつつある若者がいた。今のところその者はリヒテンラーデ侯の敵ではない。だがこの後もこの勢いで栄達の階、きざしを上りつづけるとしたら、近いうちにはその存在は無視できないものとなる。：。

「卿は、どう思う？ ミュッケンベルガー元帥は不快極まりない様子ではあつたが、今回の人事に反対しなかつた。これはグリューネルト伯爵夫人の弟に、ミュッケンベルガーをして、その軍事能力を認めざるを得ないものがあるということではないかと思つたのだが。：。」

第三次ティアマト会戦での功績により、その若者が若く十九歳にして帝國軍大將の地位に昇進したことに對して、リヒテンラーデ侯はケルラッハ子爵に尋ねた。

「皇帝陛下の御不興を買いたくない、と思つた故ではありませんか？」

國務尚書閣下の考え過ぎですよ、という信頼する腹心の言葉にも、何故か安心は出来なかつた。頭の仲で警鐘が鳴りつづけているのだ。あの男は危険だ。これは権力抗争を長年に渡つてくり抜けて来たリヒテンラーデ侯の、人間を見分ける優れた嗅覚を証明するものであつたのかも知れない。既に読者の皆さんもご存じの通り、その若者はこの二年半後、リヒテンラーデ侯を倒し、やがて全宇宙の覇者となるのだから。だが、さすがのリヒテンラーデ侯もこの時点で、そこまでの危機感はその若者に覚えてはいなかつた。

「まあ単に卿の言つとおりかも知れぬが、これ以上、宮中に個別の勢力が増えれば、廷臣間の分裂が思いやられる。悪い芽であれば摘み取つておきたいでな。」
「であつても、一介の軍人に過ぎぬではありませんか。」
「来年は、加えてローエングラム伯爵家の当

主になる。この地位は軽視できんぞ。」
「そつかも知れませんが、そもそも、國務尚書閣下、急にグリューネルト伯爵夫人のことなど考え出されたについて、何が理由がおりなのですか？」

リヒテンラーデ侯は一瞬財務尚書の顔を見つめ、一瞬の間、何か考えたようであつたが、デスクの引き出しから一通の書簡を取り出すと、それをデスクの上に置き、財務尚書の方に差し出して見せた。ケルラッハはそれを手に取り差出人を調べたが、そこにはそれを知る手がかりは何もなかつた。筆跡を隠すためである。ワードプロセッサで印字された無個性な活字が並んでいた。

「G……B……は、これは……」

口の中で呟くように、そこに書かれた文面を独語していたケルラッハだったが、数瞬の後、得心したように頷いた。

「成る程、ベーネミュンデ侯爵夫人が、グリューネルト伯爵夫人を……」

「と見るか、やはり卿も。」

腹心の思い至つたことが自分のそれと同じであることに、老國務尚書は大して喜びを見いだすことはできなかった。ケルラッハもまた同じ気持ちであつた。一人の宮廷政治家は互いの苦渋に満ちた表情をその瞳に映しつづ、どつしたものと思索した。

「まったくもつて、困つた方ですな。」
「あの夫人の宮廷生活はとうに終わった。下賜金でも頂戴してさうさと田園生活にでも入ればよいのに、未だに沈んだ陽を中空にひきもどせるつもりでいるのか？」
冷然と言ひ放たれた國務尚書の言葉に、一瞬、財務尚書の顔に、今自分達を悩ませている女性に対する憐憫の表情が浮かんだ。

「ですが、一〇年以上も前に生まれた御子が成長していれば、夫人はおそらく正式に皇后として冊立されたはず。諦めきれぬのも無理はありません。まして……」

「その先は言つな、財務尚書。」

鋭い口調で、財務尚書に言葉を制されたゲルラッハは、首をすくめてみせると、話題を現在直面している問題に戻した。

「いずれにしても、つかつて介人はできません。熱湯に手を突っ込めば、一瞬の痛みだけで済みます。後々がこわい。」

リヒテンラーデ侯は財務尚書の言葉に頷くと、鋭い眼光を放つ眼をやや上目遣いにして、何かを考えているかのよつであつた。財務尚書は再び例の無記名の書簡を手に取つて読み返した。おそろく、財務尚書が

考えておられるのは、自分と同じ事であろうと推察しながら、この書簡を書いたのが誰なのか、何の目的で書いたのか、それは自分達にも関わってくる恐れがあつた。「それにしても皇太子殿下が御健在であれば……。」

そつすれば、ベーネミュンデ侯爵夫人が見果てぬ夢を追つて、このような問題で我々を煩わすことも無かつたであらうと、財務尚書は溜息をつかざるを得なかつた。

同じ頃、全く同じ書簡が新無憂宮ノイエ・サンサーシーの正門から北へ三キロ程離れたリンベルク・シュトラーゼの二画にあるクーリヒとフーパーという二人の未亡人の姉妹が住む家にも届けられていた。二人の未亡人が最終的な受取人ではない。「金髪さん、あんたに手紙が来ていますよ。」

帰宅した二階の下宿人の片割れが階段を駆け昇ろうとするところに、妹のフーパー夫人が声を掛けた。「申し訳ありません。」

礼を言つて手紙を未亡人から受け取つたのは、金髪の青年の後から階段を昇ろうとしていた長身の赤毛の若者であつた。「いいんですよ。それにしても珍しいわね。」

金髪さんのところに手紙だなんて、赤毛さんのところには時々、親御さんからの手紙だのTV電話、ヴィジホンがあるけれど、金髪さんのところにだなんて、私が覚えてる限りじゃ初めてですよ。まあねえ、お父さんは亡くなつて、お姉さんも自由の利く身じゃないし、他には身寄りも無いついでに旦那から仕方がないんでしょつけれど、せめて、もう少し、お友達と行き来があつてもいいと思つんですよ。私の亡くなつた主人なんか……。」

赤毛の青年が、書簡を本来の受取人に渡すには、それからたつぷり一〇分は必要だつた。ようやく問借りしている自室にたどり着いた赤毛の友人に、金髪の若者は待たされた不満を幾分かの擲擲を交えてぶつた。

「遅いじゃないか、キルヒアイス、さうさどがつてくれ、ばいばいものをくだらぬ長話に付き合つて……。もしかして、お前はああいう年上の女性が好みなのか？」

「御九談はおやめ下さい、ラインハルト様、あなたがさうさど一人で部屋に上がつてしまわれるからさうなつたではありませんか。フーパー夫人にもクーリヒ夫人にもいるとお世話になつて居るのですから、むげに突き放すわけにも行きません。思い出話を聞くのも下宿代のうちです。あの二人の御婦人にとって、御主人の事を思い出している時間は何物にも代え難い幸せな時間なのです。」

「過去にはかりたいが向く……いつか俺もさうなることがあるのだから……。」
「そんなことはありません、ラインハルト様はいつも前だけを向いて歩いておられます。今までも、そしてこれからも、私達に必要なのは未来です。みんなが幸せに暮らせる未来です。」

そついつ赤毛の青年の頭の中で、何かがつつかつていた。果たしてさうなのだろうか？もしかしたら、自分達こそ、過去に帰

りたがつているのではないかと。九年前のあの頃、目の前の金髪の親友と自分で親友の姉を挟んで笑つていたあの頃に戻るために、全てが始まつたよつな気がする……。その思考の棘を霧散させたのは、親友の声だつた。

「そついえは、俺に手紙だと言つていたな誰からだ？」

「言われて書簡を調べてみると、差出人がなかつた。」

「妙だな。気をつけて開封するんだ、キルヒアイス。」

「はい、ラインハルト様。」
「万が一、開封したとたんに爆発などいふことの無いように、細心の注意を払つて中の書状を取り出した二人であつた。些が大仰に過ぎるよつでもあるが、彼らにはそれだけの注意を払つただけの理由があつた。自分達の命を虎視眈々と狙つている雌虎の存在を、彼らは知つていたからである。勿論、その雌虎の名前も含めて……。」

取り出された書状の文面に、金髪の青年の眼は釘付けになつた。
「宮中のG夫人に対しB夫人が害意をいだくなり、心せられよ。」

「豪奢な金髪に包まれた頭の中で、おそろく人類に望みつる限り最高の頭脳が忙しく働いていた。この書簡は何を目的としているのか？文面にある二人の人物は誰か？」

前者の疑問に対する彼の答えは、誰からかまでは判らないが、打算をもとにした忠告、といふものであつた。後者の疑問に対する答えは、

「やはり、ベーネミュンデ侯爵婦人か……。」
「……。」
「……。」
「……。」

「あの女を生かしておいては、姉上の身が危険にさらされる……。俺の身もだが」

それは赤毛の青年も同感であつた。
「あの夫人はかつて皇帝の寵愛を一身に背負つていました。アンネローゼ様を書しようとするのはむしろ当然です。」

「そのあたりの心理が、実は今一つよく判らぬ。姉上が失墜したところで、あの夫人に皇帝の寵が戻るとは限るまい。皇帝の性癖が変わらぬ限り、そして時を逆行でもせぬ限り、あの女に活路はないのだ。無益なことをするものではないか。」

「ラインハルト様とは違います。陰謀を巡らせるための時間と手段は有り余つておりましようし、これは理性や利益の問題ではありませんまい……。それにしても、具体的にどのような害を加えるつもりなのでしょう？」

「さあ……。毒殺でもするのさ。あるいは宮廷を追い出すつもりか。」

「宮廷を追い出すとなれば、アンネローゼに皇帝の不興を買わせることが前提となる。何か失敗させようといふのか？だとしたらどのような失敗を？二人の若者の会話は更に続いた。」

「この書簡の主は、そのあたりのことも知つているのだから……。」

「さあ、どうでしょう……。」
「この書簡を信じる限り、この書簡の主はあの女が姉上を害するつもりなのを知つてそれに闇雲に賛同してはいないといふことだ。だからこつて、我々の味方であるとは限らないが……。ただ単に、あの女の力を削ぎたいだけかも知れん……。ついでに俺や姉上の始末もできれば言つこと無しと考えているのかも……。そつなうて喜ぶ人物に心当たりがないわけではないし……。」

「つまり、宮中に味方がいるわけではなく、敵が幾種類かいるだけだ、と仰るのですね？」

「そつだ。」

「ですが、この際、それはかえつて有利かも知れませんが、彼らが一つになつた時こそ、

むしる恐るべきではありませんか？」

金髪の青年は、蒼水色、アイス・ブルーの瞳を軽く見張った。今更ながら、赤毛の親友の識見に感心したのである。

「キルヒアイス、お前は賢者だな、確かにそうだ。幾つもある敵なら各個撃破できるし互いに噛み合わせることもできる。この手紙が示すようにな。」

とにかく、これまで以上にアンネローゼの身辺に気をつけよう。あの女の動きから毛眼を離すまい。一人の青年は彼らの心の神殿に住む女性のために、それを確認した。

シュザンナは当然、この一通の書簡の存在を知らない。自分が閣僚筆頭の國務尚書からも、あの女、グリーンネルト伯爵夫人の弟からも監視されていることなど、全く気付いてはいなかった。まして、自分の保護無してやうていける筈のない、あのグレイザーがその書簡の差出人であることなど、針の先程も念頭になかったに違いない。

もしも、リヒテンラーデ侯がこの件について、もっと熟考することを許されていたら、シュザンナの人生は、老練な宮廷政治家の手によって宮廷の外に移され、彼女にとっては不本意であったかも知れないが、もっと平凡で、穏やかなものになっていたかも知れない。しかし歴史はそれを許さなかった。國務尚書は一ヶ月以上の間、他のことに忙殺されることになったからである。

二〇・死神 トート

國務尚書ばかりではなく、帝国の中枢全体が振り回された出来事、後世の人々はこれをクロフシュトゥック事件と呼ぶ。それは、皇帝フリードリヒ四世の第一皇

女アマリーエの夫であるフロンシュバイク公オットーが、皇帝臨席の許、私邸で盛大なパーティーを開催しようとしたことが始まりであった。

フロンシュバイク公にとって、こういったパーティーを開くという事は、当面のライバル、リッテンハイム侯に対するデモンストレーションの意味がかなりの比重を占める。主席者の階位、階級が高く、人数が多ければ多いほど、自分の宮廷や軍隊に於ける勢力を誇示することが出来るからである。わざわざ皇帝を招いたのもその為であった。皇帝臨席のパーティーに欠席するのは不敬罪として告発されるに値する。その為招待状を受け取った者達は、重病でもない限り、皆出席せざるを得ない。

その出席者達のリストの中に、三〇年の長きにわたり、こういつた公の場所に招かれなかった人物の名前があった。クロフシュトゥック侯ウィルヘルムである。

彼は、先帝オトフリート五世の在位中、先帝の三人の皇子のうち、末弟のクレメンツを次の皇帝に押し立てた。クレメンツは行動力に恵まれた快活な人物で、閉塞気味の帝国を再び活気ある状態にするには最もふさわしいというのがその表向きの理由である。少なからぬ投資をクレメンツの為に払い、その見返りとして、クレメンツが皇帝に即位した際には、クロフシュトゥック家にとつて七つ目の國務尚書の椅子がウィルヘルムを待っているはずであった。

しかし、激しい宮廷抗争の末、皇太子に立てられたのは長男リヒャルトであった。リヒャルトには、クレメンツとは逆の理由で支持するものがいた。勤勉で、教養があり、決してそれまでの慣習から逸脱するようなことはない。ルドルフ大帝が築き給うたゴールデンバウム王朝を守るのにこれ程適した人材はいない、というのがリヒャルト派の貴族達の言い分であった。勿論そこに、新時代に於ける自分達の利権が絡ん

でいたことはいうまでもない。

クレメンツ派の貴族達は、策略を用いて皇太子が父帝殺逆をはかったという罪を捏造し、リヒャルトを排除した。ついでにリヒャルト派の貴族達も。

クレメンツは新皇太子に冊立され、クロフシュトゥック侯の行く末も光輝溢れたものとなるかに見えた。しかし、三年後、事態は再び逆転した。クレメンツ派の貴族達の策謀が露見したのである。

リヒャルト派の貴族達を襲ったのと同じ、いや、それ以上に激しい肅清の嵐がクレメンツ派の貴族達を襲い、一七〇名の同志をクロフシュトゥック侯は突つた。クレメンツも自由惑星同盟への亡命を図って逃亡中に、宇宙船の事故で亡くなった。クロフシュトゥック侯自身は死を賜ることもなく生きてきたが、貴族社会からは弾き出される形となり、この三〇年、不遇を困っている。

その中で膨れ上がるのは、皇太子となりやがて皇帝になったフリードリヒ四世とその御代で栄華を誇る貴族達への憎しみであった。

（あのよつな無能者が皇帝だなどと片腹痛い。しかもそれを皇帝に祭り上げ、甘い汁を吸っているよつな奴腹に、敗残者として蔑視されるのは何たることか！間違っている！…私が権力の中枢に返り咲くことはもつ無いかも知れん。しかし、私にこのような恥辱を与えた者達を許してなどおくものか…今に、今にきつと…）

クロフシュトゥック侯は復讐劇の台本を練り上げた。まず、今我が世の春を謳歌している者達を出来るだけ多く、その劇の出演者に仕立て上げるにはどうしたらよいか？彼が眼を付けたのがフリードリヒ四世の二人の女嬪ら、有力貴族の僅すパーティーであった。出席者達の地位といい、人数といい申し分無い。だが、自分が彼らから招待されるということはまず考えられない。（どうせ事が起これば、私は捕まって殺さ

れるが、それが嫌なら亡命するしかない。ならば、帝国内の不動産などないも同然…。）

クロフシュトゥック侯は帝都の一面に所有していた宏大な獵園と、それに付随した邸宅を皇帝に献上し、幾つかの荘園を売り払って宮内省や典礼省の高官に多額の献金を行った。更に眼を付けた有力貴族達にも秘蔵の美術品を贈ったのである。辞を低くし、頭を垂れ、出来る限り哀れっぽく社交界への復帰を懇願する風を装って。

意外と早く撒き餌はその効果を現した。三月の中旬、フロンシュバイク公からパーティーへの招待状が届いたのである。横柄に自分の優位を誇示するかのようなフロンシュバイク公の顔を思い浮かべて、クロフシュトゥック侯は満足の笑みを浮かべた。

帝国曆四八六年三月二日。クロフシュトゥック侯爵がフロンシュバイク侯に持参した黒いセラミック製のスーツケースは、持ち主の席に置き忘れられ、玄關先のクロークへと運ばれる途中で、光と熱と轟音と爆風そして一〇名の死者と一〇〇人を越す負傷者を生み出して四散した。

クロフシュトゥック侯にとって残存した事はその死傷者達の中に、彼が憎む者達の象徴とも言つべきフリードリヒ四世の姿があったことである。フリードリヒ四世は新無憂宮、ノイエ・サンズシー、からフロンシュバイク侯邸に向かう途中で腹痛を覚え、急遽臨席を取りやめたのである。更に、出席者の中で最高位にあったフロンシュバイク公自身も極めて軽傷で済んでいる。本来スーツケースがあるべき場所から爆発していたならば、フリードリヒ四世はともかくとしても、その女嬪たるフロンシュバイク公は皇府に旅立っている筈であった。フロンシュバイク公の席は、クロフシュトゥック侯の席から五歩と離れてはいなかったのであるから。

余りにも爆発とクロフシユトック侯の忘れ物との関係が明白であった為、「不逞な共和主義者」に登場の機会が与えられることもなく、クロフシユトック侯はスッゲーの返礼を受けることになる。三月三〇日、クロフシユトック侯討伐軍が、侯が逃げ込んだクロフシユトック家の領地を目指してオーデインを進発した。指揮官は予備役から一時的に現役復帰した帝国軍上級大將ブラウンシユバイク公である。

この討伐には、予想以上に時間が掛かった。クロフシユトック侯が金に糸目をつけず傭兵隊を強化したこともあるが、結局、討伐軍は数こそ多いが急遽集められた馬合の衆であり、軍としての一貫した作戦を遂行することが極めて困難であったというところに原因がある。中でも若い貴族達の勝手気ままな行動は、指揮官にとっても、戦闘技術顧問として討伐軍に加わっている軍事の専門家達にとっても、頭痛の種であった。

それでも何とか叛乱は鎮圧され、クロフシユトック侯は毒と怨念を飲んで自殺した。討伐軍がオーデインに帰還したのは五月二日のことである。戦艦がクロフシユトック侯領から運んできたものは將兵達はかりではなかった。大鎌を手にした死神が、美しい獲物を求めて、戦艦からオーデインの街へとすべり出て行ったのである。帝国軍少將の姿を取って……。

夕刻から、新無憂宮を含む帝都の一面は、春の風に襲われた。数分おきにひらめく雷光は、まるで死神の大鎌が漆黒の闇を切り裂くかのようであった。

クロフシユトック討伐軍の帰還から一〇日後、シユザンナは出入りの仕立屋から思いがけない噂を聞くことになった。「何と申しました？今一度、申して見よ……！」

シユザンナの背後に立って、新しいドレスの仮縫いをしていた仕立屋は、彼女の烈気に当てられたかのように手を振るわせ、その手に持っていた待ち針でもつ一方の手を突いて真紅の小さな玉を作った。それを生地につけぬよと慌ててハンカチで押さえると仕立屋は容疑に映るシユザンナと目を合わせぬよう、視線を下に向け、問題の言葉を再び口にした。

「どうしますから、このドレス、お腹周りのゆとりはどのように致しましょうか……。侯爵夫人には近く御出産のご予定がお有りらしいと他のお宅で伺いましたので、それに合わせた御注文であったかと存じます……。」

「妾が、妾が懐妊しておると……。」

「はい、昨日だけで三件、今日は一件のお宅でその話が出ました。侯爵夫人には御懐妊の由、いつ頃か予定日であろうかと尋ねられまして……。」

「それでその方、何と心えたのじゃ？」

「私は聞いておりませんので何とも申し上げられぬ、と……。」

「何故、そのようなことはあり得ぬと、はっきり申して来ななんだのじゃ……！」

仮縫い中のドレスを乱暴に脱ぎ捨てようとする女主人に驚いて、近くに控えていた侍女が慌てて駆け寄り、ドレスに止められた針の先がシユザンナの肌を傷つけぬよう、細心の注意を払って、女主人の身体を豪奢な生地の中から取り出し、替わりにガウンを肩から羽織らせた。華麗な彫刻の施されたソファに身を任せ掛けたシユザンナは、額に左手をやり、常ならば象牙色の肌を怒りて赤く染めて右手を握りしめた。その手が小刻みに震えている。

「……誰じゃ？誰じゃ、そのような噂をばらまいておるのは？妾が、この妾が懐妊と……陛下の爪先があの女の館ばかりを向いておるのは周知の事実。この館への御来館は絶えて久しい……そんな中で妾が懐妊したと

なったら、それは妾が誰ぞ陛下以外の男と……ええい、口にするも汚らわしいことじや……！しかし、そのような汚らわしい噂を流すことを考えつくとは、さぞ下賤な者の仕業である。……あの女じゃ、あの女に違いない！陛下がお目を醒まされて、再び妾をお側近くに呼び戻されるのを恐れ、妾を貶める気なのじゃ……！」

自分が三月月ほど前にグレーザーに命じた事こそ、まさしくそれであったことを忘れ、シユザンナは怒りと、与えられた恥辱に歯噛みした。

「そなた、もし、今後、そのような噂をどこぞの館で聞くようなことがあったら、はっきりと否定するのじゃ。良いな？それと、その噂を誰と誰がしておったのか、それも妾に教えて欲しい。これはその礼じゃ。」

金貨を幾枚か握らせて仕立屋を帰した後、シユザンナの怒りはおさまってはいなかった。使用人達は、このように不機嫌な女主人に声を掛ければ怒声が返ってくるだけと知っており、陽が落ち、食堂に贅を尽くした皿が並んでも、誰もそれを告げることが出来なかった。冷たく冷えた食事を見れば、それもまたシユザンナの不興を買ったと判ってはいても、当面の嵐を避けることの方が、彼らにしてみれば重要だったのである。

シユザンナにとって不快極まりない噂は、シユザンナの思惑とは逆に、貴族社会から「好意」を持って迎えられたようであった。シユザンナが仕立屋から初めてその噂の存在を知らされた二日ほどで、宮廷内でのその噂を知らぬ者はいなくなった。殆どの者はあからさまに、後宮の女性としてあるまじき振る舞いだとしてシユザンナを糾弾した。ごく一部の者は、皇帝陛下の寵愛を失い、そのまま身をもち崩すとはなんと哀れなシユザンナに同情を示した。しかしその同情という名の薄皮の下には、かつて栄華を誇り仰ぎ見るしかなかった女性を、見下す側に

回った優越感がたっぷり包み込まれていたのである。

何力所かで得た情報によれば、噂の根拠となつているのは、宮廷医師グレーザーが頻繁に、それも人目を忍ぶかのように夜が更けてからバーネミニョデ邸を訪れていた事にあるという事実も判った。そのような事を知り得る人間は極限られている。後宮に身を置く者が、宮内省の人間くらいのものである。となれば、やはり最も疑わしいのは「あの女」であった。

「グレーザーめ、何をしておるのじゃ。そなたがのろろしている間に、あの女が妾を後宮から追い出しに掛かったではないか。さつさとあの女を孕ませておけば、妾がこのような目に遭うこともなかったであろう……。あれからも三月月、あの女にふさわしい男も見つかってあって良い頃じゃ。一体、何をためらっておるのじゃ？」

「こゝまで、心の中でグレーザーを責めた時、急にシユザンナの頭の中に、噂をまいた犯人として、あの女、以外の顔が浮かんだ。明日にでも、早速確かめねば……。」

眠れぬまま、寝台の上から部屋の中を見渡す。窓から差し込む月の光に、サイドテーブルの上のオルゴールが照らされていた。寝台から手を伸ばし、オルゴールを手にとつて蓋を開ける。子守歌の旋律とともに中から現れたのは、柔らかい赤みを帯びた金髪の小さな束であった。先程までの鋭角的な眼の光が、急に優しく柔らかいものに変わった。

「マクシミアン、そなたさえ生きていてくれたら、母様もこんな恥辱に晒されることもなかったのに……。そなたさえ殺されなかつたら……。そなたさえ……。……。」

幾瞬かが過ぎ、部屋に流れる子守歌にリタルダンが掛かり、やがて消え去っても、シユザンナはオルゴールを膝の上に置いたまま、微動だにしなかった。

翌五月一日、宮廷医師グレーザーは非番であった。皇帝の許に伺候する必要がない上、昨夜、奇妙な手紙を受け取り、なかなか眠りにつけなかった彼は、しばらく朝寝を楽しもうと寝台で抱き合っていた。彼を羽毛に包まれた四角い恋人から引き離れたのは、一本のTV電話、ヴィジホンであった。

急いで身繕いを整え、TV電話、ヴィジホンに向かっとうやうやしく朝の礼をほどこしたグレーザーの頭の上、シュザンナは鼓膜を刺すかのよつに尖った声を浴びせかけた。

「そなた、知っておるうな？」と数口、宮廷の周辺で、妾の名譽を傷つける下賤な噂が流れていることを。」

「いきなりこれか……」

「存じておりますが……」

シュザンナの、儀礼的なものにせよ、何の挨拶もなく、居丈高な態度に、思わず眉をしかめたのを、顔を上げるまでに修正し、グレーザーは何喰わぬ顔で心した。それくらいは芸当が出来なくては宮廷ではやっていけないのである。

「では、何故、何とが策、て、を打たぬ？」

グレーザー医師の不快感は、表面上には出ぬものの、更に増大した。この御婦人には、自分が今どんな状況にあるのか、全く判っていないらしい。自分は宮廷医であって侯爵夫人専属の医師ではない。別にこの女性に献身的な忠誠を捧げる義務はないのだ。そんな噂の後始末まで何故私がせねばならぬのか？第一、自分があたふたと動き回っては、火に油を注ぐようなものではないか。おそらく自分の行動も、暇な宮廷貴族共が興味津々で見守っているに違いないのだから……。もしかすると、今回の噂は侯爵夫人ばかりでなく、自分を目標にしたものなのかも知れない。

（昨夜届けられた手紙が、その何よりの証拠ではないか？）

そんな予感が、グレーザーを慎重にせざるを得ない。

「とにかく、あのような噂が流れたのでは私としてもお館へ出向くわけには行きかねます。成功の為に自重が何より肝要。」

「そなた、つまるところ恐ろしくなったのではないのか？」

この質問は、なかなか得ていたと言っただろう。自分には類が及ばぬ形で、シュザンナの計画が遂行不可能になることを、グレーザーは願っていたのだから。しかし、まさか、その通りですとは言えない。いくら画面の回こ側とはいえ、シュザンナの怒りを進んで買っことは、グレーザーにとっても避けたいところであった。

「そのようないことはございせん。」

「我ながら独創性のない答えだ、とグレーザーは自嘲した。」

「口ではどうとでも言える。まさか、そなた、あの女に思い知らせる一件から手を引きたさに、自分で噂を流布してまわっているのではあるまいな？」

「めっそもない！そのようにお信じ頂けぬとは、心外の極みでございますな。」

憤然として見せつつも、医師は自分の想像力の欠如を嘆いた。成る程、その手があつたのだ。しかも、それをこの御婦人は思いつき、自分は思いつかなかった。やれやれ、自分の方が策謀に関してはこの御婦人より一段も二段も劣るらしい。いずれにせよ、今はとにかく、グリューネワルト伯爵夫人に対する例の計画を実行に移すには、時間が掛かるのだということはこの御婦人に納得させ、時を稼ぐしかない。例の計画そのものが消えてしまつまで……。

「侯爵夫人、私が愚考致しまするに、たとえお望みのような男の精が手に入りましたところで、如何にしてグリューネワルト伯爵夫人に……その、左様、受精させるか

これは極めて困難と申さざるを得ません。」

「そなたは宮廷医ではないか。」

「お言葉ながら、伯爵夫人の傍らには侍女もおりますし、診察にしても誤診を避けるため複数の医師が従つことが多いため、御自分の経験からもお判り頂けると存じます。……」

「……」

「そこで、更に愚考いたしまするに、グリューネワルト伯爵夫人を完全に破滅させるのは、彼女を失墜させた後でよろしいのではないかと。」

「どういふことじゃ？」

自分の意見に、シュザンナが興味を持った様子に意を強くして、グレーザーは力説した。

「まずは、伯爵夫人を後宮から追い出す、これが肝要かと存じます。」

「成る程のついで、あの女を宮廷から追い出すについては、そなたに何か妙案でもあるのか？」

「それは……何分にも伯爵夫人の弱みを握るか、或いはあの館の使用人を抱き込むか、と今、探らせておるところでございますので、今しばらくのご猶予を、具体的な計画は、それからでございます。」

「ふむ、しかし、あの館の者がそう簡単にこちらにつくであるつか？何と云つても、今皇帝陛下下の御寵愛を集めておるのはあの女じゃ。あの女についた方が得策と考えるのではないか？あの館に勤める者は、あの女の出自を考えてか、帝国騎士の中でも特に歴史の浅い家柄の者が平民出身の者ばかりじゃ。下賤な者には、あの女の下賤さも判るまい。陛下と帝国のことを憂える妾の心もな。」

「ご心配には及びますまい。下賤なればこそ忠義の心も薄く、こちらの報酬次第で何とでもなりましたよ。」

「そなたの言つておりじゃ。自らの使用人に裏切られて涙するあの女の顔が眼に浮かぶ。金銭のことは心配要らぬ。必要なだけ出す。あの女の使用人にも伝えておくように。」

「はい、御覧な御言葉、彼らに代わつて御礼を申し上げます。」

「それで、あの女を後宮から追い出した後はどうするのじゃ？後宮からは出たもののうのうとあの女が生きていくような事、妾は許さぬ。あの女はあの女にふさわしい報いを受けるべきじゃ。」

「後宮にて陛下下の保護の許にある間は、こちらといたしましても迂闊に手を出させぬが……一旦、後宮を出て、皇帝陛下下の保護も届かぬ状態であれば、いかにしてもできましよう。それこそ、侯爵夫人の思うがままでございます。」

「わかつた。どんな形であらうと、一度後宮から追放すれば、その後、あの女をどう処置しよう、それこそこちらの思つままというのじゃな。まず追放が先決と。」

「左様でございます。」

シュザンナが自分の説明に納得したと見て取つたグレーザーは、安堵の溜息とともに、頭を垂れた。しばらくの間は、これでこの御婦人も静かにして置いてくれるだろうと思つたのである。

シュザンナの笑い声とその頭上を通過していく。競争相手のまだ見ぬ失墜を楽しみむ笑い声。

「つづく、そなたは畢竟じゃの。段階をつけてあの女を不幸に追い込み、いたぶろうとは、妾など、とても考え及ばぬ。」

「うやうやしく低頭する医師が、その言葉を耳にしてどう思つたかなど考えもせず、シュザンナはTV電話、ヴィジホンを切つた。」

グレーザー医師の方はというと、朝早くから叩き起しておきながら、挨拶の言葉一つないシュザンナを心の裡で罵つた。

「そろそろ潮時かも知れぬ。あのような噂が流布すること自体、侯爵夫人の権力がすつかり過去の栄光となつたという証明ではないか？夫人に権力があつた頃ならば、あのような噂、たとえ真実であつたとしてもみ消されていよう。あの御婦人に付き合つて、こちらまで破壊するのは御免な。」

「グレーザーはデスクから昨夜のあの手紙を取り出した。そこにはただ一行のみが記されてゐる。三月前に自分が出した一通の書簡同様、ワードプロセッサーの印字で、『汝の罪はすべて我が掌の上にある。』グレーザーは再び背筋が寒くなるのを感じた。

この、グレーザー医師の心胆を寒からしめた手紙の主であるが、その人物は例の噂を流布した張本人でもある。

しかし、この案を最初に立てたのは手紙の主ではない。作業者は、クロフシュトック侯領から帰還した戦闘技術顧問の一人で、階級は少将である。彼は彼の親友の窮地を救つべく手紙の主に近づき、目的を果たした。その代償として彼は手紙の主と彼の親友の忠誠と協力を誓つたのである。

シュザンナとグレーザー医師にとって不運だったのは、グレーザーの秘書を務める女性、クロフシュトック事件の少し前に、一時その将官とただならぬ関係にあつたといふことである。彼はその女性から寝物語に、彼女の上司がバーネミニオンデ侯爵夫人をしばしば訪れているという情報を得ていた。手紙の主が、彼と彼の姉に対するシュザンナ・フォン・バーネミニオンデの書意を赤毛の親友以外に初めて漏らした時、この将官の記憶裏から、その時の記憶が甦つたのである。

医師と皇帝の元寵姫：この二人の協力関係を裂く為はこの将官が思いついたのが、「バーネミニオンデ侯爵夫人の望まれざる懐妊」という噂の流布だった。

もし、クロフシュトック事件が起つたなければ、この将官が手紙の主と知己となるのは今少し後のことであつたであらうし、或いは別の形で手紙の主と関わる事になつたかも知れない。シュザンナの最後の二〇日間を決定つけたこの二名（正確には手紙の主と彼の親友、そしてクロフシュトック侯討伐から帰還した二人の少将の四名だが）の出会いが、その後、銀河の歴史さえも動かすことになるのだが、それはまた別の機会に語られることもあろう。

さて、シュザンナがTV電話、ワイジホンでグレーザーと話した数刻後、内務尚書の執務室では、リヒテンラーデ侯を囲み、フリーゲル内務尚書、ゲルラッハ財務尚書、ノイケルン宮内尚書、アイゼンフト典礼尚書が内密の相談をしていた。相談の内容は、バーネミニオンデ侯爵夫人シュザンナの処遇についてである。

「バーネミニオンデ侯爵夫人懐妊」の噂は彼の耳にも届いており、真偽のほどはともかく、後宮の女性、それも一時は皇帝の寵愛を一身に集めた寵姫の醜聞は、「ゴールデンパウム王朝の尊厳を傷つけるものとして看過できないことだったのである。」

「それで、内務尚書閣下のお考えは？」

財務尚書の問い掛けに、リヒテンラーデ侯は出席者全員の前を見回してから口を開いた。

「わしとしては、あの御婦人には宮廷を去り、どこか静かな田園で、残りの人生を出来るだけ穏やかに過ごして貰うにこしたことはないと思つておる。」

「同感ですな。」

五人のうちで、最もシュザンナと接する機会が多い宮内尚書が賛同の意を示した。

「しかし、あの侯爵夫人がすんなりと宮廷を去るでしょうか？」

内務尚書が疑問を投げかけると、典礼

尚書が頷いた。

「皇帝陛下の御意といつことならば、いくらあの御婦人でも嫌とは申せませぬまい。」

財務尚書の意見を内務尚書は首肯した。

「しかし、皇帝陛下がそのような御決断を下されるだろうか？今はともかく、かつてはあまたの美姫の中から特に寵愛なされたのだ。宮廷から追い出すような事を果たしてよしとなされるかどうか……。」

「卿のいふとおりじゃ、内務尚書、問題は陛下がどうなされるかに掛かつておる。だが、出来ようことならば、このような悪い噂を陛下のお耳には入れたくない。出来る限り穩便に事を済ませたいのじゃ。」

「それではどうしてはごつてしょうか、内務尚書閣下。陛下には、噂の存在はお伝えするのです。しかし、それは根も葉もない虚偽であるとも申し上げるのです。まだ十分に若く美しい侯爵夫人が、陛下の御寵愛を受けることもなく後宮で無聊を困っているから、好奇の眼にも晒され、宮廷医が入りするだけでそのような思まわしい噂が立つのだと申し上げれば、侯爵夫人のためにも宮廷から下がるのが最善と思われるのではありますまいか？」

財務尚書の案はなかなか名案のよつてあつた。

「宮内尚書、どこかにバーネミニオンデ侯爵夫人が後宮を辞するに際し、下賜されるに良さそうな荘園はあるかな？」

「多分あるとは思いますが、侯爵夫人が満足なされるような荘園となりますと、かなりの規模でないと……。下手に小さな荘園を下賜すれば、軽く見られたと機嫌を損ねるかも知れませぬからな。何分にも侯爵夫人はバーネミニオンデ家の資産を受け継がれて、経済的には恵まれておりますからな。それだけに、小さな荘園では陛下のありがたみが伝わらぬかも知れませぬ。」

「では、済まぬが、いくつか候補地を挙げて置いてくれぬか？陛下から、バーネミニオンデ侯爵夫人に、後宮を去るに付いてのお許しが出たら直ぐに、必要な手続きが取れるようにな。わしは陛下にこの件に付いての御裁可を頂けるよう、奏上して下さるとしよつ。」

内務尚書が立ち上がり執務室を出ていくのを見送つて、各尚書もそれぞれの省庁へと内務省を後にした。

一刻程後、老内務尚書はフリードリヒ二世の前にいた。内務尚書といえど皇帝に会うには所定の手順を踏まねばならず、何か伝えるべき事が生じたとしても、余程の事がなければ直ぐに会えるわけではないのである。しかも、建物から建物へはともかく、一旦建物の中に入れば、広い宮殿の中を、自分の足で歩かねば目的の場所には到達しない。エレベーターもベルトコンベアー式の廊下も、新無量宮、ノイエ・サンステー内には存在しなかつたからである。

だが、ゴールデンパウム王朝の価値観によれば、時間が掛かることこそ、逆に皇帝や宮廷の尊厳を高めらしめることであつた。彼らの皇帝に、例え政府や軍の高官であつても、簡単に会えるようでは、皇帝に謁見賜る価値が薄れようといふものだ。時間を掛け、ようやくお目もじ適つてこそ、我が身の幸せを知ることでもできる……それが、無意識のうちに宮廷に染み着いた考え方であつた。誰もそこに疑問を投げかける者はいなかつた。それは全く開祖ルドルフ大帝が定められし事であり、心のうちに不満を感じた者がいたにしても、それを表に出すことは不敬にあたるたされ、口に出すことを皆ためらつたからである。そして、己の足で移動がかなわなくなつた時が、宮廷からの引退を意味するとなれば、皆、ただひたすらに、二本の脚を動かすしかない。

「成る程、シュザンナにそのような噂が……」

國務尚書の奏上を聞き終わると、しわがれた声でフリードリヒ四世は自分に言い聞かせるように呟いた。

「はい、それで、如何致しませうか？このような噂が立つことさえ陛下にお仕えする女性にはあつてはならぬ事。厳しい罰を与えられても仕方がございますが、この噂、全くの虚偽のようでございます。おそらく、陛下の寵を離れて久しい侯爵夫人に対する好奇心がうんだデマでございます。よろしく、このまま、かの御婦人が後宮にとどまれば、今後も同じようなことが繰り返されるのではないかと臣は愚考いたす次第。それは皇室にとつても、また、あの御婦人にとつても、決して良いことではございませんまい。」

数瞬の沈黙の時が流れた。フリードリヒ四世の脳裏には、後宮に納められたばかりの頼りなげな少女の姿が浮かんだ。はたして、シュザンナは後宮で幸せだったのか？「あの者はまだ若し。宮廷の外で新しい人生を歩むのに遅すぎる」ということはあるまい。一人も存命しておらぬとは言え、予の子供を四人、身籠もつてもある。十分なものを与え、決して不自由せぬようにしてやってくれ。よいな？」

「御意。」

「それから、シュザンナに、幸福な余生を送るようにな。」

「はい、お伝え申しましょう。寛大なる御裁可、かの御婦人に成り代わり御礼を申し上げます。」

深く頭を垂れた後、皇帝の許を國務尚書が辞すると、フリードリヒ四世は椅子から立ち上がった。窓辺に近寄つて外を見ると、既に日が陰りはじめている。建物から出て、國務省へと向かうリヒテンラーデ侯の後ろ姿を見送りながら、フリードリヒ四世は、口の中で呟いた。

「シュザンナ、噂が本当だったとしても、予は構わぬ。そなたを縛つておくつもりはない。」

予にそんな資格はないのじゃ……」

二一・明けの明星

五月一六日の午後、新無憂宮、ノイエ・サンスーシー、西苑にあるシュザンナの屋敷は、久しぶりの権門の訪問に、ここ数年のうちに館全体に立ちこめた冬の気配が僅かに緩んだかに見えた。

「こちらでございます。」

使用人の案内で招き入れられたサロンには、薫香の香りか、それとも女主人の香りなのか、得も知れぬ甘い香りが立ちこめていた。

「よくぞ参られました。國務尚書閣下。」

艶然と微笑んで客人を迎えた女主人は、衣擦れの音をさせて、リヒテンラーデ侯を豪華な肘掛け椅子へと誘った。

「ペーネミュンデ侯爵夫人には御健勝の様子、慶賀にたえませぬな。」

儀礼的な挨拶の後、勧められるままに腰を下ろした老國務尚書は、これから起こるであろう事態を予想して、気が重かった。本来ならばこの役目は宮内尚書が典礼尚書の管轄である。しかし、シュザンナの怒気に晒されることを恐れた両尚書は、

「あの御婦人にこれを伝え、なだめられるのは、閣僚主座たる國務尚書閣下、あなたを置いておりませんぞ。あなたにならば、あの気性の激しい御婦人も、敬意を表して聞くでしょう。」

と、上手くこの役目をリヒテンラーデ侯に押しつけたのである。これが自分の責務であるならば、嫌なことは速やかに片付けておくに限ると自らを鼓舞し、國務尚書は訪問の目的を果たしにかかった。

「さて、ペーネミュンデ侯爵夫人、本日、御

当家を訪れたのは他でもない。皇帝陛下の御意をお伝えしようと思ひましてな。」

「おお、陛下の御言葉をとら。それはそれは……。して、陛下は何と？」

期待の眼差しで見つめられて、流石にリヒテンラーデ侯も言葉を続けるのを四分の一瞬ほど躊躇った。

「……陛下は、ペーネミュンデ侯爵夫人に新たに莊園を下賜されるというところで、」

「莊園を？」

「左様です。」

「有り難い事じゃ。されど妾には、莊園などよりも皇帝陛下のお声の方が嬉しいの……。」

「それでですな、侯爵夫人。陛下は貴女にこちらの館を引き払い、そちらの莊園で幸福な余生を送るようにと仰つておられます。」

リヒテンラーデ侯には、まるでその場の空気が凍り付いたかのように思われた。数十瞬の静寂の後、シュザンナは震える声で國務尚書に問い掛けた。

「確かに、今の御言葉は陛下の仰つたことなですか？それも、例の根も葉もない噂をお信じになつて……。」

「噂とは何のことやら判りませんが、陛下の御意には相違ありません。疑つておられるのですかな、侯爵夫人、もしそうなら……。」

「いえ、いえ、……。」

シュザンナは激しく頭、かぶり、を振つた。美しく結い上げられた髪が一筋、顔に落ちてくる。そつではない、そつではないのだ。陛下も、この老人も、何も自分のことを判つてはいない……。

「陛下の御心がそのようなものであるとすれば、何故、妾がそれに逆らいましよう。一日の例外もなく陛下に忠実であった妾です。ですが、どうして陛下は御自分でその旨を妾にお話さらぬのか。妾はそれが

無念でなりません。陛下も余りに御無情でいらつしやる。幸福な余生などと仰つても、妾の幸福は陛下と共にしかないものを……。」

皇帝の意とあれば、どのようなことでも従おう、という言葉と、幸福な余生など皇帝と共に限りあり得ない、という半ば恨みとも言える言葉の間には明らかに矛盾がある。しかし、シュザンナはそんな事に気がついていない。シュザンナにとつてはどちらも彼女の偽らざる気持ちなのである。矛盾に気がついたとしたら、それは聞き手の方であつたかも知れない。

「ペーネミュンデ侯爵夫人、お気持ちは判りますが、陛下は国事の全てを統轄なさる御身であれば、多忙にして、ここまで玉体をお運びになるのはかなわぬのです。」

「陛下はそれほど御多忙だと？」

「左様。」

シュザンナの怨差の念を封じ込めようと図つたリヒテンラーデ侯であつたが、これはこの場合、シュザンナの意識を更に深い憎悪の対象に向かわせるだけであつた。何しろ彼女はフリードリヒ四世の生活が、国政に熱心に取り組んでいるとはとても言えない代物だということ。我が身を持つて熟知しているのである。皇帝が自分の館まで足を運ぶのを阻むものが国事などでないことは、お見通しであつた。

「ああ、さほどに御多忙でいらつしやいますのか！？酒宴で？狐狩りで？賭博で？いえ、何よりも、あの女の許へお通いになるので、御多忙なのでしょう。国事など、こまかされずともよろしくでございます。」

言葉を発すれば発するほどに、シュザンナの中で、「あの女」に対する怒りが膨れ上がつていくのが判つた。それはリヒテンラーデ侯にも伝わった。

（これ以上激昂されてはかなわぬ。何とかも少し落ち着いて貰わねば……。）

そこで老國務尚書は、彼の知る限り、最

族年金を奴の家族から取り立てればよいのですから。だが、もし奴が、奴の大伯父のよつに亡命でも図つた日には、私は貸した金を取りはぐれることになる。実戦の、それも陸戦部隊では、叛徒共との接触も多く、その危険は大い。そうなつた場合、軍務官はその責任を取つてくれるのか？」と。更に続けて

「奴には、私の目の届く範囲にいて貰ねば困る。安全に長生き出来て、私に返済するための金が多く稼げるころ、そんなところ奴の身柄は置いておいて欲しい。」と、貴族の子弟が多く、後方勤務としては高給が支払われる近衛隊を、その学生配属先として希望したというのだ。

シュザンナに、その噂を教えた人物は「どうも付け加えた。その有力貴族はかなりの高利で金を貸し付けており、一士官の給料では、その利息を払うだけでも一杯、おそらくその青年が借金を払い終わることは一生ないでしょう。まあ、彼だけではなく、亡命したという大叔父の家族も含め、帝国に残つた彼の一族は、子々孫々に至るまで、たった一人の身内の不始末で人生を棒に振つた訳です。」

（あの者ならば、全そええせば妾のために働くであろう。あの女の顔にトマホークを打ち込んでくれるやも知れぬ。）

今のシュザンナにとって、人の心ほど信用できないものはなかった。人は皆、自分の利害だけで動いている。信義など、既に由緒正しき大貴族の中でさえ枯れ果てていないのは、先程の国務尚書で証明済みではないか？金が必要な者ならば必要な者ほど、自分が支払う報酬に対する忠誠もまた、確かなものである筈であった。

入れ替わり立ち替わり、仕事の合間にサロンの前にやってくる。怯えた表情で顔を見合わせていた侍女達の前に扉が開かれの、たつぱり一時間は経つてからであった。

思わず後ずさる侍女達を一瞥すると、無言のままシュザンナは二階の自室に戻つた。後には、割れた皿やカップ、ひっくり返つたテーブル、レールが外れた「元」カーテン、中身と外皮が別々になつたクッション、その他諸々のシュザンナの手になるオブジェが展示されており、その作品は部屋の中だけでは納めきれることが出来ず、窓ガラスを突き破つて、芝生の上まで陳列されていた。「近衛隊の西苑分隊に、士官学校時代、白兵戦の競技会であるオフレスサーを今少しのころまで追いつめたという男があつた。名は何と申したか……あの者に妾の許に伺候するよう、即刻伝えよ。」

自室に戻つたシュザンナは、執事と呼びつける異様なほど冷静な声で、「二代目執事の宮内省官吏に告げた。」

「しかし、侯爵夫人、このような時間から、いくら西苑警護の近衛兵と言えども館に招かれるのは如何なものかと存じますか……。」

言外に、あの噂が飛び交つているこの時期に不謹慎ではないかという意を込めて執事は心えかけたが、シュザンナの暗青色の瞳に睨まれて口をつぐんだ。彼もまた、シュザンナの怒りが自分に向けられるのは避けたい人間だつたのである。しかし、女主人の不始末は、そのまま自分の出世にも関わってくる。今この時の安息と将来の出世のどちらを選ぶべきか、半瞬の迷いの後、執事はシュザンナに頭を下げて部屋を出ていった。前者は女主人の意に従ひさえすれば手に入るものが出来るが、後者は女主人の牙で喉笛を喰ひ破られれば、それで幻と終わる代物であつた。シュザンナの絶頂期に宮内省に入つた彼の頭の中では、シュザンナの人事に関する影響力は、未だに強大なものだつたのである。

それから更に刻が刻まれ、今日と明日が交錯する頃、きびきびとした歩調にも関

わらず両脚の軍靴に完璧な沈黙を守らせて、シュザンナの屋敷を訪れた人物がいた。昏間、国務尚書が通されたと同じサロンに通されたその人物は、自分を呼び出した張本人が現れるまでの時間、室内を無遠慮に眺め廻した。

テーブルについた真新しい傷、妙にすつきりしたマントルピースの上部。絵でも掛けてあつたのか、周囲に比べ何力所か色が褪せていない箇所のある壁紙。割れた窓ガラスはあの後すぐに執事が修理の手配をし、破れたカーテンも予備のものに掛け替えられていたが、昏間、「ここで起こつた出来事は、その全てが隠されていたわけではなかつた。そして、昏間の出来事の生きた証拠が部屋に入つてきた。」

近衛兵の制服に身を包んだ人物は、恭しく膝を屈しその人物を迎えた。その身のこなしは如何にも洗練されているのだが、どこか相手を小馬鹿にした雰囲気があつた。「嘲弄」といつスハイスが、一挙手一投足に実に絶妙に効かせてあるのである。それより少なければ鈍感な人間には感知されず、それより多くは、味覚の鋭敏な者には耐え難いものになる。

彼は、かつて白兵戦の名手と目された時期もあつたのだが、今では無言のうちに自分の中に潜む競意を上官に伝える名手としての方が有名であつた。当然、上司達の印象が良い筈もない。一度ならず上官侮辱罪に問われたこともあるが、その都度、事なきを得ていたのは彼の徳によるものではなく、もっと高い所からの意志が働いていたためである。彼はその「高い所」にいる人物さえも、寄生虫と認識していたのであるが、

「今宵、そなたを呼んだは他でもない。後宮に巣くう害虫を一匹、駆除して欲しいのじゃ。」
「ほう、害虫と仰いますか。」
シュザンナの言葉に男は顔を上げた。濃い

探み上げと不敵な表情が近衛兵らしからぬ印象を与える。端正な顔立ちだが、貴公子といつには少々あくが強すぎるのである。

「そう、害虫じゃ。美しい蝶を装つておるが姉弟で、皇帝陛下を、そして「トルデンバウム」王朝を食い荒らす害虫じゃ。しかも、その事に妾以外のものは誰も気がついておらぬ……。」

「ほう、姉弟で。」
シュザンナが誰のことを言っているのか察しがついたらしい。これまでシュザンナがこの手の依頼をした人物は、「自分」が手を下すのだと言われると、例外なくこの時点で一瞬表情が硬直するのだが、この男は違つていた。全く動じず、むしろこの話を面白がつているようにさえ見えた。だが、シュザンナの次の一言は、流石のその男をも一瞬戸惑わせたよつであつた。

「もし、そなたがその者達の駆除に成功したならば、そなたが背負つておる借金、妾が全て払つてやつても良い。そなたの昇進についても力添えしよつてはいいか。そなたの祖父が剥奪されたといつ男爵が、そなたの許に返還されるよつに取り計らつてやつても良いぞ。」

「男爵……。」
近衛兵は苦笑したよつであつた。彼には判つていたのである。今のシュザンナにそんな神通力は既になつたといつことが、
「……では、単刀直入に伺いましょ。侯爵夫人はグリニューネルト伯爵夫人とその弟御を始末せよと仰るのである。その代価として私の借金を肩代わりして下さるよつ……。」

「……そつじや。西苑警備の近衛兵ならばあの女の動きをつかむことも容易であるよつ。事は一刻を急ぐのじゃ。」
「よるしい、本題に入りましょ。」
その表情はとも借金の肩代わりを頼もつといつ者のそれではなかつた。

シユザンナの屋敷を出た近衛兵は、その後近衛隊の詰所により、しばらくデータヘースで何事か検索していたようであったが、それも一〇分ほどで終わり、帰途について懐には、シユザンナから受け取った前金が入っている。

家に向かつて歩きながら、彼は迷っていたこのまま逃亡するべきか、それとも、金を受け取った以上、依頼人の希望を叶えてからにするべきか。

前者の行動をとれば、それはまさしく詐欺である。戦場での敵相手の詐欺ならば自慢もできようが、どう見ても世間に疎い女性が相手では気が進まなかった。彼は経済的に貧窮した中で成長し、理想だけでは食べていけないという現実を知っており、極めて損得勘定に敏感な思考パターンを持つてはいたが、人間としての矜持を全て失っていたわけではなかったのである。自宅のある官舎の前に到着するまでの間、ブルーノ・フォン・シエンコップは、これまでの自分の人生を振り返った。

いつも通りの朝の食事の途中で踏み込んだきた憲兵達、その時から全てが首を立てて崩れた。祖父も父も、彼らにどこかへ連れ去られ、帰って来た時には半死半生だった。住み慣れた邸宅を追い出され、僅かばかり持ち出すことを許された荷物を持つて移り住んだ下町の小さな家で、祖父はその時の怪我が許で療養いたがり、再び起きあがることなく亡くなった。

その頃の自分には、どうしてそんなことになったのか判らなかつたが、やがて、祖父の弟が莫大な借金を残したまま亡命したこと、そして、その亡命に、祖父が積極的に荷担していたことを知った。亡命は見つかれば大罪である。勿論、それを助けた者も同罪だった。

男爵号は剥奪され、あらゆる動産、不動産が国家に没収された。無一文になったシ

エンコップ家に更に追い打ちを掛けるように、あの「寄生虫」はやって来た。大叔父が保証人になっている証文をひらひらさせながら……

「借金も財産のうちです。貴方の叔父上が残していったものです。きつちりと片を付けていただきますよ。」

また怪我が治りきつていない父親の顔が蒼白に引きつっていたことを覚えていた。

その後は地獄だった。一旦、罪人の烙印を押された者に世間は冷たい。父はそれまでの職を解雇され、その後もまともな職には就けなかつた。世が世ならば男爵夫人として、私邸で家事すらする必要もなく過ごせた筈の母親も、仕事を求めて街を歩き回った。実家からは、シエンコップ家が男爵号を剥奪された時点で、絶縁を言い渡され、頼るわけにはいかなかった。しかし世間知らずの母に簡単に勤まる仕事のある筈もない。それでも、取り立ては容赦なくやって来る。

「貴方が、もっとしっかりしてくれないからこんな事になるのよ！」

「何を言つて！俺に文句を言つ前に、仕事を見つけて少しでも借金を返すことを考えろ！」

「お義父様が、叔父様の亡命などと考えさえしなれば……」

「何を言つんです？嫁の分際で、舅のことを悪く言つのですか？」

それまで、決して聞くことの無かつた罵詈が、家の中に響くようになった。

自分が軍人になったのも、それが一番安上がりで、しかも効率がいいと「寄生虫」が判断したからだった。成績が良ければ、学費は全て奨学金で賄える。そして、卒業すれば、普通の職業より割のいい給料が貰える。例え死んでも、戦死なら、それなりの年金も出して貰えるだろう。死んだ後まで借金が返せるといふ訳だ。民間人としてくたくたやっているよりも、余程親孝行出来る

るといふものだろう。だから、お前は士官学校へ行け、この一言で人生が決まった。

だが、自分はまだ良かった。七歳年下の妹は、一〇代半ばで売られるようにして家を出た。休暇で帰ってみると妹がいない。何処へ行ったのかと尋ねる自分に、両親は事も無げに言った。あの子は奉公に行ったよ。

元男爵家の娘がいうことで、高いお金を出してくれる人がいるらしい。是非に言われてね……勿論、あの「寄生虫」が持ってきた話だ。「支度金」はそのまま「寄生虫」の懐へと消えたらしい。その「奉公」というのがどの様な類のものなのかは、推して知るべしである。その後、妹には、一度も会っていない。

妹がそのような目に遭わねばならないことも辛かつたが、両親が、まるでそれが当然のように感じている様子なのが、たまらなく哀しかった。借金の返済に追われているうちに、人間としての誇りも何も、全てを失い、無気力で生きる屍になり果てた姿……やがて自分もそうなるのだと思つたやりにきれなかつた。だから、逆に、そつたるまいと、自分の中の謀反気を掻き立てて生きて来たとも言える。誰かの奴隷に成り下がるのは嫌だった。「自分自身」を見失いたくはなかつた。

官舎の前に植えられた榎の木に、片膝を上げた姿勢でもたれ掛かり、ブルーノ・フォン・シエンコップは空を仰いだ。漆黒の空には、無数の星々が燦々めいている。それを見上げる彼の胸中は既に定まっていた。

（この三〇年近く、俺の家族は金の為に苦しめられてきた。俺の人生はもつぱら、しかし、俺の息子には、俺のような人生は歩ませたくない。働いても働いても高利で膨らむ借金の利息を払うが精一杯。これまで俺や俺の家族がああ寄生虫野郎に払った金額は、最初に大伯父が保証人になったという人物が借りた金額の何倍になることか。このままでは、これから幾世代にも

渡つて、この三〇年間と同じ事が続く。それを断ち切るためならば、多少の危険は犯すだけの価値があるといふものだ。そして、男たるもの、女性に騙されても女性を騙すことなけれ、だ、いざとなつたら、同盟に亡命して、あつちにいるといふ又従兄弟の世話にでもなるさ。）

彼の頭の中では、既にこの計画に誘つべき人物のリストが出来上がっていた。皆、自分同様、何らかの負債を抱え、身動きのとれない者達である。失敗したとしても、今更失うものは無い筈であった。

だが、彼がもしこのおよそ一年後に起こるリップシュタット戦役により、彼と彼の家族を搾取してきた大貴族が、彼らを縛った証文と共にこの世から消滅すると知っていたら、また違った選択をしていたに違いない。

皮肉なことに、彼のこの選択によって、彼の家族はゴールデンバウム王朝滅亡後も、憂いの色の濃い生活を送ることになるのだが、それはまた別の物語である。

翌日の夜、皇帝フリードリヒ四世の寵姫グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼは、国立劇場で開かれたヒアノ演奏コンクールから新無憂宮、ノイエ・サンストシー、西苑の自邸への帰途、何者かに襲撃を受けた。この事件に關し、皇宮警察から宮内省、典礼省、國務省に「緊急」の判を押されて送られた書類には次のように記載されていた。

「帝国曆四八六年五月一七日二二時一〇分頃、皇宮内の車道において、グリューネワルト伯爵家所有の地上車、ランド・カーが襲撃された。襲撃に用いられたのは対戦車ライフル。帝都防衛軍陸戦部隊の武器庫から持ち出されたものであることを確認。地上車、ランド・カーは右後部ドアを破損し、運転制御不能のまま、車道横の堀に運転席側から激突。前部座席は

大破。運転手は重体。病院に搬送するも三〇分後に死亡を確認。後部座席に乗り込んでいたグリーネワルト伯爵夫人アンネローゼ、シャウハウゼン子爵夫人ドロテア、ヴェストパルレ男爵夫人マクダレーナは、目立った外傷もなく、病院での精密検査の結果も、シャウハウゼン子爵夫人に軽い頸椎捻挫（全治一週間）があっただけであった。襲撃犯は九名。犯人のうち二名は、グリーネワルト伯爵夫人に同行していたライオンハルト・フォン・ミューゼル大將、ジークフリート・キルヒアイス少佐との格闘の未死で、主犯と見られるブルーノ・フォン・シェーンコップ大尉は、事態を知り駆けつけたオスカ・フォン・ロエントアル少將、ウオルフガング・ミッターマイヤー少將との格闘中に、共犯者のブラスターの誤射を受け死亡。五名は逃亡するも、ミッターマイヤー少將に捕らえられた犯人の供述より、身元を割り出し、これを捕縛するに成功。（彼ら六名の供述調書は別紙にてこれに添付。）

襲撃犯達は、この犯行はベーネミュンデ侯爵夫人の依頼によるものと、シェーンコップ大尉から聞かされていたと供述。捜査の結果、彼らの供述通り、総額四〇万帝国マルクを超える金銭が発見された。背後関係を詳しく調べる必要性を認めるものであるが、被害者及び容疑者双方の立場を重く見て、皇宮警察はこの一件を管轄省庁に報告、以降その指示に従うものとする。

なお、今回の犯行に、軍の備品が使用されたことを重く見て、武器庫の管理により一層の注意を喚起するよう軍務省に要請するものである。」

「関係省庁」の行動は迅速であった。日付が変わらぬうちに、報告書が国務尚書に届けられた。

その中には、ベーネミュンデ邸の使用人達から得られた、「確たる証拠」がない証言も混入していた。宮廷医グレイザーもまた、

ベーネミュンデ侯爵夫人の意を受けて、グリーネワルト伯爵夫人を書する計画に加担していたといつものである。しかし、今回、嚴重な監視下に置かれている筈の皇宮内において襲撃事件が行われた以上、そちらの証言も虚言として片付ける訳にはいかない。国務尚書リヒテンラーデ侯クラウスは、信任あつた補佐官、帝国騎士ワイツを宮廷医の許に派遣した。これが五月一八日未明のことである。

常ならぬ時間の突然の来客は、皇帝の身に何かあつたのかとグレイザーを驚かせたが、国務尚書補佐官の目的が、ベーネミュンデ侯爵夫人の一件にあると知らされたときの衝撃は更に大きかった。

「それは、昨夜、夫人はグリーネワルト伯爵夫人の襲撃を行ったと？」

「実行犯達はどのように供述しております。そして、この件に関し、先生の関与も取り沙汰されております。ご存じの事は全てお話し下さった方が先生の為かと存じます。が……。」

ワイツの驚しを聞かなくとも、グレイザーは既にそのつもりであった。何も、今まさに沈みつつある船に乗ることはない。「左様でございますか……とつとつ本当に行動に移されたのでございますか……まさかとは思っておりましたが……。」

「それはどういふ意味ですか、先生。以前から先生は侯爵夫人の伯爵夫人に対する害意をご存じていらしたと？」

「はい。しかし、現実に行動に移された訳ではなく、御報告の必要はないかと思っております。しかし、現実に行動に移された訳ではありません。人はストレスが溜まって参りますと、通常ではあり得ぬ妄想を抱くものでございます。怒りにまかせてとんでもないことを口走ったりも致します。しかし、その殆どはそれでおしまひになるものでございますから……。私にお話し下さることで、侯爵夫人の気鬱が晴れますならば、それ

もまた治療の一環、医師としての務めと心得、度々のお呼び出しに心じておりました。ただ最近、そのようなお呼び出しが以前にも増して頻繁になり、お話の内容が過激になって参りまして、万が一を思慮して、国務尚書閣下には二月頃、匿名にて、「ご注意を頂くよう書簡を送っております。」しかし、それを証明するものは何かお持ちですか？」

「……ではこれをお聞き下さい。何かの役に立つかと思ひ、これまで、私が記録しておいたものです。このような形でこれが役に立つ日など、来ないことを願っておりますが……。」

グレイザーがワイツに提示したのは、グリーネワルト伯爵夫人と、その弟であるライオンハルト・フォン・ミューゼル大將に対するベーネミュンデ侯爵夫人の殺意が吐露された会話を含む、何本かのテープであった。グリーネワルト伯爵夫人の弟、幼年学校卒業後配属されたカプチュラン力で殺害したいとの意を受けて以来、グレイザーは侯爵夫人と会う度に、その会話を、自分のスーツに仕込んだ極小マイクで録音していたのである。

「これは……。」

その極一部を聞いただけで、流石のワイツも、シュザンナのグリーネワルト伯爵夫人姉弟に対する憎悪の激しさに色を失った。

その様子を見たグレイザーは、自分の提出物が、シュザンナの息の根を止める証拠となると確信した。そして、自分の身の安全を疑わなかった。まさか、それを提出した本人が、ベーネミュンデ侯爵夫人に加担した者として処断されるようなことはあるまいと踏んだのである。だが、この数週間後、四年前にベーネミュンデ侯爵夫人が故ヘルダー大佐を教唆して起こしたライオンハルト・フォン・ミューゼル暗殺未遂事件を隠蔽した動かぬ証拠として、このテープは提出

者自身の首を絞めることになる。グレイザーは、皇宮内での襲撃事件という不祥事に首筋に寒気を覚えていた皇宮警察幹部にとつて、責任を押しつけるに絶好の標的になつたのである。勿論、表向きには、「ベーネミュンデ侯爵夫人急病にて逝去の折、適切な治療を行ひ得ず、夫人の命を救えなかつた責任を問うて」と発表されたのだが……。

ワイツが、グレイザーから得た証言、及び証拠の品を携えて、再び国務省へと向かつたのは陽が昇る頃であった。朝日と反対の方角には、明けの明星がその最後の輝きを空に投げかけている。昨夜の豪雨で空気が洗われたのか、普段以上にその光は澄んでいるよつであつた。だが、陽が昇れば、その光は天空から消えるのだ。地上車、ランド・カーの中からそれを見たワイツはふと、その星がベーネミュンデ侯爵夫人その人のような感慨にとらわれていた。

一一一・終幕

空が明るく輝き、小鳥達がさえずりをはじめる頃、ゴールデンバウム王朝第三六代皇帝フリードリヒ四世は国務尚書の説明を聞いていた。普段ならばこの時間、彼は西苑にあるグリーネワルト伯爵夫人の館で過ごしていることが多いのであるが、昨夜は彼女が友人二名と自分の弟、その友人で彼女が身元保証人になつてきた青年士官と共に、ピアノの演奏を聴きに行った南苑にある皇帝とその家族の為の宮殿で過ごしたのである。既に一〇年前に大公時代からの正妃を失ひ、また数年前には皇太子を失つた彼にとつて、そこは実に孤独

な場所であつた。

起床するや否や、面会を求める國務尚書の伺候を知らされ、また叛徒達がイゼルローン回廊に攻め入つた話かと思つた彼であつたが、國務尚書の口から出たのは、もつと彼の生活に関わりの深いものであつた。

銀の皿に載せられた葡萄を二房、全て胃の腑に送り込んだ頃、國務尚書の報告も終わった。

「シュザンナがそれ程思い詰めておつたとはな。」

フリードリヒ四世の視線は國務尚書を通り越して、それが壁にぶつかると空を流れた。数秒間の沈黙が部屋の中に流れた。このままではいつまでたつても、この件に対する皇帝の勅命が出ないのではないかと、そんな気がして、リヒテンラーデ侯は自分から口を開いた。

「畏れながら陛下、貧しき平民の女として、恋人の愛を失つのを恐れるものでございませぬ。まして一天万葉の皇帝の御寵愛とあらば、寶石の山よりも貴重に思えるのは当然のこと、失つて逆上するの無理はございませぬ。」

更に数瞬の沈黙の後、フリードリヒ四世は國務尚書が今回の不祥事を知つた時より望んでいた言葉を口にした。

「苦しまずに済むようにしてやるがよい。」國務尚書は一礼した。頭の中には、既に皇帝の言葉を実行に移すための数々の儀式とその為の手續きが浮かんでゐる。

そんな國務尚書に半ば背を向けるようにして、フリードリヒ四世は窓の外を見た。昨夜の雨で濡れた芝生の緑が美しかった。

かつて、自分の関心を一心に集めた寵姫に死を与える……それは自らの人生の一部を失つたに似ていた。未来ではなく過去だとしても、いや、そもそも、かつて自分に一度でも「未来」があつたのだらうか？ 自分は「過去」そのものではないか。自分だけでは

ない。既に「ゴルデンバウム王朝そのものが過去」のものとなりつつあるのではないのか、兄のように勤勉でもなく、弟のように闊達でもない自分のような人間が皇帝になつた皇帝に相心しくない者が皇帝になつたその時点で、既に「ゴルデンバウム王朝は滅びへの道を歩いているのだ」という認識が、即位以来、フリードリヒ四世の頭には常にあつた。そして自分がおそらく「ゴルデンバウム王朝最後の皇帝になるだらう」という予感、最近とみに大きくなり、終焉の日はその遠くないとも感じていた。

「どうせ予後から行くのだ。また充分に美しい姿で待つてゐるがよい、シュザンナ……」

フリードリヒ四世のつぶやきを聞いていたのは、窓辺に飾られた鉢植えの桜草だけであつた。

同じ頃、新無憂宮、ノイエ・サンスーシー西苑のペーネミュンデ邸では、シュザンナがややいらいらしながら来るべきものを待つていた。「あの女の訃報、彼女が待つていたのはそれである。」

（遅い、あの近衛兵は昨夜のうちにと言つておつた。もつとくら何でも知らせが来てもいい頃じゃ。まだ来ないといふことは、もしやししくじつたのか？）

自室で待つことが出来るサロンで、サロンで待つのも我慢できなくなり玄關のホールで、シュザンナは期待と不安で胸を一杯にして、「それ」が自邸の扉を叩くのを待つていた。

やがてそれは、宮内省と典礼省の職員の名になつて彼女の館の玄關に立つた。二人の官吏は邸内に入るや否や女主人の姿に出くわすことになる。

「朝も早くから御苦勞な事じゃ。何か火急の知らせかな？」

努めて平静を装つて、シュザンナはいつになく愛想良く二人の官吏に尋ねた。

「昨夜、不慮の事故により、グリューネワルト伯爵夫人が逝去されました。」

（あの女が、とうとうあの女がいなくなつた自分と皇帝との間を引き裂き、邪魔し続けたあの女が……）

この数年間の無念な想いが氷解するのを感じた。表情が華やいていくのが判る。このように時には、神妙な顔をするべきだと判つていても、どうすることもできなかった。

「……それはそれは、お気の毒なこと、未だ若く美しい身でありながら、はかないことじゃ。寿命というしかないな。」

早く一人になつて跳ね回つて喜びたいのを我慢して、シュザンナは型どおりに悔やみの言葉を述べた。

「陛下には、いたくお嘆きであらせられませんが、しきりにペーネミュンデ侯爵夫人を呼べ、あれでなくては我が心の痛みがわからぬ、との仰せ。恐縮ではございますが、陛下の御覆所まで私共と御同道頂きたく存じますれば、お支度いただきませう……」

（よつやく陛下が妾の存在を思い出して下された。陛下の御心が判るのは妾だけじゃと仰せられた。）

官吏の口から発せられた言葉は、シュザンナを言葉通り至福の園へと誘つた。羽が生えて飛んでいかなかったのが不思議なくらいである。

「おお、陛下は左様に仰せられたか。亡くなつたグリューネワルト伯爵夫人もお気の毒ながら、陛下の御傷心も察するに余りある。この身は陛下の忠実なる僕、しもべ、名指してお呼び下さるに、何のためらいがある。少しだけ待つてたれ……：ブリギッタ、ブリギッタ、皇帝陛下のお召しじや、手伝つてたれ。マルタもじや。」

目を輝かせ、眉を開いて、侍女の名前を呼びながら階段を駆け上がつて行くシュザンナの姿を、二人の官吏は何とも後味の悪そうな表情で見送つた。もしその顔をシュ

ザンナが振り返つて見たら、なにがしかの不審を抱いたかも知れないが、この時のシュザンナはそれどころではなかつた。久しぶりの皇帝との逢瀬である。少しでも美しい姿で皇帝の玉顔を拝したかつた。

侍女達はこんなに上機嫌のシュザンナを見たことがなかつた。彼等はシュザンナが皇帝の寵を離れてからこの屋敷にはいつた者達であつたから、シュザンナが皇帝の第一の寵姫の座をグリューネワルト伯爵夫人に譲つてからというもの、この屋敷の使用人達の入替わりは非常に早かつた。ある者はとてもシュザンナに仕えざることは出来ない自分から去つていった。またある者はシュザンナの不興を買つて追い出された。現在の使用人達の眼には、シュザンナは常に暴風雨をその胸の中に抱えている女性と映つていたのである。

しかし、今のシュザンナは、幾枚ものドレスをクロゼットから引つぱり出して寝台に並べてどれにしようかと迷い、夢を見るように陶然とした表情で唇に紅を曳き、髪

の解れがないか何度も鏡を覗き込み、まるで、初めてのパーティーに出席する令嬢のようであつた。側にいる侍女達は、そんなシュザンナを初めて見て、思わず朋輩と顔を見合せてた。

二〇分後、シュザンナは装いを改めて階下に降りてきた。自室で行われていたことを知れば、よく二〇分の間にそれだけのことを詰め込めたものだと、官吏達は感心したに違いない。もつとも、シュザンナが去つた後には、精毛根も使い果たした一人の侍女が床に座り込んでいたのであるが。

官吏達に挟まれて地上車、ランド・カーに乗り込んだシュザンナは、やがて自分の乗つてゐる地上車、ランド・カーが南苑ではなく、常には使われぬ裏門に向かつてゐることに気がついた。

「これは道が違つてはいないか。新無憂宮、ノイエ・サンスーシーの、皇帝の御覆所は

こちらではない。どこへ連れて行くつもりか？」

先程までの上機嫌の娘は姿を消し、そこには権高で神経質な女性が座っていた。「お静かに、侯爵夫人。この車はこれより典礼尚書アイゼンフット伯爵の邸宅へ参ります。そこで貴女に、グリユーネワルト伯爵夫人殺害未遂の件に関して、弁明の機会が与えられるでしょう。」

(殺人未遂じゃと?)
シュザンナには周りのものが全て砂のように崩れていくように感じた。
「すると、すると、あの女は死んでおらぬのか……」

(せめて重傷で手足を失うとか、あの顔が二眼と見られるものになっておるとか、せめてそれくらい……)

僅かな期待を込めてシュザンナは両脇の官吏に尋ねた。

「全くの無傷です。」

これはシュザンナにとって決定的な一言であった。結局自分は、あの女に何の報いも与えることが出来なかったのだ。そして二度とその機会がないこともシュザンナは知っていた。不思議と不甲斐ない実行犯への怒りは湧いてこなかった。余りに絶望が深く、そのような感情さえ遙かなる深淵に沈んだままになっていたのかも知れない。ただ、完全に、自分が、遙かに自分より家柄で劣る姉弟に負けたのだという現実が、彼女の大貴族としての矜持を打ち砕くのを感じた。自分で自分が哀れであり、情けなかった。誰もその場にいなければ、シュザンナはその場に突っ伏して、出せる限りの声を振り絞り、泣いたに違いない。

しかし、彼女は、自分の身体から力が抜け前に折れると同時に、その口元から漏れそつになつた敗者の叫喚を、砕け散つた誇りの欠片を掻き集めて必死の思いで呑み込んだ。今、彼女の両脇には、二人の觀察者が座っている。彼らは、今やシュザン

にとつて、あの女の陣営の人間である。彼らの前で、哀れな姿は見せられなかった。脳から官吏達がシュザンナの身体を引き起こした。このような者達が触れてよい味ではないはずであった。それが……

だが、シュザンナは抗わなかった。この時彼女の脳裏には、嘗て、人類史上初めての市民革命によって処刑された王妃の逸話が甦っていた。その女性は処刑場へと向かう荷車の中でも、落ち着いて毅然としていたといふ。いよいよ断頭台へ上る時、誤つて立ち会ひの兵士の足を踏んだことを、静かに謝つて壇上へ去つたといふ。それを見た人々は、あれこそ「本当の王妃」だと囁き、その囁きは、一八〇〇年以上を経て尚語り継がれている。自分、シュザンナ・フォン・ペーネミュンデは、遂に王妃の座に就くことはならなかった。だが、自分もまた、「本当の貴婦人」なのだ。最期の最期の瞬間まで。あの女を喜ばせるような無様な様を演じてはならない。誰の同情もいらぬ。誰にも慈悲を乞つたりはしない。あの方にさえも。

(アンネロゼ・フォン・グリユーネワルト、これが「真の貴婦人」のありようじゃ。そなたに真似が出来ようか?)

それは、「あの女」に対する最後の「意地」であつたかも知れない。地上車、ランド・カーの中で、シュザンナは姿勢を正し、視線を真っ直ぐ前方に向けた。既に、官吏達の存在は彼女の中から消えている。今のシュザンナに一つだけ希望があるとすれば、それはフリードリヒ四世が自分の行くところに行幸しているかも知れないということであつた。もし、そつであつたならば、せめて我が命の果てる前に陛下に会うことが出来る。皇帝自らの口から死ねと言われれば、妾は喜んで死んで見せよう。妾の忠誠を証明する為だ。それだけを支えに、シュザンナはアイゼンフット伯爵家の門をくぐつた。

アイゼンフット伯爵家のサロンでシュザンナを待つていた觀察は一九名であつた。今回の儀式を取り仕切る典礼尚書アイゼンフット伯爵ヨハン・ディートリッヒ、その立会人代表としてフ라우ンシュバイク公、立会人はフ라우ンシュバイクの他に宮内省高等参事官ボーデン侯爵、皇宮警察本部長シャーヘン伯爵、大審院判事ブルクドルフ法学博士、宮廷医オレンブルク医学博士、國務尚書政務秘書官ワイツ、侍従次力ルテナー子爵、そして今回の事件の被害者であるグリユーネワルト伯爵夫人の弟であるラインハルト・フォン・ミューゼル大將の七名である。あと、不測の事態に備え皇宮警察官六名と儀式の進行のために典礼省職員四名が待機していた。

地上車、ランド・カー から降ろされ邸内に入れられると、シュザンナは彼らの待つサロンに向かつて歩いていった。官吏に引きずられてではない。自ら、彼女の「皇帝」の姿を求めて進んで行つたのである。
「陛下、陛下は何処におわすのか。」

サロンの重い樞の扉が開き、その向に居並ぶ觀察達の顔を見た時、シュザンナは彼女の求めるものがそこになくことを知つた。失望は怒りへと速やかに変化を遂げた。

(何故です?何故です、陛下?何故妾の命を奪つのに、このような者達をお使いになられるのです?何故御自身で妾に命じて下さらぬのです?陛下無事で生きていく位ならば、死んだ方がましというもの。妾にとつて、陛下にお仕えすることだけが生き甲斐でありましたものを。妾に命令できるのは陛下だけじゃ……)
「ペーネミュンデ侯爵夫人」
少々滑舌の悪い呼び掛けに、シュザンナは声の主を睨み付けた。彼女の瞳が捉えたのは、安楽椅子に腰を降ろした八〇過ぎの老人で、この館の主である。

(居眠りを閣議と心得るもつろくした老人が、この妾に指図すると申すのか?何年にも渡つて妾の館を訪れては、何卒陛下によしなにお取り計らい下されと、妾が裾に縋らんばかりであつたことを忘れたのか!)

握りしめた拳が、怒りで細かく震えた。「典礼尚書!アイゼンフット伯爵!これは何事です?いやしくも侯爵号を持つ身に對し、余りに非礼ななさりようではありませぬか!」

その声は鋭く、鞭のように典礼尚書を打つたが、それに反応を示したのは同席者達の方で、典礼尚書ではなかった。これは儀式なのだ。他の出演者が台本にない台詞を言おうが、それに惑わされて、舞台の進行を妨げてはならない。決められた筋書き通りに事を運ぶのが、彼の「技量」の見せ所なのだ。三〇年の歳月と五〇〇万帝國マルクを引き替えにして、人生八〇余年にして初めて与えられた一世一代の大舞台に、失敗は許されなかった。

緩慢な動作で安楽椅子から立ち上がり、片手を上げてシュザンナを制すると、典礼尚書は何も感ずるところがないかのような風情で、重々しく心えた。

「ペーネミュンデ侯爵夫人、その答えは貴女の記憶のうちにある筈ですぞ。貴女は、陛下の寵愛厚いグリユーネワルト伯爵夫人を無法にも殺害しようとなさつた。証人もあれば証言もある。」

「でたらめじゃ……」
シュザンナは、典礼尚書の言葉を認めることは出来なかつた。皇帝自らが自分を裁くというのならまだしも、一時皇帝が寵愛を与えているからといって、「あの女」の「権勢」に目が眩んだ、「恩知らず」な「裏切り者」に罪人呼ばわりされるのは、彼女にとつては許せないことであつた。そつだ、何が罪かと言つて、ルドルフ大帝が定められし御定法を蔑ろにすることこそ、なんびとも

許され得ぬ重罪ではないのか？出自による階級制度は、その中でもゴールデンバウム王朝の根幹をなす大事である。自分は、たかだか帝国騎士の分際でありながら陛下の御心を惑わせた、分をわきまえぬ「あの女」に、天誅を下すこととしただけなのだ。その自分を、「あの女の利益の為に」取り除くと言つて彼らこそ、王朝の屋台骨を虫食いにする重罪人ではないか？シュザンナの中で、自分の「正当性」がむくむくと頭をもたげた。そうだ、私は悪くない。

だが、典礼尚書にとつて、シュザンナが罪状を認めるかどうかは重要ではなかった。既にそれは、与えられる罰も含め、決まったことなのだ。侯爵夫人にそれを否定する権利はない。少なくとも、台本ではそうなつていた。

アイゼンフト伯爵は、彼に可能な限り狂重に、台本を無視する我が儘な主演女優に、彼女の演じるべき役どころを思い出させようと試みることにした。

「見苦しい弁解はおよしなさい。恐れ多くも皇祖ルドルフ大帝陛下の、国法を定められし時より、罪には罰をもって報いることが人界を律する摂理というもの。その摂理に従い、貴女の履歴と身分に相応しく身を処されるがよからう。」

老人性喘息の気がある伯爵は、途中、何度が咳で台詞を中断した。また、さほど長くない台詞にも関わらず、数度に渡つて次に自分が言つべき言葉を見失い、手にした小さな紙片の助けを借りねばならなかった。その姿は、他人、ひとから見れば、彼の望む威厳のある態度とは程遠かったが、通常の数倍の時間をかけてこれだけを口にする、典礼証書は安心と満足で大きく息をついた。取り敢えず、言つべき事は言ったのだ。

その間シュザンナは、この嫌疑がたためであるという自分の主張をどのようにしたら証明できるかを考えていた。一体彼らは

どのあたりのことまで知っているのだらう？舞台に居並ぶ役者の中に、フルノー・フォン・シエーンコップの容姿はない。シュザンナと

つて、今回の暗殺未遂事件に関しては、彼だけが、自分の声を聞き、自分の命を受けた「証人」である。それ以外の人間が何を言おうと、それは、「あの女」が、偶然起つた事象を許し、罪を自分に擦り付ける為に仕組んだ「茶番」と主張したとしても、誰もそれを一〇〇パーセント否定することは出来ない筈であった。それとも、シエーンコップは全てを語り、抜け道はもう全て塞がれているのか？いや、その場合でも、借金に苦しむ貧乏貴族の言うことなど、信用に値せぬと突っぱねることは可能ではないか？典礼尚書が発する棒読みの台詞など無視して、シュザンナの脳細胞はそれだけを考えていた。先程の地上車、ランド・カー、の中で、二人の官吏に洩らした「すると、すると、あの女は死んでおらぬのか？」の一言が、前もつてシュザンナが暗殺計画を知つてた証拠になるのだという

ことは思いも付かなかつたのである。一方典礼尚書は、シュザンナの沈黙を己の威厳に打たれてのものと解釈した。だがまだ彼の台詞のクライマックスはこれからなのである。「この舞台にはフロンターなどという気の利いた者がおらぬ以上、彼はその台詞を全て自分の脳細胞から引き出さねばならず、彼はその台詞を最後にもう一度確認し頭の引き出しに入れる為に、先程から度々視線を走らせていた紙片を再び取り出した。数瞬の間眼を細め、紙片を顔から遠ざけたり近づけたりしながら、そこに書かれている言葉を反芻する。それを何度か繰り返してから、アイゼンフト伯爵は一つ大きく咳払いをして、問題の台詞を口にした。

「フリードリヒ皇帝陛下よりの勅命である。ペーネニコンデ侯爵夫人に死を賜る。格別の御慈愛により、自裁をお許し下された。

更に侯爵夫人たる礼遇を以て、その葬礼をなすであらう。」

典礼尚書の声が途切れるのを合図に、それまで石像のように動かなくなつた皇宮警察本部長シャーヘン伯爵がゆつくりと、まるでコマ送りの画像でも見るかのような動きでその右手に真紅の液体を満たしたワイングラスを掲げて自分の方に近づいてくるのをシュザンナは見た。彼の左手がシュザンナの右手を掴み、無理矢理そのワイングラスを握らせようとする。

シュザンナは自由の利く左手でそれを振り払おうとした。身体が揺らぎ、それを立て直そうとしたシュザンナの眼に飛び込んできたのは、大任を終えて、その重圧感から解放されると同時に緊張の糸が切れ、既に事態の推移に何ら関心を向けようとならないアイゼンフト伯爵の隣から、こちらを横目で睥睨している人物であつた。

(あの男！)

まさか、シュザンナのことを汚いものでも見るような眼で見ている「あの男」！シュザンナの中で何が弾けた。これまでずっと押さえてきた何かが。

「あの男」は己の身は綺麗だとも思っているのか？とんでもない！「あの男」の手は血に染まつてゐるのだ。へつと「あの男」の手に付いてゐるのは、何の汚れもない幼子の血糊……一二年の歳月も、それを洗い落とすことは出来なかつた！「あの男」には、私が何を企て実行しよう、それを非難する資格などない！ここにゐる他の者達も、皆「その事」を知つてゐる筈だ。忘れたというのであれば、思い出させてやる！

「あの女」の殺害を企んだことを否定するより、「あの男」の罪を糾弾することの方にシュザンナの心の秤は大きく傾いた。

「何故じゃ、何故妾だけが罰せられねばならぬのじゃ。妾の赤ん坊を殺した犯人は、そこにそれ平気な顔で立つてゐるではないか。それなのに、何故妾だけが死なねばならぬ。」

この声に、宮廷医師オレンブルクは、胃壁に霜が降りるのを感じた。長い間、極親しい信頼できる人物以外には明かしたことの無い我が胸の中の秘密を、白日の下に引きずり出されたように感じたのである。自分が手を下したわけではない。しかし、シュザンナ・フォン・ペーネニコンデの最初の子の命は、自分の監督下で消されたのだ。オレンブルクの記憶裏の中に、それは不快な瀬となつて沈んでゐた。いつか、その事実を誰かから糾弾されるかも知れないという潜在的な恐怖が、この一二年間、ずっと彼の中にはあつたのである。

しかし、シュザンナの腫の中に、オレンブルクが入る隙間はなかつた。シュザンナの白く細く美しい人指し指が照準を合わせたのは、オレンブルクよりもずっと上位に立つてゐる帝国最大の門閥貴族であつた。

「そなた、どんな手を使つても自分にとつて邪魔になる者は葬るべきだと教えてくれたのは、「あの男」。そして、権力の座にある限り、それを罰する者はいないのだと教えてくれたのも、「あの男」。その時、シュザンナの視界には、ブラウンシュバイク公以外の者の存在など眼に入つてはいなかつたのである。

その指先からレーザー・ビームが飛び出すものならば、ブラウンシュバイク公の額には小さいが深い穴が穿たれたに違いない。腫に宿る怒りの炎が、現実化出来るものならば、ブラウンシュバイク公の身体は瞬時に燃え尽きていたに違いない。そのままシュザンナはブラウンシュバイク公に、一歩ずつゆつくりと近づいていった。だが、誰もそれを止める者はいなかつた。皆、シュザンナの氣迫に呑まれ、シュザンナの処刑という劇の出演者であるという事を放棄し、舞台から観客席に降りてしまつたからである。今や舞台は主演女優の独壇場であつた。

「私の赤ん坊を、いえ、陛下の御子を殺さ

らぬ。」

この声に、宮廷医師オレンブルクは、胃壁に霜が降りるのを感じた。長い間、極親しい信頼できる人物以外には明かしたことの無い我が胸の中の秘密を、白日の下に引きずり出されたように感じたのである。自分が手を下したわけではない。しかし、シュザンナ・フォン・ペーネニコンデの最初の子の命は、自分の監督下で消されたのだ。オレンブルクの記憶裏の中に、それは不快な瀬となつて沈んでゐた。いつか、その事実を誰かから糾弾されるかも知れないという潜在的な恐怖が、この一二年間、ずっと彼の中にはあつたのである。

しかし、シュザンナの腫の中に、オレンブルクが入る隙間はなかつた。シュザンナの白く細く美しい人指し指が照準を合わせたのは、オレンブルクよりもずっと上位に立つてゐる帝国最大の門閥貴族であつた。

せた男を、私より先に処罰するべきではないのか？それが正義というものではないのか？」

「この時、シュザンナは気がついたであろうか？自分が耐えて久しく使ったことのない一人称を使ったといつことには、それは一四年前の春の園遊会で、ベネディクト・フォン・アーテナウアーの言葉を立ち聞きし、後宮で生きていくことを決意して以来、彼女が封印してきた言葉の一つであった。ただ一人、生家から後宮に付き添って来た侍女ヨハンナに対して以外。

観客達の視線が、全て自分に注がれるのに気付いて、ブラウンシュバイク公は自分の立場を思った。このままシュザンナ・フォン・ベネネミュンデの好きに振る舞わせては、たとえあの女がこの後すぐに死んだとしても噂は噂を呼び、自分は嬰児殺しの影を背に歩いて行かねばならなくなる。このような時、自分の立場を取り戻す方法を、ブラウンシュバイク公は一つしか知らなかった。ブラウンシュバイクという家名の持つ重み、そして現皇帝の女嬪であるという権威、この二つで自分の前にある障害物は吹き飛ばす筈であった。

「何を血迷ったことを言っつか、この狂女めが……。」
しかし、今回の障害物は、そのようなものに吹き飛ばされはしなかった。それは一〇年以上に渡って深く深くシュザンナ・フォン・ベネネミュンデという女性の中に根を下ろし、育まれたものであったから、それくらい風にはびくともしなかったのである。
「人殺し！」
シュザンナの口から、短いがこれ以上ないと言っような明快な罪状の告発が行われた。

「あの男を捕まえて、私の赤ん坊を殺したあの残酷な、あの恥知らずな人殺しを、陛下に忠誠を装いながら、身の程知らずな野心の為に罪のない赤ん坊を殺しただけだ

のを、捕まえて！捕まえなさい！」
「皆、何を洗練してあるのだ。あの狂女に、これ以上、誹謗を続けさせる気が、取り押さえて罪に服させよ！」

ブラウンシュバイク公は、観客席から戻ってこない他の出演者達にも舞台上上がることを求めたが、誰もそれに応える者はいなかった。本来、このような事態に備えて待機している昔の皇宮警察官達ですら、本部長たるシャーヘン伯爵の支持がないのを良いことに、事態の推移を見守るばかりであった。

台本を書き替えて、割り振られた「死刑囚」という役の他に「検察官」になり、立会人役の俳優を糾弾して見せた主演女優は、他の出演者達が登場しないのに業を煮やしたのか、更に台本にはなかつた役を演じて見せた。「刑の執行人」という役を、彼女は、部屋の隅のデスクに駆け寄り、その上のインク瓶を、ブラウンシュバイク公めがけて投げつけたのである。

もし、今少しデスクとブラウンシュバイク公との間の距離が短ければ、シュザンナはそこに赤い大輪の花を咲かせることに成功していたかも知れない。しかし、いかにせん距離がありすぎた。ブラウンシュバイク公はかろうじて身をかわすことに成功し、赤い大輪の花の替わりに、壁に小さくさかぬ凹みと青黒い滝を作り、そして小さな青い花が何人かの帝国を代表する男達の顔に咲いた。

ブラウンシュバイク公がインク瓶を避けた際に、その隣にいたカルテナー子爵とそのまた隣に立っていたボーデン侯爵は玉突の要領で体勢を崩した。姿勢を正し、顔を拭く彼らの隣で、些かの容儀の崩れもなく端然と立ってシュザンナを見つめている青年がいた。ラインハルト・フォン・ミューゼル大将今回の事件の被害者であるグリーユーネワルト伯爵夫人の弟である。
インク瓶を投げた場所に立ち、興奮冷め

やらぬまま、肩で息をしているシュザンナの視線が青年のそれと空中で絡み合った。
「あの女……！あの女……あの女の弟……！」

シュザンナは再び、重罪人を発見したのだ。「あの女の弟、それは、あの女が、あの女である」と並んで、シュザンナの中では極刑に値する罪状であった。ゆっくりとシュザンナがサロンを横切るのを止めるものは誰もいなかった。ラインハルト・フォン・ミューゼルもまた、逃げようとはしなかった。息が掛かるほどに近づいた一名と、それを見守る観客の間に緊張が走った。一体、次は何が起こるのか？

「……！」
シュザンナはその珊瑚色の唇を開くと、金髪の青年将校に向かって勢いよく唾を吐き掛けた。それは青年の頬を濡らし、そして僅かに芳香を放った。シュザンナは後宮の女性のためしなみとして香り玉を口中に含んでいたのである。それは既に一五年間に渡って、彼女の生活の一部となっていた。

その香りを鼻腔に感じた時、ラインハルト・フォン・ミューゼルは、姉が後宮に納められてから初めて会った日のことを思い出した。姉が言葉を発する度に漂ってくる芳香不思議そうに何の香りかと尋ねる弟に、姉は傍らに置いてあった瀟洒なバッグの中から、繊細な細工を施された銀のピル・ケースを取り出し、掌に小さな粒をこぼして見せた。

「これはね、香り玉と言っんですって。陛下のお側に仕える女性は、皆これを口の中に入れておけるの。」
目の前にいる姉は、服装こそ家にいた頃よりずっと豪華なものを身につけていたが立ち居振る舞いも、煙のような優しい笑顔も、何も変わっていないように感じていた。しかし、姉は、既に以前の姉ではなかった。その香りこそ、姉がただ一人の人間に供される為に翼をもがれ、小さな金の籠に閉

じこめられた証だ。あの時の哀しいような辛いような胸の痛くなる複雑な感情を、姉に対して感じた数十分の一ではあったが、ラインハルト・フォン・ミューゼルはシュザンナにも感じたのである。

シュザンナが、「あの女の弟、がそんな感情と道連れに自分を見下ろしている」と知ったら、果たしてどう思ったであろうか？おそらくは矜持を傷つけられるだけであつたであろうが、しかし、「あの女」と自分は、結局同じ道を進む人生の走者であることに気がついたかも知れない。自分の前には去つていったあまたの女性の姿をして、「今の自分がいた。そして自分の後ろには、あの女」の姿をした「過去」の自分がいる……。

「気がお済みですか、侯爵夫人。では、そろそろ閉幕といきたいものですな。」
常に比べ少々細いシャーヘン伯爵の音がサロンに響き、舞台は終幕へと動き始めた。本部長の声と合図に、それまでゼンマイの切れた人形のように動かなくなつた皇宮警察官達が、突然、この場に似合わない気ぜわしい靴音を鳴らしてシュザンナを取り囲んだ。一人が右腕を、一人が左腕を、更に一人が後ろから頸を押さえつけ、彼らの上司に向かつてシュザンナの半開きになつた唇を上向かせる。

（陛下、陛下、私の命を奪つたならば、陛下御自らの手で、私に杯を……！陛下……！）
シュザンナはワイングラスから自分の喉へと注がれる液体を受け付けまいと抵抗した。しかし、それは、その液体を食道の代わりに気管支に侵入させ、シュザンナを咳だませる結果となつた。息が出来ず苦しむシュザンナの喉は、一瞬、抵抗を弱めた。そして、その隙間に死神（トート）は刃をひ込んだ。赤く透きとおつた液体は、黄泉の国への道先案内人となつてシュザンナの食道を下つていく。

一旦、皇宮警察官達から解放されたシュ

ザンナは、少しでも毒酒を吐き出そうと試みた。しかし、細い指を喉に突っ込みもがくシユザンナの細い手首を、皇宮警察官達は再び捕らえると、歯の間から、ワインの色で、それとも血の色で、赤く染まっただぼりとした形の良い指を引きずり出した。その指に輝いているのは、かつて彼女がフリードリヒ四世から賜った指輪である。

「このように者達に、このように者達に……」

生きたいという願望、晴らせなかつた恨み、皇帝以外の者によって命を断ち切られる無念……それら全てを込めて、シユザンナは自分の手首を握っている皇宮警察官の顔を睨みあげた。それは、その後何年にも渡つて、その警言を苦しませることになるほど凄まじいものだったという。

しかし、それも数瞬であつた。体内を駆けめぐる即効性の毒は、急速にシユザンナから光を奪つていった。とどろき暗度を増す視界の中で、シユザンナは最後の言葉を発した。

「嗚……下……何……故……」
しかし、それはもつ声にはならず、聞いたのはシユザンナ本人、ただ一人であつた。

暗闇の中で、シユザンナは息が切れた。向うに小さく光が見える。

「ここはここかしら、私が皇帝陛下の寵姫だなんて、変な夢を見ていたこと……」

横にも誰かいるよつてである。光はどんどん大きくなり、音楽も聞こえてきた。

「ああ、そう、今日は私の社交界デビューの日だったのね。あれは大舞踏会の本ル、ここは通路なのね。」

光の中から、見覚えのある手がシユザンナの方に伸ばされた。

暖かい手が、シユザンナの手を優しく包んだ。

「ヘネディクト様」
シユザンナはその手に導かれて、風のように軽に足取りで光の中へと飛び出していった。真っ白な、真っ白な光だけの世界へ……

(完)

【あとがき】

この作品は、ある方とのネット上のやり取りがきっかけで生まれました。後宮に納められた時、咲きほころびたばかりの桜草に例えられた深窓の令嬢が、何故、猛禽になつたのか？私の中のシユザンナ像について話したところ、是非、作品にまとめるべきだと、励ましていただいたのです。

しかし、正直言つて「これを書き始めた時」「これは精神衛生上良くない！」と思ひました。既に、彼女の人生は原作によつて定められており、「破滅」に向かつて進むしかないのですから。しかも、色々問題を引きこして彼女をそこに近づけるのは、私全く、我ながら、なんて悪人なんだ、と思ひました(笑)。

シユザンナは、原作の中で、ラインハルトにとつて不倶戴天の敵として描かれております。しかし、考えてみれば、彼女こそローエングラム王朝の生みの親とも言えます。彼女以降、フリードリヒ四世の女性に対する嗜好は変化します。それがなければ、アンネローゼが後宮に納められることもなく、ラインハルトに登極の機会は与えられなかつたでしょう。士官学校に進み、軍人にはなつたかも知れませんが、その傍らに、赤毛の青年がいたかどうかは不明です。彼は教師とか、官吏とか、もつと穏やかな人生を選択していたかも知れないからです。そ

して、キルヒライスなしでは、ラインハルトがその能力を十分に発揮することは出来ず、また、彼が士官学校で過ごす数年間に、彼は何人もの優秀な部下を持つ機会を失つていたことでしょう。例えば、ミッターマイヤーはブラウンシュバイク公の従兄弟の息子を射殺したとして、殺されてしまつたでしょう。他の諸將、例えばロイエンタールなどは階級を上げ、ラインハルトの麾下に入ることを良しとしなくなつていったかも知れません。

ラインハルトは気が付いていないかも知れませんが、彼女は、銀英伝に於ける、「一粒の麦」だつたと思つたのです。

私はこの作品の中で、幾人かオリジナルキャラを登場させました。パロディーを書くとき、オリジナルキャラはルール違反だとして、お叱りを受けるかも知れませんが、作品を膨らませる為に、どうしても必要な登場人物達だつたのだと、どうかお許し下さい。

ヘネディクトは、もし、彼女が後宮に納められなかつたら……といつことを考えて作つたキャラです。彼女にも、宮廷の花とならなくとも、それなりに満ち足りた平和な生活を持てたかも知れないだといつことを、何処かでイメージしていただきました。それは、彼は、結局、シユザンナの事を想ひ続けたまま亡くなります。しかし、彼女は、その事を知りません。「誤解」は解かれることなく終わるのです。それもまた、彼女の悲劇を助長します(あくまでも、私の妄想の中の話ですが)。

ブルーノ・フォン・シェーンコップは、帝國領に残つたリュープ・フォン・シェーンコップの親族がどうなったのか、そんな疑問から生まれました。亡命せねばならないほど多額の借金だつたら、おそろく、債権者はあの手この手で回収にかかるでしょう。まして、強い者に程都合の良い社会、「逃げられちゃっ

た」で済ませて貰えるわけがありません。ブルーノの姿は、シェーンコップが手にしたかも知れない「人生の台本」の一つです。そして、マルコットやヨハン。彼女たちは『シユザンナ』におけるシユザンナの為人、ひととなり、を形成する上で必要なキャラとして作りました。

マルコットの役割は、気が強く「出来の良い姉」として、シユザンナに「落ちこぼれ意識」を植え付けることでした。彼女の晩年の傲慢とも言える態度の裏に、どのように権力の中枢に近づこうとも、結局、己の存在を支えるものを、他人(皇帝)の関心や階級制度といった外因的要素にしか見いだせない故の怯えを潜ませたかつたのです。マルコットとシユザンナの関係を、後のシユザンナとアンネローゼの關係に相似させることで、シユザンナがもつ二人のアンネローゼであるといつことを表したかつたということもありました。

ヨハンの方は、少女時代からの理解者との別離によつて、シユザンナが如何に精神的孤独に陥つていったかを表現したかつたのです。苦惱する「本当の自分」を見せることの出来る相手を失い、誰からも侮られまいと虚勢を張り、益々本来の自分とはかけ離れていくシユザンナ……。そして、ヨハンを信じていたからこそ、その後陥つた深い人間不信。此処でも、「誤解」が重要なポイントです。

最後になりましたが、田中芳樹先生、徳間書店様、ライトスタッフ様、原作やOVAの中の台詞を勝手に使つてごめんなさい。でもそれも、原作やOVAが素晴らしい作品だからです。こつこつここで謝つておきます。お許し下さいね。

(フミミ)